岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第610集

八反町遺跡・中畑城跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業古城２期地区関連遺跡発掘調査

２０１３

岩手県県南広域振興局農政部農村整備室
(公財)岩手県文化振興事業団

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第610集

八反町遺跡・中畑城跡発掘調査報告書

２０１３

岩手県県南広域振興局農政部農村整備室
(公財)岩手県文化振興事業団

八反町遺跡・中畑城跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業古城２期地区関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史を生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは、県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターでは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、経営体育成基盤整備事業古城２期地区に関連して、平成22年度に発掘調査された八反町遺跡と平成22・23年度に発掘調査された中畑城跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査により、八反町遺跡では、12世紀の道路跡や建物跡、井戸、土坑、性格不明遺構などが検出され、平泉藤原氏時代の都市平泉以外の地域が如何なる状況にあったのかを解明する上で貴重な資料を得ることができました。また、中畑城跡では関東地方で発展した「障子堀」と呼ばれる築城技術が採り入れらた16世紀の城館であることが明らかになりました。障子堀を持つ城館が本県で見つかることは殆どなく、極めて珍しい発見といえます。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました県南広域振興局農政部農村整備室、奥州市教育委員会、奥州市世界遺産推進室をはじめとする関係各位に深く感謝の意を表します。

平成25年３月

公益財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　　池　田　克　典

例　　言

1．本報告書は岩手県奥州市前沢区古城字館八反町地内に所在する八反町遺跡と前沢区古城字水上西88番地ほかに所在する中畑城跡の発掘調査成果を収録したものである。

2．上記２遺跡の調査は、経営体育成基盤整備事業古城２期地区に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と県南広域振興局農政部農村整備室との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（当時）が実施した。

　なお、費用負担は岩手県教育委員会が岩手県県南広域振興局農政部農村整備室に農家負担分を補助している。

3．岩手県遺跡台帳に登録される八反町遺跡・中畑城跡の遺跡番号と遺跡略号は次のとおりである。

　八反町遺跡：遺跡番号ＮＥ46－0365、遺跡略号　ＨＴＣ－10

　中畑城跡：遺跡番号ＮＥ46－0332、遺跡略号　ＮＨＪ－10・11

4．発掘調査の期間・調査面積・担当者は次のとおりである。

　八反町遺跡　平成22年９月１日～12月２日、3,545㎡、杉沢昭太郎・米田　寛

　中畑城跡　平成22年10月22日～12月10日　1,540㎡　杉沢昭太郎・米田　寛・北田　勲・中村絵美・菅野　梢

　　平成23年４月25日～７月６日　950㎡　杉沢昭太郎・巴　亜子

5．室内整理の期間・担当者は次のとおりである。

　八反町遺跡　平成23年３月１日～平成23年３月31日　杉沢昭太郎・米田　寛

　中畑城跡　平成23年３月１日～３月31日　北田　勲・菅野　梢

　　平成23年８月22日～９月30日　丸山直美

　　平成24年１月16日～３月31日　杉沢昭太郎、巴　亜子

6．野外調査における基準点測量・写真撮影にあたっては次の機関に委託した。

　基準点測量：㈱東北プランニング、興国測量設計株式会社

　空中写真撮影：東邦航空株式会社

7．遺物の分析・鑑定にあたっては次の機関に委託した。

　樹種同定・花粉分析・種実同定：古代の森研究舎

　骨同定：㈱パリノ・サーヴェイ

　年代測定：㈱加速器分析研究所

　石質鑑定：花崗岩研究会

　木製品・金属製品の保存処理：岩手県立博物館

8．発掘・整理・報告にあたっては次の方々に御指導・ご協力いただいた（順不同・敬称略）。

　奥州市埋蔵文化財調査センター、奥州市教育委員会、奥州市世界遺産登録推進室、県南広域振興局農政部農村整備室

9．本報告書の執筆は、Ⅰ章　調査に至る経過は、県南広域振興局農政部農村整備室に原稿を依頼した。Ⅱ～Ⅴ・Ⅶ章は杉沢が執筆した。報告書の編集・校正は杉沢が行った。

10．本遺跡の調査成果は、先に、『現地公開資料』（平成22年）、『平成22年度発掘調査報告書』（岩文振第588集）『平成23年度発掘調査報告書』（岩文振第603集）に発表しているが、本書の内容が優先するものである。

11．本遺跡の調査で得られた一切の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 3

　1　遺跡の位置と立地 …… 3

　2　地理的環境 …… 3

　3　歴史的環境と周辺の遺跡 …… 5

Ⅲ　調査・整理の方法 …… 9

Ⅳ　八反町遺跡 …… 20

　1　概　　要 …… 20

　2　基本層序 …… 20

　3　検出遺構（掘立柱建物跡、竪穴住居跡、竪穴遺構、井戸、土坑、焼土、道路、溝、性格不明遺構）… 21

　4　出土遺物（概要、陶磁器、かわらけ、木製品、金属製品、土師器須恵器、石製品、その他）…… 33

Ⅴ　中畑城跡 …… 69

　1　概　　要（位置など、縄張）…… 69

　2　基本層序 …… 76

　3　検出遺構（堀、土坑、カマド、溝、柱穴群、旧石器）…… 76

　4　出土遺物（陶磁器、かわらけ、木製品、金属製品、土師器、須恵器、瓦、縄文時代の土器・石器他）… 82

Ⅵ　自然科学分析 …… 118

　1　放射性炭素年代測定 …… 118

　2　花粉分析 …… 122

　3　種子・種実同定 …… 130

　4　樹種同定 …… 136

　5　骨同定 …… 142

Ⅶ　調査のまとめ …… 146

　1　八反町遺跡 …… 146

　2　中畑城跡 …… 150

報告書抄録 …… 231・232

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧 …… 7
＜八反町遺跡＞
第２表　土坑類観察表 …… 28
第３表　溝跡観察表 …… 29･30
第４表　柱穴観察表 …… 65
第５表　陶磁器観察表 …… 66
第６表　かわらけ観察表 …… 67
第７表　木製品観察表 …… 67
第８表　金属製品観察表 …… 67
第９表　土師器・須恵器観察表 …… 67
第10表　石器観察表 …… 67
＜中畑城跡＞
第11表　土坑類ほか観察表 …… 79
第12表　溝跡観察表 …… 80
第13表　柱穴観察表 …… 113
第14表　陶磁器観察表 …… 114
第15表　かわらけ観察表 …… 114
第16表　木製品観察表 …… 115
第17表　金属製品観察表 …… 115
第18表　土師器・須恵器観察表 …… 116
第19表　石器観察表 …… 116･117
第20表　動物・植物遺体観察表 …… 117

図 版 目 次

第１図　岩手県図・遺跡位置図 …… 2
第２図　遺跡周辺の地質分類図 …… 3
第３図　遺跡周辺の地形分類図 …… 4
第４図　周辺の遺跡分布図 …… 6
第５図　遺跡地形図と調査区①② …… 12･13
＜八反町遺跡＞
第６図　調査区（Ａ－Ｊ区）…… 14
第７図　遺構配置図１ …… 15
第８図　遺構配置図２（Ａ・Ｂ区）…… 16
第９図　遺構配置図３（Ｃ・Ｊ区）…… 17
第10図　遺構配置図４（Ｄ・Ｅ・Ｆ区）…… 18
第11図　遺構配置図５（Ｇ・Ｈ・Ｉ区）…… 19
第12図　基本土層 …… 20
第13図　１号掘立柱建物跡 …… 35
第14図　２号掘立柱建物跡 …… 36
第15図　３号掘立柱建物跡 …… 37
第16図　４号掘立柱建物跡 …… 38
第17図　６～８号掘立柱建物跡 …… 39
第18図　９・10号掘立柱建物跡 …… 40
第19図　５号掘立柱建物跡、１～３号柱穴列 … 41
第20図　１・２号竪穴住居跡 …… 42
第21図　３号竪穴遺構、１～３号土坑 …… 43
第22図　４～９号土坑 …… 44
第23図　10～14号土坑 …… 45
第24図　15～18号土坑、１号焼土、３号井戸跡 … 46
第25図　１号道路跡 …… 47
第26図　１～６・13号溝跡① …… 48
第27図　１～６・13号溝跡② …… 49
第28図　７～９号溝跡 …… 50
第29図　10・11号溝跡 …… 51
第30図　14～19号溝跡 …… 52
第31図　21～24号溝跡 …… 53
第32図　25～28号溝跡 …… 54
第33図　12・20・29号溝跡 …… 55
第34図　ＳＸ１・ＳＸ２① …… 56
第35図　ＳＸ１・ＳＸ２② …… 57
第36図　１・２号井戸跡、ＳＸ３ …… 58
第37図　河川跡 …… 59
第38図　国産陶器（渥美・常滑）…… 60
第39図　国産陶器（常滑）…… 61
第40図　かわらけ・陶磁器ほか …… 62
第41図　木製品 …… 63
第42図　土師器・須恵器 …… 64
＜中畑城跡＞
第43図　中畑城跡地形図 …… 68
第44図　中畑村古絵図 …… 70
第45図　中畑城全体図 …… 71
第46図　遺構配置図１ …… 72
第47図　遺構配置図２ …… 73
第48図　遺構配置図３ …… 74
第49図　遺構配置図４ …… 75
第50図　基本土層 …… 76
第51図　１号堀跡ａ～ｄ（Ｃ区）…… 84
第52図　１号堀跡断面１ …… 85
第53図　１号堀跡断面２ …… 86
第54図　１号堀跡断面３、ａ～ｄ（Ａ区）…… 87
第55図　２号堀跡（Ｆ区）、３号堀跡 …… 88
第56図　２号堀跡（Ｇ区）…… 89
第57図　４号堀跡、Ｆ区トレンチ …… 90
第58図　１～６号土坑、カマド状遺構 …… 91
第59図　１～４号溝跡 …… 92
第60図　５～７号溝跡 …… 93
第61図　８～10号溝跡 …… 94
第62図　11～13号溝跡 …… 95
第63図　自然地形、沢跡 …… 96
第64図　柱穴群（Ｃ区）…… 97
第65図　柱穴群（Ａ･Ｂ･Ｆ区）…… 98
第66図　旧石器出土地点 …… 99
第67図　陶磁器１ …… 100
第68図　陶磁器２、かわらけ …… 101
第69図　木製品１ …… 102
第70図　木製品２ …… 103
第71図　木製品３ …… 104
第72図　木製品４、瓦、縄文土器 …… 105
第73図　石器(縄文)、鉄製品 …… 106
第74図　土師器・須恵器１ …… 107
第75図　須恵器２ …… 108
第76図　須恵器３ …… 109
第77図　石器１ …… 110
第78図　石器２ …… 111
第79図　石器３ …… 112
第80図　類例（前沢区）…… 147
第81図　12世紀の奥州市前沢区古城 …… 149
第82図　中世の奥州市前沢区 …… 154

写真図版目次

＜八反町遺跡＞
写真図版１　遺跡遠景１ …… 155
写真図版２　遺跡遠景２ …… 156
写真図版３　遺跡遠景３ …… 157
写真図版４　遺跡遠景４ …… 158
写真図版５　遺跡遠景５、現況 …… 159
写真図版６　１号掘立柱建物跡１ …… 160
写真図版７　１号掘立柱建物跡２ …… 161
写真図版８　４号掘立柱建物跡 …… 162
写真図版９　２･３･９号掘立柱建物跡 …… 163
写真図版10　５～８号掘立柱建物跡ほか …… 164
写真図版11　９号掘立柱建物跡の柱穴ほか …… 165
写真図版12　竪穴住居跡、３号竪穴遺構１ …… 166
写真図版13　３号竪穴遺構２ …… 167
写真図版14　井戸跡ほか …… 168
写真図版15　土坑１ …… 169
写真図版16　土坑２ …… 170
写真図版17　土坑３ …… 171
写真図版18　土坑４ …… 172
写真図版19　焼土ほか、溝跡１ …… 173
写真図版20　溝跡２ …… 174
写真図版21　溝跡３ …… 175
写真図版22　溝跡４ …… 176
写真図版23　溝跡５ …… 177
写真図版24　溝跡６ …… 178
写真図版25　溝跡７ …… 179
写真図版26　溝跡８ …… 180
写真図版27　溝跡９ …… 181
写真図版28　性格不明遺構１ …… 182
写真図版29　性格不明遺構２ …… 183
写真図版30　性格不明遺構３ …… 184
写真図版31　調査区近景１ …… 185
写真図版32　調査区近景２ …… 186
写真図版33　現地公開ほか …… 187
写真図版34　出土遺物１ …… 188
写真図版35　出土遺物２ …… 189
写真図版36　出土遺物３ …… 190
写真図版37　出土遺物４ …… 191
写真図版38　出土遺物５ …… 192

＜中畑城跡＞
写真図版39　中畑城跡全景 …… 193
写真図版40　遺跡遠景１ …… 194
写真図版41　遺跡遠景２、近景１ …… 195
写真図版42　遺跡近景２ …… 196
写真図版43　遺跡北西部（Ａ区）…… 197
写真図版44　遺跡北西（Ｂ区）、北東（Ｃ区）…… 198
写真図版45　遺跡北（Ｅ区）、西（Ｆ区）…… 199
写真図版46　外堀（１号堀跡ｃ、ｄ）…… 200
写真図版47　外堀（１号堀跡ａ、ｂ）…… 201
写真図版48　内堀（２号堀跡）…… 202
写真図版49　内堀（２号堀跡）西側 …… 203
写真図版50　内堀（２号堀跡）東側 …… 204
写真図版51　外堀の調査 …… 205
写真図版52　外堀（１号堀跡）…… 206
写真図版53　外堀（１号堀跡）東側 …… 207
写真図版54　外堀（１号堀跡）中央 …… 208
写真図版55　外堀（１号堀跡）構造 …… 209
写真図版56　外堀（１号堀跡）西側 …… 210
写真図版57　外堀（１号堀跡）断面他 …… 211
写真図版58　外堀（１号堀跡）出土遺物 …… 212
写真図版59　土坑 …… 213
写真図版60　溝跡１ …… 214
写真図版61　溝跡２ …… 215
写真図版62　溝跡３ …… 216
写真図版63　溝跡４ほか …… 217
写真図版64　溝跡５、カマド状遺構、旧石器集中区 218
写真図版65　柱穴群、調査風景 …… 219
写真図版66　陶磁器１ …… 220
写真図版67　陶磁器２、かわらけ …… 221
写真図版68　木製品１ …… 222
写真図版69　木製品２ …… 223
写真図版70　木製品３ …… 224
写真図版71　木製品４、金属製品 …… 225
写真図版72　瓦、土師器・須恵器１ …… 226
写真図版73　須恵器２ …… 227
写真図版74　縄文土器・石器、旧石器１ …… 228
写真図版75　旧石器２、骨１ …… 229
写真図版76　骨２、種実 …… 230

Ⅰ　調査に至る経過

中畑城跡及び八反町遺跡は、「経営体育成基盤整備事業古城２期地区」のほ場整備に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

本地区は奥州市前沢区中心部より北東部に位置し、現況は、小区画・不整形な水田で、かつ幅員狭小な農道となっていることから、作業効率が悪く、また用排水兼用の土側溝水路のため、用水不足や排水不良となっており、維持管理に支障を来しているところである。

このため、本事業地区においては、大区画ほ場整備を実施することで、農作業の効率化、生産コストの削減、生産性の向上等を図り、農地集積による安定した経営体および担い手農家の育成を目的として、事業着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、県南広域振興局農政部農村整備室から平成21年10月13日付け県南広農整第136-３号及び平成22年２月19日付け県南広農整第136-16号「経営体育成基盤整備事業古城２期地区における埋蔵文化財試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

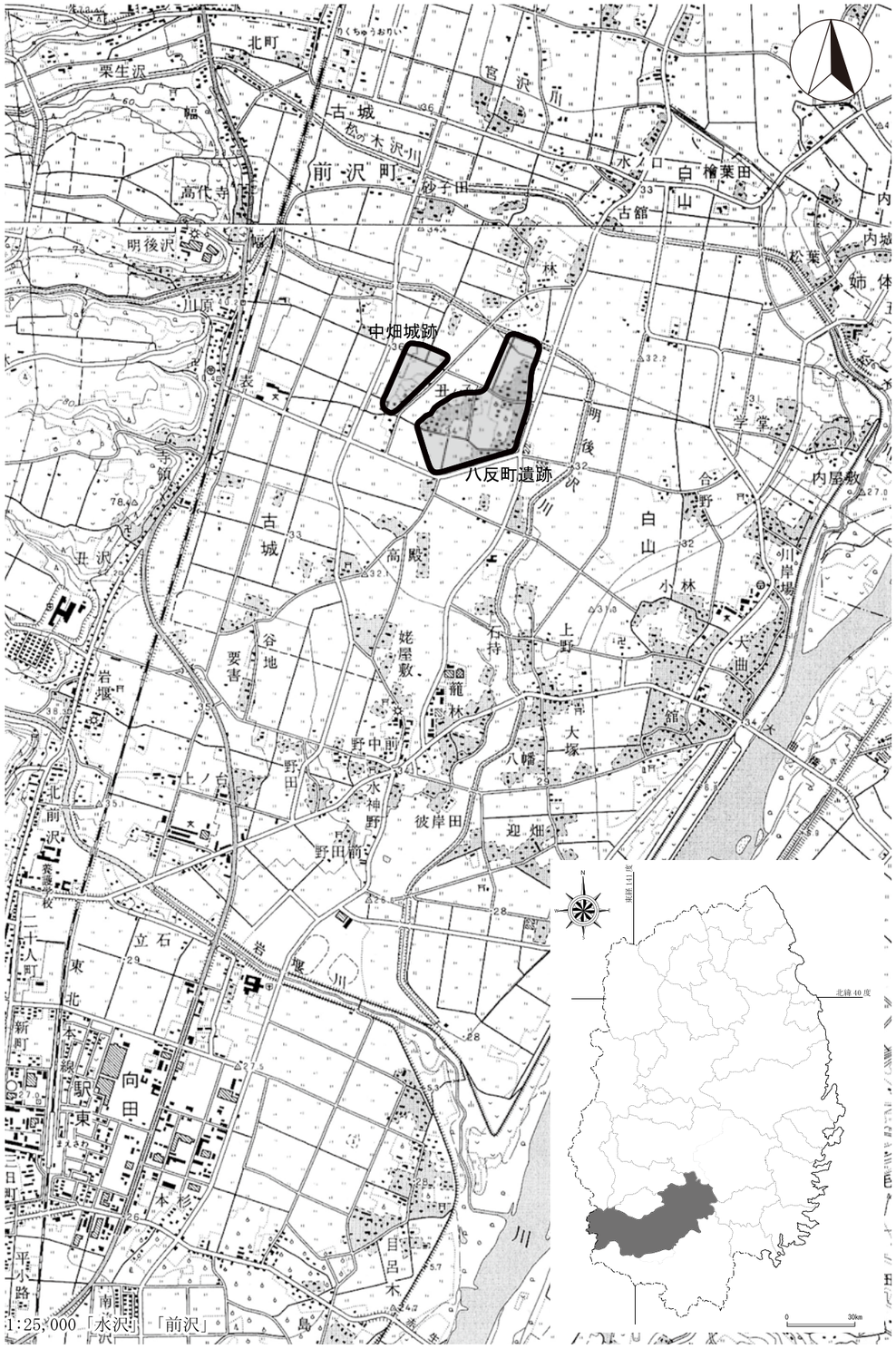
依頼を受けた岩手県教育委員会は、平成21年11月24日から26日及び平成21年12月３日、平成22年２月26日の計５日間に渡って試掘調査を実施し、工事に着手するには当該遺跡の発掘調査が必要となる旨を、平成22年１月12日付け教生第1239号及び平成22年１月29日付け教生第1314号、平成22年３月８日付け教生第1533号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により回答があった。

この回答を受けて当農村整備室は、平成22年２月19日付け県南広農整第136-12号、同日付け県南広農整第136-13号、同日付け県南広農整第136-14号「埋蔵文化財試掘調査結果による工法協議について」により、盛土工法による保存箇所と、発掘調査による記録保存箇所について協議を行った。

その結果を踏まえて当農村整備室は、岩手県教育委員会の調整を受けて、平成22年４月１日付けで財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

なお、中畑城跡については、平成23年度まで継続調査を行うことになり、平成23年４月１日付けで同事業団と再度委託契約を締結し、発掘調査を実施した。

（岩手県県南広域振興局農政部農村整備室）



第1図　岩手県図･遺跡位置図

Ⅱ　遺跡の立地と環境

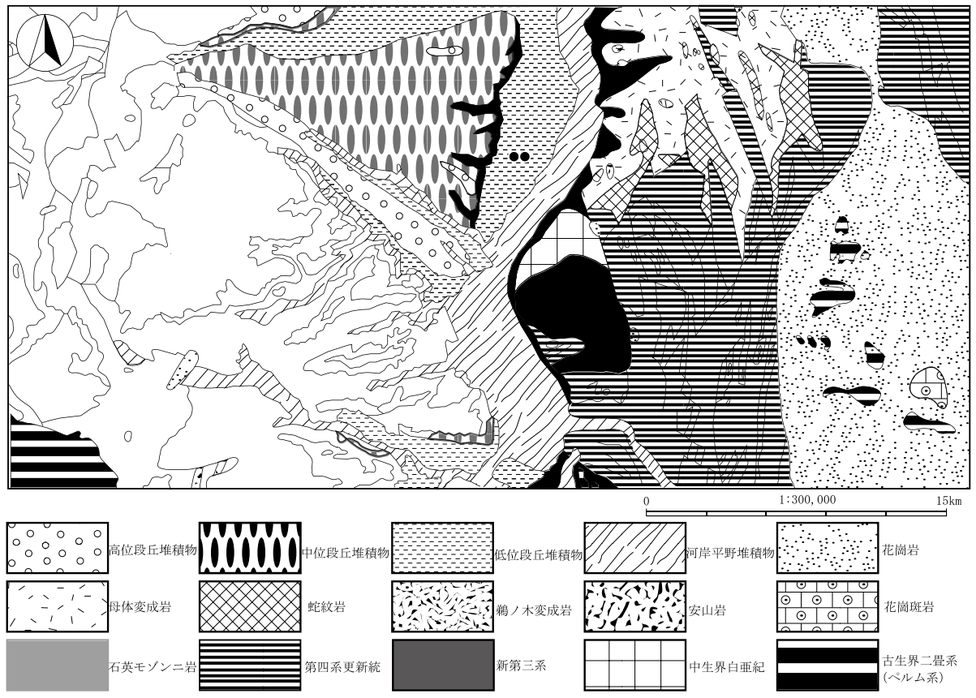
1　遺跡の位置と立地（第１図）

八反町遺跡、中畑城跡のある奥州市前沢区は岩手県南の内陸部、北上盆地の南側に位置する。前沢区はもともと「前沢町」であったが、平成18年に周辺の水沢市、江刺市、胆沢町、衣川村と合併し「奥州市前沢区」となった。両遺跡ともに奥州市前沢区古城に所在している。八反町遺跡は北緯39度４分25秒、東経141度９分20秒周辺に、中畑城跡は北緯39度４分15秒、東経141度９分30秒周辺に位置している。標高は八反町遺跡が31～32m、中畑城跡が32mほどである。いずれも現況は水田や畑となっている。遺跡周辺は古くから米作を中心とした農業を基幹産業とする地域だが、米作のみならず全国的ブランドとなった「前沢牛」の飼育を行っている農家も多く見られる。

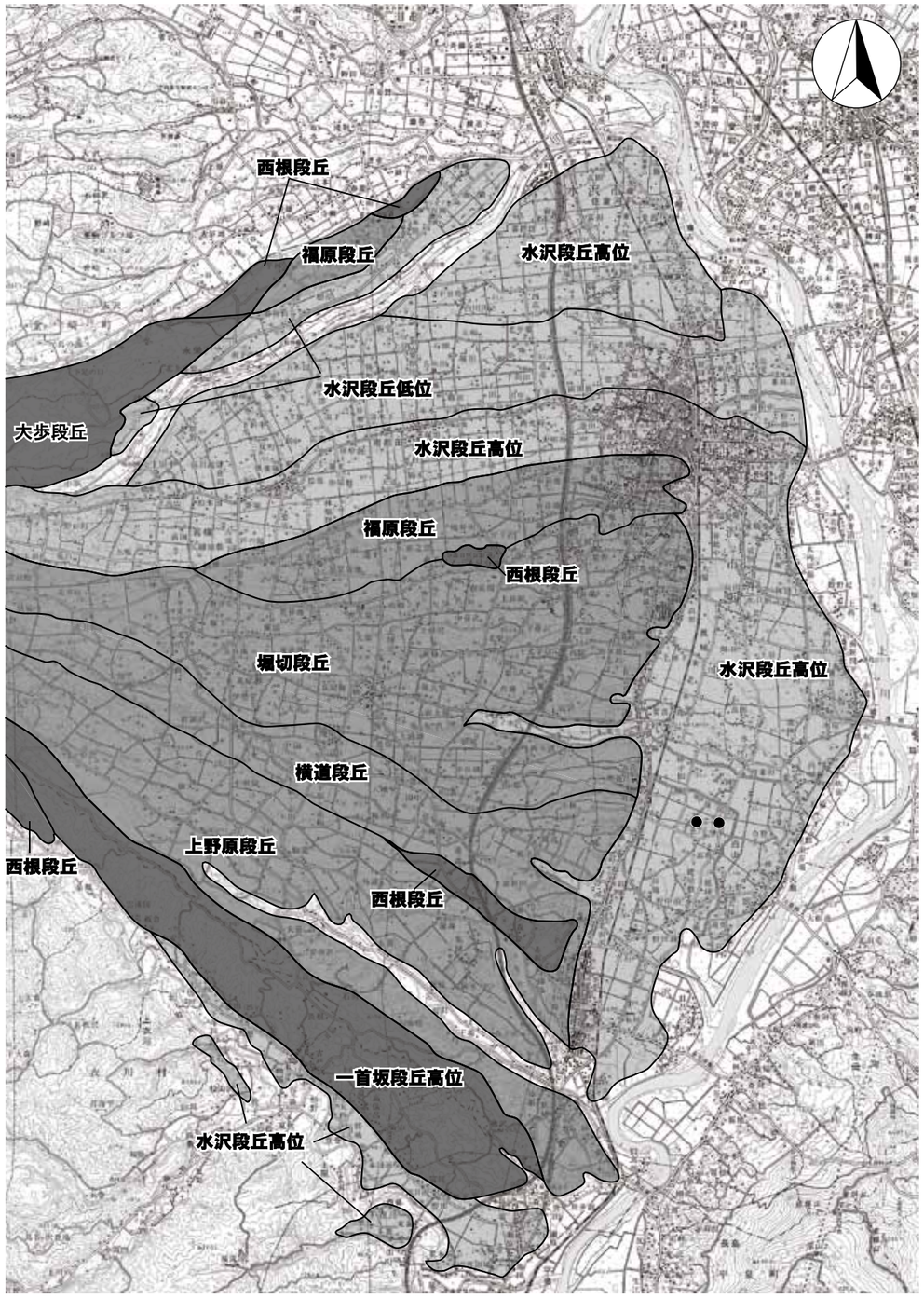
2　地 理 的 環 境（第２・３図）

ここでは、両遺跡がある奥州市前沢区及びその周辺の地理的環境について述べる。

北上川水系の視点から見ると、奥州市前沢区は北上川中流域の南端に位置する。前沢区は北上側を挟んだ東西で地形が異なる。北上川の東側は、河岸低地とその東側の山や丘が連なる丘陵地帯から成り、それらの丘陵地帯は第三紀層に相当する北上山系である。河岸低地から丘陵地帯へ急激に標高が高くなる地形になっている。また西側には河岸低地と胆沢扇状地が広がっている。胆沢扇状地は奥羽山系の底部、胆沢区若柳の市野々を扇頂部とし、東に向かって段丘面が広がっている。それらの段丘



第２図　遺跡周辺の地質分類図



※1:100,000(1:50,000 北上・水沢を転用)

高位段丘　中位段丘　低位段丘　●東が八反町遺跡、西が中畑城跡

第3図　遺跡周辺の地形分類図

面は高位から一首坂段丘、西根段丘、胆沢段丘群に分類され、さらに胆沢段丘群は高位から上野原段丘、横道段丘、堀切段丘に細分される。いずれの段丘も高位から順に北に向かって分布し、胆沢段丘の北端部（堀切段丘の北端部）には胆沢川が流れている。胆沢川の浸食作用が北に向かって進んだ地形である。それらの高位段丘の北側と東側には低位段丘である水沢段丘が広がり、広範な洪積層の平坦地が展開する。さらに東側の北上川に近い部分には、堆積作用による沖積層の河岸低地が展開する。ただし水沢段丘と河岸低地はほぼ平坦に続くので、地形的に厳密な境界が見られるわけではない。また白鳥川周辺には、河川の浸食を受けた河岸低地が一首坂段丘と上野原段丘に挟まれるように分布している。白鳥川周辺も含め前沢区の北上川西側は水沢段丘、河岸低地が広がり、両遺跡ともに水沢段丘に立地している。

地質的には北上川西側の河岸低地を成す沖積層は、北上川の堆積作用によってできた腐食壌土または砂質壌土で成り立ち、八反町、中畑城跡両遺跡はこの沖積層上に立地する。なお胆沢扇状地を成す洪積層は、焼石岳や栗駒山付近から供給された火山灰の堆積土壌で成り立っており、河岸低地と地質が異なる。

3　歴史的環境と周辺の遺跡（第４図及び第１表）

八反町遺跡、中畑城跡のある前沢区及びその近辺の平野部には、確認されたものでは縄文時代前期から始まり縄文時代全般、古代、中世そして現代に至る長い期間、人間が活動していた痕跡が見られる。

胆沢区との境にある高日向遺跡では、縄文時代前期初等～前葉期のものと思われる土器が出土している。また縄文時代中期以降の遺跡としては、中期の土器が出土した小林繁長遺跡、後期の土器が出土した川岸場Ⅰ遺跡、縄文時代晩期～弥生時代の遺物が出土した川岸場Ⅰ及びⅡ遺跡があげられる。他に本遺跡近辺で縄文時代晩期の土器が出土した遺跡として、小林繁長、八幡、青木の各遺跡があげられる。いずれにしても、縄文時代後期～晩期にかけてこの一帯にある程度の規模の集落が存在した可能性がある。

本遺跡の周辺は平安時代の遺跡も多く確認されている。川岸場Ⅱ遺跡第２次調査や道上遺跡第１次調査では、平安時代の竪穴住居跡や土師器が出土している。緑釉陶器などが出土した水ノ口、瓦などが出土した明後沢、目呂木本杉、土師器、須恵器が出土した中林Ｂ、大桜の各遺跡は平安時代の集落であったと思われる。また特筆すべき古代の遺物として、平成18年度に行われた道上遺跡３次調査では平安時代のものと思われる墨書木質遺物（木杭）が出土した。

平安時代以降の遺跡としては、北上川が湾曲する部分の川岸にある白鳥舘が知られている。平安時代末期の豪族である安部頼時の子、白鳥八郎の城として作られ、その後も室町時代まで城が存在したと言われている。近年の発掘調査により前沢区の古城・白山地区では12世紀の遺跡が多く見つかっている。かわらけが多量に出土した白山上野遺跡、規模の大きな掘立柱建物跡が検出された明後沢遺跡、密教の法具である六器が出土した道上遺跡第２次調査などがあげられる。

平泉藤原氏が滅亡し、岩手県南部から宮城県北部地域を拝領したのは葛西氏であった。その中で伊沢郡を実質的に支配していたのは柏山館・大林城（金ケ崎町）を居城とする柏山氏であったという。前沢区ではこれまでに13箇所の中世城館が知られているが、発掘調査が行われたのは白鳥舘遺跡、西舘跡、明後沢遺跡郡の周辺など多くはない。「風土記御用書出」によると、中畑城（城主、樫山平次郎）、前沢城（城主、樫山彦三郎）「仙台領古城書上」には中畑城（城主、樫山彦三郎）、前沢城（城主、

1:50,000「北上・水沢」

第４図　周辺の遺跡分布図

No.	遺跡名	種別	時代	所在地
1	八反町	散布地	古・中	前沢区古城字向田ほか
2	中畑城（樫山城）	城館跡	旧・古・中	前沢区古城字水上西
3	大壇	集落跡	平	水沢区真城字大壇・南上野
4	折居舘	城館跡	中	水沢区真城字中崎
5	雷神Ⅰ	集落跡	平	水沢区真城字雷神ほか
6	真城ガ丘団地	集落跡	平	水沢区真城字真城ヶ丘二・三丁目
7	高田	集落跡	平	水沢区真城字高田
8	堤尻下	散布地	中	水沢区真城字堤尻下
9	浜田	散布地	縄・平	水沢区真城字浜田
10	畑田荒谷	散布地	平	水沢区真城字荒谷
11	舘（中野館）	集落跡	古・平・中	水沢区真城字舘・字金田・字畑ヶ田
12	金田Ⅰ	集落跡	平	水沢区真城字金田
13	向田	散布地	平	水沢区真城字北野
14	北野Ⅰ	散布地	平	水沢区真城字北野
15	北野Ⅱ	集落跡	平	水沢区真城字北野
16	北野Ⅲ	集落跡	平	水沢区真城字北野
17	水の口	散布地	平	水沢区姉体町字水の口前
18	水ノ口前東	散布地	平	水沢区姉体町字水ノ口前
19	小水ノ口	散布地	平	水沢区姉体町字水ノ口
20	上姉体城（舘）	城館跡	中	水沢区姉体町字寺田
21	寺西南	散布地	平	水沢区姉体町字寺ノ西
22	姉体車堂Ⅱ	散布地	平	水沢区姉体町字車堂稗田下
23	姉体車堂Ⅲ	散布地	平	水沢区姉体町字車堂
24	元天神前Ⅱ	散布地	平	水沢区姉体町字元天神前字北白山
25	上島	散布地	平	水沢区姉体町字上島
26	沖	散布地	平	水沢区姉体町字目細
27	北白山Ⅰ	散布地	平	水沢区姉体町字北白山
28	北白山Ⅱ	散布地	平	水沢区姉体町字北白山
29	北白山Ⅲ	散布地	平	水沢区姉体町字北白山
30	根蕪	散布地・環濠	平	水沢区姉体町字根無
31	上林下	散布地	古	水沢区真城字上林下
32	中林Ⅲ	散布地	平	水沢区真城字中林
33	中林A	集落跡	平	水沢区真城字中林
34	中林B	集落跡	平	水沢区真城字中林
35	中林下	集落跡	平	水沢区真城字中林下
36	馬籠舘	城館跡	中	水沢区真城字馬篭舘
37	中平舘	環濠屋敷集落	平・中・近	水沢区真城字中平
38	中平西	散布地	平	水沢区真城字中平
39	東谷地	散布地	平	水沢区真城字東谷地
40	中平	散布地	平	水沢区真城字中平
41	中平東	散布地	平	水沢区真城字中平
42	寺ケ前Ⅰ	散布地	平	水沢区真城字谷地田
43	寺ケ前Ⅱ	散布地	平	水沢区真城字谷地田
44	寺ケ前Ⅲ	散布地	平	水沢区真城字谷地田
45	島田Ⅰ	散布地	平	水沢区真城字島田
46	島田Ⅱ	散布地	平	水沢区真城字島田
47	島田Ⅲ	散布地	平	水沢区真城字島田
48	島田Ⅳ	散布地	平	水沢区真城字島田
49	真城落合	散布地	平	水沢区真城字落合
50	土手北	散布地	平	水沢区真城字土手
51	土手南	散布地	平	水沢区真城字土手
52	二ツ渕	散布地	平・中	水沢区真城字二ノ渕
53	二ツ渕北	散布地	平	水沢区真城字二ツ渕
54	二ツ渕南	散布地	平	水沢区真城字二ツ渕
55	谷地舘	散布地	平	水沢区真城字谷地舘
56	下植田	散布地	平	水沢区真城字下植田
57	原抜	散布地	平	水沢区姉体町字原抜
58	樋ノ口	散布地	平	水沢区姉体町字樋ノ口
59	小庄	散布地	平	水沢区姉体町字小庄
60	宿	散布地	古	水沢区姉体町字宿ほか
61	庚申塚	散布地	平	水沢区姉体町字庚申塚
62	迎畑	散布地・舘跡？	平	水沢区姉体町字鍛冶屋敷・迎畑
63	漆林Ⅰ	散布地	縄・古	水沢区姉体町字漆林
64	漆林Ⅱ	散布地	古	水沢区姉体町字漆林
65	吹張	散布地	平	水沢区姉体町字吹張
66	内城吹張	散布地	縄～平	水沢区姉体町字深町・内堀・吹張
67	吹張鞘戸	散布地	平	水沢区姉体町字吹張・鞘戸
68	鞘戸	散布地	古	水沢区姉体町字鞘戸
69	小谷下	散布地	古	水沢区姉体町小谷下
70	松葉	散布地	縄～平	水沢区姉体町字内城、野中
71	鶴城舘（黒石古舘）	城館跡	平・中	水沢区黒石町字鶴城
72	下柳舘（下谷木舘）	城館跡	中	水沢区黒石町字下柳
73	南下田	散布地	平	水沢区真城字南下田
74	迎野Ⅰ	散布地	古	水沢区真城字迎野
75	迎野Ⅱ	散布地	古	水沢区真城字迎野
76	高根Ⅰ	散布地	古	水沢区真城字高根・字砂川
77	高根Ⅱ	散布地	古	水沢区真城字高根
78	堂田Ⅰ	散布地	古	水沢区真城字堂田
79	堂田Ⅱ	散布地	古	水沢区真城字堂田
80	栗林	経塚・屋敷跡	中・近	水沢区真城字八反町
81	谷地	散布地・城館跡	中・近	水沢区真城字谷地
82	堤ケ沢Ⅰ	集落跡	平	水沢区真城字堤ケ沢
83	堤ケ沢Ⅱ	集落跡	平	水沢区真城字堤ケ沢
84	要害	城館跡	中・近	水沢区真城字要害
85	折居舘	城館跡	中	水沢区真城字中崎
86	北舘	環濠屋敷跡	中	前沢区古城字北舘
87	北舘東Ⅰ	散布地	古	前沢区古城字北舘東
88	北舘東Ⅱ	散布地	縄・古	前沢区古城字北舘東
89	熊野	散布地	平	前沢区古城字幅
90	古城外ケ沢	散布地	古・縄	前沢区古城字外ヶ沢
91	高日向	散布地	弥・平	前沢区古城字高日向
92	養ケ森	集落跡	平	前沢区養ケ森
93	幅	散布地・瓦窯跡？	縄・平	前沢区古城字幅ほか
94	前堀	散布地	縄・古	前沢区古城字前堀
95	八郎舘	散布地・城館跡	平・中・縄	前沢区古城字高代寺
96	鳥子沢	散布地・城館跡	平・中	前沢区古城字鳥子沢
97	明後沢	散布地・城館跡？	平	前沢区古城字明後沢ほか
98	宗角舘	城館跡	中・平	前沢区古城字姥沢
99	長者舘	城館跡	中	前沢区古城字南上野
100	砂子田	散布地	古	前沢区古城字砂子田
101	舘合下	散布地	平	前沢区古城字舘合下
102	下町	散布地	縄・平	前沢区古城字下町ほか
103	草井川	散布地	平	前沢区古城字草井川
104	水ノ口	集落跡	縄・平	前沢区白山字水ノ口
105	六日入	城館跡	中・古	前沢区白山字古舘
106	川前	散布地	古	前沢区白山字川前
107	古城林	散布地	古	前沢区古城字林後ほか
108	檜葉田	散布地	平	前沢区白山字檜葉田
109	九郎舘	城館跡	中	前沢区古城字南上野
110	寺ノ上	散布地	古	前沢区古城字寺ノ上
111	寺ノ上経塚	経塚	中	前沢区古城字寺ノ上
112	古城上野	散布地	古・縄	前沢区古城字寺領上野
113	寺領沖	散布地	古	前沢区古城字寺領沖
114	内ノ町	環濠屋敷跡	中	前沢区古城字内ノ町
115	水尻	散布地	縄・古	前沢区古城字水尻
116	四反田Ⅰ	散布地	平	前沢区古城字四反田地内
117	四反田Ⅱ	散布地	奈・平	前沢区古城字四反田地内
118	古城方八丁	散布地	縄・古	前沢区古城字宿ノ前
119	高殿Ⅰ	散布地	古	前沢区古城字高殿地内
120	高殿Ⅱ	散布地	平・近	前沢区古城字高殿
121	道上	散布地	古	前沢区白山字道上
122	合野	散布地	古	前沢区白山字合野
123	学堂	散布地	平	前沢区白山字学堂
124	学堂Ⅱ	散布地	古	前沢区白山字合野・学堂
125	内屋敷	散布地	平	前沢区白山字内屋敷
126	川岸場Ⅰ	散布地	縄・弥・平	前沢区白山字川岸場
127	川岸場Ⅱ	集落・環濠屋敷跡	縄・弥・平・近	前沢区白山字川岸場
128	小林繁長	散布地	縄・弥・平	前沢区白山字小林・古宿
129	要害	散布地・環濠屋敷跡	古・中	前沢区古城字要害
130	要害Ⅱ	散布地、環濠屋敷跡	古・中	前沢区古城字要害ほか
131	亀田	環濠屋敷跡	中	前沢区古城字亀田
132	上ノ台	環濠屋敷跡	中	前沢区古城字上ノ台
133	田高Ⅱ	散布地・環濠跡	縄・古・中	前沢区白山字田高
134	彼岸田	散布地	縄・平	前沢区白山字彼岸田
135	安倍舘	城館跡？	古～中	前沢区字阿部舘
136	境田	散布地	縄・平	前沢区古城字境田ほか
137	迎畑	散布地	奈・平	前沢区白山字迎畑・宮内
138	安久沢東	散布地	縄・古・中	前沢区古城字水神野ほか
139	竹沢	集落跡	平	前沢区字竹沢
140	栗ヶ島	散布地・環濠屋敷跡	中・近	前沢区字駅東4丁目
141	赤坂Ⅱ	散布地	平	前沢区字赤坂
142	前沢城	城館跡	中	前沢区字陣場
143	目呂木本杉	散布地	古	前沢区字本杉
144	長壇高畑	散布地	平	前沢区字長壇・高畑
145	上麻生城（大麻生柵）	城館跡	中・古	前沢区白山字舘、内舘
146	壇ノ腰	散布地	縄・平	前沢区生母字壇ノ腰
147	登満羽毛経塚	経塚	平	前沢区生母字壇ノ腰
148	西舘	散布地・城館跡	縄・中	前沢区生母字西舘
149	羽場舘	城館跡	中	前沢区生母字羽場
150	赤間舘	城館跡？	中	前沢区生母字雨請石、峠
151	古舘	城館跡	中	前沢区生母字剣林
152	東舘(赤生津城)	城館跡	中	前沢区生母字斎田
153	二子Ⅱ	散布地	中・近	前沢区生母字二子
154	生母長根Ⅰ	散布地・経塚？	縄・平	前沢区生母字新地
155	生母長根Ⅱ	経塚？	平	前沢区生母字新地
156	田谷	散布地	平	前沢区生母字田谷
157	大桜	集落跡	平	前沢区字屋敷・赤面・里
158	新城Ⅰ	城館跡	縄・平・中	前沢区字新城
159	新城Ⅱ	散布地	平	前沢区字新城
160	泊ケ崎	散布地	縄・平	前沢区字泊ヶ崎
161	合ノ沢A	散布地	縄・平・近	前沢区字合ノ沢
162	舞鶴公園	散布地	縄・古	前沢区字徳沢
163	白鳥舘	城館跡	縄・平・中	前沢区字白鳥舘ほか

第1表　周辺遺跡一覧表

樫山平四郎)、九郎館（城主、樫山九郎)、などの記載がある。この他に折居館（城主、柏山明好の四男折居宮内明久)、前沢城は樫山（柏山）氏の重臣である三田氏が永く居城としていたと伝えるものや、六日入城に葛西清重の子定重の居館と伝えるものがある。
葛西・柏山・三田氏を中心とした当地方の動向については主なものについて以下の年表に整理した。

年代		事象１	事象２
鎌倉初		三田将監を三千石にて前沢に封じ、ゆくゆくは中畑村を合わせて四千石とする	
	16c初	安土呂井城主（水沢）の岩渕氏の所領小山郷（前沢古城含むか)、中野郷（真城)、安土呂井郷	
	1530頃		上麻生城 平国久、姉体村居城 大内彦三郎 水沢城主 蜂谷次郎左衛門
	1530頃	三田主計頭かずえのかみ重明	
	1543	三田主計頭に五千苅	
	1571	三田刑部少輔に五千苅	
天正元年	1573	三田氏は葛西氏より五千苅（桃生郡寺崎村)、金ヶ崎へ南部氏が侵攻	
天正３	1575	この頃母体に佐藤豊後守清信（大和田氏の臣）	
天正７	1579	目呂木村が登場、他国の戦の恩賞地として	
天正９	1581	柏山氏の内紛、明吉の子の内紛、嫡男明国と二男明宗	三男小山九郎、四男折居明胤
天正10	1582	南部氏九戸政実が金ヶ崎城を落とす。葛西勢は峠城主寺崎氏を総大将に金ヶ崎を攻めるが敗れる。	
天正11	1583	鬼柳の鈴木兄弟が流浪し、二男良作が六日入村に居住（後の大室鈴木家へ）	
天正１５	1587	本吉 気仙の争乱に三田氏は50騎を引き具して駒を進めた	五千石近くの領主であったろう
天正15	1587	気仙郡浜田市と本吉郡の元吉氏の争乱が再燃、柏山明宗が病弱なため三田氏に陣代	六日入村鈴木氏も気仙浜田乱で活躍、赤生津安倍氏も活躍
天正15	1587	騒乱で中畑村住の岩渕三郎左衛門が活躍、三千苅加増	
天正16	1588	三田刑部少輔左衛門義広は主家柏山氏に攻められ滅ぶ（前沢城）	三田高ひろとあるから領地前沢と中畑の二郷の他に領土を広げていた（応永８年より古）
天正18	1590	奥州仕置で柏山氏没落	

中世、近世の遺跡では、城館や屋敷があったとされるところが多く確認されている。特に本遺跡の東約１㎞に位置する川岸場Ⅱ遺跡には、天正16年（1588年）前後に「大室屋敷」と言われた鈴木家の環濠屋敷があった。寛永19年（1642年）には、屋敷の南に仙台藩の御本石御蔵が置かれ、現前沢区内の各村の年貢が収納された。屋敷南側には川湊があり、石巻と盛岡を運行する船舶が停泊したという。

Ⅲ　調査・整理の方法

野外調査

調査区の設定と遺構の命名

調査区の地区割にあたっては、それぞれの調査区が分かれているためそれごとに地区割りをした。平面直角座標（第Ｘ系：世界測地系）に合わせた基準点・補点をもとにして、遺構や地形測量を行ったが、グリッド設定はしていない。設定した基準点・補点の座標は世界測地系であり、座標値は以下のとおりである。

＜八反町遺跡＞

基準点１	Ｘ＝－102161.656	Ｙ＝27331.358	Ｈ＝32.824m
基準点２	Ｘ＝－102205.707	Ｙ＝27320.731	Ｈ＝34.078m
補　点１	Ｘ＝－102231.088	Ｙ＝27311.080	Ｈ＝33.208m
補　点２	Ｘ＝－102279.244	Ｙ＝27297.270	Ｈ＝33.266m
Ｋ１	Ｘ＝－101922.452	Ｙ＝27559.230	Ｈ＝33.081m
Ｋ２	Ｘ＝－101888.650	Ｙ＝27468.618	Ｈ＝32.567m
Ａ	Ｘ＝－102013.784	Ｙ＝27523.863	Ｈ＝31.730m
Ｂ	Ｘ＝－102073.978	Ｙ＝27500.222	Ｈ＝32.042m
Ｃ	Ｘ＝－102041.176	Ｙ＝27467.050	Ｈ＝32.765m

＜中畑城跡＞

中畑城跡に関してはその数が多いため、第46図を参照願いたい。

この基準点と補点を基準として調査区および検出遺構や出土遺物の記録をとった。調査区は遺跡内に点在するようにあるため、八反町遺跡ではＡ～Ｊ区と、中畑城跡ではＡ～Ｇ区と呼ぶこととし、遺構外出土遺物に関してはこの調査区ごとに取り上げた。

遺構の名称

検出された遺構の名称は、遺構の種類に応じて検出順にそれぞれ番号を付けて、１号掘立柱建物跡・２号掘立柱建物跡、１号井戸跡・２号井戸跡…のように命名した。精査の過程や終了後に検討した結果、遺構ではないと判断したものや、遺構の種類を変更した番号については、混乱を防止するために欠番とした。よって掲載の無い遺構名は遺構ではなかったものである。本調査では性格不明遺構に関してのみ遺構略号としてＳＸを使用した。

試掘・粗掘と遺構検出

当初、幅１～２ｍ、長さ３～４ｍのトレンチを地形に応じて任意の場所に入れ、土層の堆積状況を把握した。その試掘にもとづいて表土掘削を行った。

八反町遺跡では各調査区の表土の厚さには大きな差があり、Ａ～Ｃ区では１ｍ前後の表土があった。一方、Ｄ～Ｊ区は水田であったため、20～30㎝と浅かった。表土除去は重機と人力により行い、可能な限り遺構外出土遺物を採取することに努めている。遺構検出は人力で行った。遺構の検出は、所謂地山面で行った。中畑城跡では調査区の現況が水田のところが多かった。水田の土を除去（重機で）

すると地山となる場所が殆どで遺構検出も地山面で行った。Ｃ区とＧ区は堀があることが初めから想定されていたため、あまり重機で下げすぎないようにして、可能な限り人力で掘り下げて遺物を採取することに努めた。

精査

検出された遺構は、原則として竪穴住居跡や性格不明遺構など大形の遺構の場合は４分法、土坑類は２分法で行った。精査の各段階において必要図面の作成や写真撮影を適宜行った。

遺構内出土の遺物は、覆土で可能な限り分層して取り上げ、床面出土の遺物は写真撮影・図面作成後に取り上げた。遺構外出土の遺物については、原則として調査区ごとに出土した層位を記して取り上げ、適宜、写真撮影・図面作成を行った。

また、現場での記録作成では、上記の図面・写真以外にField･Cardを使用して、遺跡の調査経過や遺構の精査の進捗状況を記録している。

実測・写真撮影

平面実測は電子平板を使用して行った。各遺構の測点はかつての遣り方実測と同程度である。レベルは、基準高をもとに絶対高で記録される。断面実測については、任意の高さを基に設定した水糸を基準として計測を行い、手書き実測図とした。

写真撮影は、モノクローム６×９㎝判１台、1000万画素以上の一眼レフデジタルカメラ１台を使用して調査員が行った。撮影に際しては、整理時の混乱を避けるために撮影カードを使用した。実際の撮影は各種遺構の覆土堆積状況、掘り上げ状況、遺物の出土状況などについて行っている。調査終了段階でセスナ飛行機による航空写真撮影を行っている。

土層注記

断面図作成後に土層注記を行った。観察項目は、色調・土性・締まり・混入物などである。基本的には『新版標準土色帳』（1990年版、小山正忠・竹原秀雄編・著）をもとに行っているが、締まりは、調査員の主観で判断した。個々の遺構の覆土堆積状況は、自然堆積か人為堆積かの判断と、埋没している土の起源を把握することを課題とした。層名は調査区内に見られる基本的な土層をローマ数字（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）、遺構内覆土をアラビア数字（１・２・３）で表した。層位の細分の必要が生じた場合は、小文字のアルファベットを付し、Ⅰａ・Ⅰｂ・１ｃ・…などと表わした。

土壌水洗

八反町遺跡の12世紀の竪穴遺構・性格不明遺構、中畑城跡の16世紀の堀跡では、動植物遺存体が存在する可能性を考慮し、各遺構の覆土を採取し、水洗い・天日での乾燥・篩（５㎜・３㎜・１㎜）による仕分けを行った。

普及活動

野外調査での成果は地元住民を対象に現地説明会（現地公開）を企画して、遺跡の内容を説明した。また県民を対象とした当センターの事業である「遺跡報告会」(於県民会館）でも両遺跡の調査成果を報告した。

＜八反町遺跡＞	現地公開	平成22年11月25日	第13回遺跡報告会	平成23年２月５日
＜中畑城跡＞	現地説明会	平成23年６月11日	第14回遺跡報告会	平成24年２月18日

室内整理

八反町遺跡の室内整理の期間は、平成23年３月1日～平成23年３月31日である。
中畑城跡の室内整理期間は平成23年３月１日～３月31日、８月22日～９月30日、平成24年１月16日～３月31日である。

期間内で、得られた遺物・実測図・写真などの整理を行った。野外調査で得られた遺物、実測図、写真などの各種資料は室内整理の段階で次のように処理し、整理を行い、報告書作成とともに資料化を行った。

遺構に関わる記録

実測図は遺構ごとに分類し、図面は点検のうえ、デジタルトレースを行った。電子平板で測量したデータについては、現場で入手した情報をそのまま保存することとし、編集用データは、手実測で記録したその他の実測図と合成し、遺構図版を作成している。

野外調査で撮影した写真については遺構ごとに分類し整理した。その中から代表的な写真を選び遺構写真図版を作成し報告書に掲載している。その際に廃土の山が遺構を隠していた写真があったため加工して廃土を消したものが１枚ある。

撮影されたフィルムはネガアルバムに密着写真と一組にして収納した。

遺物の整理

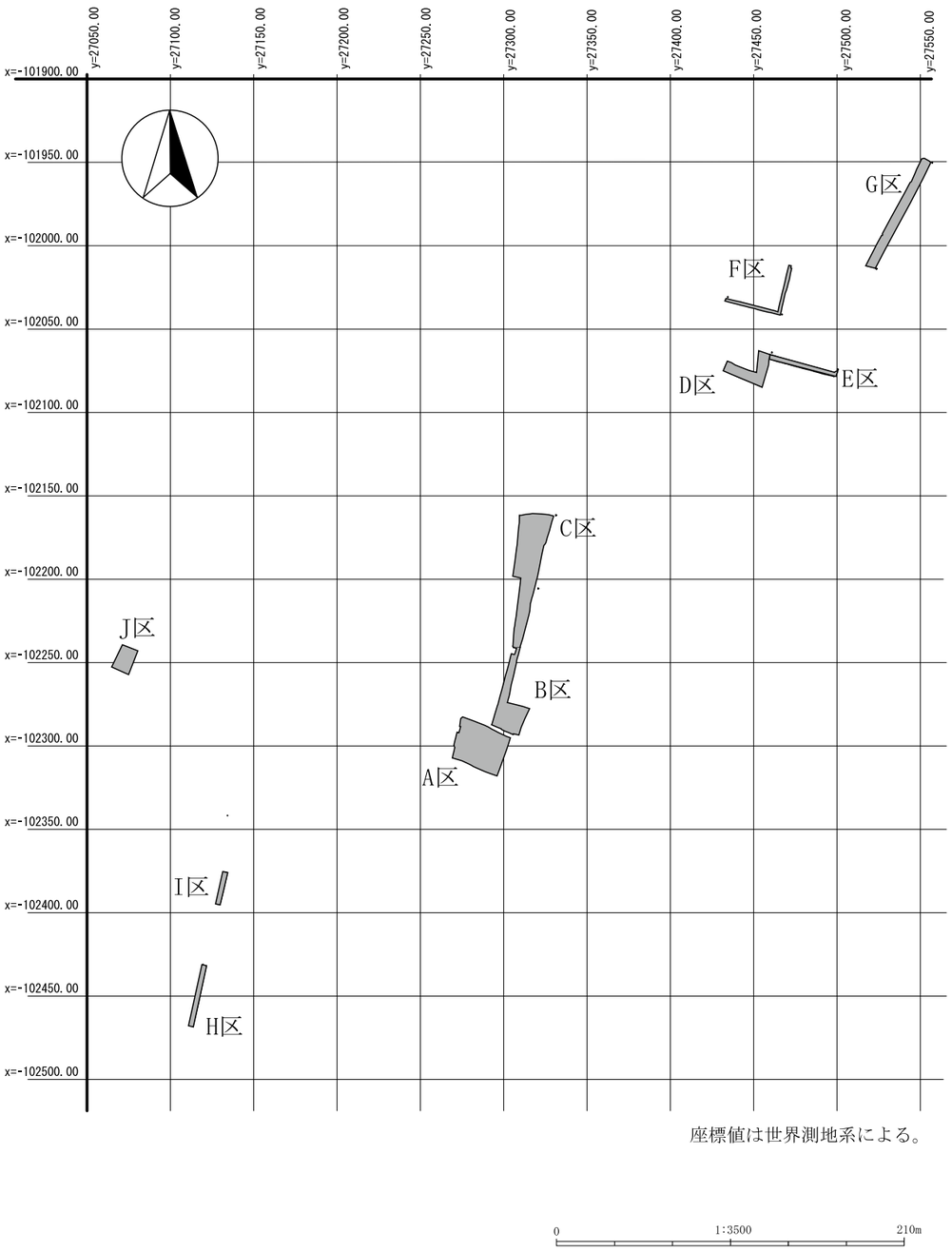
遺物は野外及び当センター整理室で水洗した後、細片は別として、出土地点・層位等を登録した遺物番号を各破片に注記した。その後、出土地点・層位ごとに仕分けを行い、遺構ごと、遺構外出土の遺物は調査区ごとに接合・復元作業を行った。遺物の実測図は実大とし、トレースは遺物の状況に応じて実大あるいは縮小して図化した。石材・炭化材・炭化種実・放射性炭素年代測定などの分析は外部の専門家に委託した。

遺物の選別・図化の基準

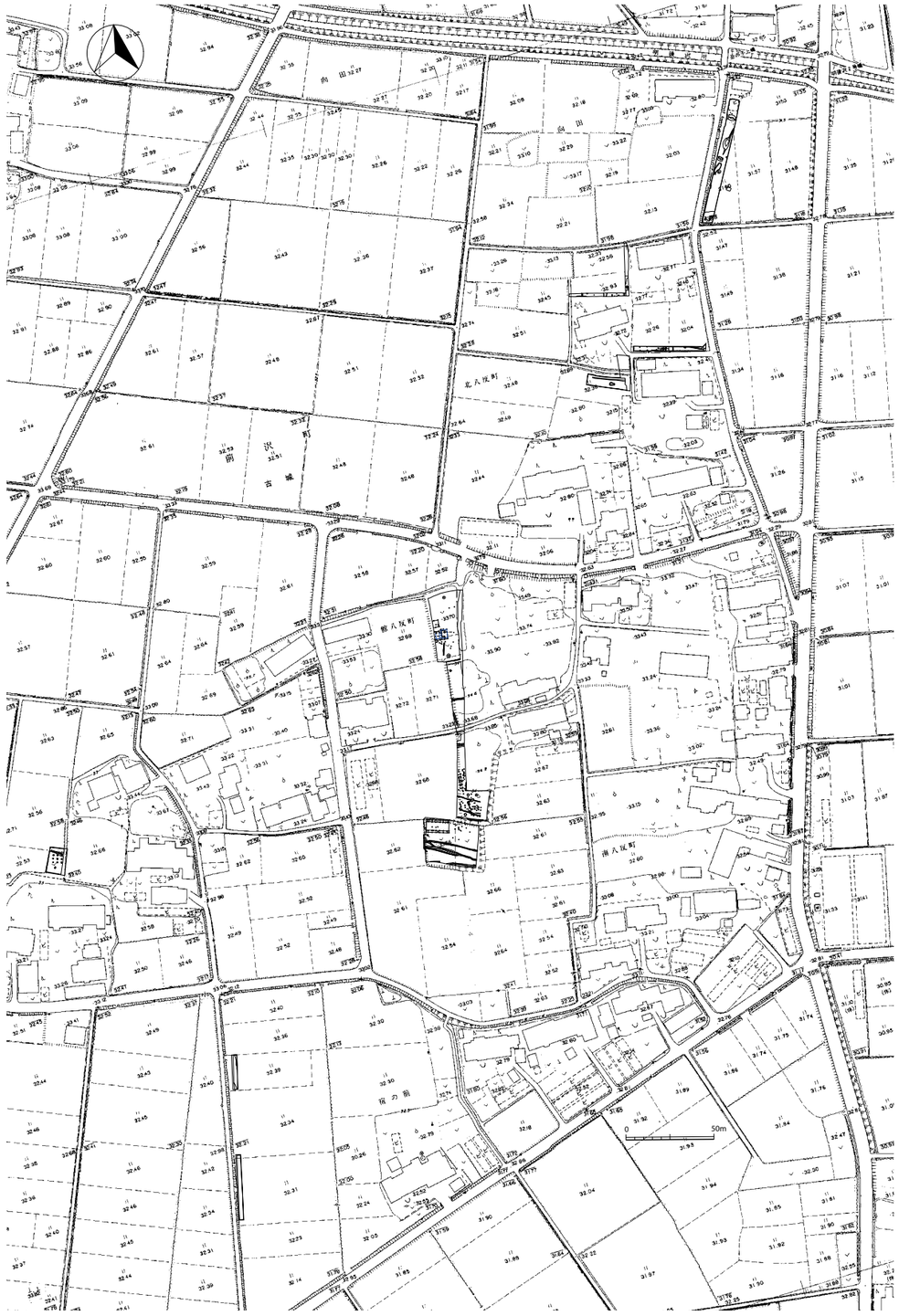
遺物の整理・報告にあたっての作業・記録作成は以下の方針で進めた。報告書に掲載された遺物は出土した遺物のすべてではなく、整理のなかで設定した基準を基に選別した一部の資料である。各遺構に伴う遺物を最優先し、遺構外出土であっても本遺跡を代表するものについては掲載した。また、各種の遺物については破片数、重量の計測を行い台帳作成している。

第5図　遺跡地形図と調査区①

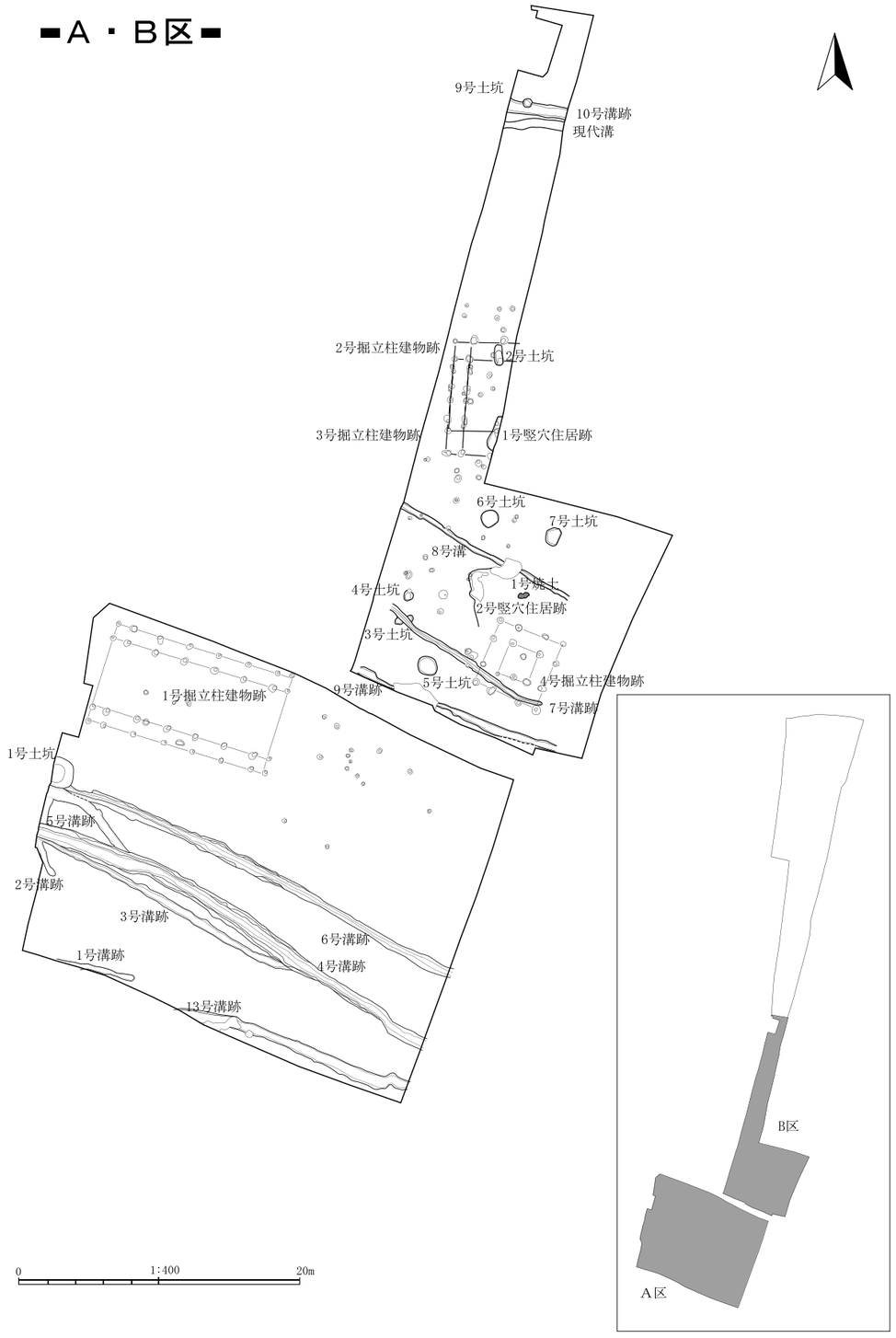
第5図　遺跡地形図と調査区②



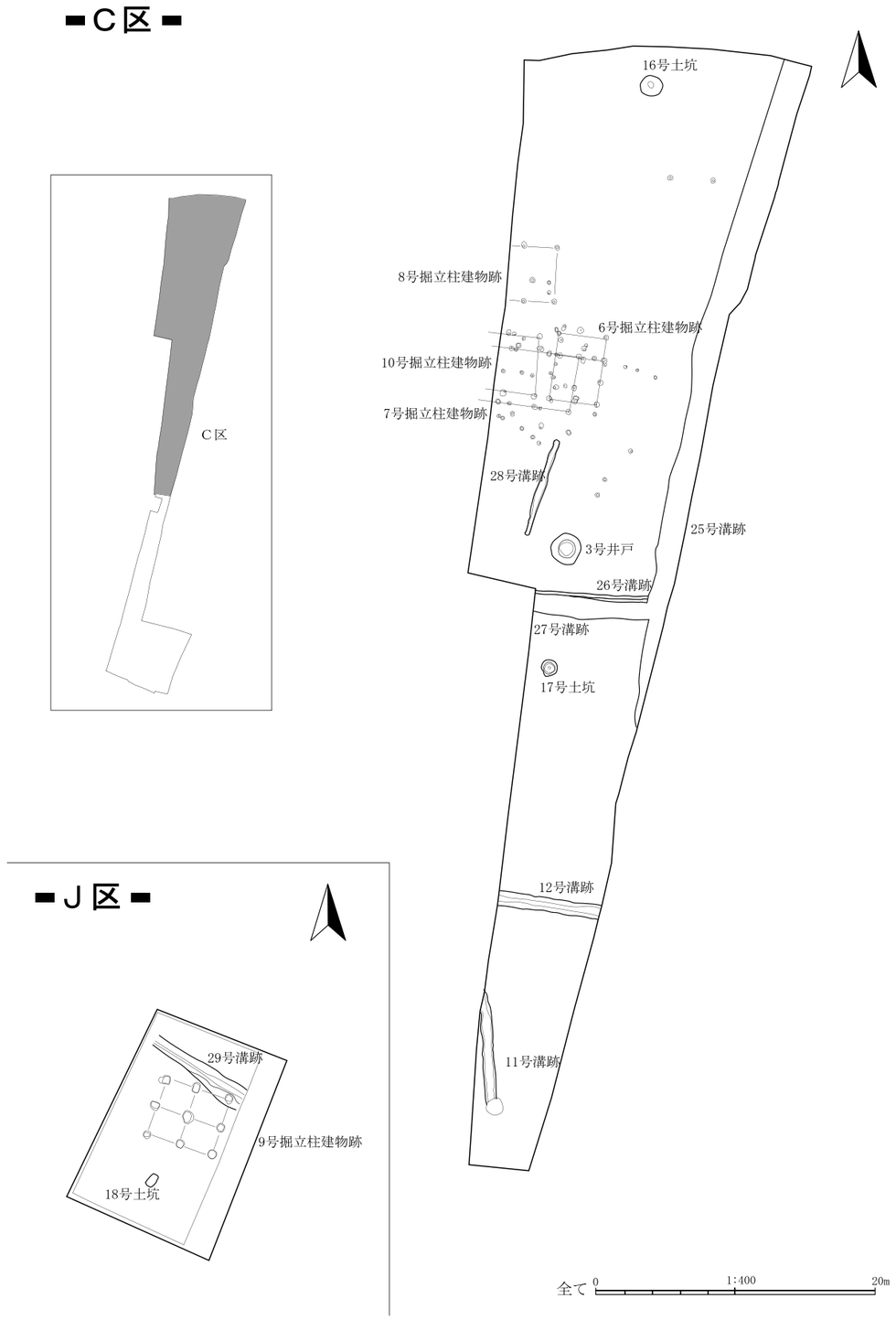
第6図　調査区（A-J地区）



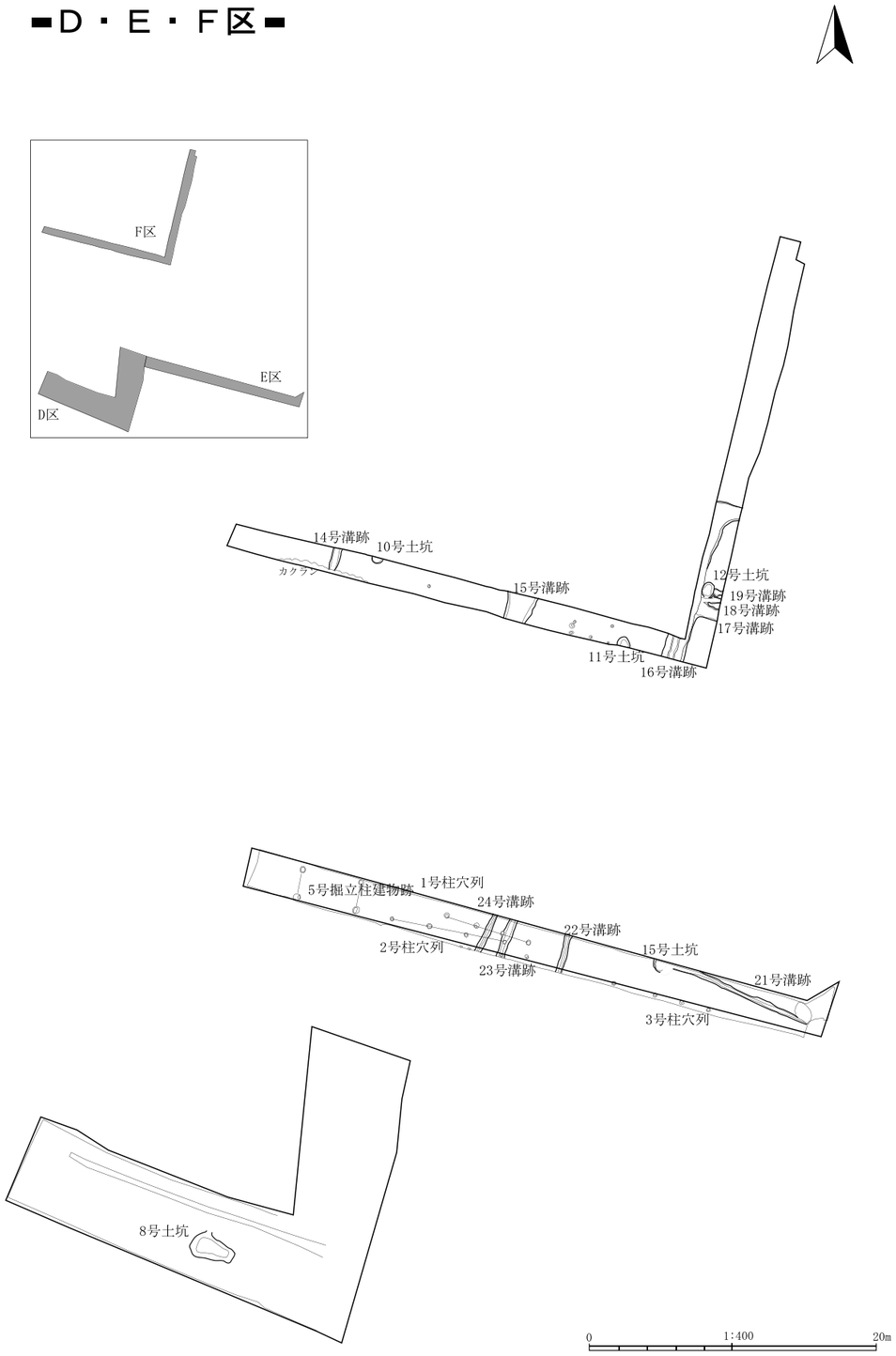
第7図　遺構配置図1



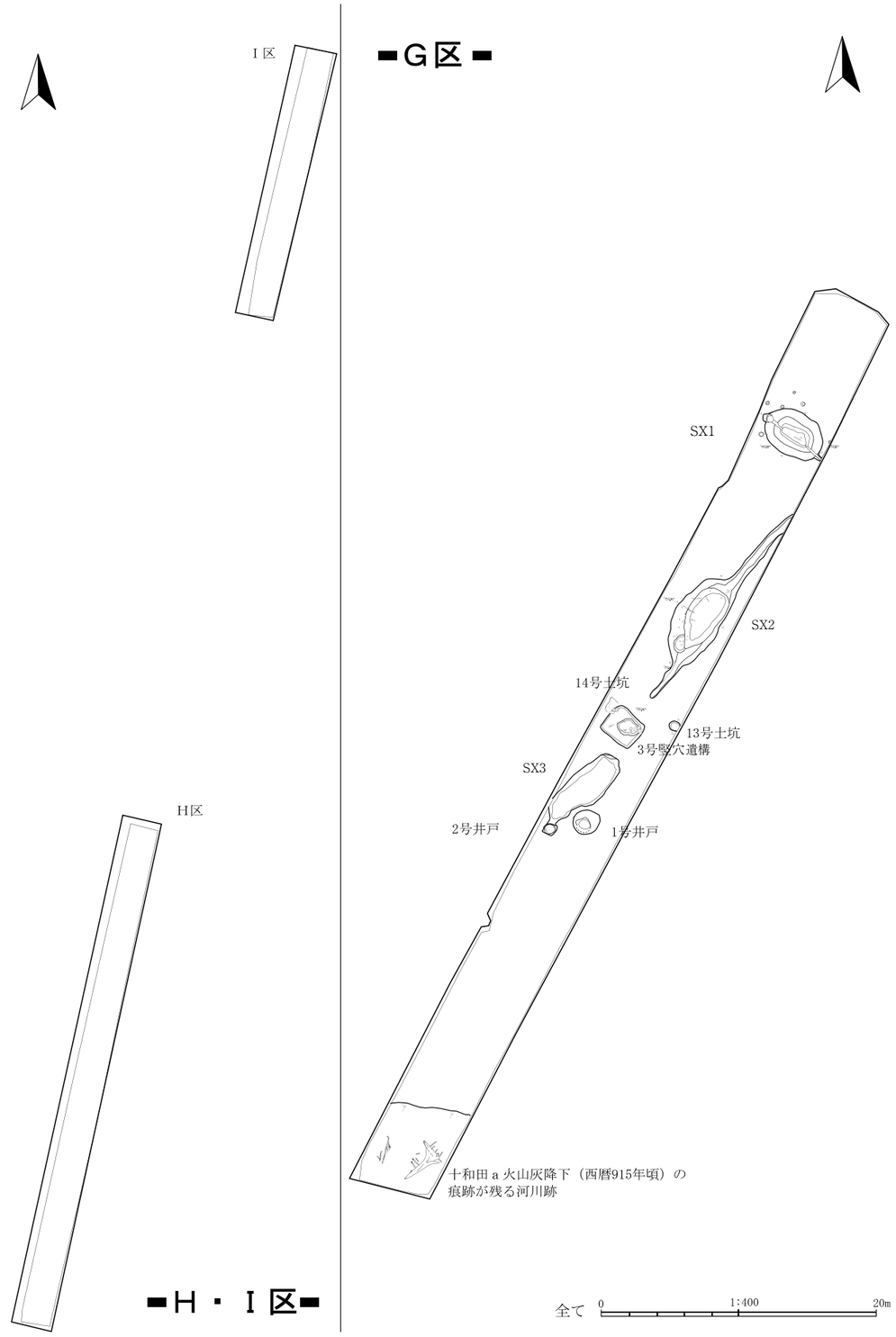
第8図　遺構配置図2(A･B区)



第9図　遺構配置図3(C･J区)



第10図　遺構配置図4(D･E･F区)



第11図　遺構配置図5(G･H･I区)

Ⅳ　八 反 町 遺 跡

1　概　　要

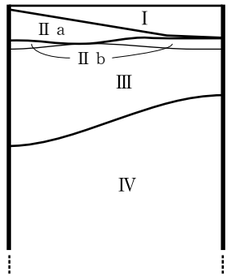
遺跡は奥州市前沢区古城字南八反町・字北八反町・館八反町・向田地区にある。遺跡の範囲は東西500m×南北550mと広く、現況は水田が主であとは畑や宅地となっている。調査区はＡ～Ｊ区に分かれており、主に遺跡中央（Ａ－Ｃ区）、遺跡の北－北端（Ｄ－Ｇ区）、遺跡の南端（Ｈ・Ｉ区）、遺跡の西側（Ｊ区）に分散している。

遺構は12世紀後半の道路跡１、掘立柱建物跡５棟、竪穴遺構１棟、井戸状遺構２基、性格不明遺構３基、平安時代の竪穴住居跡２棟、河川跡１箇所、その他の時期や時期不明の遺構としては掘立柱建物跡４棟、柱穴列３基、溝27条、土坑18基、井戸状遺構１基が検出された。

幅約4.5mある12世紀後半の道路跡が北西-南東方向に延びており、これに沿うように掘立柱建物跡が４棟見つかっている。さらに北へ400m程離れたところからは井戸状遺構や性格不明遺構(粘土を採取した跡か）が検出された。11世紀や13世紀の遺構や遺物はなく、12世紀になって発展した集落と考えられる。

2　基　本　層　序

遺跡の層序は各調査区により異なる。Ａ～Ｃ区は昭和初期に周辺の開田整地により生じた残土を盛り上げており、周辺より１m以上高い地形を呈していた。この厚い盛土により旧表土が耕作されることはなく、遺構の残りも良好であった。Ｄ～Ｊ区は水田・休耕田・畑地であり、基本的に耕作の影響が遺構検出面にまで及んでいる。



第12図　基本土層

Ⅰ層　　暗褐色土　盛土・現在の耕作土を一括。層厚10～100cm。
Ⅱａ層　　黒褐色土　圃場整備前の旧表土でＡ～Ｃ区にのみ残っている。層厚０～５cm
Ⅱｂ層　　暗褐色土　Ⅲ層とⅡａ層の漸移層。層厚０～５cm。
Ⅲ層　　黄褐色土　地山。層厚10～100cm。地点によっては粘土層を形成している。
　　この粘土層は遺跡北側で特に発達しているようで30～50cmの厚さを持つところもある。
　　薄い地点では更に下位の砂礫層（Ⅳ層）が確認される。
Ⅳ層　　暗褐色砂礫　層厚０～100cm。部分的に確認される。

3　検　出　遺　構

（1）掘立柱建物跡・柱列

Ａ区から１棟、Ｂ区から３棟、Ｃ区から３棟、Ｅ区から１棟、Ｊ区から１棟の合計９棟の掘立柱建物跡が検出されている。１～４、９号掘立柱建物跡が12世紀の可能性が高い遺構、その他は時期不明である。本稿では１尺を303mmにて計算している。また遺構配置図には掘立柱建物跡にならなかった柱穴についても、検出したすべてを掲載している。

１号掘立柱建物跡（第13図、写真図版6・7）

［位置］遺跡のほぼ中央にあたる、Ａ区の北西端部に位置する。１号道路跡からは最短で4.8mあり、本遺構の長軸方向と道路跡の延びる方向はよく似ている。

［重複関係］他遺構との重複が全くないため、平面形式についてはほぼ確実なものである。

［平面形式］東西棟の掘立柱建物である。桁行きは総長14,756.1mm(48.7尺)、梁行きの総長は7,150.8mm（23.6尺）である。桁行き５間、梁行き２間の身舎の四面に幅の狭い庇が取り付く形態と考えている。西側調査区外に遺構が延びる可能性は殆どない。面積は約90㎡（27坪）と推定される。

［建物方位］Ｎ－73°　－Ｗ

［柱穴］身舎に使われている柱の柱穴は大きく深いのに対し、庇部分の柱穴は小さくやや浅いものが含まれる。明瞭な抜き取り痕跡を有するものはなかった。柱痕跡を検出できる柱穴もあり、上屋柱で22～28cm、庇に使われている柱で15～21cmの柱が用いられていたようである。

［柱間寸法］桁行き方向は6.6～7.8尺と一定ではないが7.2尺で概ね割り切れるようである。桁行きの柱穴はほぼ真っ直ぐに柱穴が並んでいるものの、南西部では並びが悪い。梁行きは柱穴２個により16.5尺であるから、これを半分にして梁行きを２間としたのであろう。梁行き中心にあるはずの柱穴は注意して探したが見つからなかった。よって他よりも極端に浅い柱穴であったか、地表面で立ちあがるような構造のものであったと解釈したい。桁行き方向に付く庇の出は3.5～3.8尺、柱間寸法は身舎にほぼ対応しているようであり、真っ直ぐには並ばない。梁行き方向に付く庇の出は3.3～3.8尺で身舎と同様に中心に来る部分の柱穴は精査したが見つからなかった。庇の四隅は同じ寸法とはならないようである。この他、本遺構に伴うかどうかわからない柱穴が５個あるが、これも含めて掲載することとした。

［出土遺物］遺構に伴う遺物はない。

［時期・建物の性格］１号道路跡と関係が深い遺構と考えられること、近世の遺物は付近からは殆ど出土しなかったことなどから、12世紀後半の遺構と見るのが最も妥当である。建物は柱配置がやや整わないものの平面形式や規模は本県の中では大きな方の部類に入る。よって、当地方の有力者の家臣クラスの建物と考えられる。

２号掘立柱建物跡（第14図、写真図版９）

［位置］遺跡ほぼ中央のＢ区に位置する。

［重複関係］３号掘立柱建物跡と重複するが本遺構のほうが新しい。

［平面形式］南北棟とみられる掘立柱建物であるが、東側は調査区外へ続いている。桁行き6,878mm（22.7尺）、梁行きは東側が調査区外にたっしており3,333mm（11.0尺）までが確認できている。身舎と二面の庇からなる構造であるならば３間二面の建物となる可能性が高く、そうした場合は床面積が

約45.8㎡（13.9坪）となる。全体ではほぼ正方形に近い建物になりそうである。
［建物方位］Ｎ－５°－Ｅ
［柱穴］身舎と庇とで柱穴には大きな違いはなく、柱穴底面の規模をみると18㎝前後の柱が収まるように掘られていたと推測される。
［柱間寸法］身舎部分の桁行きは7.2尺、7.4尺、7.5尺と統一感がない。庇部分の桁行きも同様で7.3尺、8.1尺と等間隔とはならない。北側の梁行きは身舎7.2尺と庇部分は3.8尺で11尺となり、南側の梁行きは7.2尺と庇部分は3.8尺で11尺となりそうである。桁行きに関しては総長を22.2尺か22.5尺とし、それを３分割して柱を配置したものと推察される（この場合は１間7.4尺か7.5尺となる）。このことから梁行き総長22.1尺（或いは22.7尺）、桁行き総長21尺となり、桁行きが若干長い建物（ほぼ正方形となる建物）が想定される。
［出土遺物］遺構に伴う遺物はない。
［時期・建物の性格］１号道路跡、１・４号掘立柱建物跡との配置関係は互いに同じ時期に存在していても矛盾しないことから、広く12世紀代と捉えたい。建物の性格については３号掘立柱建物跡とともにほぼ建物の軸線が南北方向に揃えていることもあり、宗教関連施設か１号掘立柱建物跡のような住居であろう。

３号掘立柱建物跡（第15図、写真図版９）
［位置］遺跡のほぼ中央にあたるＢ区に位置する。
［重複関係］２号掘立柱建物跡と重複するが本遺構のほうが古い。
［平面形式］南北棟なのか東西棟になるのか判然としない掘立柱建物である。桁行き6,333㎜（20.9尺）、梁行きは東側が調査区外にたっしており3,333㎜（11.0尺）までが確認できている。身舎と二面の庇からなる構造であるならば３間二面の建物となる可能性が高く、そうした場合は床面積が約42.2㎡（12.8坪）となる。そして身舎だけをみれば梁行きのほうが長い建物となり、全体ではほぼ正方形に近い建物になりそうである。
［建物方位］Ｎ－５°－Ｅ
［柱穴］Ｐ47・48・114が他よりも大きな柱穴となった。梁行きの中心にくる部分（Ｐ47・114）に太い柱を使用していたのかもしれない。他の柱穴には大きな違いはなく、18㎝前後の柱が収まるように掘られていたと推測される。Ｐ48・54・55は柱を抜き取った痕跡がある。
［柱間寸法］身舎部分の桁行きは6.3尺、6.8尺、7.2尺と統一感がない。庇部分の桁行きも同様で6.6尺、7.0尺、7.3尺と等間隔とはならない。北側の梁行きは身舎7.0尺と庇部分は4.0尺で11尺となり、南側の梁行きは7.3尺と庇部分は3.7尺で11尺となりそうである。桁行きに関しては総長を21尺としてそれを３分割して柱を配置したものと推察される（この場合は１間7.0尺となる）。このことから梁行き総長22尺、桁行き総長21尺となり、梁行きのほうが若干長い建物（ほぼ正方形となる建物）が想定される。
［出土遺物］遺構に伴う遺物はない。
［時期・建物の性格］１号道路跡、１・４号掘立柱建物跡との配置関係は互いに同じ時期に存在していても矛盾しないことから、広く12世紀代と捉えたい。建物の性格については４号掘立柱建物跡のような宗教施設か１号掘立柱建物跡のような住居であろう。

４号掘立柱建物跡（第16図、写真図版８）
［位置］遺跡のほぼ中央にあたるＢ区に位置し、Ⅲ層上面にて検出された。
［重複関係］７号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。
［平面形式］１間四面の掘立柱建物である。桁行き47,571㎜(15.7尺)、梁行きも同じく4,757.1㎜（15.7尺）となる。面積は約22.7㎡（6.9坪）ある。周囲に柱穴をはじめとする遺構があまりないため、平面形式や規模に変更が生じる可能性は殆どない。
［建物方位］Ｎ－23°－Ｅ
［柱穴］身舎部分と庇部分を比較しても柱穴の規模や柱痕跡から推測される柱の太さに大きな違いは見られない。明らかな柱抜き取り痕を有するものはなかったが、Ｐ48・103・106などは柱穴上端が大きいので抜き取られているかもしれない。この建物跡の柱穴は浅い柱穴によって構成されている。これは基盤の砂礫層によって深く掘り下げることができなかったためであろうか、或いは本遺構の性格に起因しているのであろうか。柱穴の下端や柱痕から推定される柱の太さは15～18㎝が主体になる。
［柱間寸法］身舎部分は6.7尺、7.0尺、7.7尺と柱間寸法にばらつきが見られる。１間四面の建物であるから身舎は正方形が理想であると思うが、本遺構の場合は台形のような形状の身舎となる。庇部分では桁行き方向、梁行き方向共に4.5尺と6.7尺の２種類の柱間寸法によってできている。四隅が4.5尺となるように造られているようである。桁行き、梁行き共に柱穴は真っ直ぐには配列されていない。梁と桁を設定した根拠であるが、Ｐ88－106、Ｐ89－105が比較的直線的に結べるのに対して、Ｐ91－95、Ｐ99－103は直線的には結べないことから、前者を梁行き、後者を桁行きと考えた。
［出土遺物］遺構に伴う遺物はない。
［時期・建物の性格］建物の方位や配置が１号道路跡や１号掘立柱建物跡とよく似ていること、近世以降の遺物が周囲にから殆ど出土していないことなどから、１号道路跡と同じ12世紀に位置づけるのが最も妥当である。宗教関連施設か。

５号掘立柱建物跡（第19図、写真図版10）
［位置］遺跡北側のＦ区に位置する。
［重複関係］なし。
［平面形式］南北棟の掘立柱建物と推測される。狭い調査区のため建物の一部のみを確認した。桁行き1,969㎜（6.5尺）、梁行き4,091㎜(13.5尺）である。庇をもたない構造である。遺構の面積は不明である。
［建物方位］Ｎ－12°－Ｅ
［柱穴］検出面で径30～50㎝の円形を基調とする掘り方を持つ柱穴が主体である。明瞭な柱抜き取り痕は見られなかったが、柱痕跡も把握しにくい土色であった。
［柱間寸法］桁行き方向は6.5尺。梁行きは13.5尺であるから、本当は6.5尺の倍数である13.0尺を意図して構築されたと推察される。そうなると、梁行きも２間となり、柱も３本使われていてもいいわけだが、中央部は精査しても柱穴はみられなかった。
［出土遺物］遺構に伴う遺物はない。
［時期・建物の性格］時期不明である。建物の規模から主屋に付属するような建物と考えられる。

６号掘立柱建物跡（第17図、写真図版10）
［位置］遺跡中央付近にあたるＣ区に位置している。

［重複関係］７号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。
［平面形式］桁行き３間、梁行き２間の南北棟建物。桁行き総長4,817㎜（15.9尺）、梁行き3,393㎜（11.2尺）で遺構の面積は約16.3㎡（4.9坪）ある。
［建物方位］Ｎ－９°－Ｅ
［柱穴］検出面で径30㎝前後の円形を基調とした掘り方を持つ柱穴が多い。各柱穴の下端径等をみると大凡９～12㎝の柱を使用していたと推測される。Ｐ174・177・184などは柱抜き取り痕を有する可能性がある。
［柱間寸法］桁行き方向は5.3尺で統一されている。梁行きは、Ｐ177－184が6.2尺－5.0尺、Ｐ174－197が6.4尺－5.0尺と何れも東側が短くなる。P209－175間にも柱穴がないか探したが無かった。
［出土遺物］遺構に伴う遺物はない。
［時期・建物の性格］時期不明である。建物の規模から主屋に付属するような建物と考えられる。

７号掘立柱建物跡（第17図、写真図版10）
［位置］遺跡中央付近に相当するＣ区に位置している。
［重複関係］６・10号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。
［平面形式］桁行き２間以上、梁行き１間（２間か）の東西棟建物である。桁行きは西側調査区外へと続くものと考えている。
［建物方位］Ｎ－10°－Ｅ
［柱穴］検出面で径30～40㎝の掘り方を持つ柱穴からなる。各柱穴の下端径等をみると大凡９～12㎝の柱を使用していたと推測される。柱の抜き取り痕を持つものは見られなかった。
［柱間寸法］桁行き方向は7.0尺、7.3尺、7.5尺、7.9尺とややばらつきがある。梁行きは12.7尺、12.9尺である。梁行きは13.0尺を想定していたのであろうか、そうであれば6.5尺の２間とも解釈できる。
［出土遺物］遺構に伴う遺物はない。
［時期・建物の性格］時期不明である。小規模な付属小屋と考えられる。

８号掘立柱建物跡（第17図、写真図版10）
［位置］遺跡中央付近に相当するＣ区に位置している。
［重複関係］なし。
［平面形式］桁行き１間以上、梁行き１間（２間か）の東西棟建物である。桁行きは西側調査区外へと続くものと考えている。
［建物方位］Ｎ－３°－Ｅ
［柱穴］検出面で径30～40㎝の掘り方を持つ円形を基調とした柱穴からなる。各柱穴の下端径等をみると12㎝前後の柱を使用していたと推測される。柱の抜き取り痕を持つものは見られなかった。
［柱間寸法］桁行き方向は7.1尺、8.0尺。梁行きは12.7尺である。梁行きは13.0尺を想定していたのであろうか、そうであれば6.5尺の２間とも解釈できる。
［出土遺物］遺構に伴う遺物はない。
［時期・建物の性格］時期不明である。小規模な付属小屋と考えられる

９号掘立柱建物跡（第18図、写真図版11）
［位置］遺跡西端のＪ区に位置する。周囲は水田になっていたが、本遺構のあるＪ区だけが畑地となっており、周囲よりも小高くなっていた。
［重複関係］29号溝跡と重複するが本遺構が古い。
［平面形式］総柱の掘立柱建物である。桁行き4,787㎜（15.8尺）、梁行き4,181㎜（13.8尺）で面積は約20㎡（６坪）である。本遺構が東側に延びる可能性はほとんどない。
［建物方位］Ｎ－17°－Ｅ
［柱穴］中心部にあたるＰ305は他の柱穴よりもひとまわり大きな掘り方を有している。柱穴掘り方は方形基調のものが多く他遺構とは形状がやや異なる。明確な柱抜き取り痕を持つものはない。
柱痕の残存するものから、20㎝前後の柱穴が使用されていたようである。
［柱間寸法］桁行き方向は7.9尺、梁行きは6.9尺を使用している。このことから桁行き８尺、梁行き７尺を意識して構築されたと推察される。
［出土遺物］遺構に伴う遺物はない。
［時期・建物の性格］遺構の現況が水田化していなかったこと、29号溝跡は１号道路跡の続きの可能性があること、近世陶磁器は殆ど出土しなかったことなどから、平安時代から中世と広く捉えておく。建物の性格は、その形状から倉庫的な施設であろう。

10号掘立柱建物跡（第18図）
［位置］遺跡中央付近のＣ区に位置している。
［重複関係］７号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。
［平面形式］桁行き１間以上、梁行き１間（２間か）の東西棟建物である。桁行きは西側調査区外へと続くものと想定した。
［建物方位］Ｎ－４°－Ｅ
［柱穴］検出面で径30～40㎝の掘り方を持つ円形を基調とした柱穴によって構成される。各柱穴の下端径等をみると12㎝前後の柱を使用していたと推測される。柱の抜き取り痕を持つものは見られず、土色も不明瞭であった。
［柱間寸法］桁行き方向は7.2尺、7.3尺。梁行きは14.0尺である。梁行きは7.0尺の２間とみるほうが適切であろうか。
［出土遺物］遺構に伴う遺物はない。
［時期・建物の性格］時期不明である。小規模な付属小屋と考えられる

１号柱穴列（第19図）
［位置］遺跡北側のＦ区に位置する。５号掘立柱建物跡の東隣りにある。２号柱穴列とも近接する。
［重複関係］23・24号溝跡と重複するが新旧関係は不明である。
［方位］Ｎ－75°－Ｗ
［柱穴］検出面での上端径26～35㎝の柱穴４個からなる。東西方向へは展開しないようだが、調査区が狭いため南北方向へ続いているかは不明である。
［柱間寸法］7.0尺と6.1尺を使用して３間分検出されている。
［出土遺物］遺構に伴う遺物はない。
［時期・建物の性格］時期や性格は不明であるが、Ｆ区からは12世紀代の遺物が出土していないことから12世紀よりも新しい時期の遺構と考えている。

２号柱穴列（第19図）
［位置］遺跡北側のＦ区に位置する。５号掘立柱建物跡の東隣りにある。１号柱穴列にも近い。
［重複関係］23・24号溝跡とも重複しているが新旧関係は不明である。
［方位］Ｎ－77°　－Ｗ
［柱穴］検出面での上端径25～40㎝の柱穴４個からなる。東側へは展開しないようだが、調査区が狭いため南北西方向へ続いているかは不明である。
［柱間寸法］8.7尺を使用して３間分検出されている。
［出土遺物］遺構に伴う遺物はない。
［時期・建物の性格］時期や性格は不明であるが、Ｆ区からは12世紀代の遺物が出土していないことから12世紀よりも新しい時期の遺構と考えている。

３号柱穴列（第19図）
［位置］遺跡北側のＦ区に位置する。15号土坑や21号溝跡の南隣りにある。５号掘立柱建物跡や１・２号柱穴列にも近い。
［重複関係］なし。
［方位］Ｎ－72°　－Ｗ
［柱穴］検出面での上端径30～35㎝の柱穴４個からなる。東・西・北方向へは展開しないようだが、調査区が狭いため南方向へ続いているかは不明である。
［柱間寸法］9.9尺、6.3尺、6.2尺を使用して３間分検出されている。
［出土遺物］遺構に伴う遺物はない。
［時期・建物の性格］時期や性格は不明であるが、Ｆ区からは12世紀代の遺物が出土していないことから12世紀よりも新しい時期の遺構と考えている。

（２）竪穴住居跡・竪穴遺構

１号竪穴住居跡（第20図、写真図版12）
［位置・検出状況］遺跡のほぼ中央にあたるＢ区に位置し、Ⅲ層上面で検出された。
［重複関係］２・３号掘立柱建物跡と重複するが、本遺構のほうが古い。
［規模平面形］東側が調査区外へと延びているが、平面形は隅丸方形を基調とすると推定され北東壁－南西壁方向の上端部で2.6ｍを測る。
［床・壁］床面は概ね平坦で壁は垂直気味に立ちあがっている。
［埋土］にぶい黄褐色土ブロックを多く含むが自然堆積であろうと判断した。
［柱穴・周溝］北側の壁際から１基確認された。
［カマド］カマドは調査区外にあると推測される。
［出土遺物］土師器・須恵器が埋土から少量出土している。何れも本遺構に伴うようである。
［時期］９世紀前半。

２号竪穴住居跡（第20図）
［位置・検出状況］本遺跡の中央にあたるＢ区に位置し、砂礫層（Ⅳ層）から検出された。
［重複関係］８号溝跡との新旧関係は不明である。

［規模平面形］全体的に残りが悪く、北東部分の床面及び１号焼土としたカマド燃焼部のみを検出している。平面形は隅丸方形で、一辺は約４ｍと推定される。
［床・壁］砂礫層を床面としているようで、北端部には本遺構を掘り下げる際に出来たと見られる掘り方があった。壁は残っていない。
［埋土］埋土というよりも貼床の残りといったほうが適切かもしれない。
［柱穴・周溝］精査したが、本遺構に伴うような柱穴や周溝は検出されなかった。
［炉］１号焼土が本遺構のカマド燃焼部の残存部分とみられるがその残りは悪い。
［出土遺物］土師器・須恵器が少量出土した。
［時期］平安時代。

３号竪穴遺構（第21図、写真図版12・13）
［位置・検出状況］遺跡北端部にあたるＧ区に位置する。地山面（Ⅲ層）で検出した。
［重複関係］14号土坑は本遺構と同時期か、やや新しい遺構である。ＳＸ２・３も直接重複しているわけではないが、本遺構とほぼ同時期の遺構である。
［規模平面形］検出面での規模は北西－南東2.7m、北東－南西2.3mの隅丸方形を呈する。
［床・壁］概ね平坦であるが、中央から南東部にかけて床面より更に一段掘り下げた穴がある。この穴は1.7×1.3mの不整形で底面は平坦というよりも丸底に近い。壁は底面から垂直気味に外傾して立ち上がっている。
［埋土］本遺構は粘土層をほりこんでおり、壁下部および底面はグライ化していた。埋土は地山ブロックを多量に含んだ人為堆積である。
［柱穴・周溝］柱穴や周溝はなかった。
［炉］精査したが見られなかった。
［出土遺物］（第41図、写真図版36・37）陶磁器や木製品が出土した。詳細は４節で記述する。
［時期・性格］12世紀後半。ＳＸ１～３と同様のものの可能性もあるが、平面形が異なることからここでは作業小屋で床面にある穴は収納施設と考えたい。

（３）井　戸　跡

１号井戸跡（第36図、写真図版14）
［位置・検出状況］遺跡北端部のＧ区に位置し、周辺の遺構と同様に地山面（Ⅲ層）で検出した。
［規模・形状］検出面での規模は2.0×1.8mの長円形を呈する。底面径は0.7mの円形で壁は外傾して立ち上がっている。壁が垂直ではなく外傾しているのは壁が崩落したためかもしれない。底面までの深さは1.2mを測る。
［埋土］地山ブロックを多量に含んだ人為堆積である。
［出土遺物・時期］12世紀後半。

２号井戸跡（第36図、写真図版14）
［位置・検出状況］遺跡北端部のＧ区に位置し、周辺の遺構と同様に地山面（Ⅲ層）で検出した。ＳＸ３との新旧関係は不明である。
［規模・形状］遺構検出面での規模は0.9×0.8mの不整な方形をしている。底面径は0.7×0.6mの円形である。壁はほぼ垂直気味に立ちあがっている。底面までの深さは1.0mある。

［埋土］地山ブロックを多量に含む人為堆積である。
［出土遺物・時期］12世紀後半。

３号井戸跡（第24図、写真図版14）
［位置・検出状況］遺跡の中央やや北側にあたるＣ区にあり、Ⅲ層で検出した。
［規模・形状］遺構検出面での規模は2.1×2.0m、平面形は円形を基調としている。底面は径約0.9mの円形である。壁は底面から外傾して立ち上がっている。深さは1.3mを測り、底面付近からは湧水している。
［埋土］人為堆積である。
［出土遺物・時期］出土遺物がなく時期不明であるが、位置関係から６～８・10号掘立柱建物跡に伴う井戸跡と思われる。

（４）土　　坑

今回の調査では18基の土坑を検出した。個々の土坑の特徴については一覧表に整理している。

第２表　土坑類観察表　　計測値の単位：cm

遺構名	位置	検出面	規　模 長軸.短軸. 深さ	底面	埋　土	出土遺物 時期	その他
１号土坑	A区	Ⅲ層	215.(148).53	平坦	自然堆積、5･6 号溝より新しい	12 世紀より新しい	
２号土坑	B区	Ⅲ層	141.60.40	やや平坦	人為堆積	平安時代か	
３号土坑	B区	Ⅲ層	136.57.12	平坦	焼土ブロックを含む人為堆積	土師器 平安時代	
４号土坑	B区	Ⅲ層	68.67.17	やや平坦	焼土・炭粒を多量に含む人為堆積	平安時代	
５号土坑	B区	Ⅲ・Ⅳ層	155.136.17	平坦	焼土・炭粒を多量に含む人為堆積	平安時代	
６号土坑	B区	Ⅲ層	135.125.12	やや平坦	人為堆積か		
７号土坑	B区	Ⅲ層	129.98.6	礫層	焼土粒微量、人為堆積か		
８号土坑	D区	Ⅲ層	308.158.28	やや丸	人為堆積	時期不明	
９号土坑	B区	Ⅲ層	65.60.48	平坦	人為堆積か	現代か	
10 号土坑	F区	Ⅲ層	77.(35).6	やや凹凸	人為堆積か		
11 号土坑	F区	Ⅲ層	90.(70).43	やや丸	自然堆積か	時期不明	
12 号土坑	F区	Ⅲ層	112.80.13	平坦	17・18 号溝跡と重複		
13 号土坑	G区	Ⅲ層	80.68.30	平坦	自然堆積	時期不明	
14 号土坑	G区	Ⅲ層	100.100.73	平坦	人為堆積	12 世紀	３号住居状 遺構関連
15 号土坑	E区	Ⅲ層	(90).(75).23	やや凹凸	21 号溝跡より新しい	現代	
16 号土坑	C区	Ⅲ層	160.146.70	丸底	人為堆積	遺物なし　時期不明	
17 号土坑	C区	Ⅲ層	125.114.87	平坦	自然堆積	縄文時代か	陥し穴か
18 号土坑	J区	Ⅲ層	99.58.22	やや丸	暗褐色土主体	時期不明	

（５）焼　　土

１号焼土（第24図、写真図版19）
［位置・検出状況］Ｂ区、砂礫層（Ⅳ層）にて検出した。
［規模・形状］検出面での焼土の広がりは80×35cmあり、最大３cmの焼成面を形成していた。平面的には不整な長円形をしている。
［焼土］別の場所から持ち込まれたものではなく、この場で焚かれて形成されたものである。
［出土遺物・時期］周囲には土師器・須恵器が散在していた。２号竪穴住居跡のカマドの燃焼部の可能性が高いと考えている。

（６）道路遺構・溝跡

１号道路跡（第25図、写真図版20・21）
［位置・検出状況］遺跡のほぼ中央にあたるＡ区に位置し、Ⅲ層上面にて検出された。
［重複関係］１号土坑、２・３・５号溝と重複する。
［路面の規模・形状］両側に側溝（４･６号溝跡）を持つ道路である。路面の幅は最少で2.2m、最大で4.5mあり、平均幅は3.4mとなる。道路は西北西－東南東方向に延びているが、直線ではなく緩やかに弧を描くように曲がっている。その際に東南東方向の道路幅が少し広くなっていくように見られる。路面は平坦であるが、特に硬く締まるようなところは無い。車輪跡、轍のような箇所も観察されていない。これらのことから遺構検出面が当時の使用面ではないことは窺える。調査区外の現地形でこの道路遺構の延長線を推測できるような地形は見られない。
［４号溝跡の規模・形状］検出された総長は31.5m、上幅は0.7～1.5mあり西北西方向がやや幅広で、東南東部分が狭い。西北西部分は掘り返しを行っているようで溝の壁に段が付いている。深さは0.2～0.3mを測る。
［埋土］暗褐色土を主体とする自然堆積。
［６号溝跡の規模・形状］検出された溝の長さは30mで上幅は0.5～1.1mある。４号溝跡と同様に西北西方向の上幅が広く、東南東部分の幅は狭い。どちらも溝に堆積した土砂を掘り返したことにより、幅が広くなったものだが、東南東部分の幅が狭いのは、硬い砂礫層を掘り込んでいるために幅広にならなかったと解釈される。
［埋土］暗褐色土を主体とする自然堆積で黄褐色土粒を微量含む。
［出土遺物・時期］常滑産陶器片が１点出土している。12世紀後半。

（７）溝　　跡（第25～33図、写真図版19～27）

調査区の全域に分布している。時期不明のものが多いが、４・６号溝跡のように12世紀後半の道路側溝となるものもある。各溝跡の特徴については一覧表にまとめた。

第３表　溝跡観察表　　計測値の単位：m

遺構名	位置	検出面	規模　長さ.上幅.深さ	方向	埋　土	出土遺物期	その他
１号溝跡	A区	Ⅲ層	(5.8)×0.5×0.06	東ー西	自然堆積	12 世紀頃か	１～６号溝跡は埋土が類似
２号溝跡	A区	Ⅲ層	(3.2)×0.4×0.07	南東ー北西	自然堆積、３・４号溝跡より古い	12 世紀頃か	

遺構名	位置	検出面	規模　長さ.上幅.深さ	方向	埋　土	遺物・時期	その他
3号溝跡	A区	Ⅲ層	(20.0)×0.6×0.11	西北西－東南東	自然堆積	12 世紀	
4号溝跡	A区	Ⅲ・Ⅳ層	(31.5)×1.5×0.35	西北西－東南東	自然堆積	陶器　12 世紀	1号道路跡
5号溝跡	A区	Ⅲ層	(7.0)×0.7×0.11	北西－南東	自然堆積	12 世紀頃か	
6号溝跡	A区	Ⅲ・Ⅳ層	(30.0)×1.1×0.36	西北西－東南東	自然堆積	12 世紀	1号道路跡
7号溝跡	B区	Ⅲ・Ⅳ層	13.0×0.5×0.20	西北西－東南東		時期不明	
8号溝跡	B区	Ⅲ・Ⅳ層	(13.5)×0.3×0.10	西北西－東南東	自然堆積(水の流れた感じはない)	時期不明	
9号溝跡	B区	Ⅲ・Ⅳ層	(15.0)×0.6×0.04	西北西－東南東		時期不明	
10 号溝跡	B区	Ⅲ層	(4.2)×0.8×0.17	東－西	人為堆積か	時期不明	
11 号溝跡	C区	Ⅲ層	(7.7)×0.8×0.19	北北西－南南東	自然堆積	時期不明	
12 号溝跡	C区	Ⅲ層	(7.3)×0.9×0.48	東－西	自然堆積	時期不明	
13 号溝跡	A区	Ⅲ・Ⅳ層	(16.7)×0.7×0.08	西北西－東南東	暗褐色土主体	時期不明	
14 号溝跡	F区	Ⅲ層	(1.1)×0.6×0.17	北北東－南南西	自然堆積か	時期不明	
15 号溝跡	F区	Ⅲ層	(1.9)×2.0×0.26	北北東－南南西	人為堆積か	時期不明	
16 号溝跡	F区	Ⅲ層	(11.5)×1.5×0.28	北北東－南南西	暗褐色	現代	
17 号溝跡	F区	Ⅲ層	(1.9)×0.9×0.10	西北西－東南東	暗褐色土に地山ブロック微量	時期不明	
18 号溝跡	F区	Ⅲ層	(1.9)×0.4×0.16	西北西－東南東	暗褐色土に地山ブロックごく微量	時期不明	
19 号溝跡	F区	Ⅲ層	(0.6)×0.5×0.12	西北西－東南東		時期不明	
20 号溝跡	G区	Ⅲ層	(16.5)×0.7×0.09	北北東－南南西	暗褐色土、SX2 との切り合いは不明	12 世紀	SX2 関連
21 号溝跡	E区	Ⅲ層	(10.0)×0.4×0.13	西北西－東南東	褐灰色粘土	現代か	
22 号溝跡	E区	Ⅲ層	(2.5)×0.4×0.05	北北東－南南西	暗褐色土	現代か	
23 号溝跡	E区	Ⅲ層	(2.6)×0.6×0.12	北北東－南南西	暗褐色土	現代か	
24 号溝跡	E区	Ⅲ層	(2.7)×0.5×0.11	北東－南西	自然堆積	時期不明	
25 号溝跡	欠						欠番
26 号溝跡	C区	Ⅲ層	(8.2)×0.3×0.05	東－西	にぶい黄褐色土	時期不明	
27 号溝跡	C区	Ⅲ層	(8.2)×1.2×0.53	東－西	にぶい黄褐色土に焼土・炭粒含む	現代	
28 号溝跡	C区	Ⅲ層	7.1×0.6×0.14	北北東－南南西	暗褐色土	時期不明	
29 号溝跡	J区	Ⅲ層	(7.5)×1.7×0.13	西北西－東南東	人為堆積か	時期不明	

（8）性格不明遺構・その他

ＳＸ１（第34・35図、写真図版28）

［位置・検出状況］本遺跡の北端部にあたるＧ区の中でも北側に位置している。Ⅲ層面で検出した。

［重複関係］長さ5.3m、上幅約0.3m、西北西－東南東方向にのびる溝跡と重複する。溝跡は本遺構に伴うか、古い時期の遺構である。

［規模平面形］遺構検出面での規模は4.6×3.2mの長円形である。長軸は西北西－東南東方向である。深さは最大で0.9mある。

［底面・壁］底面は2.0×0.8m程の長円形で、方向は上端部と同じである。Ⅲ層内に部分的に見られる粘土層（層厚約30㎝）を掘り込むように構築されており、粘土層より下層の砂質シルト面に達したところで底面としている。壁は底面から緩やかに外傾しながら立ち上がっており、途中で段がついたり、不規則な掘り込み痕を持つわけではない。

［埋土］底面付近は自然堆積である。これは遺構が機能している間に堆積したものであろう。埋土上位は人為堆積で遺構廃絶時に埋め戻している。

［付属施設］溝跡は本遺構の中心長軸線上を通っていることから、時期の異なる遺構とは考え難い。よってここでは溝跡と本遺構は一体の施設であると解釈する。

［出土遺物］（第38・40図、写真図版34～37）常滑産陶器片が廃棄された状態で出土した。

［時期・性格］12世紀後半。粘土層を掘り込んでいることから粘土採掘坑ではないかと考えているが、底面や壁面があまり凸凹していない。溝が取り付くことから小規模な池の可能性もある。この場合は庭園などにある苑池ではなく、生業関連の池であろう。ＳＸ２・３も同様の施設と考えている。

ＳＸ２（第34・35図、写真図版29）

［位置・検出状況］本遺跡の北端部にあたるＧ区に位置している。Ⅲ層面で検出した。北側にはＳＸ１が、南側にはＳＸ３が近くにある。

［重複関係］長さ16.5m、上幅約0.6m、北東－南西方向に延びる溝跡と重複する。溝跡は本遺構より新しいものではない。同時期か、古い遺構である。

［規模平面形］遺構検出面での規模は7.1×3.5mの不整な長円形である。長軸は北東－南西方向である。深さは最大で0.7mを測る。

［底面・壁］底面は3.9×1.6m程の不整長円形で、長軸方向は上端部と同じである。ＳＸ１と同じくⅢ層内に部分的に見られる粘土層（層厚約30㎝）を掘り込むように構築されており、粘土層より下層の砂礫層に達したところで底面としている。底面は概ね平坦である。壁は底面から緩やかに外傾しながら立ち上がっており、不規則な掘り込み痕を持つわけではない。

［埋土］底面付近は自然堆積である。これは遺構が機能している間に堆積したものであろう。埋土上位は人為堆積で遺構廃絶時に埋め戻している。

［内部施設］前述した溝跡は本遺構の中心長軸線上を同じ方向で通っていることから、時期の異なる遺構ではなく、本遺構と一体の施設であると見たい。その他の施設は見られなかった。

［出土遺物］（第38・39・41図、写真図版34～38）常滑産陶器片や木製品片が埋め戻した土に混入した状態で出土している。

［時期・性格］12世紀後半。粘土層を掘り込んでいることから粘土採掘坑ではないかと考えているが、底面や壁面があまり凸凹していない。溝が取り付くことから小規模な池の可能性もある。ＳＸ１と同

様に庭園などにある苑池ではなく、生業関連の池であろう。ＳＸ３も本遺構と類似する施設と考えている。

ＳＸ３（第36・37図、写真図版30）

［位置・検出状況］本遺跡の北端部のＧ区に位置している。北側にはＳＸ１が、北側にはＳＸ２と３号住居状遺構が近くにある。Ⅲ層面で検出した。

［重複関係］遺構検出した段階では２号井戸跡と重複していたが、埋土が浅く新旧関係を把握できなかった。本遺構の平面形状からは１号井戸跡を避けて構築されたように見える。

［規模平面形］遺構検出面での規模は6.5×2.5mの不整な長円形である。長軸はＳＸ２と同じく北東－南西方向である。深さは最大で0.4mを測る。

［底面・壁］底面は5.8×1.9m程の不整長円形で、長軸方向は上端部と同じである。ＳＸ１・２と同じくⅢ層内に部分的に見られる粘土層（層厚約30㎝）を抜くように掘り込まれており、粘土層より下層の砂質シルト層に達したところで底面としている。底面は概ね平坦である。壁は底面から外傾しながら立ち上がっており、段が付いていたり不規則な掘り込み痕を持つわけではない。

［埋土］底面付近は自然堆積である。これは遺構が機能している間に堆積したものであろう。埋土上位は人為堆積で遺構廃絶時に埋め戻している。

［内部施設］炉跡、柱穴、周溝といったその他の施設は見られなかった。

［出土遺物］（第38・39・41図、写真図版34・35）常滑産陶器片や木製品片が埋め戻した土に混入した状態で出土している。

［時期・性格］12世紀後半。底面や壁面に土取り穴特有の不規則な掘り込みは見られないが、粘土層を掘り込んでいることから粘土採掘坑ではないかと考えている。ＳＸ１・２と同様小規模な池の可能性もある。何れにせよＳＸ１～３は同じ性格の遺構で、同時存在か場所をずらして造り替えたと推測される。

Ｇ区埋没沢（第37図、写真図版19）

遺跡北側にあたるＧ区にてされた。限られた調査区であったため長さ5.5m、幅6.1m、深さ0.7m程を確認するにとどまったが、想定される沢の上幅は10～15mと推測される。深さは１mを超える可能性があり、東西方向に流れていたと考えられる。検出面から約10㎝掘り下げた段階で十和田ａ火山灰と巨大な倒木を検出した。十和田ａ火山灰は１～５㎝の厚を持ち、面的にも広がりをもって堆積していた。断面で観察すると、ほぼ水平に近い位緩やかな傾斜で堆積している。このことから火山灰堆積段階ではこの沢もかなり埋まっており、流れは殆どなく湿地的な状態となっていたようである（本稿では沢跡としているものの確たる根拠に基づいて沢跡としているわけではない。よって沢ではなく池や湿地の可能性もある）。この火山灰は何処か別の場所に降り積もったものが時間の経過とともにこの地に流れてきて溜まったものではない。この沢跡に降下し堆積した原位置を保った状態にある。

倒木は十和田ａ火山灰と共にあった。倒木周辺の火山灰は部分的に２層に分かれていたり、攪拌されたような状態になっているところもあった。このことから火山灰降下直後にこの木は倒れたといえる。火山灰の降下と木の倒れたのは殆ど同時期である。この倒木には人為的な加工痕は見られなかった。

火山灰下層からは土師器が複数出土している。土師器は何れも坏であった。その特徴については４節で記述するが、底面付近をヘラケズリ再調整している。そして墨書・線刻もされている（どちらも「一万」と読むのか）。前述したように沢は殆ど流れを失っていることから、これらの坏も遠距離から流れてきたのではない。調査区外のすぐ近くに９世紀中葉頃の集落が想定される。

Ｇ区の北側には現在、明後沢川が東西方向に流れている。これは圃場整備に伴う河川改修によるものであり、以前は松ノ木沢川の流路であった。遺跡周辺は平野であるため、小河川はその流路を時折変えていたことが、古地図・古写真・遺跡調査などから明らかになっている。Ｇ区埋没沢もその規模や方向などから、嘗ての松ノ木沢の可能性があり、その時期は平安時代前半及びそれ以前であるから、別の地点でこの沢の続きが見つかった場合は考古学的な調査の必要があろう。

４　出　土　遺　物

（１）概　　要

出土遺物は平安時代の土師器・須恵器、中世陶磁器、かわらけ、鉄製品などが中コンテナ1.5箱。下駄、柱材、杭等の木製品が大コンテナ１箱である。時期別にみると縄文時代、９・10世紀、12世紀後半、近世及びそれ以降の遺物が出土しているが、主体を占めるのは12世紀後半である。

（２）陶磁器・かわらけ（第38～40図、写真図版34～36）

12世紀の陶磁器を主体に、近世及び近世以降の陶磁器が微量出土している。かわらけは12世紀後半と見られる手づくねかわらけが１点出土している。

12世紀の陶磁器では常滑産陶器が30片、1941.35ｇ。渥美産陶器が12片1013.33ｇ。中国産白磁片４片、24.42ｇが出土しその殆どを掲載した。また須恵器系陶器か須恵器かよく分からない破片が２片出土している。

常滑産陶器

今回の調査で最も多く出土した陶器である。その多くは遺跡の北端にあたるＧ区に集中している。器種をみると甕或いは広口壺となるような破片が多いようである。明らかに壺となるような資料は１・２点といったところで、その他の器種には鉢類が微量だがある。何れの器種もＧ区にあるＳＸ１～３で出土したものが大半である。この遺構は粘土採掘坑或いは農業用池と考えている施設であるが、12世紀後半にこれらの遺構を埋め戻す際に不要になったものを廃棄している。破片は接合するものがあまりなく、廃棄される段階で既に破片になっていたと推察される。特に口縁部の破片は殆ど見られなかった。常滑２型式段階に殆どが属すると考えている。１ｂ型式段階のものが含まれている可能性があるが破片資料により分けることができなかった。206は壺の底部と考えている。96は甕の体部であるが、窯内で付着した溶解物がある。225ａ～ｃは甕の体部上半であるが沈線が見られる。押印があるものは328・80・105・243ｂ・228である。22は１号道路跡を構成する４号溝跡からの出土で、道路跡が12世紀後半であるとする根拠に用いている。

渥美産陶器

12世紀代の陶磁器の中では常滑産陶器に次いで出土量が多く、その中から10片を掲載している。鉢が２片であとは全部甕類であった。ＳＸ１・２、12・18号溝から出土しているが、何れの破片もあまり接合せず、もともと破片の状態でＳＸ１・２に廃棄されたのであろうし、12・18号溝に入ったのであろう。

白　　磁

５片出土し、そのすべてを掲載した。何れも12世紀代のもので器種は碗と皿である。43は高台を持

たない皿で内面には線描き文様がある。47は口縁部端反りの碗である。白化粧を施すものはないように観察したが、あまり自信はない。

その他の陶磁器

48は瀬戸産の擂鉢である。49は瀬戸美濃産天目碗である。錆釉が施されるので大窯期（16世紀前半か）のものである。50・51は大堀相馬産の陶器である。52～54は肥前産である。

かわらけ

12世紀後半の手づくねかわらけである。小形で口縁部に面取と１段のヨコナデが施されている。

（３）木　製　品（第41図、写真図版36・37）

12世紀の遺構である１号井戸跡、３号竪穴遺構、ＳＸ２から出土した中の殆ど全てを掲載している。57・62・63は漆器椀である。62の底面裏に刻まれているのは「大」の字であろうか。58・59は加工痕のある材である。60は縄で下駄の緒であろう。61は下駄で燃えた痕跡がある。64・65は薄い板材に細く浅い切れ込みが等間隔で入れられている。曲物の一部であった可能性がある。66は横位に小さな削り込みを持つ。67には平坦な面を削り出し、その後には複数の傷が付いている。

（４）金　属　製　品（第40図、写真図版36）

今回の調査では殆ど出土しなかったので、全点掲載した。55は祥符元寶、56は銅製の煙管でともに遺構外からの出土である。

（５）土師器・須恵器（第42図、写真図版37・38）

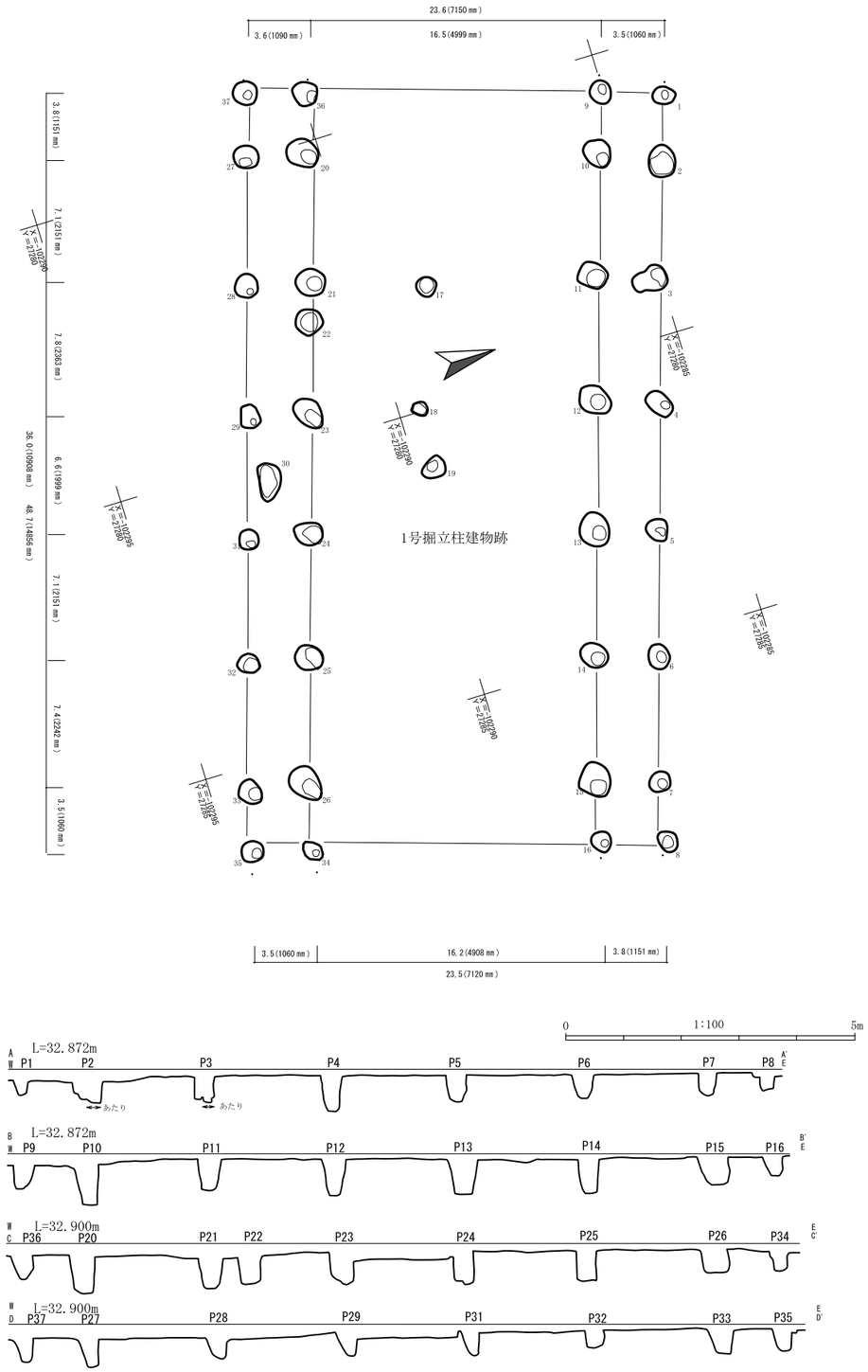
68～70の坏はＧ区にある沢跡に堆積していた十和田ａ火山灰よりも下層から出土している。71～83は須恵器である。溝・土坑・遺構外等から破片の状態で出土したものである。73は東海地方産の短頸壺か脚付短頸壺の可能性があり、９世紀代かそれより古いものかもしれない。その他は在地の甕・壺・坏類である。84は時期不明のミニチュア土器である。

（６）石　　器（第40図、写真図版38）

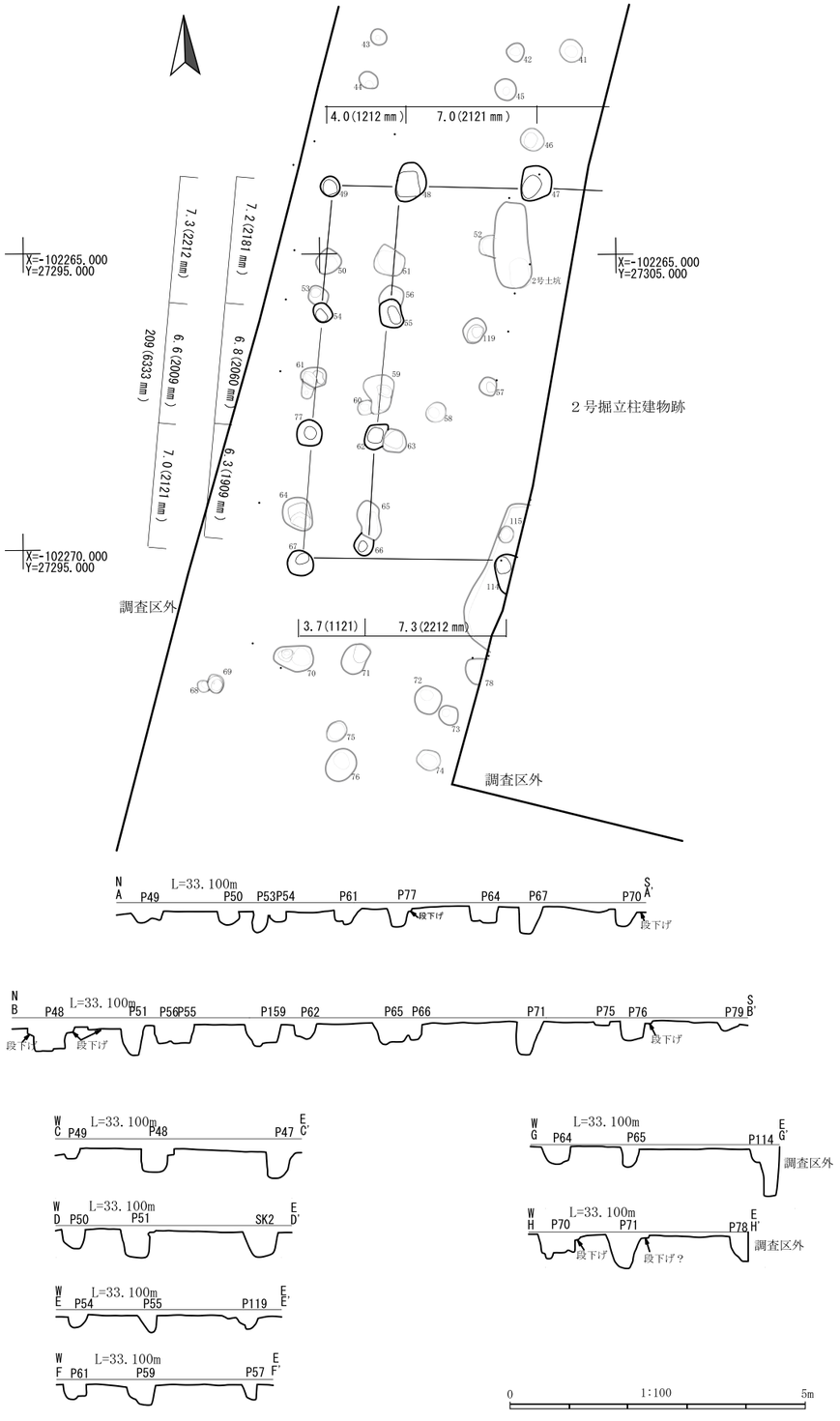
遺構外から出土した縄文時代の石鏃が２点（85・86）ある。

（７）そ　の　他（写真図版38）

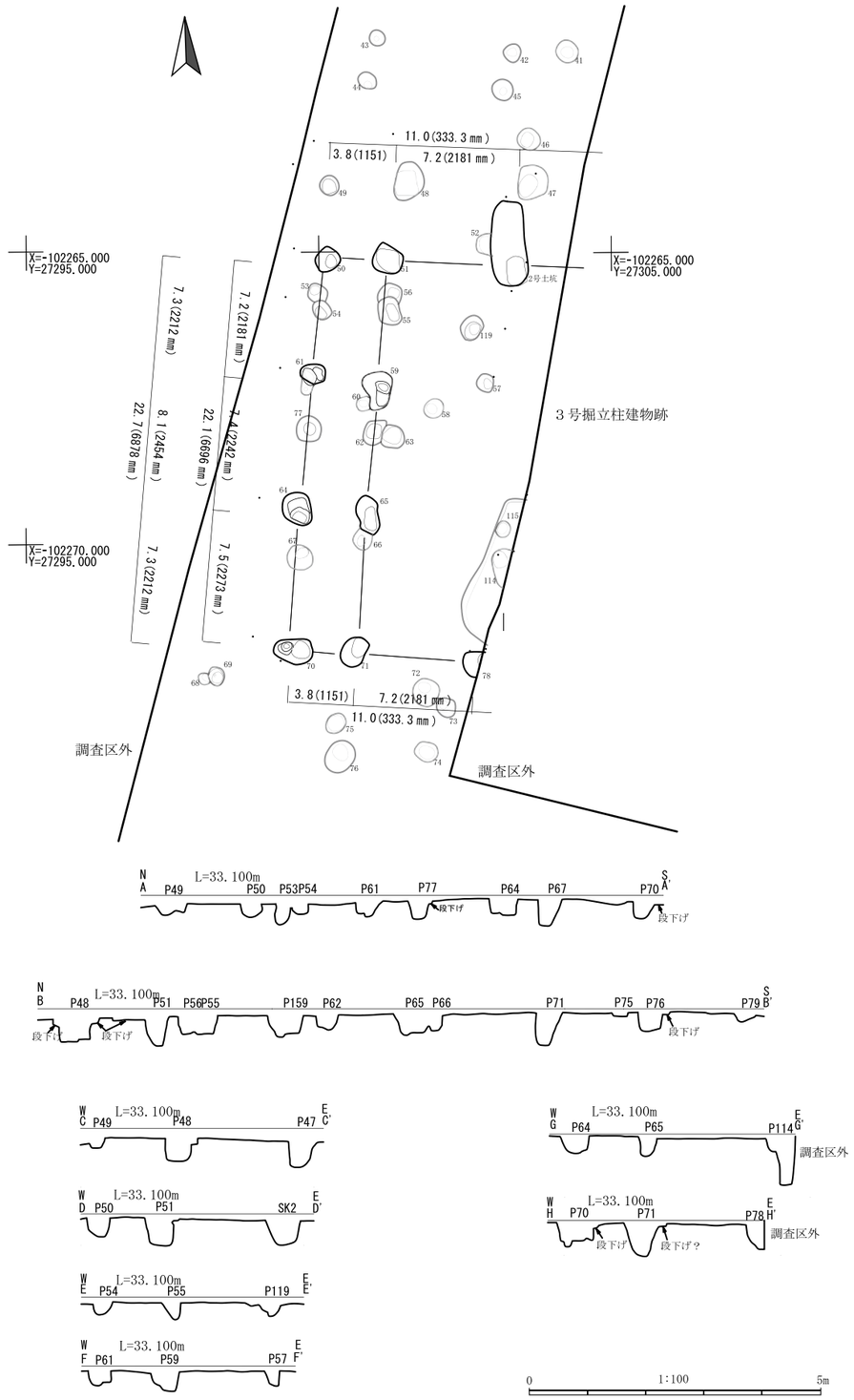
遺構内から各種の種実が出土している。また、骨片も僅かだが残っているものがあった。詳細は遺物観察表と第Ⅵ章に整理した。



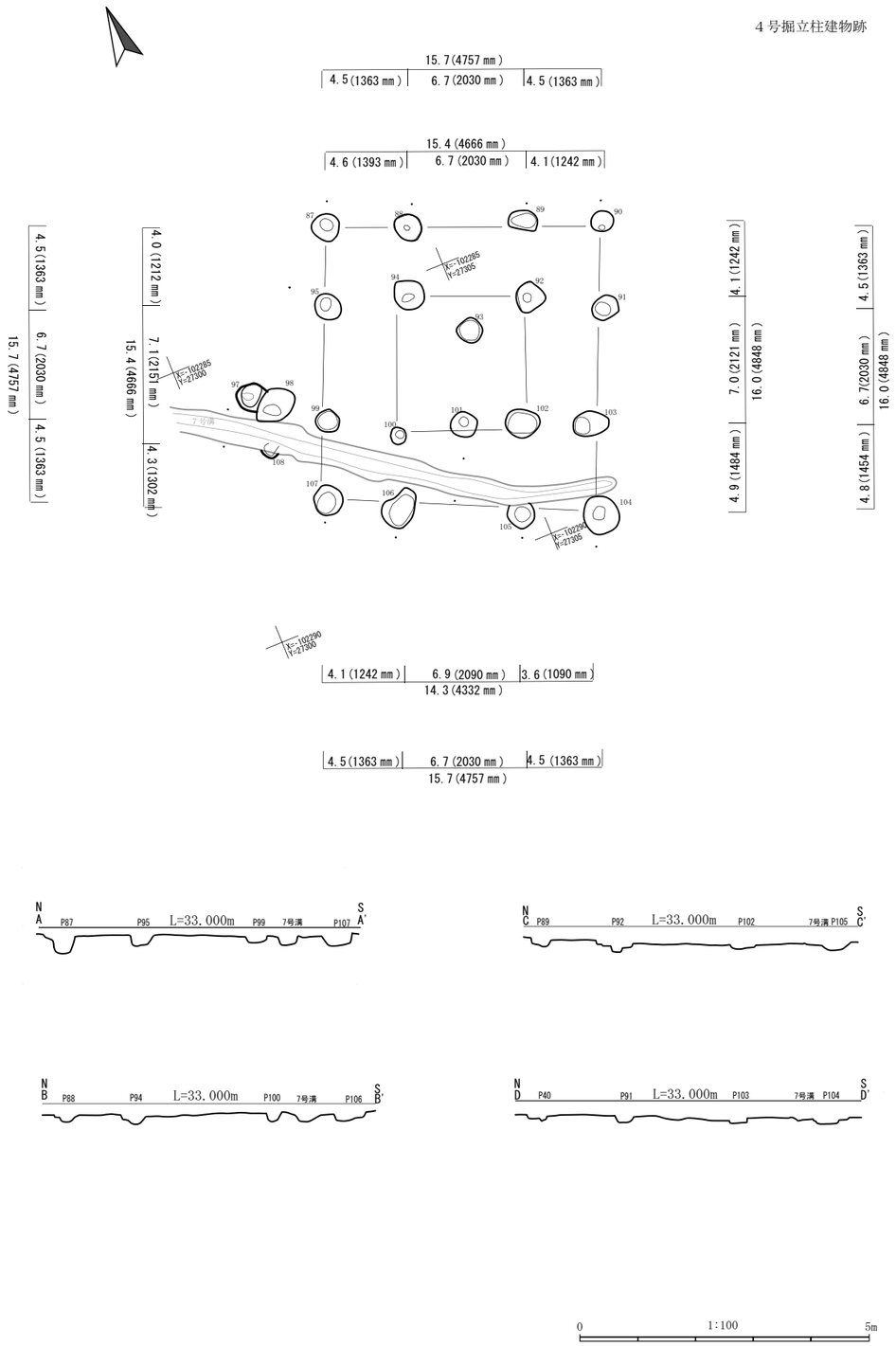
第13図　1号掘立柱建物跡



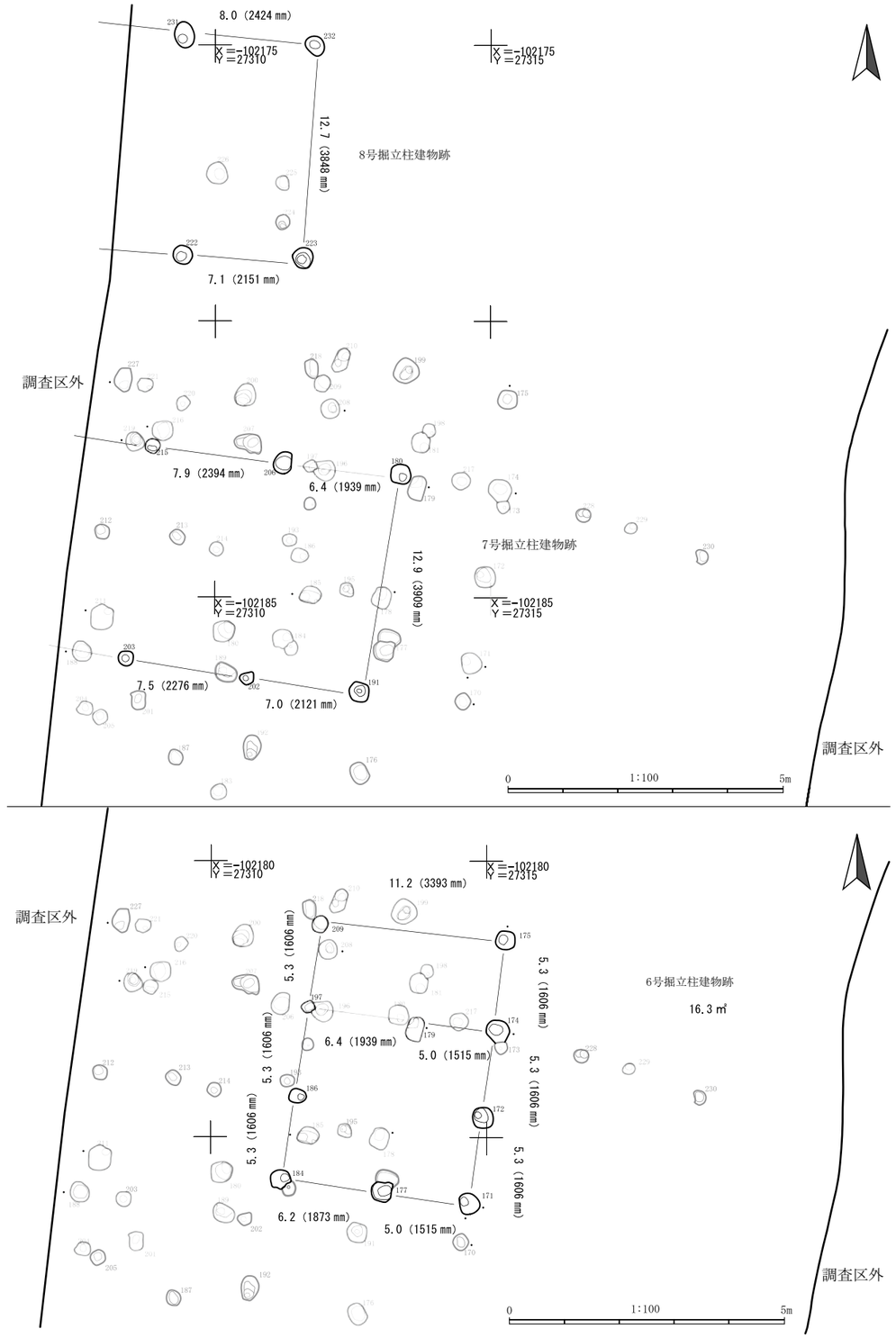
第14図　2号掘立柱建物跡



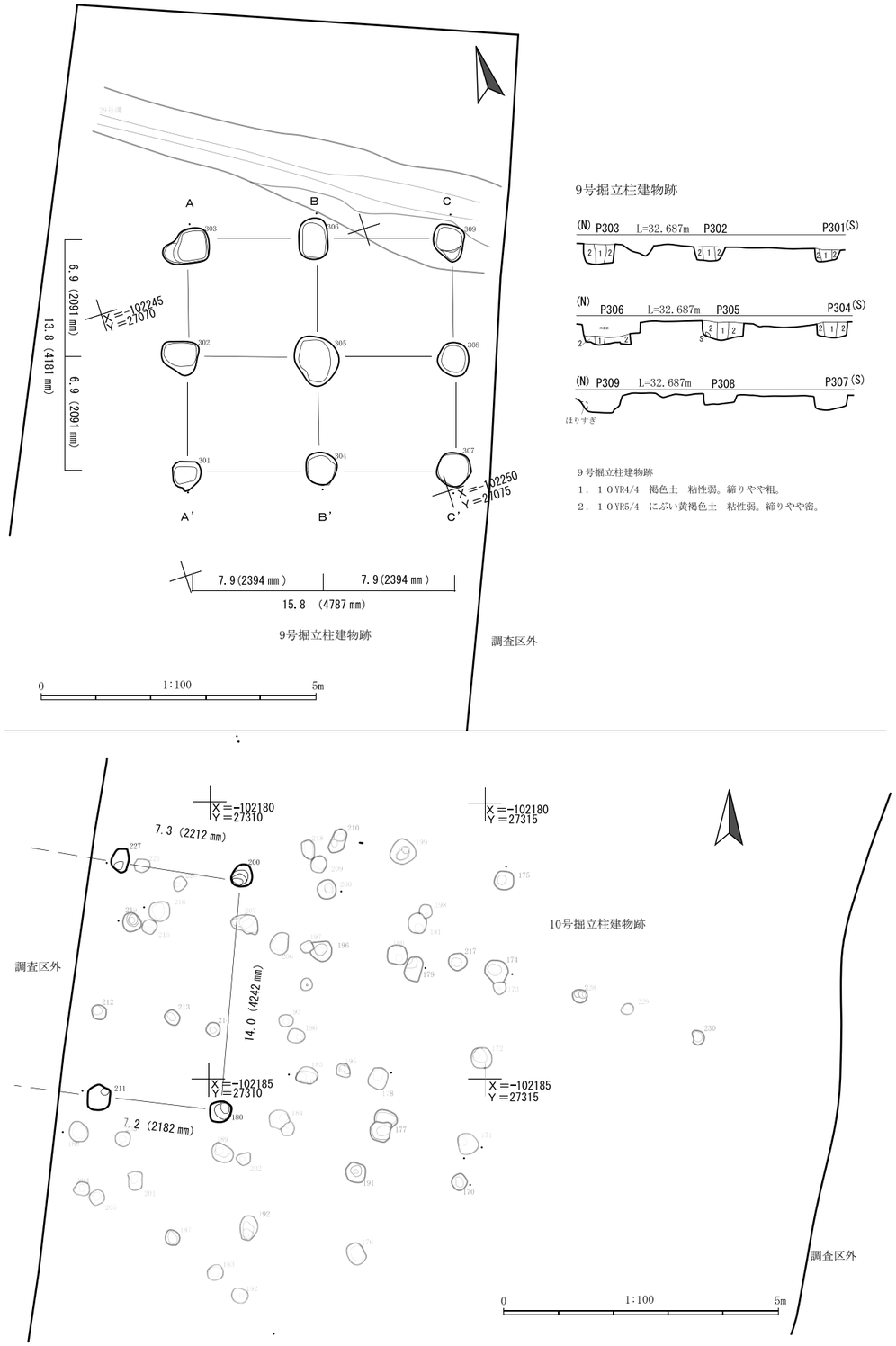
第15図　3号掘立柱建物跡



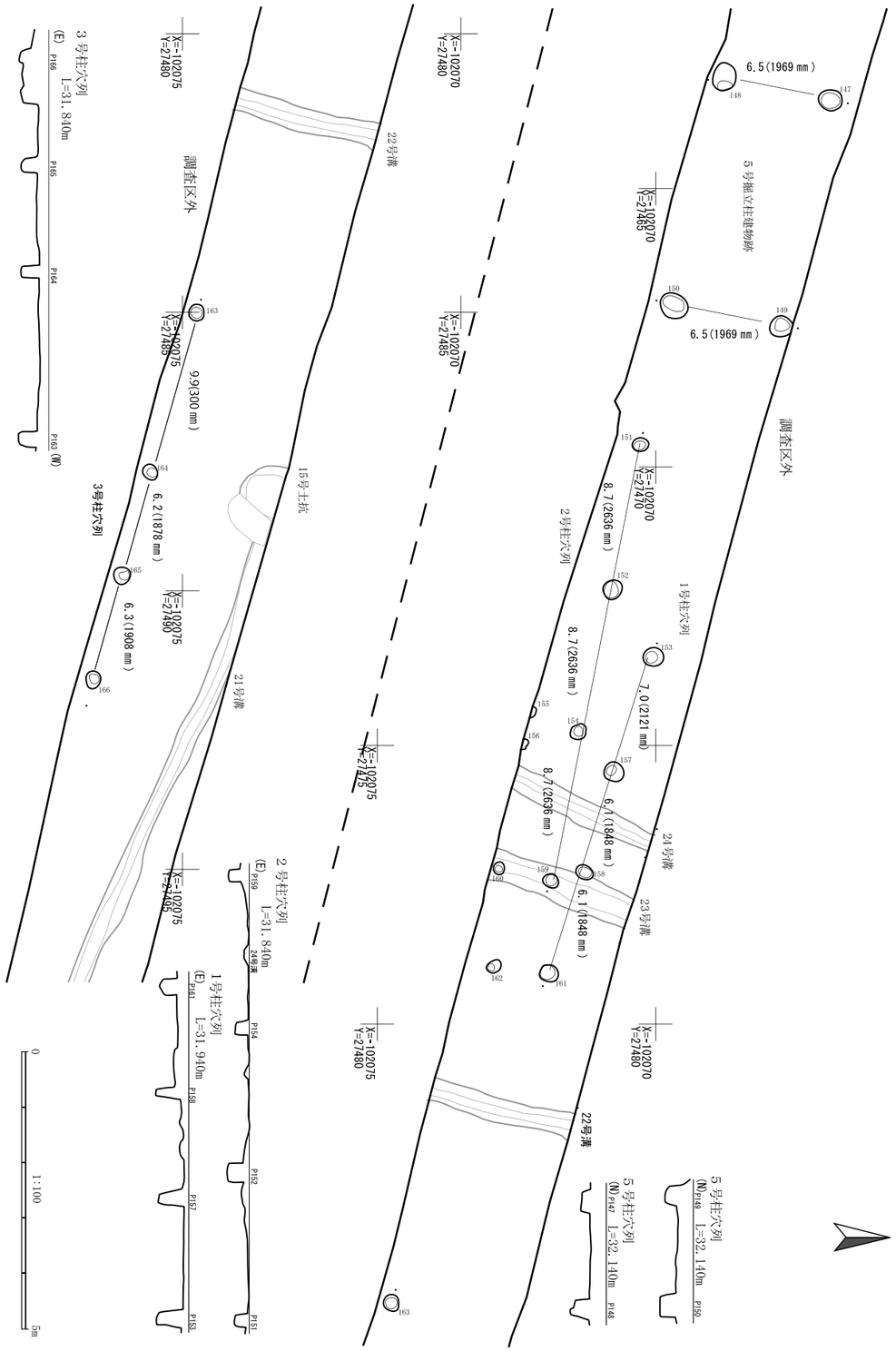
第16図　4号掘立柱建物跡



第17図　6～8号掘立柱建物跡

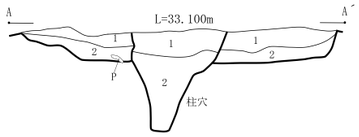


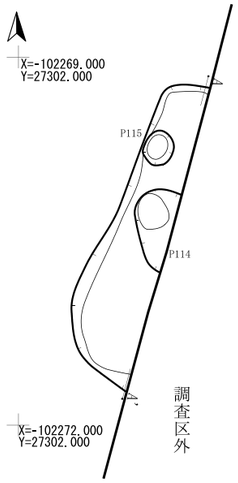
第18図　9･10号掘立柱建物跡



第19図　5号掘立柱建物跡、1～3号柱穴列

1号竪穴住居跡

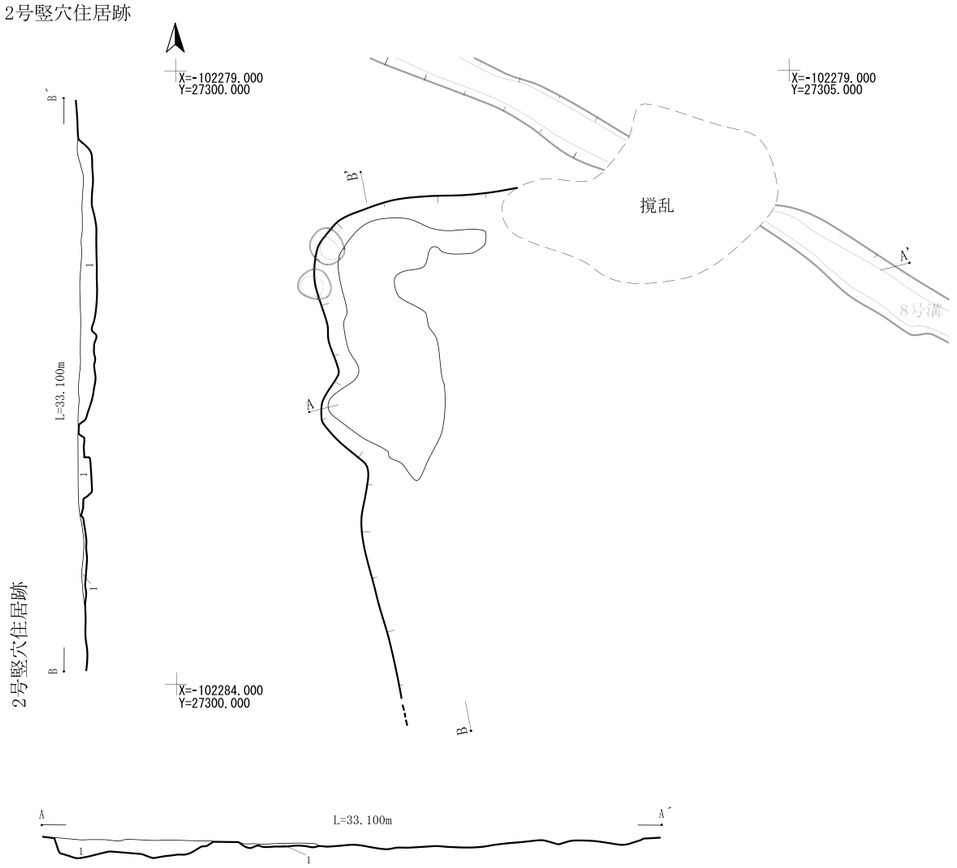




１号竪穴住居跡
柱穴埋土
1.10YR3/3　暗褐色土　小礫、地山ブロック少量含む。粘性・締りやや有。
2.10YR4/3　にぶい黄褐色土　砂礫多量含む。粘性弱。締りやや有。

住居埋土（自然堆積）
1.10YR3/3　にぶい黄褐色土　粘性・締りやや有。
2.10YR3/3　にぶい黄褐色土　地山ブロック小粒を多量含む。粘性・締りやや有。

2号竪穴住居跡

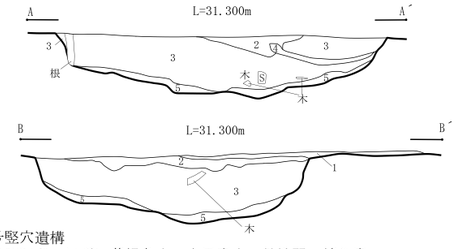


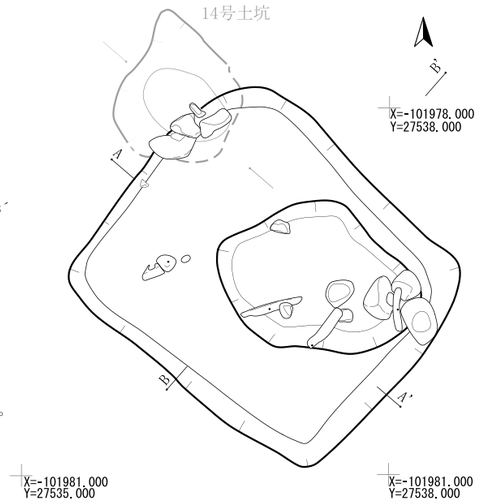
2号竪穴住居跡
1.10YR3/4　暗褐色土　黄褐色土ブロック5mm大3%、炭化物粒1%、遺物含む。粘性弱。締り粗。
底面は礫層である。

0　1:50　2m

第20図　1･2号竪穴住居跡

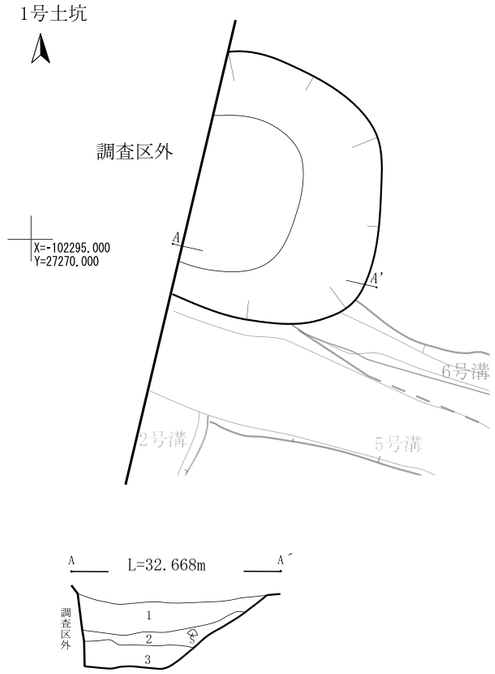
3号竪穴遺構





3号竪穴遺構
1.10YR4/3　にぶい黄褐色土　水田床土。粘性弱。締り密。
2.10YR3/2　黒褐色土　サビ1%含む。(造成以前の耕作土か？)
　　粘性やや弱。締り密。
3.10YR2/2　黒褐色粘土　白色粘土ブロック5%、サビ3%、炭化物粒
　　1%含む。12C遺物含む。（人為層）粘性やや強。締り粗。
4.10YR3/1　黒褐色土　白色粘土ブロック1%含む。(人為層)
　　粘性やや弱。締り粗。
5.7.5YR4/2 灰オリーブ粘土　自然堆積か。粘性強。締り粗。
　　下駄出土。
※3層を土壌サンプルに採取。

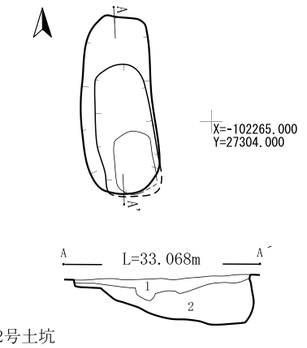
1号土坑



1号土坑
1.10YR3/3　暗褐色土　自然堆積。粘性強。締り粗。
2.10YR3/3　暗褐色土　水性堆積？　自然堆積。粘性強。締り密。
3.10YR4/1　褐灰色粘土　水性堆積。自然堆積。グライ化した粘土。
SD5・6を切る。中世より新しい可能性高い。粘性強。締り密。

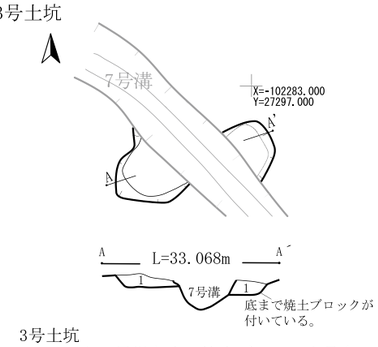
0　1:50　2m

2号土坑



2号土坑
1.10YR4/6　褐色土　地山ブロック、小礫を多量に含む。粘性有。締まっている。
2.10YR4/6　褐色土　地山ブロック少量含。粘性やや有。締まっている。
※1・2層　人為堆積。

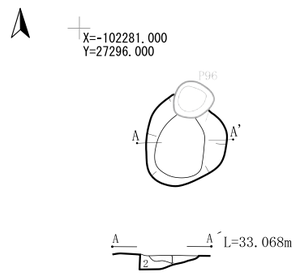
3号土坑



3号土坑
1.10YR3/2　黒褐色土　焼土ブロック少量含。土師器出土。粘性・締りやや有。土師器と焼土を廃棄している。

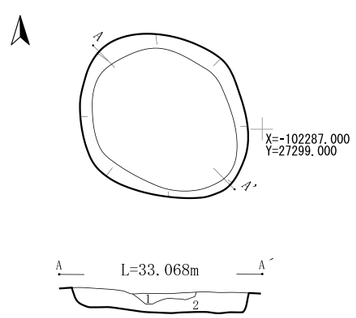
第21図　3号竪穴遺構、1～3号土坑

4号土坑



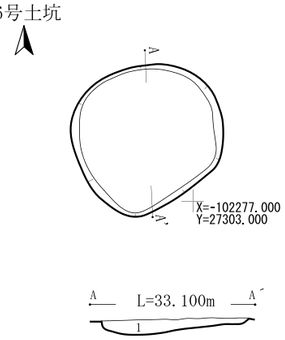
4号土坑
1.10YR4/4　褐色土　焼土粒、炭粒多量に含。粘性・締りやや有。
2.10YR3/4　暗褐色土　粘性・締りやや有。

5号土坑



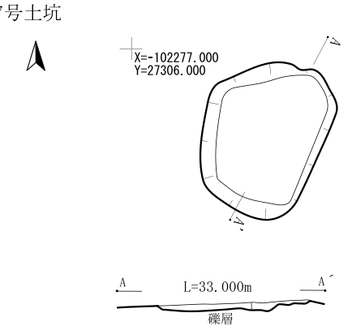
5号土坑
1.10YR2/2　黒褐色土　粘土粒、炭粒少量含（廃棄）。粘性・締りやや有。
2.10YR3/3　暗褐色土　焼土粒、炭粒微量含（廃棄）。粘性・締りやや有。

6号土坑



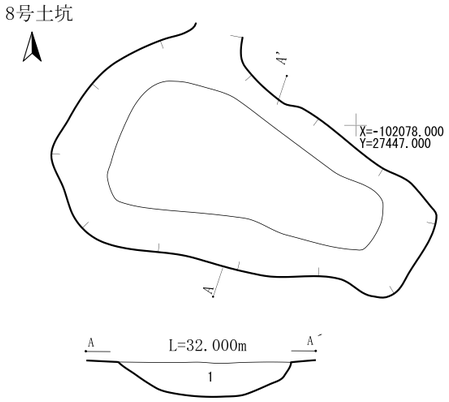
6号土坑
1.10YR3/4　暗褐色土　（北側が一段低くなっているのは、そこに柱穴があったからのようだ。）　埋土下位ほど地山ブロックを多く含む。粘性やや有。締っている（人為か）。

7号土坑



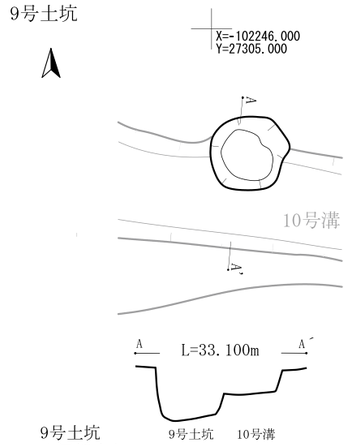
7号土坑
1.10YR2/3　黒褐色土　焼土粒をごく微量含。粘性・締りやや有。底は礫層により凸凹している。

8号土坑

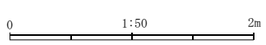


8号土坑
1.10YR3/3　暗褐色土　粘性やや強。締り粗。黄褐色土1%（人為）。肥だめか。

9号土坑

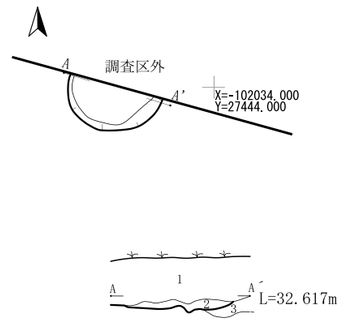


9号土坑
土層観察なし。



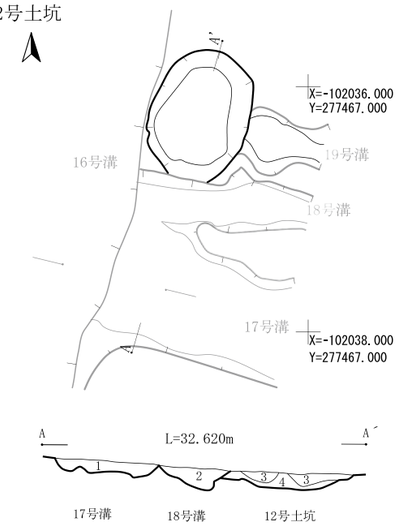
第22図　4～9号土坑

10号土坑

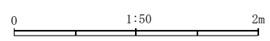


10号土坑
1.10YR3/3　暗褐色土　黄褐色ブロック（φ～5cm）5%、炭化物含む。表土。粘性やや密。締りやや弱。
2.10YR2/2　黒褐色土　黄褐色ブロック（φ5mm）5%、炭化物、焼土粒10%含む。東側に多くなる。粘性密。締りあり。
3.10YR3/3　暗褐色土　風倒木痕。粘性密。締りあり。

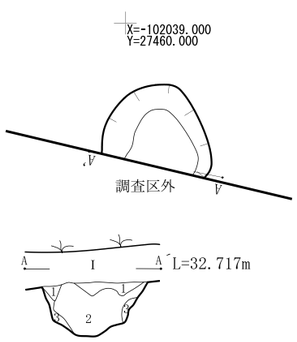
12号土坑



12号土坑(17・18号溝)
1　10YR3/3　暗褐色土　黄褐色土5%含む。粘性弱。締り粗。（17号溝）
2　10YR3/3　暗褐色土　黄褐色土1%含む。粘性やや弱。締り粗。（18号溝）
3　10YR3/4　暗褐色土　焼土ブロック3%含む。粘性やや弱。締り粗。（12号土坑）
4　10YR2/2　黒褐色土　炭化物粒1%含む。粘性弱。締り粗。（12号土坑）

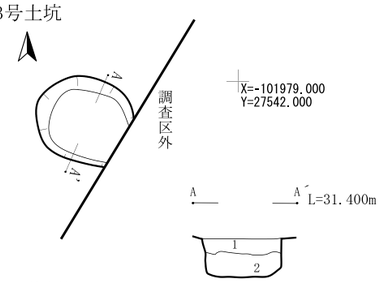


11号土坑



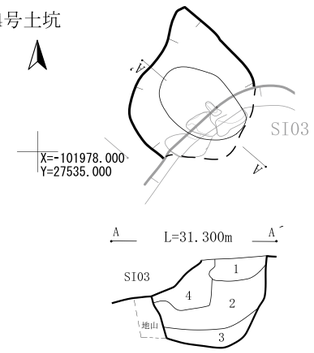
11号土坑
Ⅰ.10YR3/3　暗褐色土　黄褐色ブロック（φ～5cm）5%、炭化物含む。表土。粘性やや密。締りやや弱。
1.10YR3/3　暗褐色土　粘性弱。締り粗。根発達する。
2.10YR2/2　黒褐色土　粘性弱。締りやや粗。
3　10YR3/3　暗褐色土　黄褐色土粒１%含む。粘性やや弱。締りやや粗。

13号土坑



13号土坑
1.10YR2/2　黒褐色土　黄褐色粘土１%。粘性やや弱。締りやや粗。
2.10YR3/1　黒褐色粘土　水つき粘土（水性堆積）。　粘性やや強。締りやや粗。

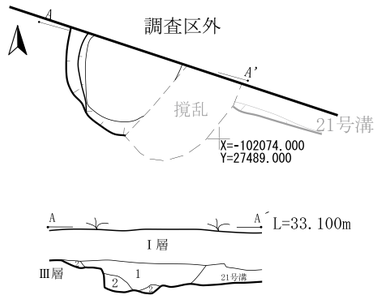
14号土坑



14号土坑
1.10YR2/2　黒褐色土　炭化物粒１%、白色粘土粒１%含む（人為層）。粘性弱。締り粗。
2.10YR2/2　黒褐色土　炭化物粒３%、白色粘土粒３%含む（人為層）。粘性やや弱。締り粗。
3.5Y4/2　灰オリーブ粘土　炭化物粒１%含む（人為層？）。　粘性強。締り粗。
4.7.5Y6/2　灰オリーブ粒　黒褐色土ブロック３%含む（人為層）。　粘性強。締り密。　地山.灰白粘土（還元層）
※SK14埋没後にSI-3を構築して礫をのせる水性堆積層が形成。

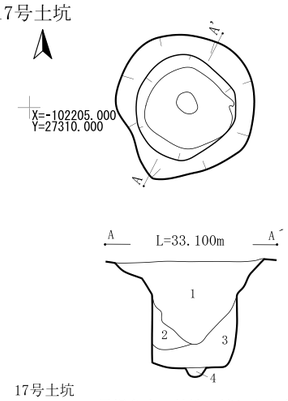
第23図　10～14号土坑

15号土坑



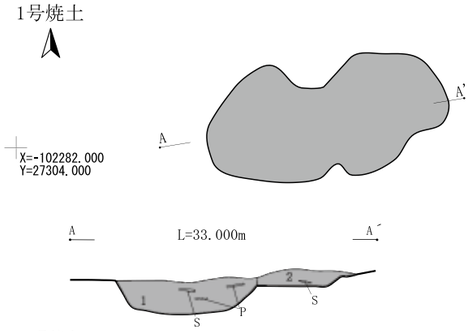
15号土坑
1. 10YR2/2　黒褐色土　炭化物粒１％、サビ１％含む。粘性弱。締り密。
2. 10YR5/4　にぶい黄褐色土　粘性強。締り粗。
※21号溝を切る。現代。

17号土坑



17号土坑
1. 10YR3/2　黒褐色土　粘性・締りやや有。
2. 10YR3/4　暗褐色土　粘性・締りやや有。
3. 10YR4/4　褐色土　粘性・締りやや有。
4. 10YR2/2　黒褐色土　粘性弱。締り粗。（副穴埋土）
※陥し穴か？

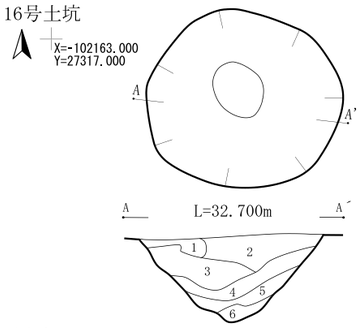
1号焼土



１号焼土
1. 5YR3/2　暗赤褐色土　焼土ブロック5mm大3%、炭化物粒1%、　土師器（甕）含む。粘性弱。締り粗。
2. 5YR4/4　にぶい赤褐色土　焼土ブロック1cm大5%、炭化物粒1%含む。粘性弱。締り粗。
※1層と2層との切り合いは不明。住居内カマドの燃焼部の可能性も考えられるが、壁面は赤化していない。ほり込みに焼土が堆積した状態であるため、燃焼部とは見なし難い。

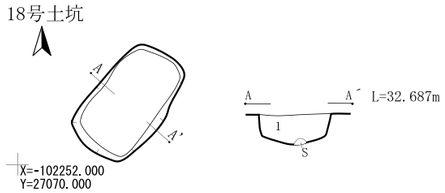
1号焼土　0　1:20　1m

16号土坑



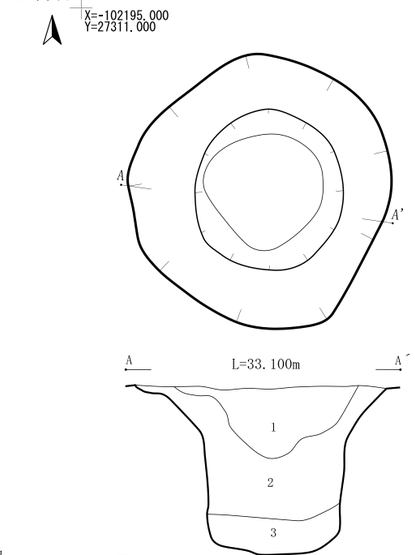
16号土坑
1. 10YR2/2　黒褐色土　黄褐色粘土5%含む（人為）。　粘性弱。締り粗。
2. 10YR2/2　黒褐色土　黄褐色粘土1%含む（人為）。　粘性弱。締り粗。
3. 10YR6/8　明灰褐色土　粘性やや強。締り粗。（人為）
4. 10YR2/3　黒褐色土　黄褐色粘土3%含む（人為）。　粘性弱。締り粗。
5. 10YR5/6　黄褐色粘土　粘性強。締り粗。（人為）
6. 10YR2/2　黒褐色土　黄褐色粘土１%含む。粘性強。締り粗。

18号土坑



18号土坑
1. 10YR3/3　暗褐色土　黄褐色土粒5%含む。粘性弱。締りやや密。

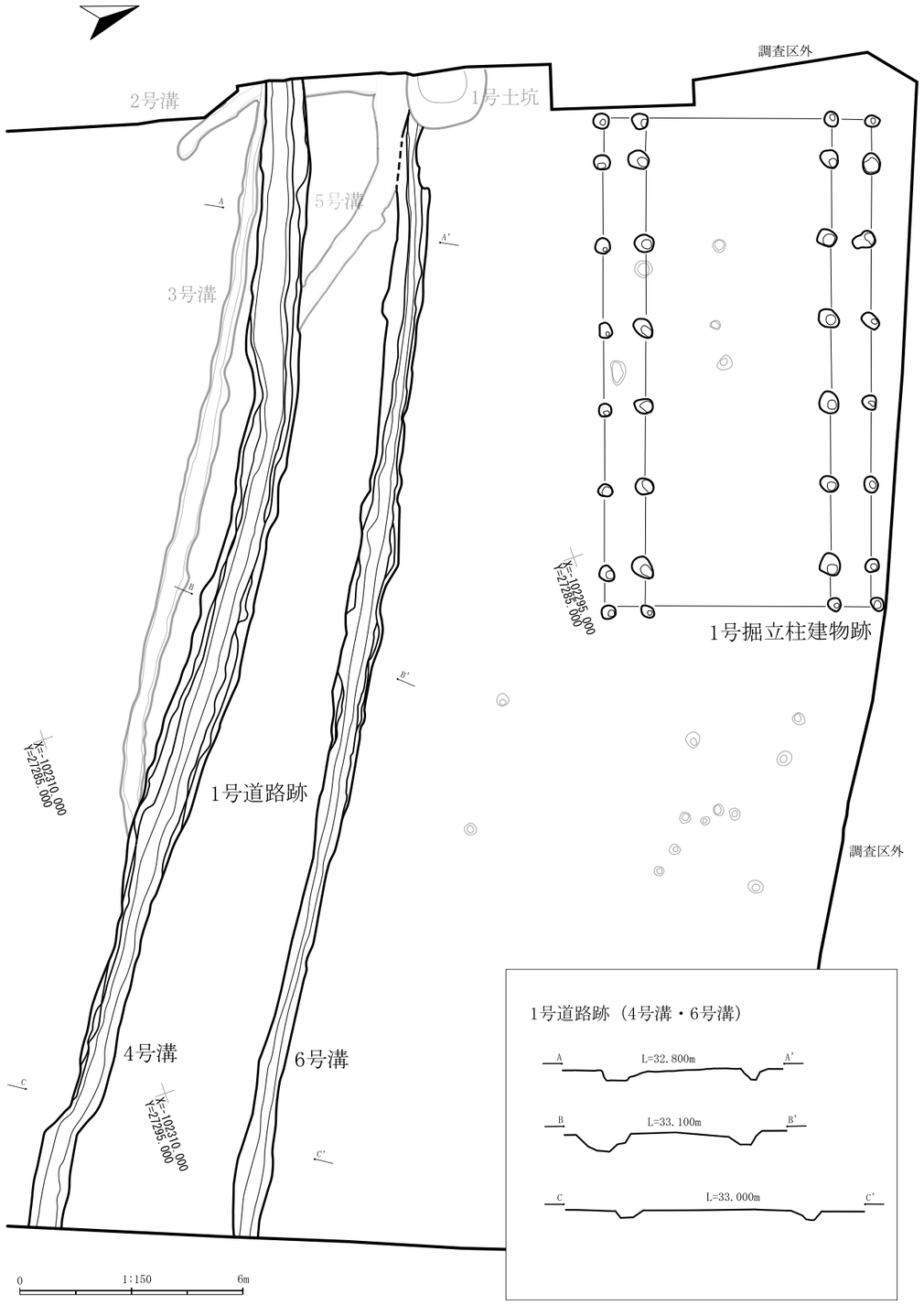
3号井戸



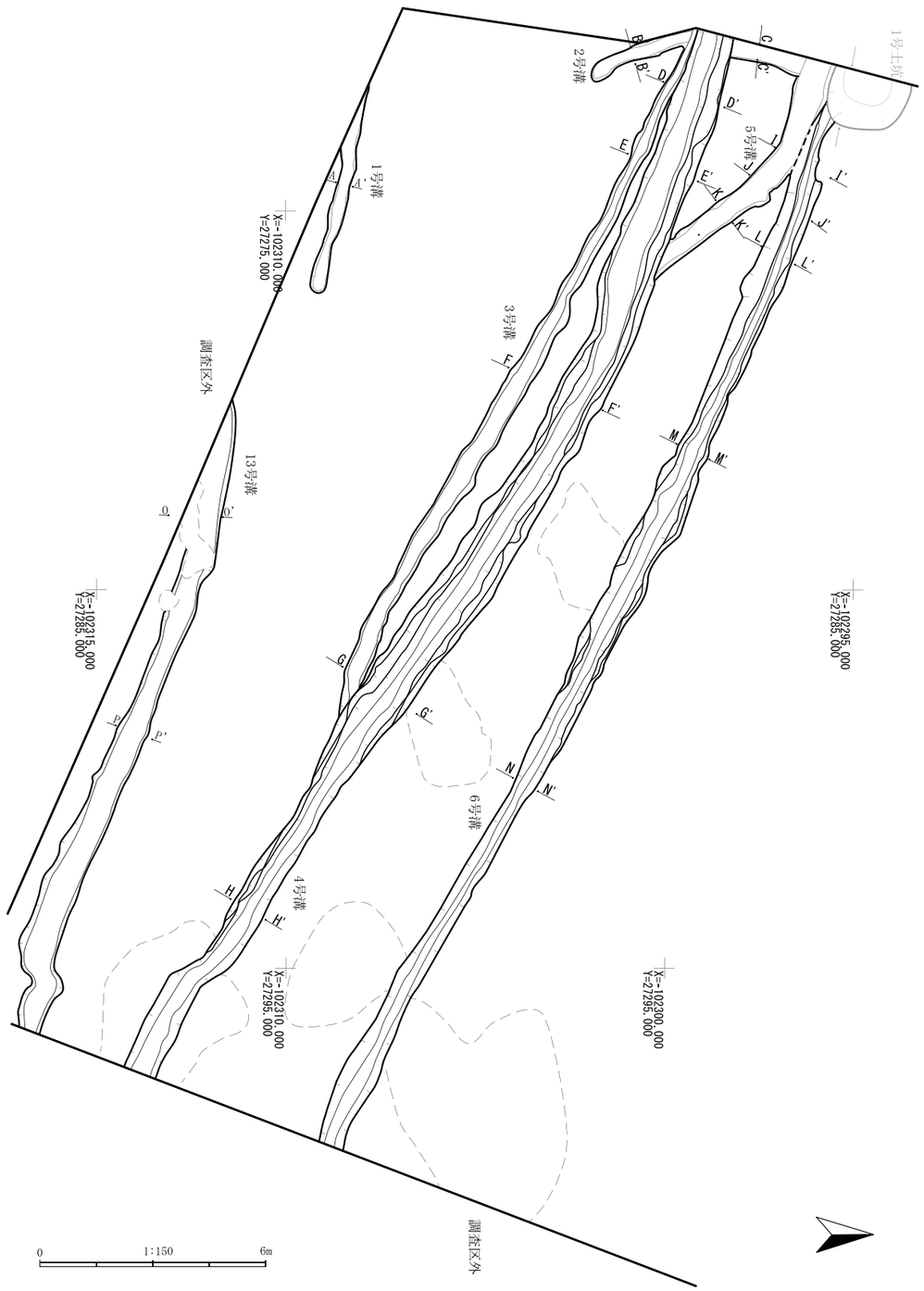
３号井戸
1. 10YR3/3　暗褐色土　黄褐色土3%、炭化物粒1%含む（人為）。　粘性弱。締りやや密。
2. 10YR2/3　黒褐色土　黄褐色土1%含む（人為）。粘性弱。締り粗。
3. 10YR4/3　にぶい黄褐色土　黄褐色土5%含む（人為）。粘性弱。締り粗。

その他　0　1:50　2m

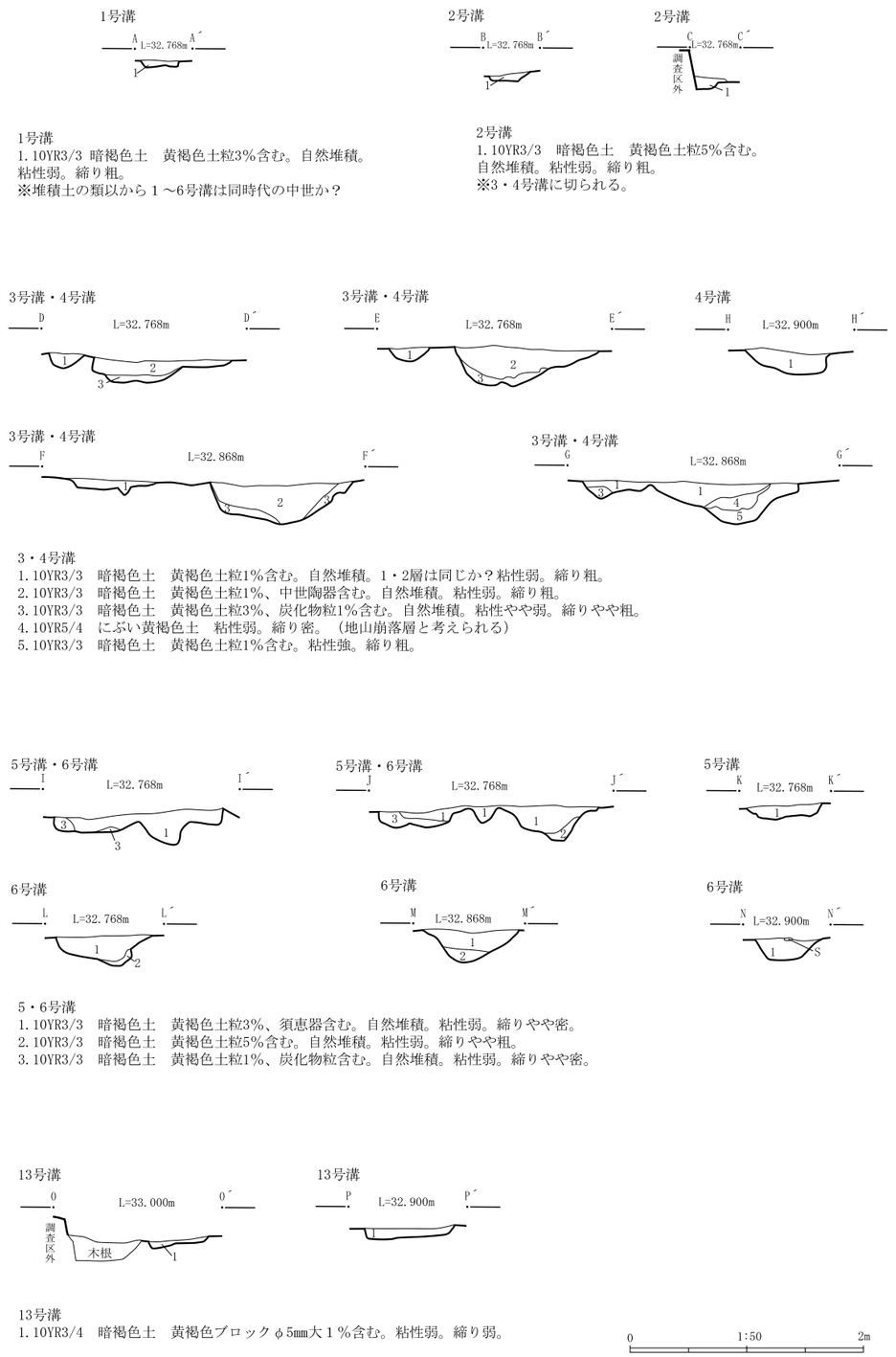
第24図　15～18土坑、1号焼土、3号井戸跡



第25図　1号道路跡



第26図　1～6･13号溝跡①



1号溝
1.10YR3/3 暗褐色土　黄褐色土粒3%含む。自然堆積。
粘性弱。締り粗。
※堆積土の類以から１～6号溝は同時代の中世か？

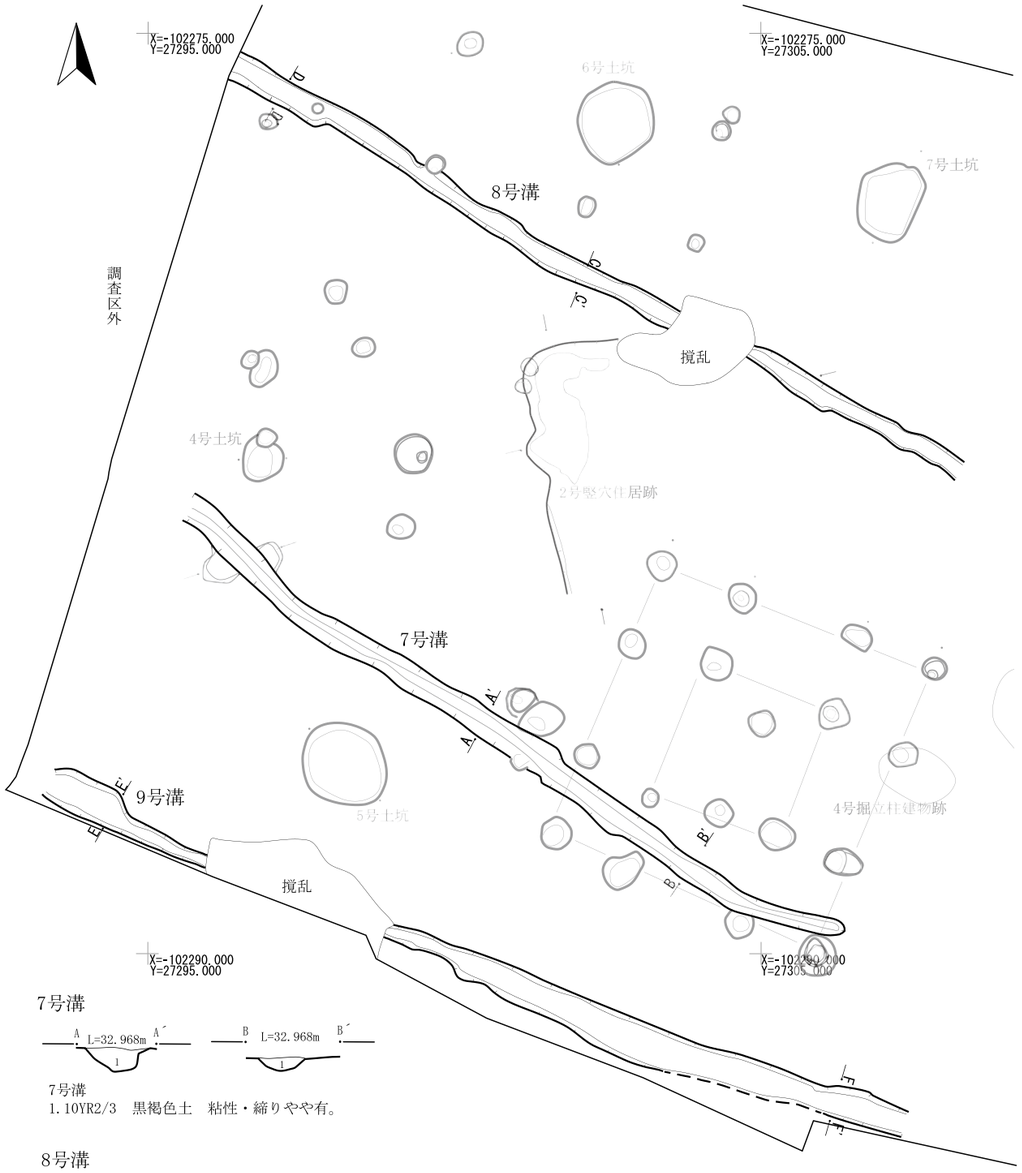
2号溝
1.10YR3/3　暗褐色土　黄褐色土粒5%含む。
自然堆積。粘性弱。締り粗。
※3・4号溝に切られる。

3・4号溝
1.10YR3/3　暗褐色土　黄褐色土粒1%含む。自然堆積。1・2層は同じか？粘性弱。締り粗。
2.10YR3/3　暗褐色土　黄褐色土粒1%、中世陶器含む。自然堆積。粘性弱。締り粗。
3.10YR3/3　暗褐色土　黄褐色土粒3%、炭化物粒1%含む。自然堆積。粘性やや弱。締りやや粗。
4.10YR5/4　にぶい黄褐色土　粘性弱。締り密。（地山崩落層と考えられる）
5.10YR3/3　暗褐色土　黄褐色土粒1%含む。粘性強。締り粗。

5・6号溝
1.10YR3/3　暗褐色土　黄褐色土粒3%、須恵器含む。自然堆積。粘性弱。締りやや密。
2.10YR3/3　暗褐色土　黄褐色土粒5%含む。自然堆積。粘性弱。締りやや粗。
3.10YR3/3　暗褐色土　黄褐色土粒1%、炭化物粒含む。自然堆積。粘性弱。締りやや密。

13号溝
1.10YR3/4　暗褐色土　黄褐色ブロックφ5mm大１%含む。粘性弱。締り弱。

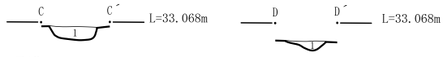
第27図　1～6号･13号溝跡②



7号溝

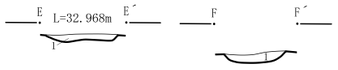
7号溝
1.10YR2/3　黒褐色土　粘性・締りやや有。

8号溝



8号溝
1.10YR3/3　暗褐色土　地山ブロック微量含む。自然堆積。（水の流れた感じはしない）粘性・締りやや有。

9号溝



9号溝
1.10YR3/4　暗褐色土　礫微量含む。粘性・締りやや有。

―平面図―
1:100
0　5m

―断面図―
1:50
0　2m

第28図　7～9号溝跡

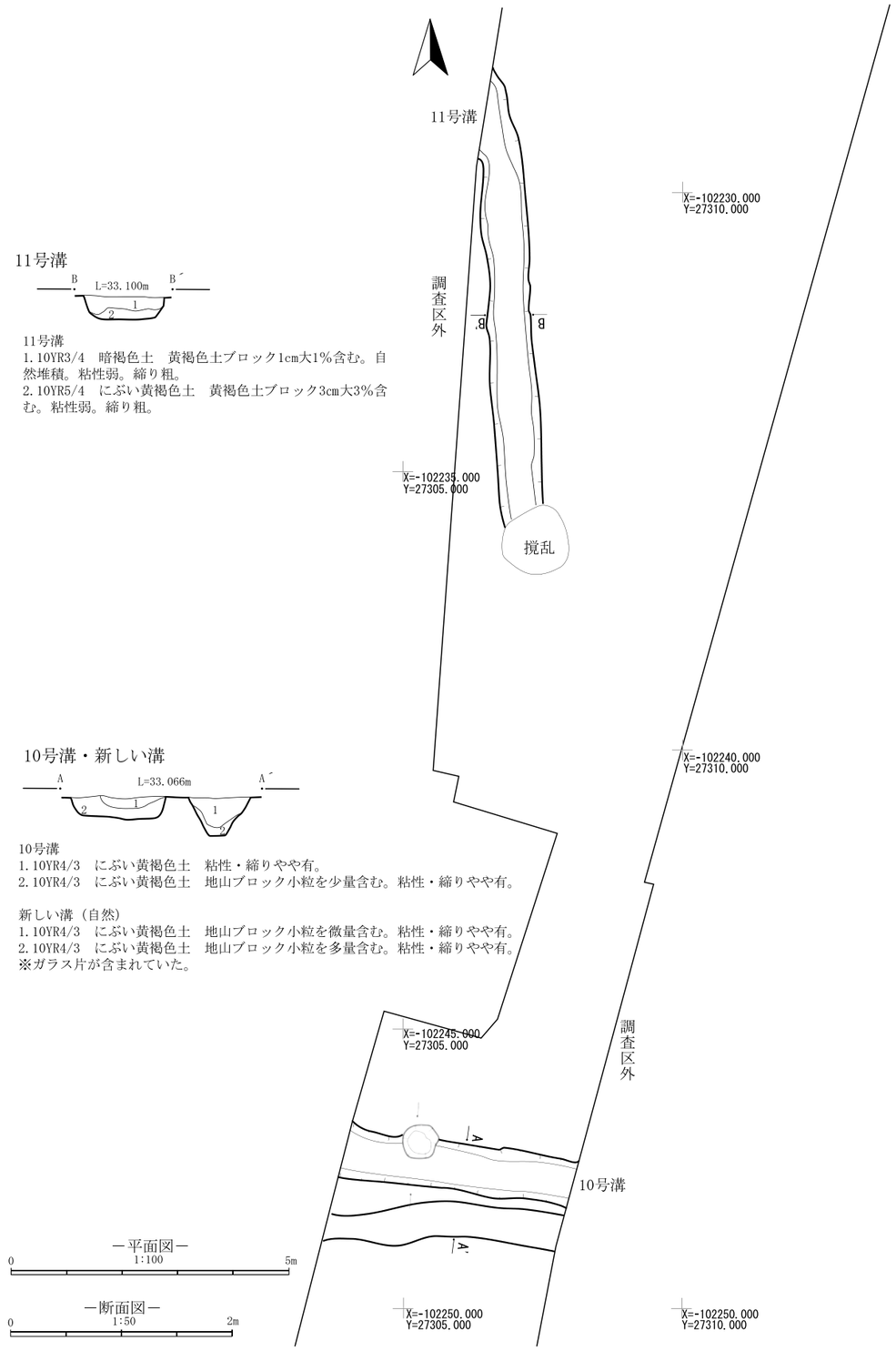
11号溝

11号溝
1.10YR3/4　暗褐色土　黄褐色土ブロック1cm大1%含む。自然堆積。粘性弱。締り粗。
2.10YR5/4　にぶい黄褐色土　黄褐色土ブロック3cm大3%含む。粘性弱。締り粗。

10号溝・新しい溝

10号溝
1.10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性・締りやや有。
2.10YR4/3　にぶい黄褐色土　地山ブロック小粒を少量含む。粘性・締りやや有。

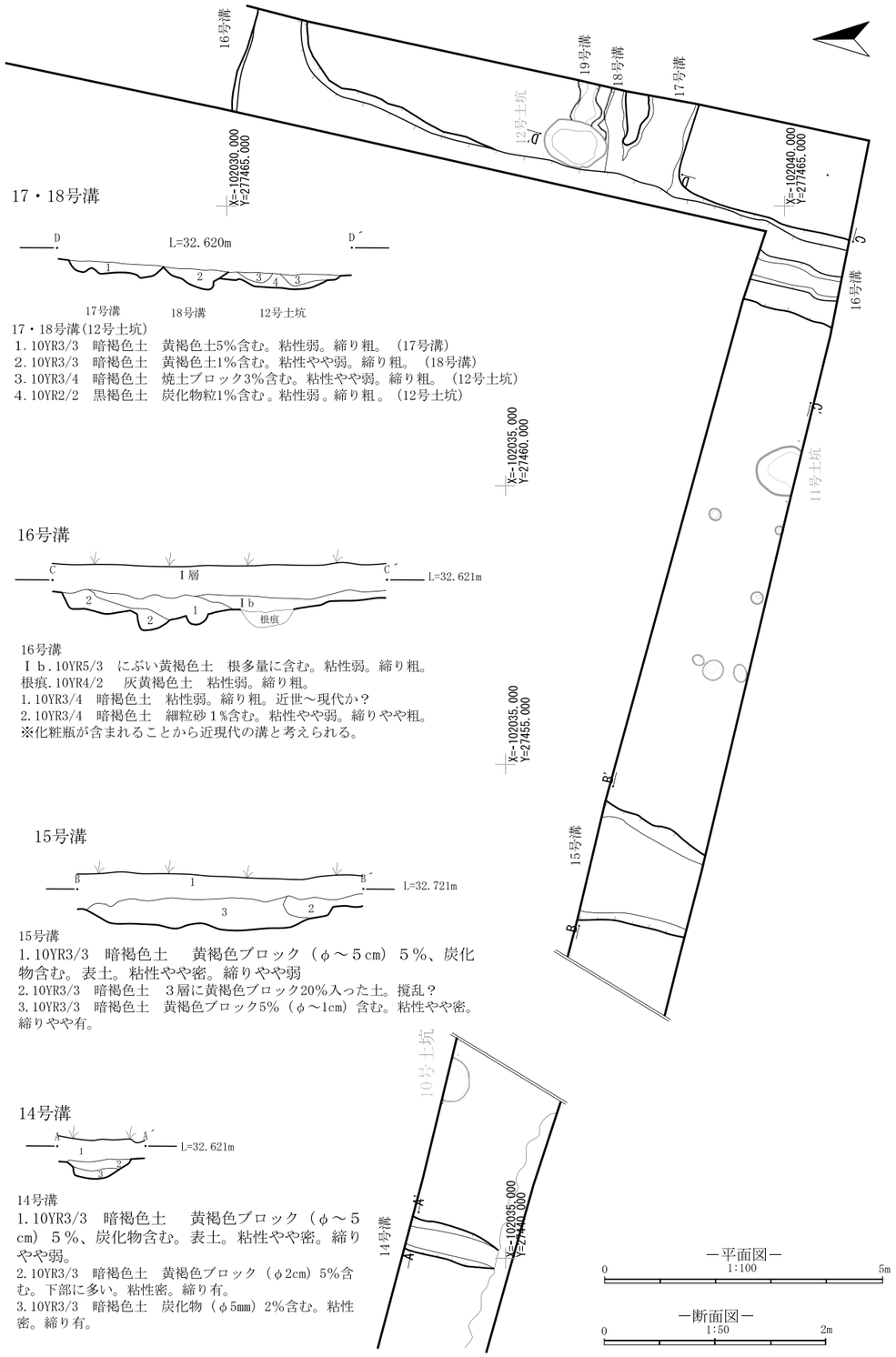
新しい溝（自然）
1.10YR4/3　にぶい黄褐色土　地山ブロック小粒を微量含む。粘性・締りやや有。
2.10YR4/3　にぶい黄褐色土　地山ブロック小粒を多量含む。粘性・締りやや有。
※ガラス片が含まれていた。



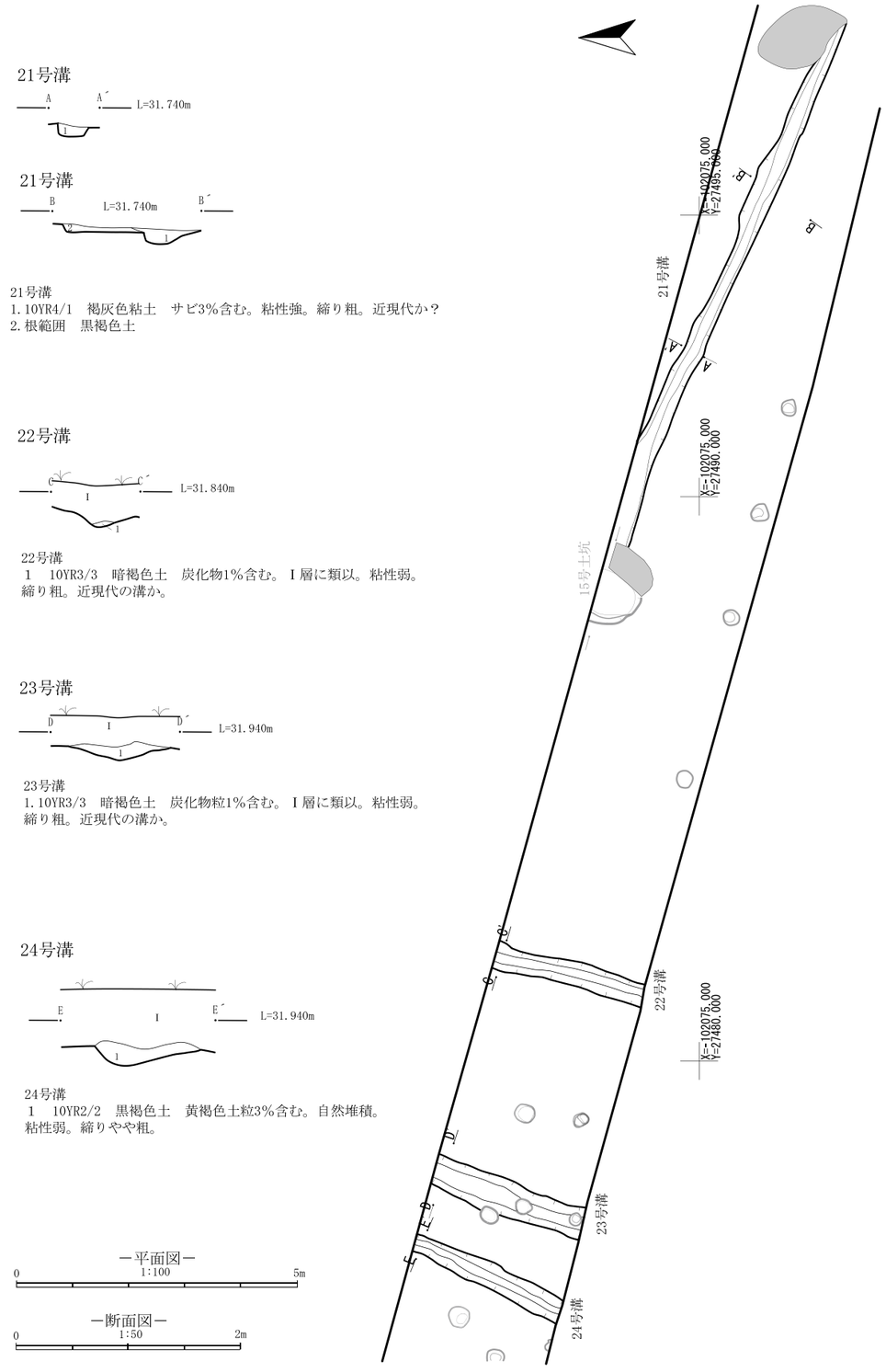
―平面図―
1:100
0　5m

―断面図―
1:50
0　2m

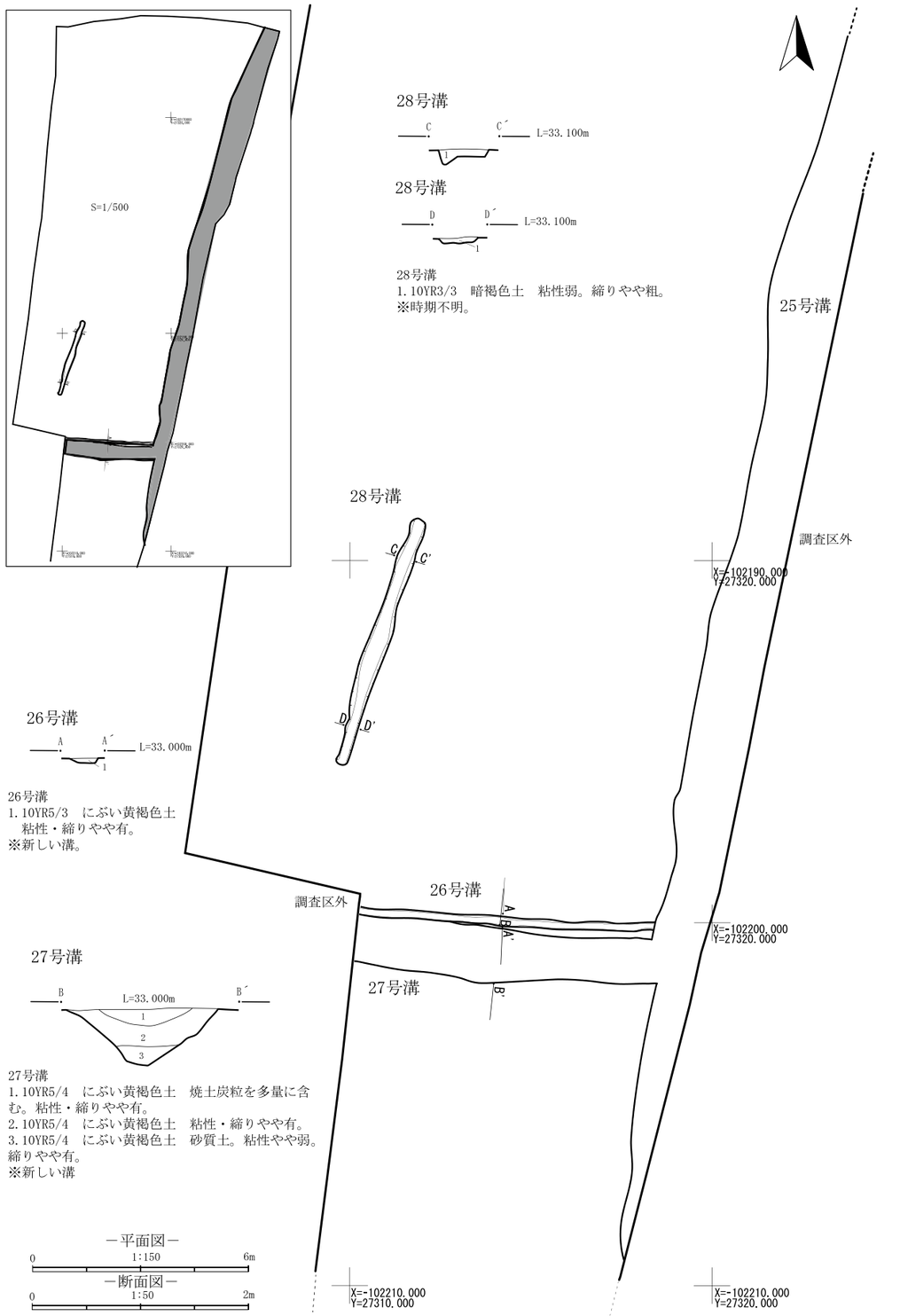
第29図　10･11号溝跡



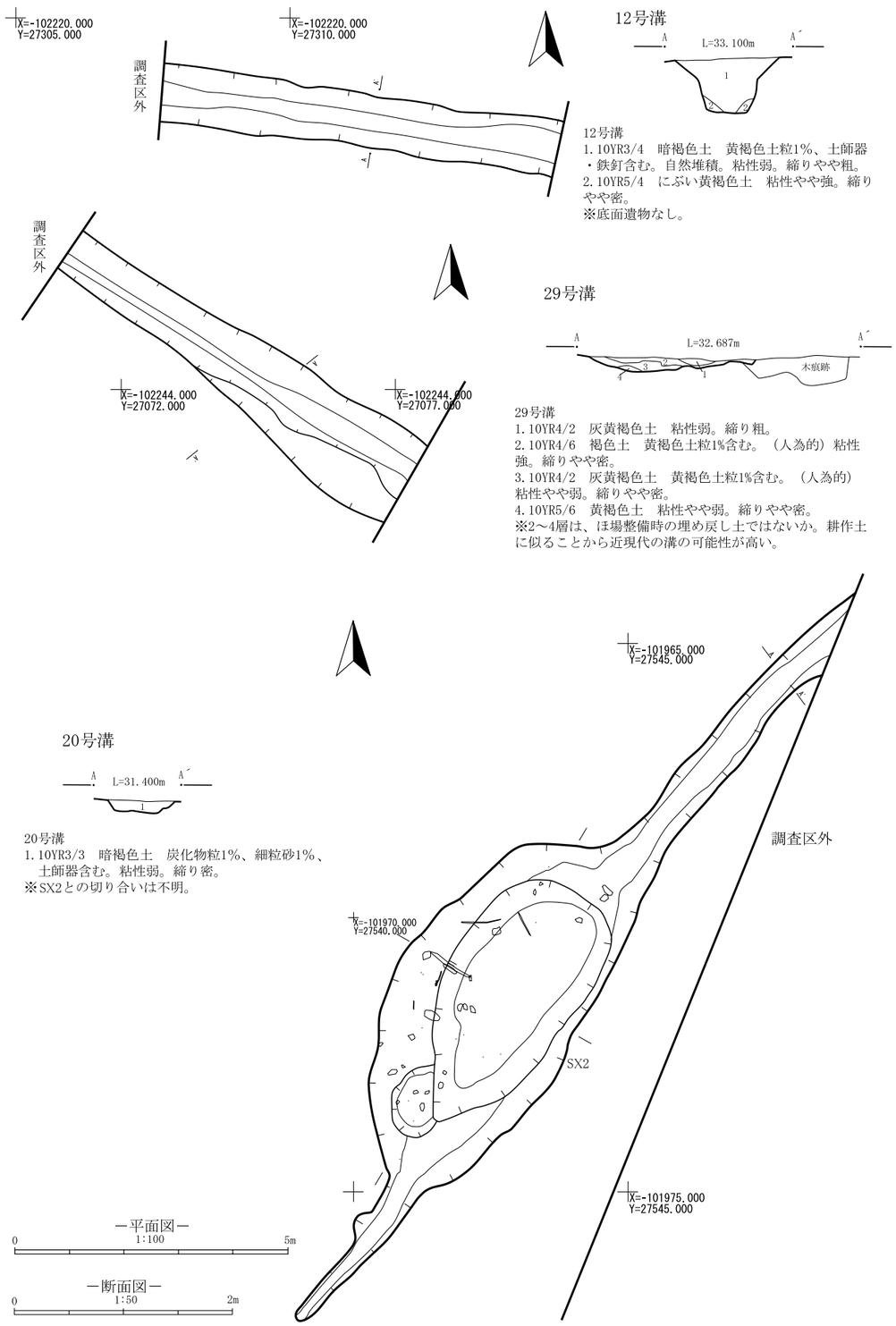
第30図　14～19号溝跡



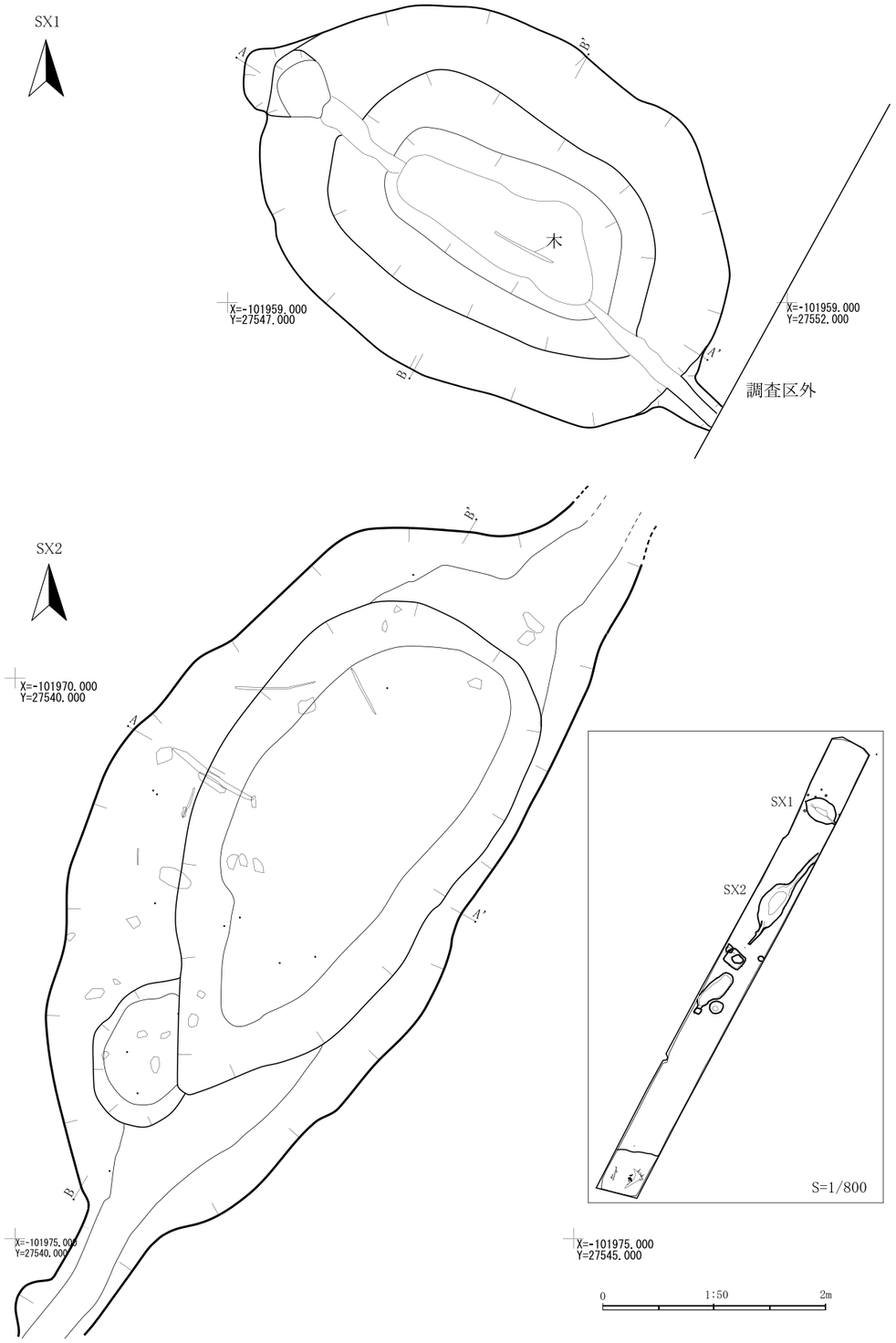
第31図　21～24号溝跡



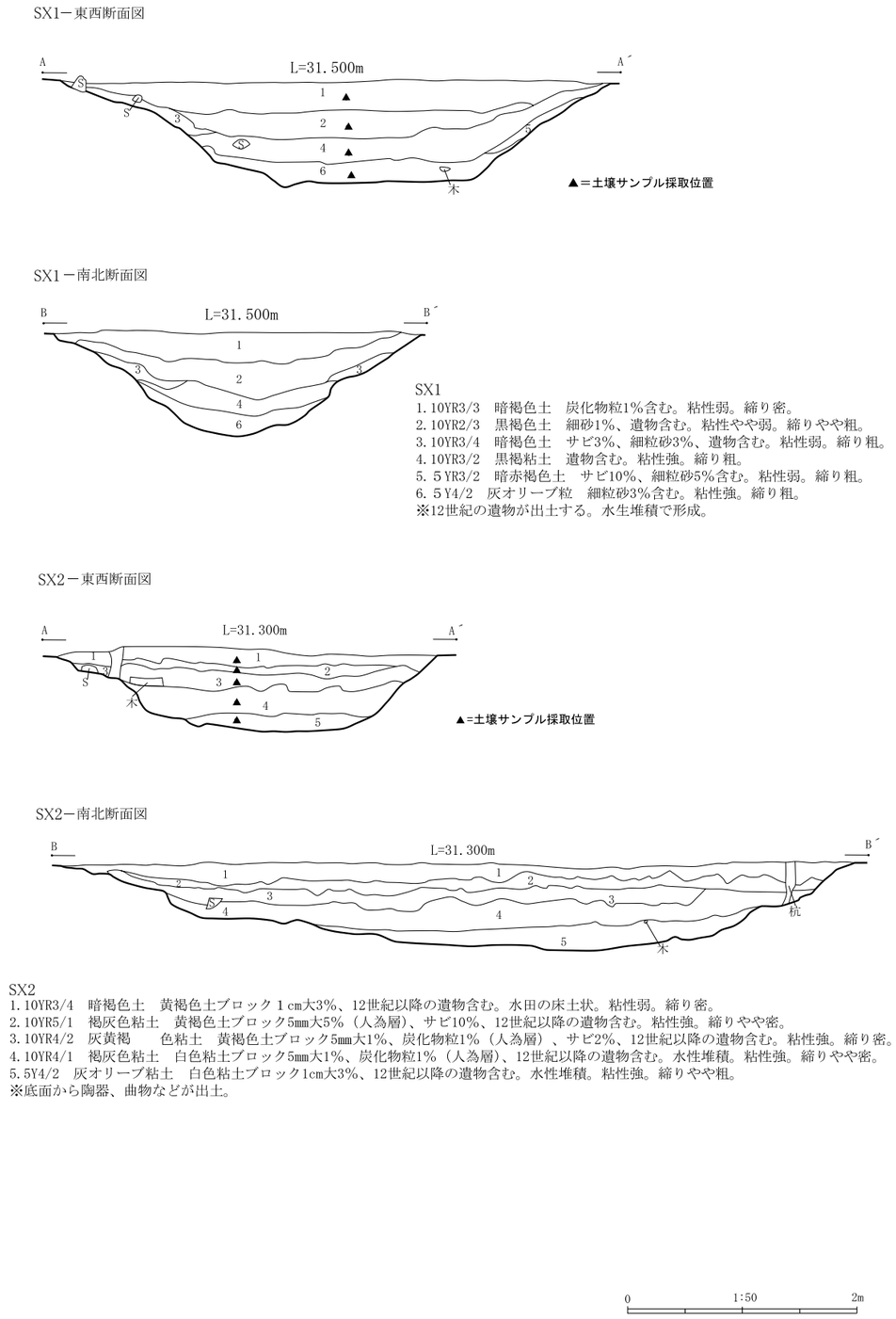
第32図　25～28号溝跡



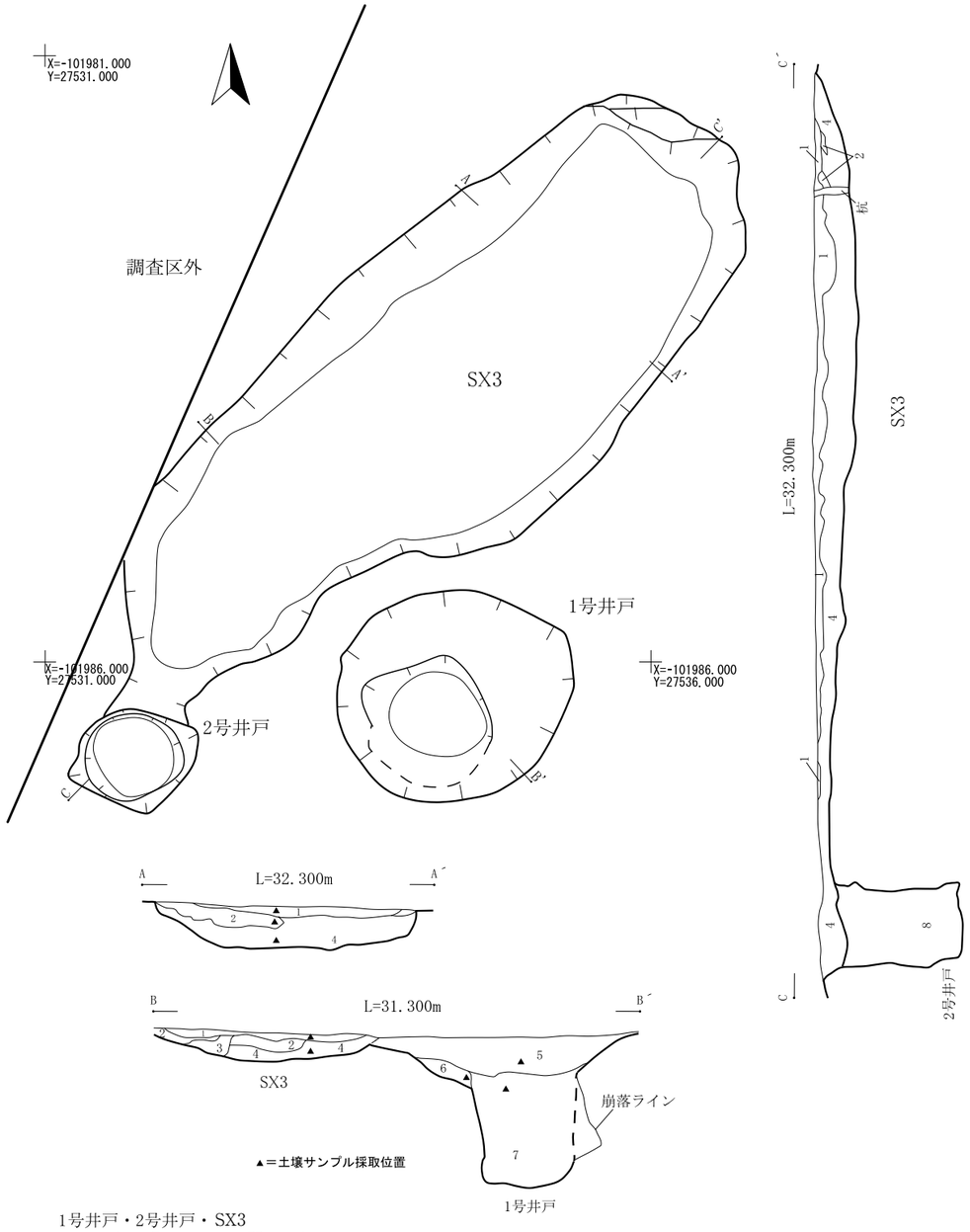
第33図　12･20･29号溝跡



第34図　SX1･SX2①



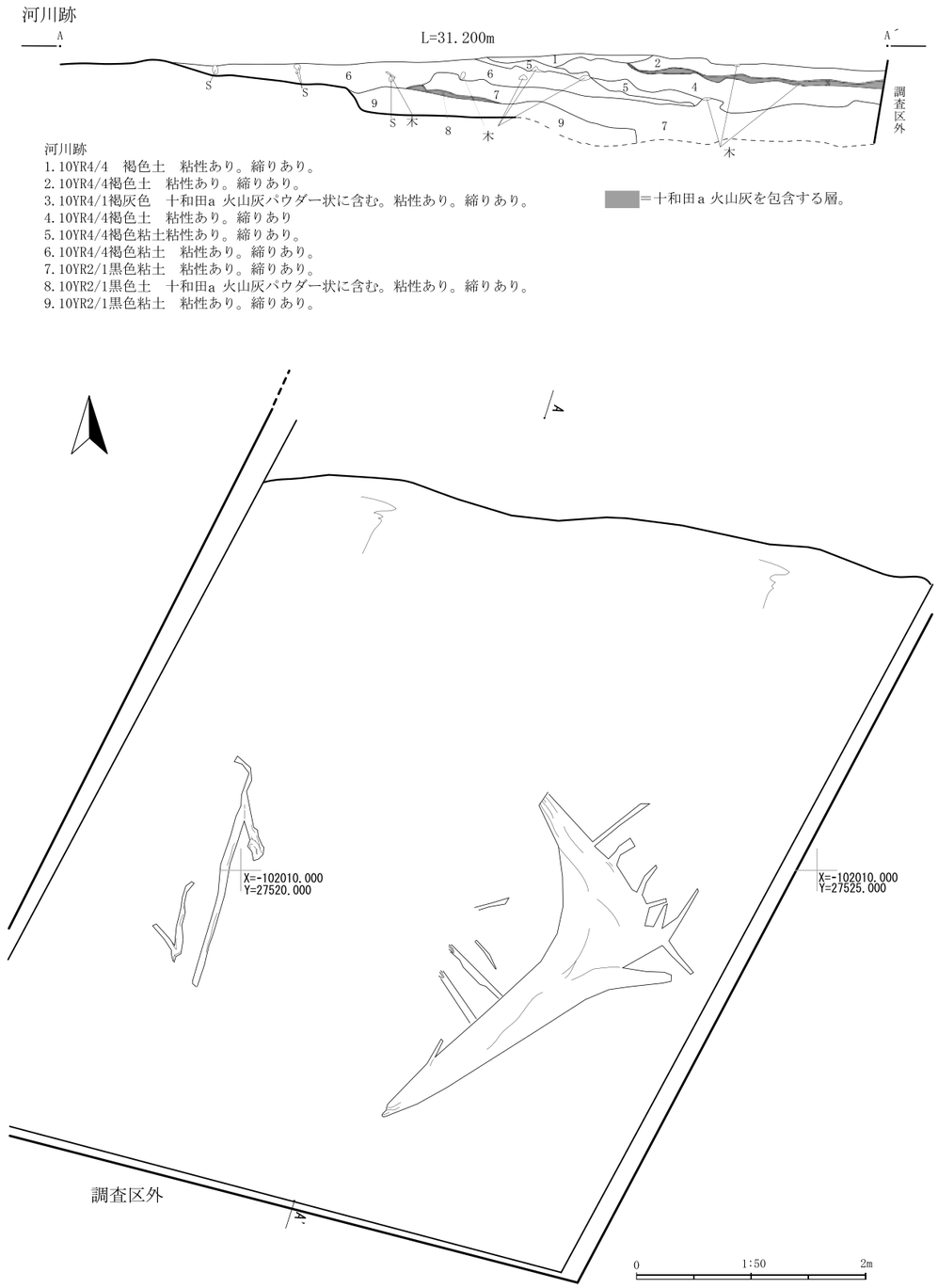
第35図　SX1･SX2②



1号井戸・2号井戸・SX3
1.10YR4/4　褐色土　粘性弱。締り密。(床土)
2.５Y4/4　暗オリーブ粘土　サビ1%含む（人為層)。 粘性強。締りやや粗。
3.10YR3/3　暗褐色粘土　サビ3%含む（人為層)。 粘性強。締り粗。
4.10YR3/2　黒褐色粘土　サビ3%、白色粘土塊3cm大1%、白色砂粘3%含む（水性層)。粘性強。締りやや粗。
5.10YR3/2　黒褐粘土　4層と同じ。
6.10YR3/3　暗褐粘土　白～オリーブ色粘土ブロック3cm大1%含む。粘性強。締り粗。
7.10YR2/2　黒褐粘土　粘性強。締り粗。
8.10YR3/1　黒褐色粘土　粘性強。締り粗。水つき。白色～オリーブ粘土５%
※4層と5層は同じであることからSX3が新しいと考えられる。また、第２、３層の存在は本遺構が粘土採掘を行った可能性を示唆する。

0　1:50　2m

第36図　1･2号井戸跡、SX3

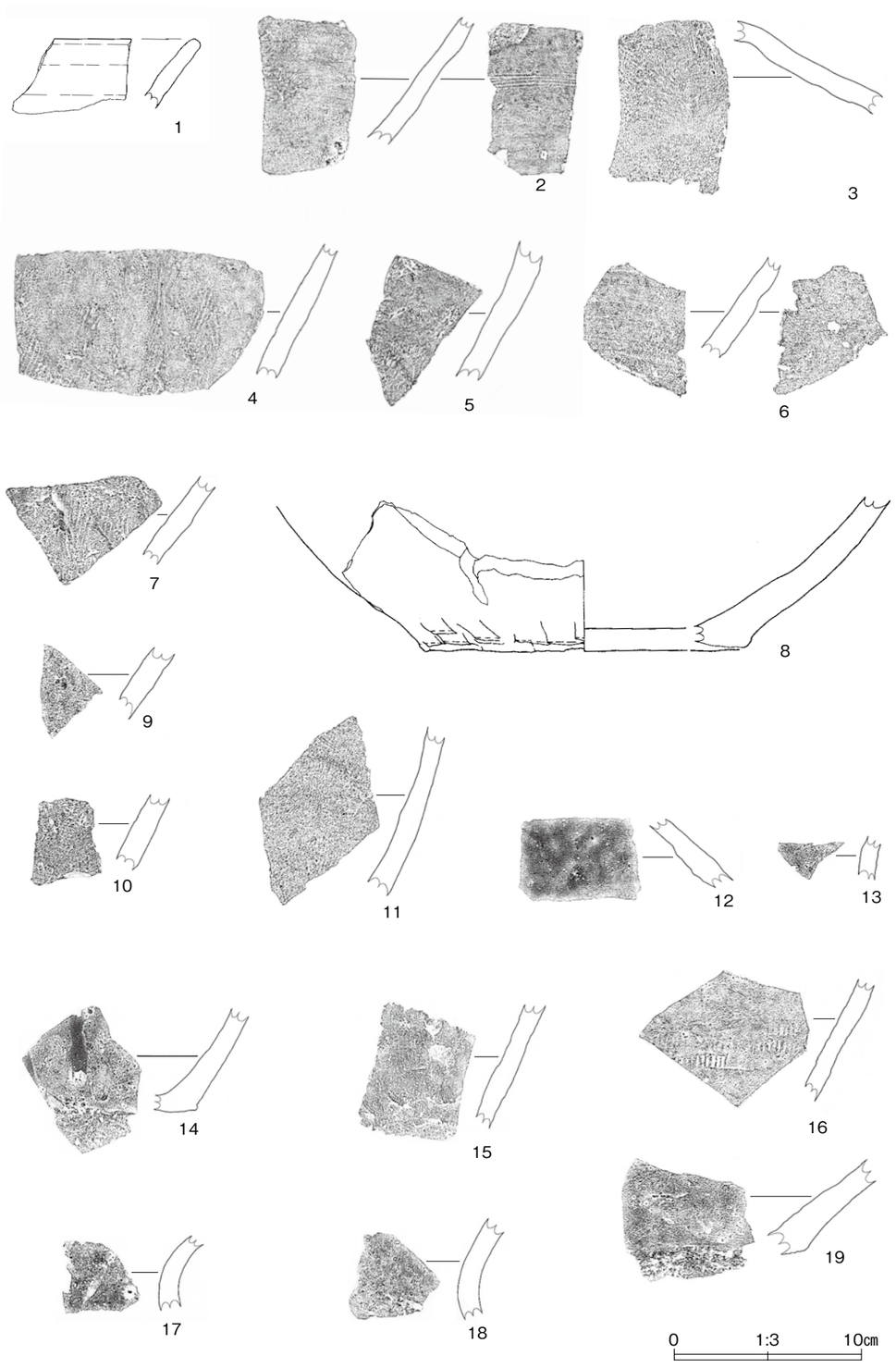


河川跡
1.10YR4/4　褐色土　粘性あり。締りあり。
2.10YR4/4褐色土　粘性あり。締りあり。
3.10YR4/1褐灰色　十和田a 火山灰パウダー状に含む。粘性あり。締りあり。
4.10YR4/4褐色土　粘性あり。締りあり
5.10YR4/4褐色粘土粘性あり。締りあり。
6.10YR4/4褐色粘土　粘性あり。締りあり。
7.10YR2/1黒色粘土　粘性あり。締りあり。
8.10YR2/1黒色土　十和田a 火山灰パウダー状に含む。粘性あり。締りあり。
9.10YR2/1黒色粘土　粘性あり。締りあり。

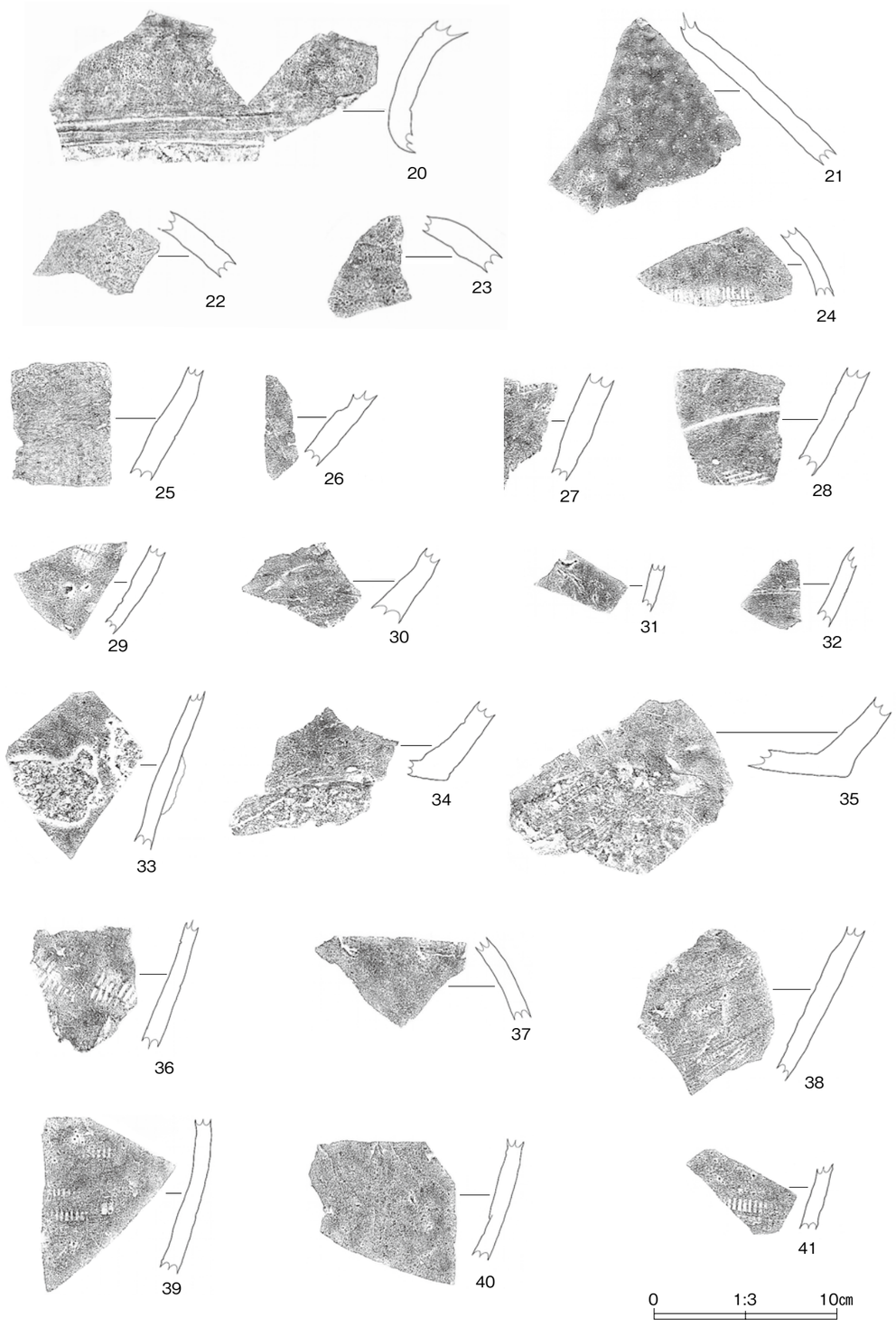
＝十和田a 火山灰を包含する層。

0　1:50　2m

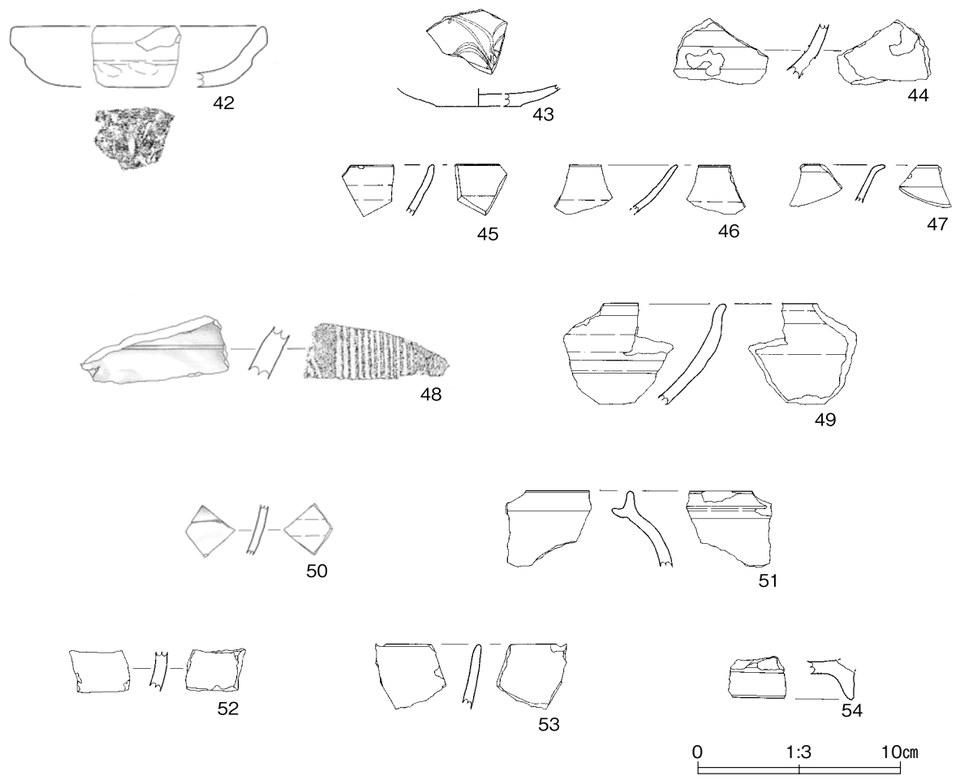
第37図　河川跡

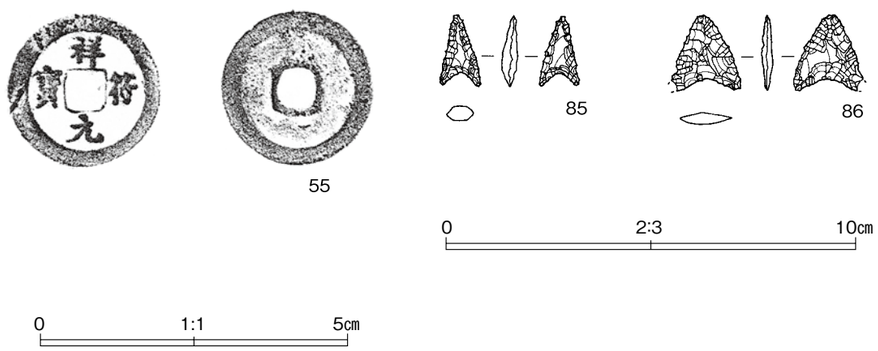


第38図　国産陶器（渥美・常滑）

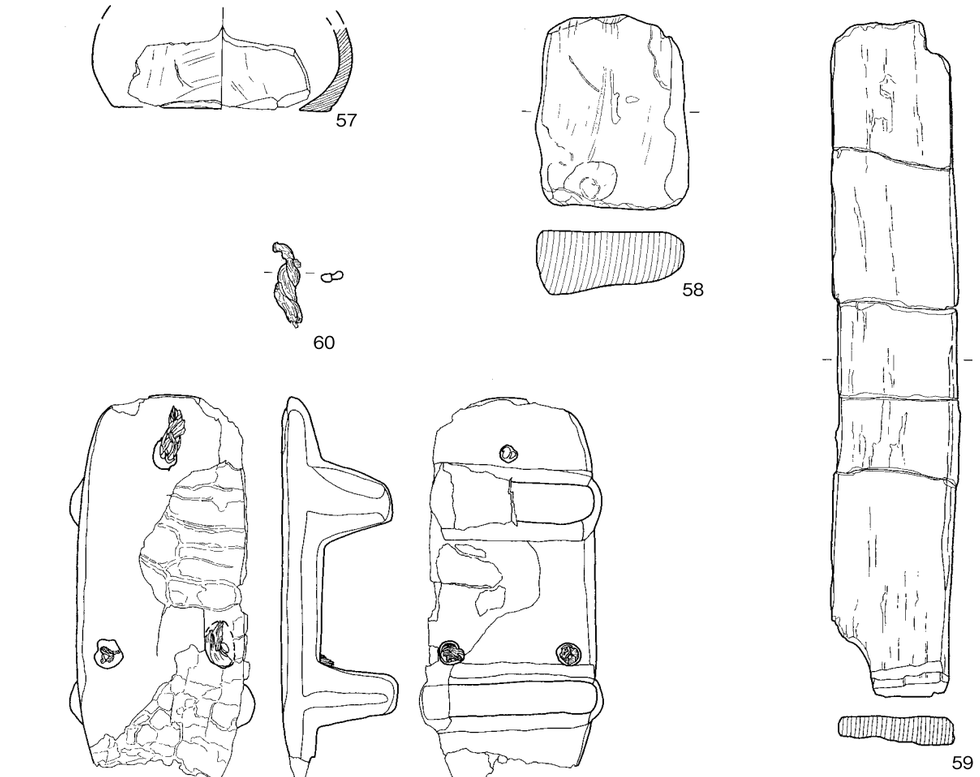


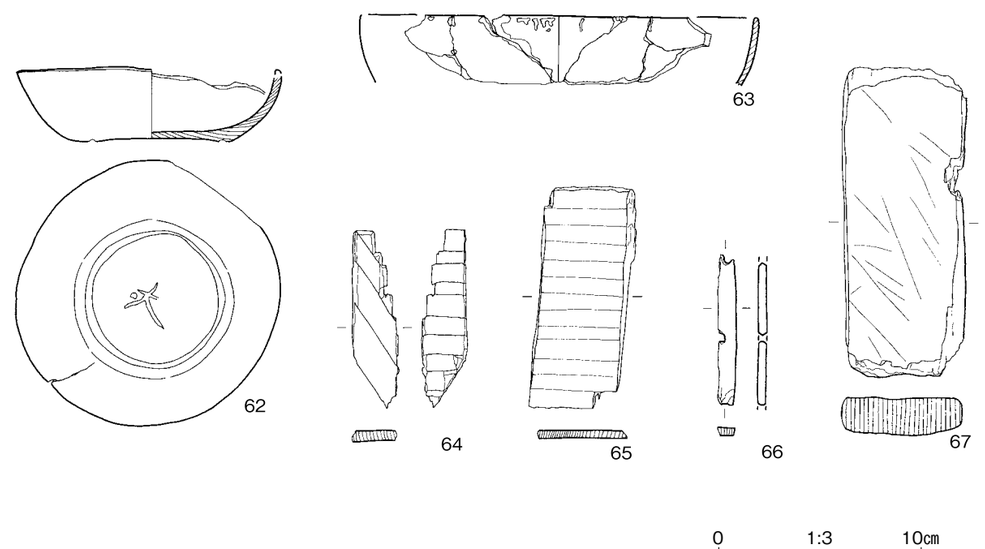
第39図　国産陶器（常滑）



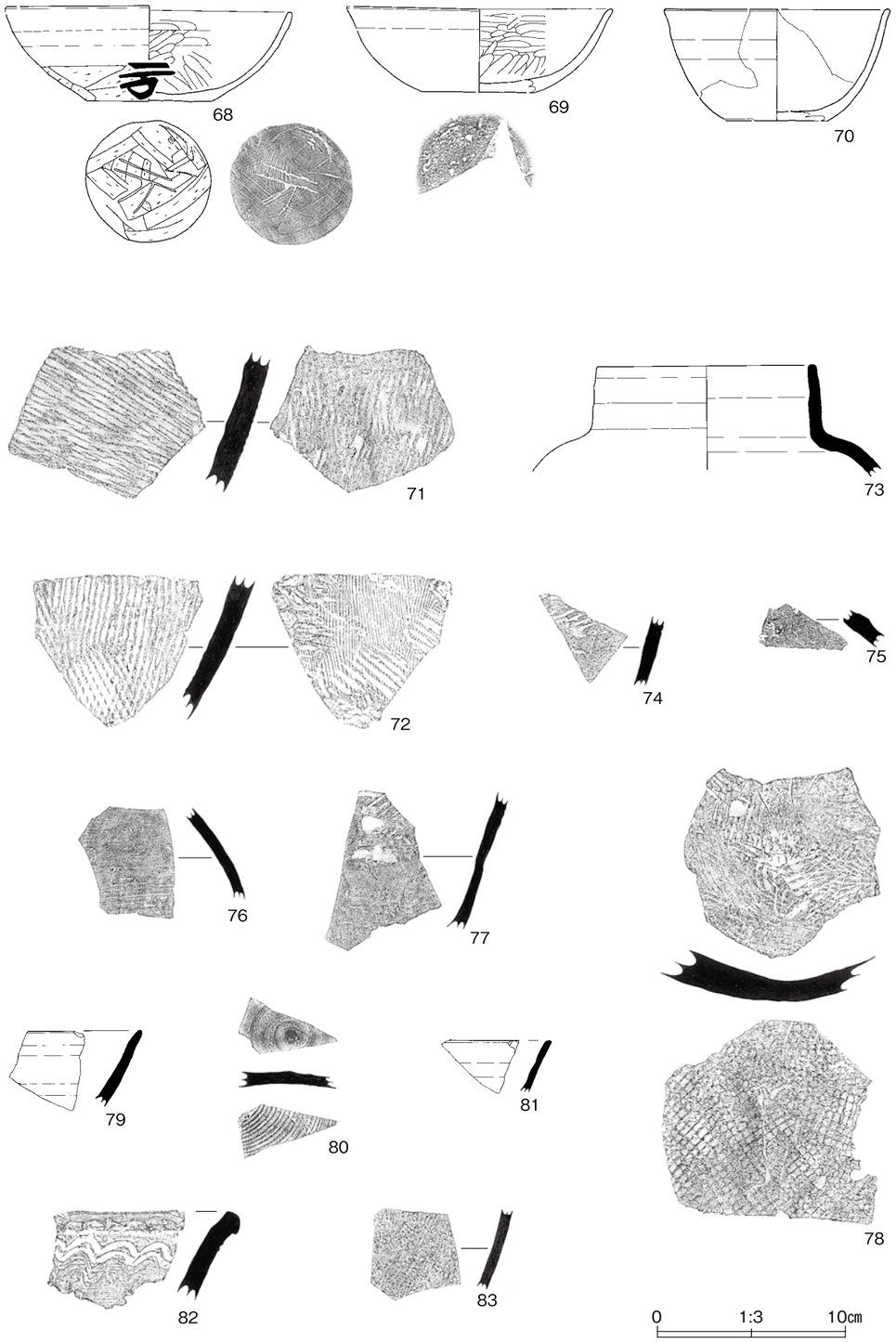


第40図　かわらけ・陶磁器ほか





第41図　木製品



第42図　土師器・須恵器

第4表　柱穴観察表

No.	上端(標高m)	下端(標高m)	深さ(cm)	調査区	備考
1	32.710	32.459	25.1	A	1号掘立柱
2	32.684	32.322	36.2	A	1号掘立柱
3	32.697	32.363	33.4	A	1号掘立柱
4	32.781	32.170	61.1	A	1号掘立柱
5	32.789	32.321	46.8	A	1号掘立柱
6	32.796	32.385	41.1	A	1号掘立柱
7	32.833	32.605	22.8	A	1号掘立柱
8	32.772	32.676	9.6	A	1号掘立柱
9	32.698	32.311	38.7	A	1号掘立柱
10	32.713	32.006	70.7	A	1号掘立柱
11	32.796	32.205	59.1	A	1号掘立柱
12	32.794	32.153	64.1	A	1号掘立柱
13	32.778	32.188	59.0	A	1号掘立柱
14	32.797	32.199	59.8	A	1号掘立柱
15	32.866	32.370	49.6	A	1号掘立柱
16	32.855	32.502	35.3	A	1号掘立柱
17	32.712	32.483	22.9	A	
18	32.793	32.605	18.8	A	
19	32.675	32.501	17.4	A	
20	32.763	32.078	68.5	A	1号掘立柱
21	32.693	32.173	52.0	A	1号掘立柱
22	32.719	32.257	46.2	A	
23	32.787	32.269	51.8	A	1号掘立柱
24	32.789	32.279	51.0	A	1号掘立柱
25	32.794	32.296	49.8	A	1号掘立柱
26	32.870	32.579	29.1	A	1号掘立柱
27	32.711	32.203	50.8	A	1号掘立柱
28	32.712	32.250	46.2	A	1号掘立柱
29	32.792	32.343	44.9	A	1号掘立柱
30	32.696	32.466	23.0	A	
31	32.815	32.390	42.5	A	1号掘立柱
32	32.850	32.545	30.5	A	1号掘立柱
33	32.863	32.434	42.9	A	1号掘立柱
34	32.987	32.649	33.8	A	1号掘立柱
35	32.879	32.506	37.3	A	1号掘立柱
36	32.745	32.390	35.5	A	1号掘立柱
37	32.725	32.317	40.8	A	1号掘立柱
38～40欠番					
41	32.973	32.766	20.7	B	
42	32.966	32.947	1.9	B	
43	33.091	32.735	35.6	B	
44	32.963	32.704	25.9	B	
45	32.924	32.683	24.1	B	
46	33.086	32.96	12.6	B	
47	32.954	32.666	28.8	B	2号掘立柱
48	32.895	32.76	13.5	B	2号掘立柱
49	33.014	32.837	17.7	B	2号掘立柱
50	33.021	32.674	34.7	B	3号掘立柱
51	32.985	32.691	29.4	B	3号掘立柱
52	32.983	32.939	4.4	B	
53	32.974	32.8	17.4	B	(新54・旧53)
54	33.027	32.833	19.4	B	2号掘立柱 (新54・旧53)
55	33.035	32.727	30.8	B	2号掘立柱 (新55・旧56)
56	33.027	32.874	15.3	B	(新55・旧56)
57	33.044	32.821	22.3	B	
58	33.036	32.595	44.1	B	
59	33.030	32.659	37.1	B	3号掘立柱 (新59・旧60)
60	33.026	32.895	13.1	B	(新59・旧60)
61	33.053	33.03	2.3	B	3号掘立柱
62	33.048	32.822	22.6	B	2号掘立柱 (新63・旧62)
63	33.045	32.949	9.6	B	(新63・旧62)
64	33.106	32.792	31.4	B	3号掘立柱
65	33.225	32.871	35.4	B	3号掘立柱 (新65・旧66)
66	33.218	32.906	31.2	B	2号掘立柱 (新65・旧66)
67	33.235	32.787	44.8	B	2号掘立柱
68	33.205	32.744	46.1	B	(新69・旧68)
69	33.217	32.755	46.2	B	(新69・旧68)
70	33.227	32.816	41.1	B	3号掘立柱
71	33.225	32.675	55.0	B	3号掘立柱
72	33.222	32.763	45.9	B	
73	33.219	32.864	35.5	B	
74	33.218	33.08	13.8	B	
75	33.231	33.143	8.8	B	
76	33.256	32.919	33.7	B	
77	33.22	32.909	31.1	B	2号掘立柱
78	33.209	32.736	47.3	B	
79	33.215	33.061	15.4	B	

No.	上端(標高m)	下端(標高m)	深さ(cm)	調査区	備考
80	33.169	32.993	17.6	B	
81	33.168	32.811	35.7	B	
82	33.175	32.91	26.5	B	
83	33.163	33.008	15.5	B	
84	33.192	33.062	13.0	B	
85	33.198	33.046	15.2	B	
86	33.181	33.016	16.5	B	
87	33.116	32.786	33.0	B	4号掘立柱
88	33.046	32.89	15.6	B	4号掘立柱
89	33.035	32.905	13.0	B	4号掘立柱
90	32.988	32.879	10.9	B	4号掘立柱
91	32.964	32.842	12.2	B	4号掘立柱
92	32.907	32.791	11.6	B	4号掘立柱
93	32.99	32.906	8.4	B	
94	33.046	32.845	20.1	B	4号掘立柱
95	33.094	32.926	16.8	B	4号掘立柱
96	33.193	32.927	26.6	B	
97	33.058	32.869	18.9	B	(新98・旧97)
98	33.025	32.667	35.8	B	(新98・旧97)
99	33.09	32.955	13.5	B	4号掘立柱
100	33.084	32.919	16.5	B	4号掘立柱
101	33.013	32.823	19.0	B	
102	32.945	32.85	9.5	B	4号掘立柱
103	32.918	32.759	15.9	B	4号掘立柱
104	32.954	32.816	13.8	B	4号掘立柱
105	32.964	32.813	15.1	B	4号掘立柱
106	33.091	32.955	13.6	B	4号掘立柱
107	33.147	32.893	25.4	B	4号掘立柱
108	33.094	32.903	19.1	B	
109	33.183	33.022	16.1	B	
110	33.191	33.023	16.8	B	
111	33.198	33.041	15.7	B	
112	33.198	33.008	19.0	B	
113	33.206	33.092	11.4	B	
114	33.002	32.432	57.0	B	2号掘立柱
115	33.022	32.907	11.5	B	
116	33.119	33.07	4.9	B	
117	33.192	32.958	23.4	B	
118	33.197	33.089	10.8	B	
119	32.981	32.762	21.9	B	
120	32.817	32.57	24.7	A	
121	32.942	32.491	45.1	A	
122	32.932	32.507	42.5	A	
123	32.939	32.642	29.7	A	
124	32.924	32.696	22.8	A	
125	32.924	32.782	14.2	A	
126	32.913	32.735	17.8	A	
127	32.927	32.74	18.7	A	
128	32.911	32.709	20.2	A	
129	32.894	32.734	16.0	A	
130	32.795	32.622	17.3	A	
131	32.946	32.678	26.8	A	
132	32.87	32.664	20.6	A	
133	32.838	32.688	15.0	A	
134	32.558	32.427	13.1	F	
135	32.536	32.378	15.8	F	
136	32.548	32.281	26.7	F	
137	32.623	32.427	19.6	F	
138	32.612	32.362	25.0	F	
139	32.589	32.209	38.0	F	
140	32.515	32.4	11.5	F	
141	31.447	31.239	20.8	G	
142	31.483	31.346	13.7	G	
143	31.46	31.361	9.9	G	
144	31.434	31.206	22.8	G	
145	31.445	31.246	19.9	G	
146	31.438	31.221	21.7	G	
147	31.861	31.658	20.3	E	5号掘立柱
148	31.846	31.493	35.3	E	5号掘立柱
149	31.852	31.627	22.5	E	5号掘立柱
150	31.829	31.54	28.9	E	5号掘立柱
151	31.827	31.579	24.8	E	2号柱穴列
152	31.751	31.453	29.8	E	2号柱穴列
153	31.861	31.377	48.4	E	1号柱穴列
154	31.835	31.593	24.2	E	2号柱穴列
155	31.844	31.684	16.0	E	
156	31.842	31.633	20.9	E	
157	31.881	31.366	51.5	E	1号柱穴列
158	31.8	31.334	46.6	E	1号柱穴列
159	31.692	31.477	21.5	E	2号柱穴列
160	31.675	31.471	20.4	E	
161	31.772	31.484	28.8	E	1号柱穴列
162	31.735	31.496	23.9	E	
163	31.622	31.303	31.9	E	3号柱穴列

No.	上端(標高m)	下端(標高m)	深さ(cm)	調査区	備考
164	31.652	31.319	33.3	E	3号柱穴列
165	31.621	31.33	29.1	E	3号柱穴列
166	31.519	31.289	23.0	E	3号柱穴列
167	32.989	32.642	34.7	C	
168	32.963	32.779	18.4	C	
169	32.952	32.717	23.5	C	
170	32.969	32.732	23.7	C	
171	32.97	32.517	45.3	C	6号掘立柱
172	32.942	32.533	40.9	C	6号掘立柱
173	32.959	32.655	30.4	C	(新173・旧174)
174	32.957	32.525	43.2	C	6号掘立柱 (新173・旧174)
175	32.934	32.605	32.9	C	6号掘立柱
176	32.929	32.744	18.5	C	
177	32.961	32.546	41.5	C	6号掘立柱
178	32.962	32.414	54.8	C	
179	32.938	32.545	39.3	C	
180	32.931	32.458	47.3	C	7号掘立柱
181	32.921	32.42	50.1	C	(新181・旧198)
182	32.963	32.623	34.0	C	
183	32.946	32.737	20.9	C	
184	32.922	32.437	48.5	C	6号掘立柱
185	32.942	32.514	42.8	C	
186	32.933	32.464	46.9	C	6号掘立柱
187	32.904	32.749	15.5	C	
188	32.879	32.552	32.7	C	
189	32.923	32.517	40.6	C	
190	32.926	32.433	49.3	C	10号掘立柱
191	32.935	32.696	23.9	C	7号掘立柱
192	32.921	32.649	27.2	C	
193	32.93	32.673	25.7	C	
194	32.942	32.535	40.7	C	
195	32.948	32.732	21.6	C	
196	32.922	32.783	13.9	C	(新197・旧196)
197	32.921	32.685	23.6	C	6号掘立柱 (新197・旧196)
198	32.884	32.717	16.7	C	(新181・旧198)
199	32.912	32.796	11.6	C	
200	32.925	32.392	53.3	C	10号掘立柱
201	32.899	32.704	19.5	C	
202	32.909	32.57	33.9	C	7号掘立柱
203	32.9	32.573	32.7	C	7号掘立柱
204	32.885	32.706	17.9	C	
205	32.89	32.79	10.0	C	
206	32.921	32.452	46.9	C	7号掘立柱
207	32.928	32.484	44.4	C	
208	32.894	32.676	21.8	C	
209	32.897	32.484	41.3	C	6号掘立柱
210	32.892	32.487	40.5	C	
211	32.896	32.358	53.8	C	10号掘立柱
212	32.874	32.533	34.1	C	
213	32.919	32.725	19.4	C	
214	32.924	32.724	20.0	C	
215	32.927	32.712	21.5	C	7号掘立柱
216	32.916	32.619	29.7	C	
217	32.871	32.286	58.5	C	
218	32.918	32.741	17.7	C	
219	32.911	32.572	33.9	C	
220	32.906	32.641	26.5	C	
221	32.896	32.611	28.5	C	
222	32.892	32.338	55.4	C	8号掘立柱
223	32.92	32.425	49.5	C	8号掘立柱
224	32.91	32.472	43.8	C	
225	32.893	32.711	18.2	C	
226	32.887	32.622	26.5	C	
227	32.871	32.299	57.2	C	10号掘立柱
228	32.946	32.666	28.0	C	
229	32.948	32.649	29.9	C	
230	32.918	32.734	18.4	C	
231	32.845	32.35	49.5	C	8号掘立柱
232	32.87	32.669	20.1	C	8号掘立柱
233	32.861	32.449	41.2	C	
234	32.822	32.345	47.7	C	
235～300欠番					
301	32.45	32.177	27.3	J	9号掘立柱
302	32.503	32.201	30.2	J	9号掘立柱
303	32.56	32.124	43.6	J	9号掘立柱
304	32.599	32.282	31.7	J	9号掘立柱
305	32.597	32.311	28.6	J	9号掘立柱
306	32.552	32.201	35.1	J	9号掘立柱
307	32.605	32.353	25.2	J	9号掘立柱
308	32.633	32.37	26.3	J	9号掘立柱
309	32.578	32.287	29.1	J	9号掘立柱

第5表　陶器観察表

掲載番号	仮番号	種別	器種	出土地点	部位	重量(g)	色調	その他（口：口径、底：底径、高：器高、計測値mm）
1	204	常滑	鉢	12号溝　埋土一括	口	31.25	2.5Y6/2灰黄色	渥美かもしれない
2	258	渥美	鉢	18号溝　埋土	体	59.40	5Y5/1褐灰色	
3	209	渥美	甕	SX1南西区　埋土上部	胴	89.86	2.5Y4/1黄灰色	
4	235	渥美	甕	SX2　№.10底面	胴	188.34	5Y4/1褐灰色	
5	246	渥美	甕	SX2北西区　埋土上部	胴	64.91	N3/0暗灰色	
6	226b	渥美	甕	SX2南東区　埋土下部	胴	56.22	2.5Y5/1黄灰色	
7	226a	渥美	甕	SX2南東区　埋土下部	胴	55.52	N3/0暗灰色	
8	230	渥美か	甕	SX2　№.２	胴下～底	420.36	5YR4/3にぶい赤褐色	№.５底面、№.232と接合、常滑かもしれない、底168
9	87	渥美	甕	SX2南ベルト　２層	胴	20.11	5PB4/1暗青灰色	
10	244	渥美	甕	G区南端　検出面	胴	27.45	7.5Y3/1オリーブ黒色	
11	19	不明	甕	４号溝　№.１、１層	胴	85.55	5YR4/2灰褐色	
12	59	常滑	甕	３号竪穴遺構　３層上部№.３	体	53.70	7.5Y4/3暗オリーブ色	内外面に降灰釉
13	22	常滑		５号土坑　埋土				
14	206	常滑	甕	12号溝　埋土一括	胴下～底	71.04	7.5YR3/3暗褐色	内外面に降灰釉
15	207	常滑	甕	20号溝　南側埋土	胴	67.32	2.5Y5/2暗灰黄色	
16	238	常滑	甕	２号井戸　底面	胴	74.39	2.5YR4/4にぶい赤褐色	外面降灰釉、押印
17	68	常滑	甕	SX1南西区　埋土上部	肩	27.63	7.5Y4/2灰オリーブ色	内外面に降灰釉
18	213	常滑	甕	SX1　南西区埋土上部	肩	40.90	7.5Y2/2オリーブ黒色	内外面に降灰釉
19	71	常滑	甕	SX1南東区　埋土上部	胴下～底	104.93	10YR3/3暗褐色	内面に降灰釉
20	233b	常滑	甕	SX2　№.６底面	口～頸	163.62	2.5YR4/2灰赤色	外面降灰釉
21	97	常滑	甕	SX2　№.９	肩	133.50	7.5Y4/3暗オリーブ色	外面に降灰釉、下位に押印
22	262	常滑	甕	SX2　南西部底面	胴	36.69	7.5YR4/1褐灰色	内外面に降灰釉
23	225a	常滑	甕	SX2南東区　埋土上部	肩	32.48	10YR5/1褐灰色	外面上位降灰釉
24	80	常滑	甕	SX2北西区　埋土上部	肩	41.88	7.5YR4/3褐色	外面上位に降灰釉、下位に押印
25	231	常滑	甕	SX2　№.４	肩	80.42	5YR5/4にぶい赤褐色	
26	233a	常滑	甕	SX2　№.６底面	胴	18.25	10YR5/1褐灰色	
27	224	常滑	甕	SX2　南東区埋土上部	胴	71.79	5YR6/6橙色	
28	225b	常滑	甕	SX2南東区　埋土上部	胴	81.02	7.5Y5/2灰オリーブ色	外面降灰釉、押印
29	228	常滑	甕	SX2　南東区埋土下部	胴	33.86	5YR3/1黒褐色	外面降灰釉、押印
30	222a	常滑	甕	SX2　北東区埋土上部	胴	37.19	7.5YR4/1褐灰色	
31	222b	常滑	甕	SX2　北東区埋土上部	胴	12.68	10YR6/4にぶい黄橙色	
32	217	常滑	甕	SX2　南ベルト１層	胴	15.03	10YR6/2灰黄褐色	
33	96	常滑	甕	SX2　№.７底面	胴	81.54	N3/0暗灰色	内面に降灰釉
34	225c	常滑	甕	SX2南東区　埋土上部	胴下～底	83.26	5YR4/2灰褐色	
35	218	常滑	甕	SX2　南ベルト１層	胴下～底	165.59	7.5YR5/4にぶい褐色	
36	105	常滑	甕	SX3　中央ベルト４層	胴	47.04	N4/0灰色	押印
37	129a	常滑	甕	G区検出面	胴	42.77	2.5Y3/3暗オリーブ褐色	外面に降灰釉
38	129a	常滑	甕	G区検出面	胴	90.26	2.5Y4/4オリーブ褐色	
39	243b	常滑	甕	G区南端　検出面	胴	76.84	7.5YR4/3褐色	内外面に降灰釉
40	169	常滑	甕	排土一括	胴	92.57	10YR5/2灰黄褐色	
41	243a	常滑	甕	G区南端　検出面	胴	26.05	2.5Y3/3暗オリーブ褐色	内外面に降灰釉、押印
43	239	白磁	皿	２号井戸　底面	体下～底	7.41	10YR7/1灰白色	内面線描き文様あり。12世紀、底40
44	249	白磁	壺か碗	SX1　南西区埋土上部	体	10.93	10YR6/1褐灰色	内外に円形剥離（焼け弾？）
45	236	白磁	碗か皿	SX2　５層ベルト中央部	口～体上	3.53	10YR8/1灰白色	12世紀、化粧土無いようだ。
46	263	白磁	皿	SX2　北東区ベルト内埋土下部（３層）	口～体上	4.07	10YR7/1灰白色	12世紀、化粧土無いようだ。
47	237	白磁	端反碗	SX3　北西区埋土上部	口～体上	2.55	10YR8/1灰白色	12世紀
48	118	瀬戸	擂鉢	E区検出面	体	30.61	10YR7/3にぶい黄橙色	暗褐色釉
49	137	瀬戸	天目茶碗	G区南端　検出面	口～底	25.74	10YR5/1褐灰色	大窯３・４か、鉄釉、錆釉
50	37	大堀相馬	急須か	F区16号溝　南端、西側の浅い部分（小穴列の上）	体	2.20	10YR7/3にぶい黄橙色	土瓶か、山水文、19世紀
51	255	大堀相馬	土瓶	G区南端　検出面	口～体上	13.54	10YR7/3にぶい黄橙色	山水文、19世紀
52	252	肥前	碗	F区16号溝　南端、西側の浅い部分（小穴列の上）	体	5.79	10YR7/3にぶい黄橙色	透明釉、18世紀
53	119	肥前	碗	F区南側　検出面一括	口～体上	6.63	10YR6/3にぶい黄橙色	透明釉、18世紀
54	133	肥前	碗	G区北側　検出面	高台	8.26	10YR7/3にぶい黄橙色	透明釉、18世紀

第6表　かわらけ観察表

掲載番号	仮番号	器種	出土地点	計測値：cm・g			その他
				口径	器高	底径	
42	242	手づくね　大皿	３号竪穴遺構　南東区埋土上部	(12.4)	3.0	−	口縁部面取り、１段ナデ、指おさえ

第7表　木製品観察表

掲載番号	仮番号	種類	出土地点	計測値:cm・g				その他
				長さ(口径)	幅(器高)	厚さ(底径)	重量	
57	267	漆椀	1号井戸　埋土	−	＜4.9＞	(10.6)	−	
58	269	加工材	3号竪穴遺構　埋土	9.4	7.5	3.1	−	板状
59	268	加工材	3号竪穴遺構　埋土	32.9	5.3	1.4	−	板状
60	240b	下駄紐	3号竪穴遺構　埋土	4.2	1.3	1.0	−	
61	240a	下駄	3号竪穴遺構　№.1	18.8	8.4	5.7	367.28	
62	219	漆椀	SX2　№.8	12.9	3.5	7.8	75.46	底面に「大」の刻書
63	92	漆椀	SX2　ベルト南側	(19.2)	＜3.3＞	−	42.08	
64	265	加工材	SX2　北西部底面	8.2	2.3	0.6	−	木目に直交・斜交する刻目多数あり
65	270	加工材	SX2　埋土	10.7	5.1	0.4	−	木目に直交する刻目多数あり
66	266	加工材	SX2　南東区	7.3	0.9	0.4	−	細板状
67	264	加工材	SX2　埋土	15.1	5.91.8−板状			

第8表　金属製品観察表

掲載番号	仮番号	種類	出土地点	計測値：cm・g			その他
				長さ（径）	幅	重量	
55	127	古銭	G区検出面	2.5	−	2.8	祥符元寶
56	113	キセル	D区排土一括	6.6	0.8	7.2	銅製

第9表　土師器・須恵器観察表

掲載番号	仮番号	器種	部位	出土地点	特徴(口:口径、底:底径、高:器高、計測値mm)	その他
68	259	土師器坏	口～底	G区南端西側 To-aより下位 褐灰色粘土層	外ロクロナデ・ヘラケズリ、内ミガキ・黒色処理、底ヘラケズリ、口153、底66、高51	墨書「一万」、底に削りで「一万」
69	260	土師器坏	口～底	G区南端西側 To-aより下位 褐灰色粘土層	外ロクロナデ、内ミガキ、底部摩耗、口142、底60、高45	内面黒色処理
70	261	土師器坏	口～底	G区南端西側 To-aより下位 褐灰色粘土層	外ロクロナデ、内ミガキ、底部回転糸切り、口120、底54、高59	内面黒色処理
71	24	須恵器甕	胴部	5号溝　1層№.1	外タタキ、内アテグ	
72	247	須恵器甕	胴部	12号溝　埋土一括	外タタキ、内アテグ	
73	27	須恵器壺	口～肩	7号溝	外ロクロナデ、内ロクロナデ(肩部ハケメ様)、口116	外面肩部に緑色釉、猿投7世紀か
74	39	須恵器甕	胴部	F区17号溝　埋土	外タタキ・ケズリ、内ナデ	
75	248	須恵器鉢か	体部	20号溝南側　埋土	内外ロクロナデ	須恵系
76	44a	須恵器鉢か	体部	18号溝　埋土	外ロクロナデ・ケズリ、内ロクロナデ	
77	44b	須恵器甕	胴部	18号溝　埋土	外タタキ・ケズリ、内ナデ	
78	111	須恵器甕	胴下～底	B区検出面	外タタキ、内アテグ	
79	9	須恵器坏	口～体上	3号土坑	内外ロクロナデ	
80	13	須恵器坏	底	5号土坑	内外ロクロナデ、底部回転糸切り	
81	3	須恵器坏	口～体上	住居？	内外ロクロナデ	
82	110	須恵器甕	口縁	A区の排土	内外ロクロナデ	口縁に櫛書波状文
83	168	須恵器甕	胴部	表採	外ケズリ、内ナデ	須恵系
	13	須恵器坏	体下～底	5号土坑　埋土	内外ロクロナデ、底部回転糸切り	
84	−	小形土器	口～底	遺構外	非ロフロ　無調整	時期不明

第10表　石器観察表

掲載番号	仮番号	種類	出土地点	計測値:cm・g				石材	特徴
				長さ	幅	厚さ	重量		
85	52	石鏃	4号掘立柱建物跡 P100	1.8	1.0	0.35	0.36	頁岩　奥羽山脈 新生代新第三紀	
86	25	石鏃	6号溝西側　埋土	1.9	1.7	0.3	0.51	頁岩　奥羽山脈 新生代新第三紀	

第43図　中畑城跡地形図

Ⅴ　中　畑　城　跡

1　概　　要

（1）位　置　な　ど

中畑城跡はＪＲ東北本線前沢駅の北北東約3.5kmに位置している。水沢段丘高位面にある小規模な微高地を複数の堀で囲んで城域としている。調査区の現況は標高32m前後の水田であった。

中畑城跡は江戸時代の史料である「風土記御用書出」によると樫山館（御城主樫山平次郎）と記載される城館である。調査区は主に城館を取り囲む北側の外堀と内堀の一部にあたる。

（2）縄　　張

発掘調査成果、明治時代の絵図、戦後まもないころの航空写真に写る地形などから想定される中畑城跡の縄張は第45図のとおりである。

一曲輪　中畑城跡の本丸にあたる。「岩手県の中世城館」にはこの部分のみが中畑城跡として紹介されている。北東－南西110m、南東－北西80m、標高34mと僅かではあるが城域の中では最も高い場所である。西縁辺部と北縁辺部には土塁が一部残っている。周りは全て幅６～10mの堀（内堀）で囲まれている。

一曲輪の北東端部と南東端部には細長く舌状に張り出した場所がある。これは出入口施設で張出の先に橋を架けて、それぞれ二曲輪や三曲輪へと内堀の上を渡れるようになっていたようである。

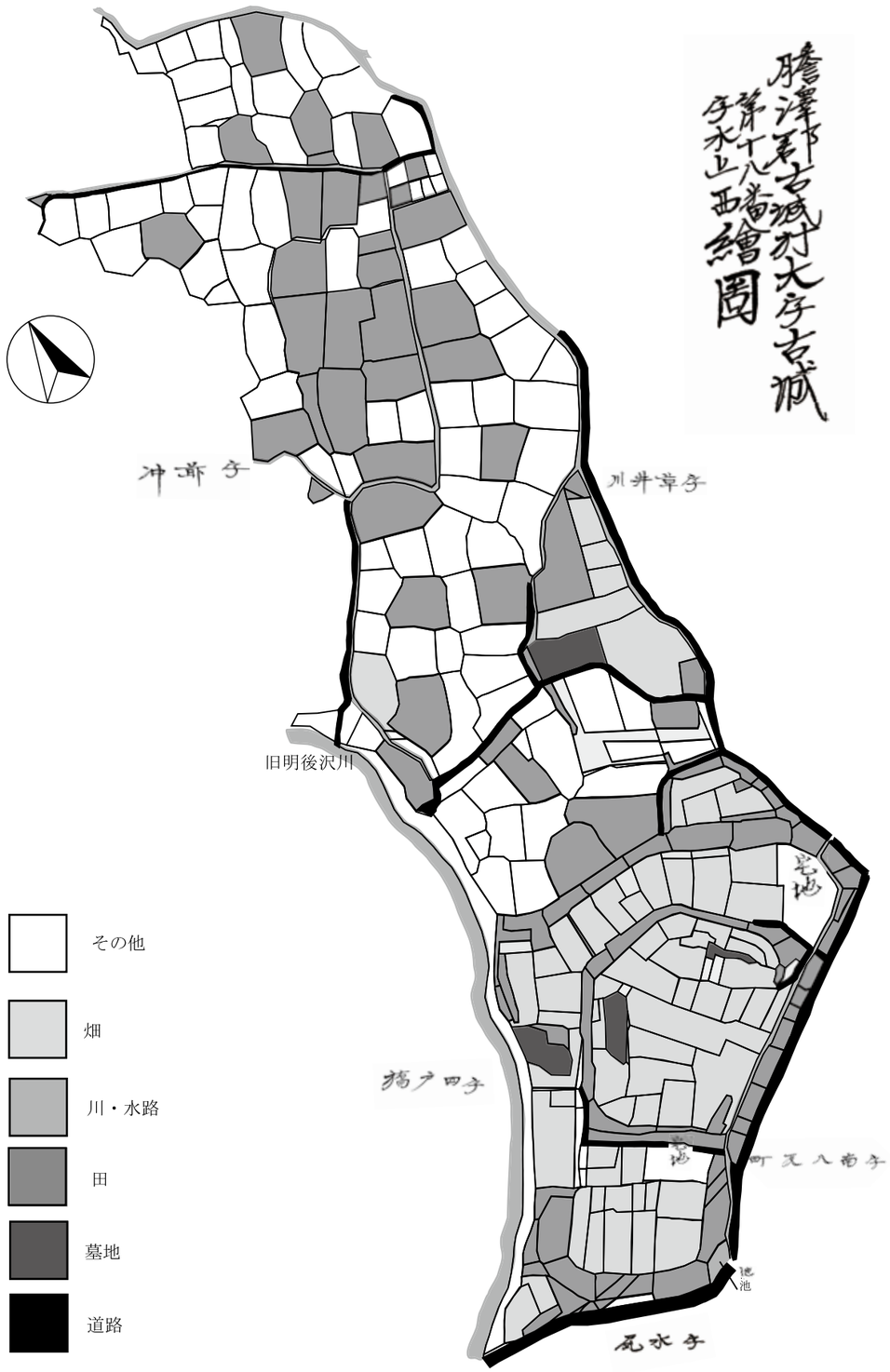
内堀　特に北側は堀内部に障壁のある「畝堀」となっていた。内堀の西側は「畝堀」ではないことが分かったため、東－南側も「畝堀」ではないと考えている。

二曲輪　一曲輪の北側に配される。東－西150m、南西－北東40mで標高は33.3m前後、東西方向に細長く西側は旧明後沢側まで達している。曲輪内部はごく一部を発掘調査したに過ぎないが、柱穴や土坑、溝跡などが確認されている。二曲輪を取囲むように北側から東側にかけて外堀が巡っている。

北側の外堀　二曲輪の東側から北側を巡り西側は旧明後沢川まで達している。この北側の外堀は発掘調査の結果「障子堀」であることが明らかとなった。全長210m、幅14m、深さは検出面からで0.6～0.9mである。「障子堀」の構造は間隔や深さの異なる障壁を不規則に４列配置するもので、粘土などを張って障壁とするのではなく、地山をそのまま掘らずに残すことで障壁を造り出している。あたかも大小の堅穴が連続して並んでいるような形態をしていた。幾つかの障壁には堅穴から隣の堅穴へと水が流れるように浅い溝が掘られているものがあった。外堀は旧明後沢川と連結していることからも、堀に水を引き入れて水堀にしていたといえる。水を張り、障壁が見えないように隠していたのであろう。

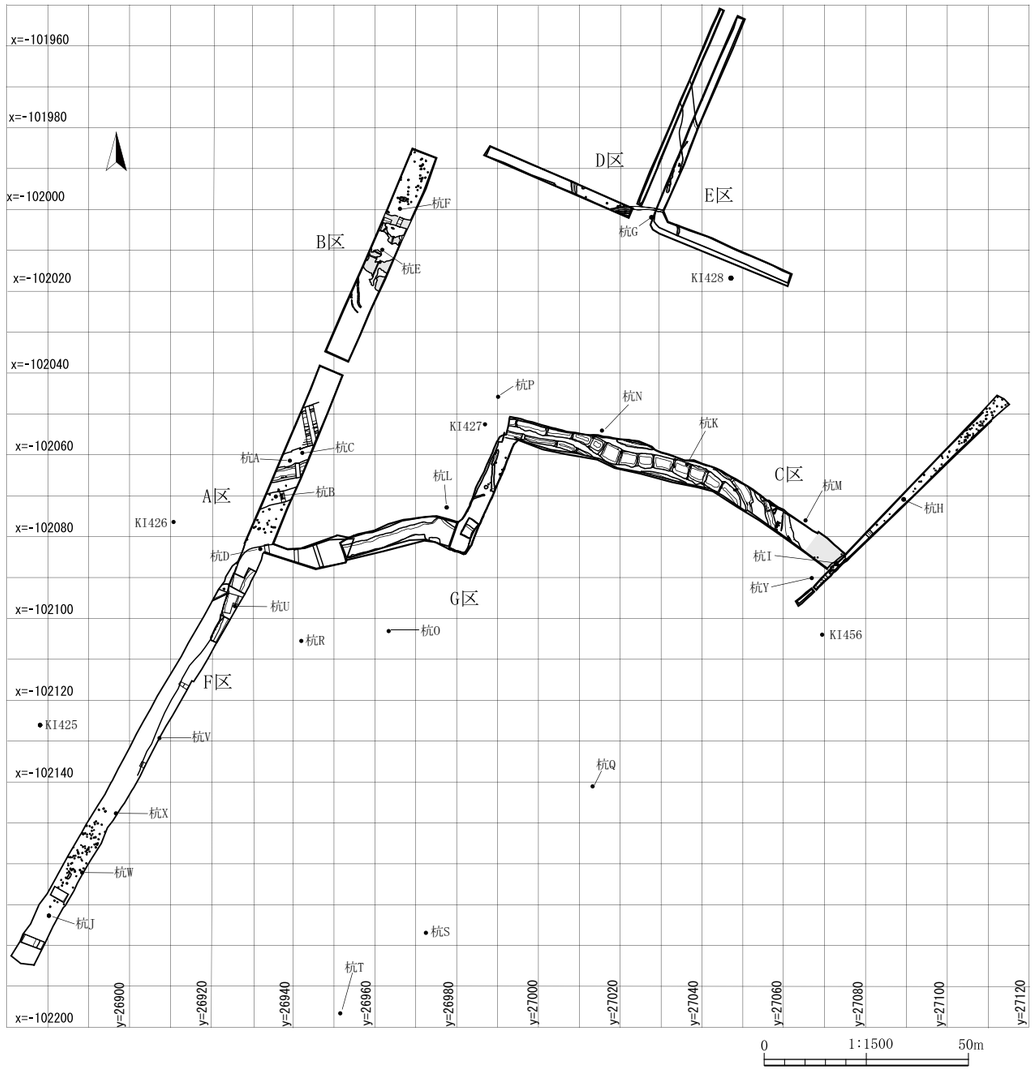
堀に障壁を持つ「畝堀」「障子堀」は本県においては金ケ崎町にある柏山館にあるのみで、極めて珍しい事例である。

三曲輪　一曲輪の南側から西側にかけてある。規模を計測しにくいが南北110m東西75mで標高は32.9～33.5mを測る。発掘調査では狭い範囲のみの調査であったがカマド状遺構や柱穴群が広がっており、遺構密度はかなり濃いと推察される。曲輪北西端部に標高34.3mと周りより１mほど高い方形の場所があるが、城館に関連するものか後世の盛土なのかは分からなかった。一曲輪との通路は現在宅地のある部分であろう。一曲輪南東隅にある細長い張出部分から橋が架かって内堀を渡るようになっていたと考えられる。三曲輪から外堀を渡って外側へと出入りする場所については南西隅が最も有力であ



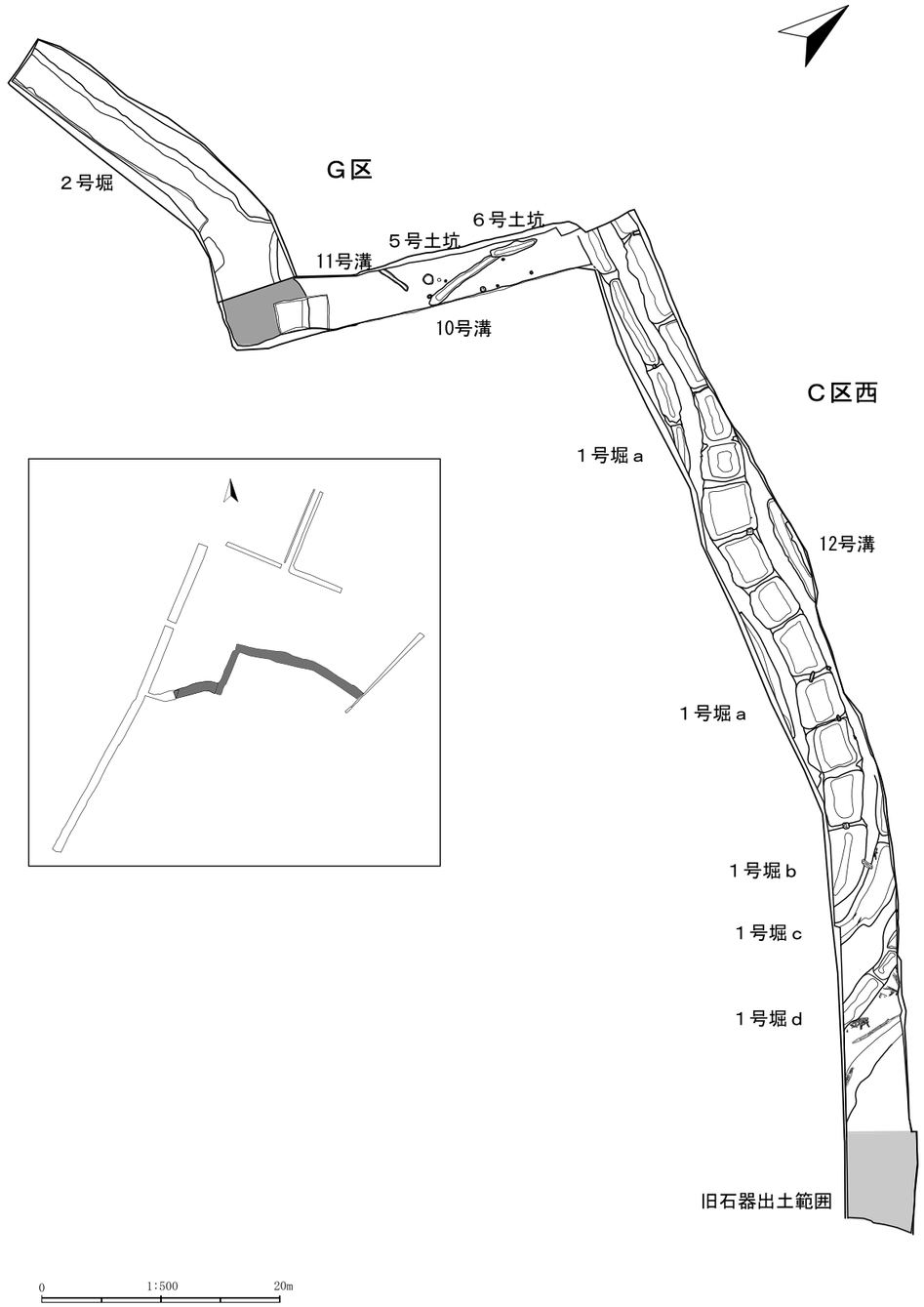
第44図　中畑村古絵図

第45図　中畑城全体図

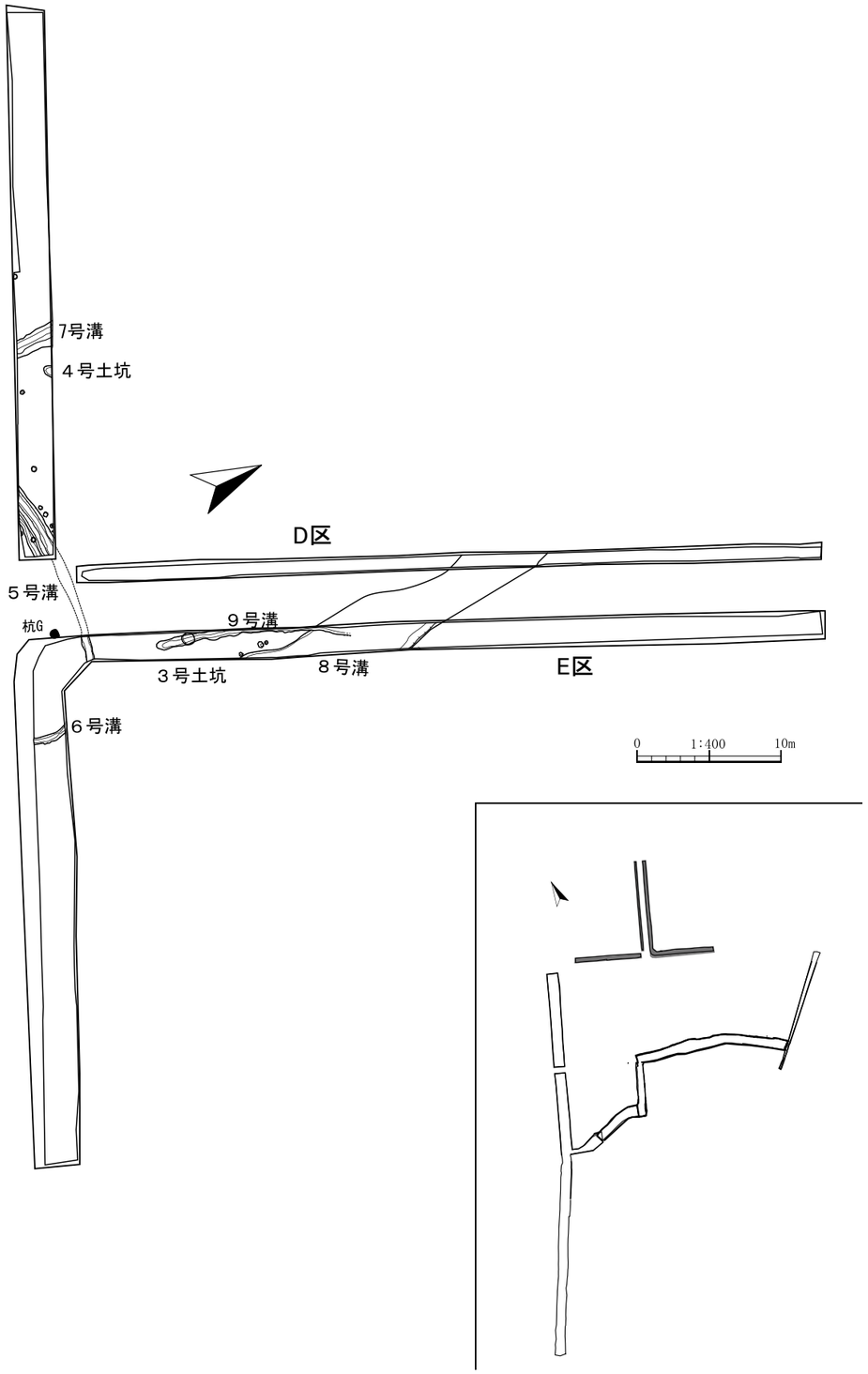


KI424	X=	-102201.08	Y=	26868.187	H=	32.716	杭K	X=	-102062.271	Y=	27036.496	H=	32.438
KI425	X=	-102126.107	Y=	26878.194	H=	33.937	杭L	X=	-102072.818	Y=	26977.675	H=	33.01
KI426	X=	-102076.417	Y=	26910.813	H=	33.209	杭M	X=	-102076.069	Y=	27065.448	H=	32.584
KI427	X=	-102052.571	Y=	26987.046	H=	33.068	杭N	X=	-102054.008	Y=	27015.705	H=	32.624
KI428	X=	-102016.787	Y=	27047.267	H=	33.126	杭O	X=	-102102.76	Y=	26963.51	H=	34.333
KI456	X=	-102103.915	Y=	27065.581	H=	33.505	杭P	X=	-102045.814	Y=	26990.215	H=	33.098
杭A	X=	-102061.466	Y=	26939.371	H=	32.469	杭Q	X=	-102141.077	Y=	27013.377	H=	33.079
杭B	X=	-102070.182	Y=	26935.948	H=	32.487	杭R	X=	-102105.451	Y=	26942.116	H=	33.896
杭C	X=	-102059.464	Y=	26942.307	H=	32.69	杭S	X=	-102176.909	Y=	26972.616	H=	32.871
杭D	X=	-102082.938	Y=	26932.049	H=	32.537	杭T	X=	-102196.49	Y=	26951.648	H=	32.692
杭E	X=	-102009.887	Y=	26961.994	H=	32.762	杭U	X=	-102096.934	Y=	26925.812	H=	33.27
杭F	X=	-101999.852	Y=	26966.292	H=	33.05	杭V	X=	-102129.289	Y=	26907.402	H=	33.24
杭G	X=	-102001.955	Y=	27027.776	H=	33.213	杭W	X=	-102161.988	Y=	26888.493	H=	33.252
杭H	X=	-102070.834	Y=	27089.444	H=	32.638	杭X	X=	-102147.56	Y=	26896.817	H=	33.284
杭I	X=	-102086.516	Y=	27072.921	H=	32.5	杭Y	X=	-102090.113	Y=	27066.95	H=	33.005
杭J	X=	-102172.717	Y=	26880.442	H=	32.452							

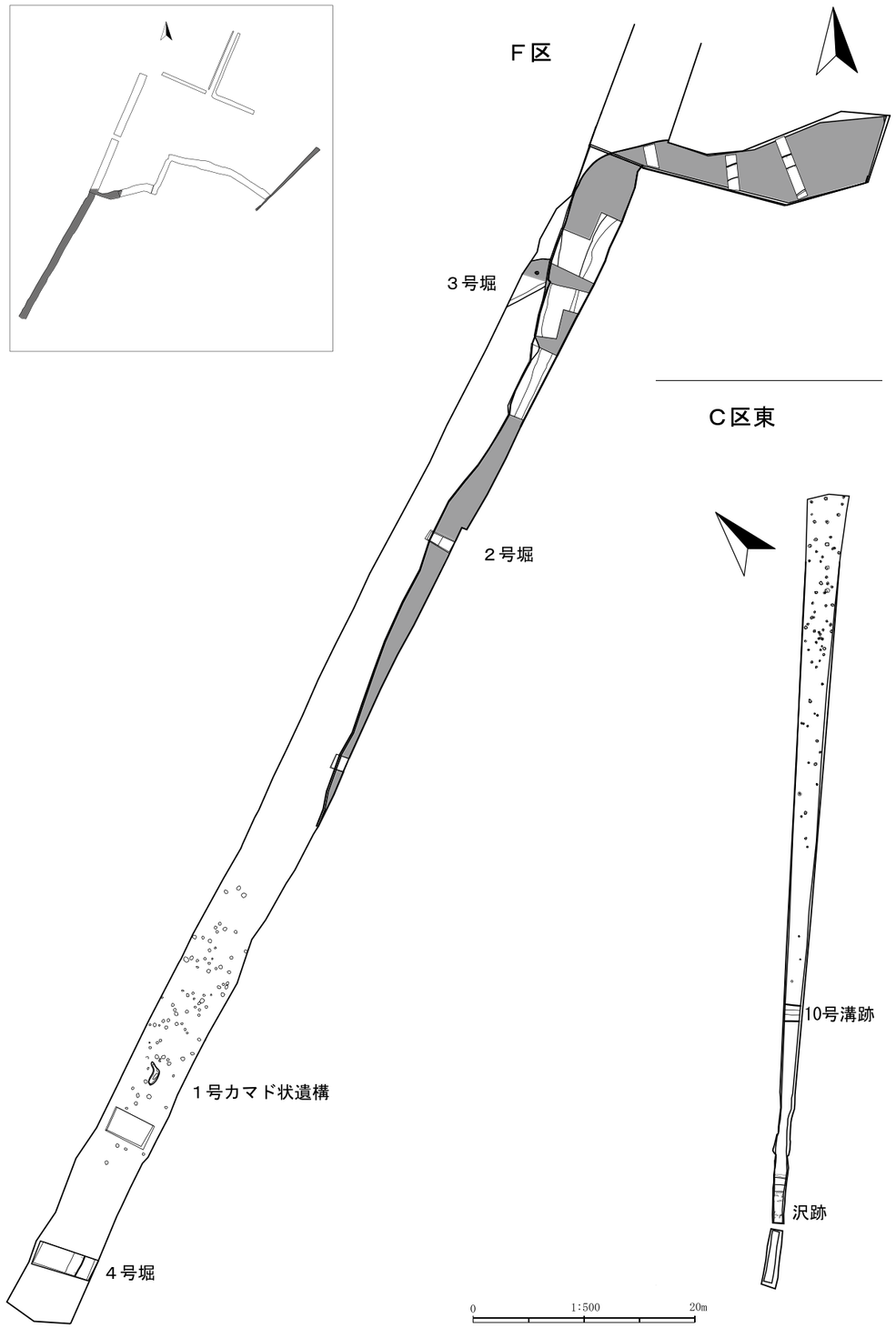
第46図　遺構配置図1



第47図　遺構配置図2



第48図　遺構配置図3



第49図　遺構配置図4

ると考える。それは古絵図に南西隅から北東隅へと直線的に道路が描かれていること、現在も南西隅にあたる場所には曲輪内に入れるように道路があることを根拠としている。曲輪の南西隅から外に出たら、そのまま南西－西側へと進み、現道と同じ場所に旧明後沢川を渡る橋が架かっていたのではないだろうか。

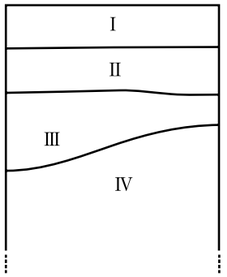
馬出し　古絵図から北側の外堀の北に台形状の小規模な曲輪らしき平場が見つかっている。東西50m、南北25m、標高32.8mと一曲輪の三分の一程度の広さしかない。その形状から馬出しと思われるが、発掘調査で確認したわけではない。古絵図に描かれた地割を見る限り、馬出しから外へ出るのは東側からと推測される。この平場が馬出しであるならば二曲輪に虎口があったことになるのであるが、その場所についてはよく分からなかった。

その他　古絵図の解説でも述べるがここに揚げた曲輪の他に、馬出し及び二曲輪の北側にもう一つ曲輪が存在するかもしれないこと、三曲輪の南側にも更に一つ曲輪がある可能性を指摘した。何れも現時点では不明瞭な部分が多く決め手を欠いているが、別な古絵図の発見や発掘調査などが実施されれば明らかにできるであろう。一曲輪の東側にも曲輪があると城館としては理想的だと思うが、現時点ではよく分からない。検討史料もなく今後の課題として残っている。

2　基　本　層　序

調査区の殆どが水田でありその下に旧表土がのこっている場所は僅かしかなかった。遺構検出は基本的に地山面（Ⅲ層）で行ったが、堀跡はⅢ層よりもやや上層から精査を始めた。

Ⅰ層　暗褐色土～黒褐色土：現在の表土・水田の耕作土（30～40㎝）。
Ⅱ層　黒褐色土　：旧表土でその残りはよくない（０～20㎝）。
Ⅲ層　黄褐色土：地山。遺構検出面。上位からは旧石器が出土（30～70㎝）
Ⅳ層　褐色砂礫層：部分的にみられる。直径５～10㎝大の円礫。（層厚不明）



第50図　基本土層

3　検　出　遺　構

検出された遺構には中世の堀跡４条、古代の溝跡６条、旧河道１箇所、旧石器集中区１箇所他である。複数ある堀跡はそれぞれが間仕切りを有する「障子堀」であることが判明した。出土遺物から16世紀に構築されたと言え、県内では金ヶ崎町にある柏山館跡に次ぐ２例目で極めて珍しい事例である。

（１）堀　　跡

１号堀跡（第51～54図、写真図版46・47・51～58）
［位置・検出状況］１号堀跡は中畑城跡の二曲輪を囲む北側の外堀である。Ａ区とＣ区にて検出されている。検出面はⅡ層上面であるが、Ｃ区ではⅠ層の途中から掘削を重機から手掘りに換えて精査した。
［規模・形状］１号堀の全長は、調査区外まで達している部分も含めて凡そ210mである。西は旧明後沢川から始まり、やや北に膨らみながら東に伸び、南に曲がって内堀と合体するようである。

本遺構は堀内部に障壁（畝）を多数配置する「障子堀」であることが判明した。実際に各調査区で検出された部分の計測値（単位はｍ）は下表のとおりである。

	A区			C区				全体
遺構名	長さ	幅	深さ	長さ	幅	深さ	障壁数	長さ
１号堀ａ	7	2.6	0.6	45	1.8-0.9	0.6-0.3	3	210
１号堀ｂ	7	2.8	0.9	60	4.3-3.1	0.8-0.4	12	
１号堀ｃ	7	8.5	0.7	15	2.6-1.4	0.5	1	
１号堀ｄ	7		0.8	10	1.8	0.6	2	

１号堀跡の障子堀は、まずａ～ｄの細長い４条の堀からなり、これらの堀が横に並べられて１条の堀となっている。１号堀ａ～ｄそれぞれに障壁が設けられているが何れも地山をそのまま利用したものであり、後から粘土などを積んで造られたものではない。障壁の高さは基本的に各堀の深さと等しい。障壁と障壁との間隔は8.5～3.5mとばらつきがあるが、これは意識的にそうしていると理解される。深さについても同じである。障壁は堀の長さに対してほぼ直交するように設けられている。直線的なもので、折れ曲がるものや、曲線的なものはない。こうしたことから上から見ると長方形や方形の升が不規則に連なっているように見える。それぞれの底面は概ね平坦である。

障壁のいくつかには上端部に浅い溝が掘られているものがある。これは堀の中に溜まった水が隣へと徐々に流れていくようにと設けられた導水溝と考えられる。今回の調査ではこのような小溝が７箇所で確認されている。

１号堀跡に関しては旧明後沢川と接続していること、障壁に導水溝が設けられていること、障子堀そのものが水を張ってその姿を隠したほうが防御施設としてより有効であることなどから、水堀であったと解釈される。

逆茂木、橋脚の痕跡なども注意して探したが見られなかった。
［埋土］Ｃ区に於いては何れも自然堆積と判断されたが、Ａ区になると様相が異なる。Ａ区でも１号堀ｃ・ｄは基本的に自然堆積であったが、１号堀ａ・ｂでは底面近くに堀が機能していたときに堆積したとみられる泥があり、その上は地山ブロックを多量に含む人為堆積で埋め戻されていた。廃城となったときに土塁を崩して堀を埋めたのかもしれない。その後、同じ場所に小さな溝が出来ていたようであるが、これは17世紀以降であろう。
［出土遺物・時期］（第67～72図、写真図版66～71）今回の調査で得られた遺物の９割は１号堀跡のＣ区からの出土で陶磁器やかわらけ、木製品、金属製品、獣骨などが出土した。何れの遺物も壊れたものを堀に捨てたような状態で見つかっており、完形品はない。獣骨なども散在して出土しており、祭祀を示すような出土状況のものはない。個々の遺物の特徴については４節で記述する。

瀬戸美濃産陶器は何れも大窯期のものであった。17世紀代の遺物、15世紀以前の遺物も基本的には見られないことから、本遺構は16世紀代に構築され、16世紀末には廃絶したと考えられる。

２号堀跡（第55・56図、写真図版48～50）

［位置・検出状況］２号堀跡は中畑城跡の一曲輪を囲む内堀である。今回の調査ではＦ区からＧ区にかけて見つかったが、Ｆ区は検出のみ、Ｇ区は精査まで行っている。検出面はＦ区がⅢ～Ⅳ層、Ｇ区はⅡ層上面である。

［規模・形状］２号堀跡は一曲輪を全て囲むので全長は約350mとなる。調査したのは西部（Ｆ区）から北西部（Ｇ区）のみで、調査区の関係で堀幅がきちんとあらわれているところはない。調査区内で計測した２～４号堀跡の規模（単位はm）は下表のとおりである。

	F区			G区				全体
遺構名	長さ	幅	深さ	長さ	幅	深さ	障壁数	長さ
２号堀跡	67	5	1.2	45	6	1.5	1	350
３号堀跡	4	2.5	0.4	-	-	-	0	30
４号堀跡	-	-	0.7	-	-	-	0	150

Ｇ区における２号堀は１号堀跡と断面形が異なる。１号堀跡は断面形が逆台形を基調としていたのに対して２号堀跡は中段・下段といった具合に少なくとも２つの段差が付くようである。そしてこの下段、つまり最も深くなる部分に障壁が造られていることを確認した。２号堀跡は調査区の外に延びているため堀の幅が不確実であるのだが、調査区外の現況をみる限り１号堀跡のように複数の列を成さずに１列のみと推測される。よって障子堀というよりも「畝堀」と称したほうが適切かもしれない。障壁は１号堀跡と同じく地山をそのまま掘り残して利用したものである。

橋脚や柵などの施設も注意して探したが見つからなかった。

Ｆ区における２号堀跡は基本的に確認調査区であることから、基本的に検出とその段階での実測である。部分的に底面まで掘り下げを行って３号堀跡との新旧関係や障壁の有無などを調査した。その結果、本遺構が３号堀跡よりも新しいように断面では見えた。また障壁については検出されず、この内堀もＦ区にくると障壁を持たない堀へと変わることが分かった。

２号堀跡も１号堀跡と同じ理由から水を湛えた堀跡であったと考えられる。

［埋土］Ｆ区もＧ区も基本的に自然堆積と判断された。本遺構と３号堀跡との新旧関係はあまり自信がないのだが、本遺構のほうが新しいように断面では見えた。これは使用されていた時期というよりも堀としての機能が失われた後の埋まり方の早さの違いなのかと思われる。

［出土遺物・時期］（第67・68図、写真図版66～69）Ｇ区から陶磁器片やかわらけ、木製品が出土した。何れも16世紀代のもので、15世紀や17世紀以降の遺物は出土しなかった。その場に置かれたもの、祭祀を意図する出土状況を呈するものはなかった。

16世紀に構築され、16世紀末葉に廃絶したと考えられる。

３号堀跡（第55図、写真図版49）

［位置・検出状況］旧明後沢川から一曲輪を囲む内堀の西側に向かって延びている。その一部をＦ区にて検出した。

［規模・形状］調査区内には３号堀跡の一部が入っているに過ぎない。その規模については前表に記したとおりである。１号堀跡のように西－東北東方向に延びていると推測される。堀跡というよりも二曲輪と三曲輪を分ける区画溝といったほうが適切かもしれない。

［埋土］自然堆積である。本遺構と２号堀跡は重複しており、あまり自信はないのだが本遺構のほうが古いと判断した。

［出土遺物・時期］遺物は出土しなかった。広い意味で他の堀跡と同時期であろう。

４号堀跡（第57図、写真図版45）

［位置・検出状況］旧明後沢川から三曲輪を囲むように巡る南側の外堀である。Ｆ区の南端部にてその一部を検出した。

［規模・形状］４号堀跡は確認調査区内にその一部が入っているのみである。その規模については前表に整理した。旧明後沢川から始まり、三曲輪を囲むように南側に膨らみ最後は北側に向きを変えて一曲輪南東端部で内堀と接続する。トレンチを１箇所入れて中を確認したが障壁はなかった。形状としてはＦ区にある２号堀跡の形状と似ている。

［埋土］自然堆積である。旧明後沢川から近いせいか底面近くまで掘り下げると湧水してきた。堀が機能していた時は水堀であったと考えられる。

［出土遺物・時期］陶磁器などの時期を示すような遺物は出土していないが、１～３号堀跡と同じく16世紀の遺構である。

（２）土　　坑

５基の土坑を検出したがその用途や性格が明らかになったものは少ない。個々の内容については下表に整理した。

第11表　土坑類ほか観察表　　計測値の単位：cm

遺構名	位置	規　模 長軸 短軸 深さ	形状 底面	埋　土	出土遺物 時期	その他
１号土坑	B区北	(120).92.12	不整形 やや凹凸	地山ブロックと炭粒を少量含む黒褐色砂質シルト	なし 不明	
２号土坑	B区北	105.(90).32	不整形 やや丸み		なし 不明	
３号土坑	E区	85.84.39	不整円形 やや凹凸	灰色粘土筒を多量に含む人為堆積	土師器・須恵器片 平安時代	
４号土坑	D区	84.(58).65	不整円形 やや凹凸	黒褐・黒色土を主体とする自然堆積	不明	
５号土坑	G区	90.84.30	円形 平坦	黒褐色土を中心とする自然堆積	なし 平安時代か	
６号土坑	G区	402.96.23	長円形 平坦	大小炭粒を少量含む褐灰色粘土質シルト	なし 平安時代か	
１号カマド状遺構	F区	158.61.13に張り出しが52	不整楕円 やや凹凸	底面から少し浮いて焼土層あり、底面付近は炭粒を多量に含む黒色土。自然堆積。	なし 中世後半	細長い張出が煙道か

（３）カマド状遺構

１号カマド状遺構（第58図、写真図版64）

Ｆ区の南端部にある。不整楕円形の燃焼部内の底部には炭が薄く敷かれたようにあった。その上には焼土粒を多く含む層となる。北側に細長い張出があり煙出の可能性が高い。本施設の上半部は完全に削られており残っていない。周囲には多くの柱穴があるが、本遺構と直接関係のあるものを抽出することはできなかった。

（４）溝　　跡（第59～62図、写真図版60～64）

溝跡は主に二曲輪の外側（北側）で見つかっている。時期不明のものも多いが、その特徴については下表にまとめた。

第12表　溝跡観察表　　計測値の単位：m

遺構	位置	規　模 長軸.短軸.深さ	方向	埋土、重複など	出土遺物 時期	その他
１号溝跡	B区	(6.1)/4.4/0.4	西北西－東南東	上位は自然堆積、下位は人為堆積か。２号溝跡より新しい。	須恵器甕片 平安時代～	
２号溝跡	B区	(6.7)/2.6/0.3	北西－東南東	上位に十和田ａらしき火山灰ブロックあり。１号溝跡より古い。	平安時代	
３号溝跡	B区	(7.1)/0.4/0.1	北－南東	埋土薄く、自然堆積か人為堆積かよくわからない。	不明	
４号溝跡	B区	(4.9)/0.2/0.1	北－南東	埋土薄く、自然堆積か人為堆積かよくわからない。	不明	
５号溝跡	D・E区	(12.8)/2.1/0.4	東－西	黒褐色土の単層。	縄文土器片、土師器、須恵器 平安時代	
６号溝跡	E区	(2.4)/0.5/0.1	南－北	黒褐色土の単層。	不明	
７号溝跡	D区	(2.7)/1.5/0.2	南－北	黒褐色土を主体とする自然堆積か。	不明	
８号溝跡	D・E区	(10.1)/4.6/0.5	北西－南東	黒褐色土を主体とする自然堆積。９号溝跡より古い。	近世陶磁器・金属器、土師器、須恵器　近世	平安時代から近世まで開口していたかもしれない。
９号溝跡	E区	(13.5)/0.5/0.1	南－北	黒褐色土を主体とする自然堆積。８号溝より新しい。	土師器、須恵器 近世	
10号溝跡	C区	(1.3)/1.4/0.2	北西－南東	記録なし。	平安時代～	１号溝跡と同じものの可能性高い。
11号溝跡	G区	(6.5)/0.7/0.1	北北西－南南東	黒褐色土に地山ブロックや炭粒を微量含む。	平安時代か	
12号溝跡	G区	(2.8)/0.4/0.1	東北東－西南西	黒褐色土に地山ブロックや炭粒を微量含む。	不明	
13号溝跡	C区	(6.5)/0.7/0.1	東－西	褐灰色土に地山ブロックが少量。	平安時代	

８号溝跡はＣ区の東側にある沢跡と同じものの可能性がある。

（５）柱　穴　群（第64・65図、写真図版65）

Ａ区の南側、Ｂ区の北側、Ｃ区の東側、Ｆの南側に分布している。Ａ区の柱穴群が二曲輪内部、Ｂ・Ｃ区が二曲輪の外部、Ｆ区が三曲輪内部に相当するが、遺構に伴う形で遺物が出土したものはない。個々の柱穴の内容については一覧表にまとめた。なお、Ｃ区柱穴群の中には掘立柱建物跡になりそうなものが１箇所あるので図示している（第64図）が、調査区の幅が狭いため確実ではない。周囲からは12世紀の陶器片が出土しており、Ｃ区柱穴群と建物跡は12世紀の可能性がある。Ａ・Ｆ区の柱穴群は中畑城に伴う可能性が高い。

（６）旧石器集中区（第66図、写真図版64）

Ｃ区の南東隅で１箇所の旧石器集中区が確認された。細長い調査区のため、全体的な広がりを把握することはできなかったが、凡そ６ｍ四方に分布しているようである。石器類はⅢ層の上面～20㎝掘り下げた間にほぼ収まる。実際にはこれよりもさらに深くまで掘り下げて遺物の有無を調査し、出土しないことを確認した。今回の調査では石器集中区がこの１箇所のみであった。周囲の調査区外をみると南側にこの集中区よりも約２ｍ高い場所（中畑城跡の一曲輪にあたる）があるので、そこにも石器集中区が形成されている可能性が高い。むしろ本遺構より主たる活動域であったと思われる。各石器の特徴や石器の出土した層位などは本遺跡の南隣にある水尻遺跡の石器群と似ている。後期旧石器時代前半期、概ねＡＴ降下前後までの石器群と考えらる。

（７）自然地形・沢跡（第55図、写真図版62）

自然地形　遺跡北西部のＢ区にある。東西約７ｍ、南北約10ｍにわたり不整形な落ち込みを検出した。確認調査区であったため、一部分のみを掘り下げて下部の状況を観察した。それによると深さは10㎝～27㎝程あり、底面も不規則な形をしていることが分かった。近現代の遺物は出土していないので中世かそれ以前のものであろう。

沢跡　Ｃ区の東側で１号堀跡と重複した状態で検出された。１号堀跡よりは古い。調査区外にも達しているため全体の規模は不明であるが長さ6.4ｍ、幅3.1ｍほどが検出されている。深さは0.3ｍを測る。平面的には検出された沢跡のほぼ全体、層位でいえば底面付近を中心に大小の自然木が多量に見つかった（大コンテナ換算で約20箱）。この場に置かれていたというよりは、その多くは流溜まったような状態で分布していた。埋土上位には十和田ａ火山灰が薄く堆積しており、この火山灰も降下後それほど動いていない状態で見つかった。このことから自然木群については十和田ａ火山灰降下の直前頃に流溜まったものである可能性が高い。同じ層位からは土師器が出土しており、こちらも十和田ａ火山灰降下直前頃のもので、重なるように出土しており何れも共判関係にある。自然木群は１号堀跡が中世後半に掘られた際には削りとられており、本来もっと多くの自然木が広がっていたと推測される。

4　出　土　遺　物

遺物では中世の陶磁器が小コンテナ0．1箱、木製品が大コンテナ１箱、旧石器３点他が出土している。

（1）陶　磁　器（第67・68図、写真図版66・67）

堀跡から出土した陶磁器についてはその殆どを掲載し、遺構外出土のものは代表的なものを選んだ。中世の陶磁器は、国産陶器と中国産磁器とに分けられる。破片数による出土比率は瀬戸美濃産陶器50％、白磁14％、青磁14％、染付22％で、国産と中国産とが半々であった。

瀬戸美濃産陶器は何れも大窯期のものであった。灰釉小皿が殆どで鉄釉碗（天目碗）は出土しなかった。破片が多く細分できない破片も多いが、16世紀前半ころのものが多いようである。折縁皿、内禿皿、志野皿なども出土していない。

白磁は全て皿類であった。22・23・27は16世紀、39は高台の付かない12世紀代のもののようである。青磁は全て碗であった。38は半肉掘りの連弁文を持つ。37には見込みに印花文がある。12には文様がない。何れも15世紀かそれ以降のものであろう。染付は碗と皿からなる。29は見込みが窪むのが特徴の碗である。口縁部が外反するものとしないものとがあるが、何れも15世紀後半から16世紀のものである。

12世紀のものとして、常滑産甕類の破片が３点出土し、その全てを掲載した。

主に遺構外からは近世陶磁器も出土している。肥前産の磁器は18世紀を中心に19世紀代まで、大堀相馬産の陶器は18世紀のもの。瀬戸美濃産陶器は18世紀の香炉が出土した。

（2）か　わ　ら　け（第68図、写真図版67）

出土したかわらけはその全てを掲載している。１号堀跡、２号堀跡からの出土である。ここでは口径が10cm以上のものを大型のかわらけ、10cm以下のものを小型のかわらけと分類した。全てロクロ整形で大型が10点、小型が２点と大型が主体となる。大きさには違いがあるものの、かわらけの形態は何れのかわらけもよく似ている。幾つか特徴を挙げると、第一に口唇部が細く尖るような形態をしていることである。外に反るものや口唇部が肉厚のものは見られない。第二に見込みから体部(口縁部)への立ち上がりが滑らかであることである。緩やかに立ち上がるものが多く、段が付いたり急角度で立ち上がったりするものは見られない。大型のかわらけについては器高が低く皿的なものと、器高が高く坏的なものとに細分できそうだが、何れのかわらけも16世紀代のもので、本遺跡ではそれ以上は時期的に細分する根拠はない。かわらけが出土した堀跡からは大窯期の瀬戸美濃産陶器皿が出土していること、木製品のＣ14年代測定でも15世紀後半と測定されたことから16世紀代のかわらけと位置付けられることは間違いない。

（3）木　製　品（第69～72図、写真図版68～71）

１・２号堀跡からは木製品の他に多くの中世の自然木も出土した。それから１号堀跡では東側で平安時代の沢跡と重複しており、その沢跡でも多くの自然木が出土した。

56は木製の碗（鉢か）である。残りが悪く本来の表面が殆ど失われている。高台もあったと思われるが残っていない。57～59は曲物の側板である。60は曲っているが箸と思われる。61は栗材の下駄である。62も下駄かもしれない。63～65は漆器椀で黒地に赤で草花が描かれている。66は塔婆で五輪種字が書かれている「キャ・カ・ラ・バ・ア」。67は杭である。先端だけを削り出しており、その他のところは無加工である。68～70は漆器椀で文様は描かれていない。高台部も残っていない。71～76・78・79は曲物の側板である。77は何かの容器の一部だと思われる。80は細長い板の片側に鋸歯状の加工を施している。81～83は加工材であるがどのようなものであったかわからない。84は桶や曲物の蓋になるのであろうか。85は歯を取り付ける構造の下駄である。86・87は加工材である。88・89は曲物である。直径は約15cmとみられる。桜皮で留めた部分も残っている。90・91は文様のない漆器椀である。92は桶か曲物の底部である。102は植物で編んだものである。樹種は調べてもらったが分からなかった。

（4）金　属　製　品（第73図、写真図版71）

出土した全てを掲載した。115は器種不明であるが16世紀代のものである。116は火箸で近世のもの。117は刀子でかなり刃こぼれしている。堀跡からは銭貨は出土しなかった。

（5）土師器・須恵器（第74～76図、写真図版72・73）

殆どが平安時代に属する。Ｃ区沢跡から出土した118～122は土師器坏で底面及びその周辺にヘラケズリ等の再調整を施している。９世紀前半ころのものであろう。123にも底部に再調整がみられる。還元炎焼成しなかったものなのであろう。３号土坑から出土した須江系土器124、と須恵器坏125は共に破片で時期細分は難しい。中世の堀跡である１号堀跡から出土した須恵器126～134は甕や壺、坏等がある。130の高台坏は平安時代ではなく、８世紀代のものかもしれない。１号溝からも須恵器片がまとまった量出土している135・137・138。５号溝跡から出土した須恵器類の中で坏をみると、底部及びその周辺に再調整をしているものがみられることから、９世紀前半に位置付けられる。その他、遺構外からも須恵器甕片を中心に破片が出土している。

（6）瓦（第72図、写真図版72）

瓦は２点のみの出土である。何れも外面に縄目、内面には布目が残る。在地産の瓦であろう。

（7）縄文時代の土器・石器（第72・73図、写真図版74）

縄文時代の土器は極僅かしか出土していない。105～109は何れも小片で詳細な時期は分からない。110・111は石鏃、112は両面加工の削器である。

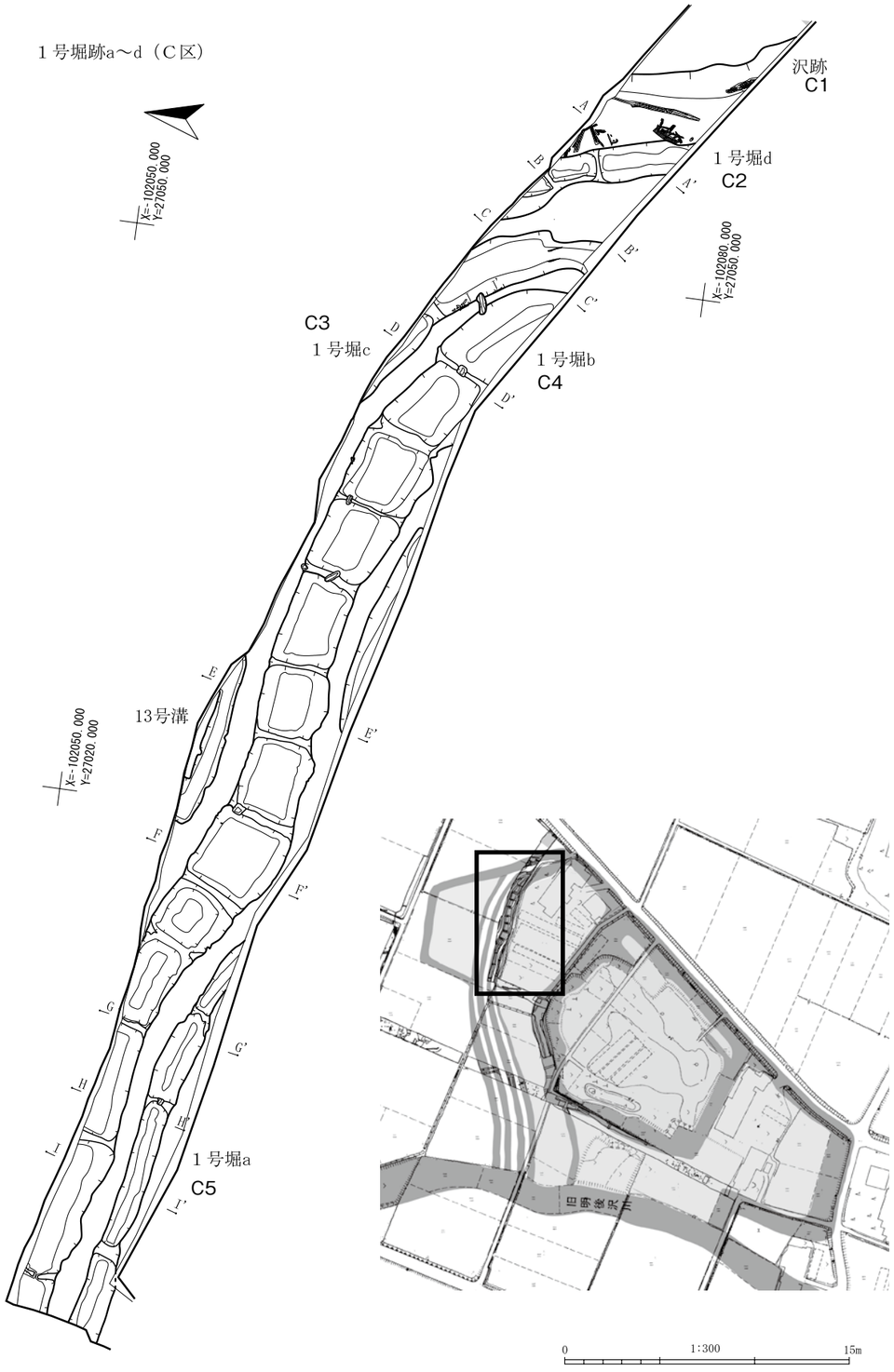
（8）旧石器時代の石器（第77～79図、写真図版74・75）

遺跡北東部（Ｃ区）で旧石器の集中区が１カ所見つかった。検出面はⅢ層で、範囲は６×６ｍ、剥片類と無加工の円礫からなり炭粒などは分布していなかった。石器が出土しなくなっても更に下まで掘り下げを行ない、下層面の状況も確認した。集中区の南西約100ｍに小規模な丘がある。ここが旧石器時代に主に使われていた場であろう。また、本遺跡の南隣にある水尻遺跡でも同じ時期の石器集中区が複数見つかっている。その時期はＡＴ降下前後までの後期旧石器時代前半期と考えられる。

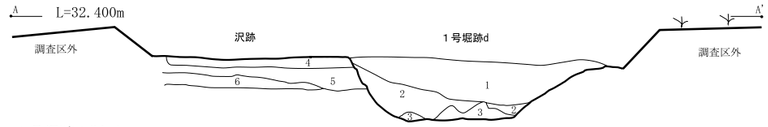
石器群の特徴については観察表にまとめている。

（9）骨　・　種　実（写真図版75・76）

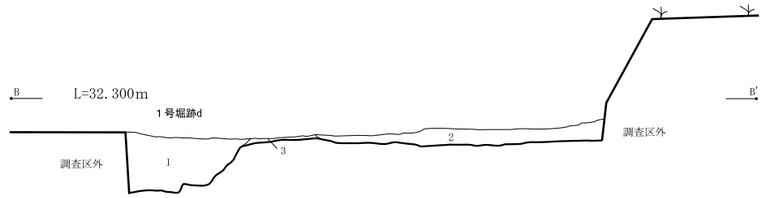
１号堀跡から出土した骨及び種実については遺物観察表及び第Ⅵ章を参照願いたい。



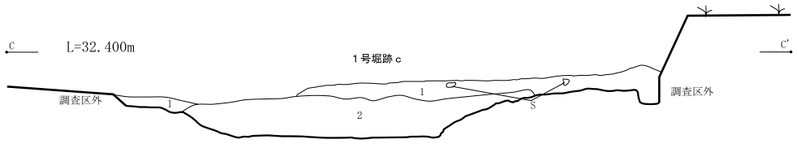
第51図　1号堀跡a～d(C区)



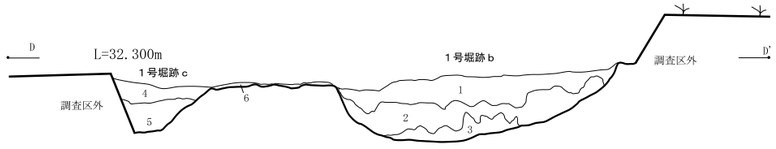
1号堀跡A断面
1．10YR3/2黒褐色土　炭化物粒、自然木微量含む。粘性やや有。締り有。
2．10YR3/2黒褐色土　小～大粒地山ブロック多量に含む。人為層か。粘性やや有。締り有。
3．10YR7/2灰白色粘土　粘性やや有。締り有。
4．10YR3/2黒褐色土　小粒To-a火山灰微量含む。粘性やや有。締り有。
5．10YR2/2黒褐色土　褐色土をラミナ状に含む。粘性やや有。締り有。
6．10YR3/3暗褐色土　自然木多量含む。粘性やや有。締り有。



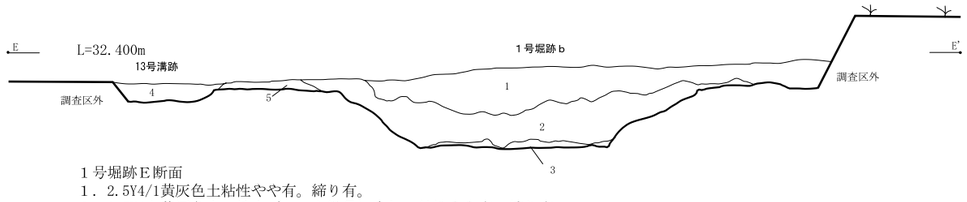
1号堀跡B断面
1．10YR3/2黒褐色土　粘性やや有。締り有。
2．10YR3/2黒褐色　地山ブロック多量含む。粘性やや有。締り有。
3．10YR3/2黒褐色　締まっている。地山ブロック少量含む。



1号堀跡C断面
1．10YR3/1黒褐色土　地山ブロックごく微量含む。粘性有。締まっている。
2．10YR3/1黒褐色土　地山ブロック壁に沿って多量に含む。粘性有。締まっている。



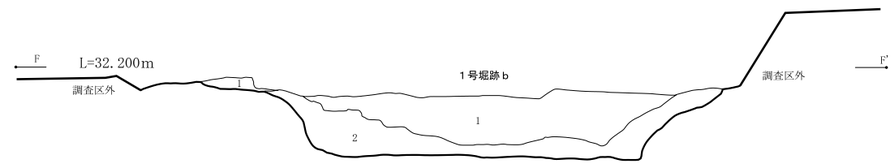
1号堀跡D断面
1．10YR3/2黒褐色土　粘性有。締まっている。黒褐色土微量、地山ブロック微量含む。
2．10YR3/2黒褐色土　粘性有。締まっている。地山ブロック多量含む。
3．浅黄色+灰オリーブ色粘土　粘性有。締まっている。
4．10YR3/2黒褐色土　粘性有。締まっている。地山ブロック微量含む。
5．10YR3/2黒褐色土　粘性有。締まっている。地山ブロック多量含む。
6．10YR3/2黒褐色土　粘性有。締まっている。地山ブロック少量含む。
※地山ブロックが多いが、その多くは土壁の崩落土であろう。ｃ、ｂの新旧は不明だが、おそらくは、全て同一時期のもの。



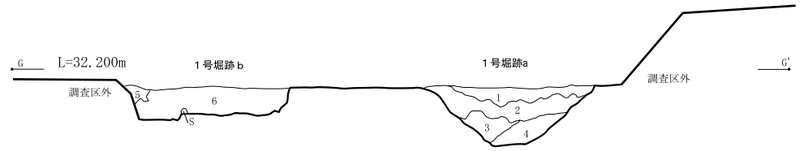
1号堀跡E断面
1．2.5Y4/1黄灰色土粘性やや有。締り有。
2．2.5Y4/1黄灰色土　地山ブロック微量に含む。粘性やや有。締り有。
3．2.5Y4/1黄灰色土　地山ブロック多量に含む。粘性やや有。締り有。
4．10YR4/1褐灰色土　粘性やや有。締まっている。地山ブロック少量、土師器・須恵器含む。
5．2.5Y4/1黄灰色土　粘性有。締まっている。

0　1:60　3m

第52図　1号堀跡断面1

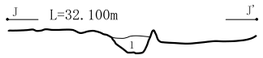


1号堀跡F断面
1．2.5Y4/1黄灰色土　粘性有。締りやや有。
2．2.5Y4/1黄灰色土　地山ブロック少量含む。粘性有。締りやや有。

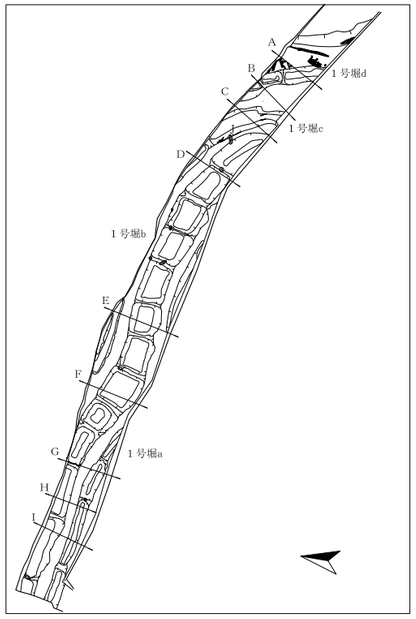


1号堀跡G断面、H断面
1．2.5Y4/1　黄灰色土　粘性有。締りやや有。
2．2.5Y4/1　黄灰色土　地山ブロック微量含む。粘性有。締りやや有。
3．2.5Y4/1　黄灰色土　地山ブロック多量含む。粘性有。締りやや有。
4．10G6/1　緑灰色の砂と粘土がラミナ状に含む。粘性有。締り弱。
5．2.5Y4/1　黄灰色土　地山ブロック少量含む。粘性有。締りやや有。
6．2.5Y4/1　黄灰色土　粘性有。締っている。

1号堀跡I断面
1．2.5Y3/1　黒褐色土　砂少量含む。粘性、締りやや有。
2．10YR4/1　褐灰色土　地山ブロック少量含む。粘性、締りやや有。
3．5B5/1　青灰色砂と褐色土ブロックから成る。粘性、締りやや有。
4．5B5/1　青灰色　粘性無し。締まっている。掘りすぎ。
5．2.5Y3/1　黒褐色土　粘性有。締りやや有。

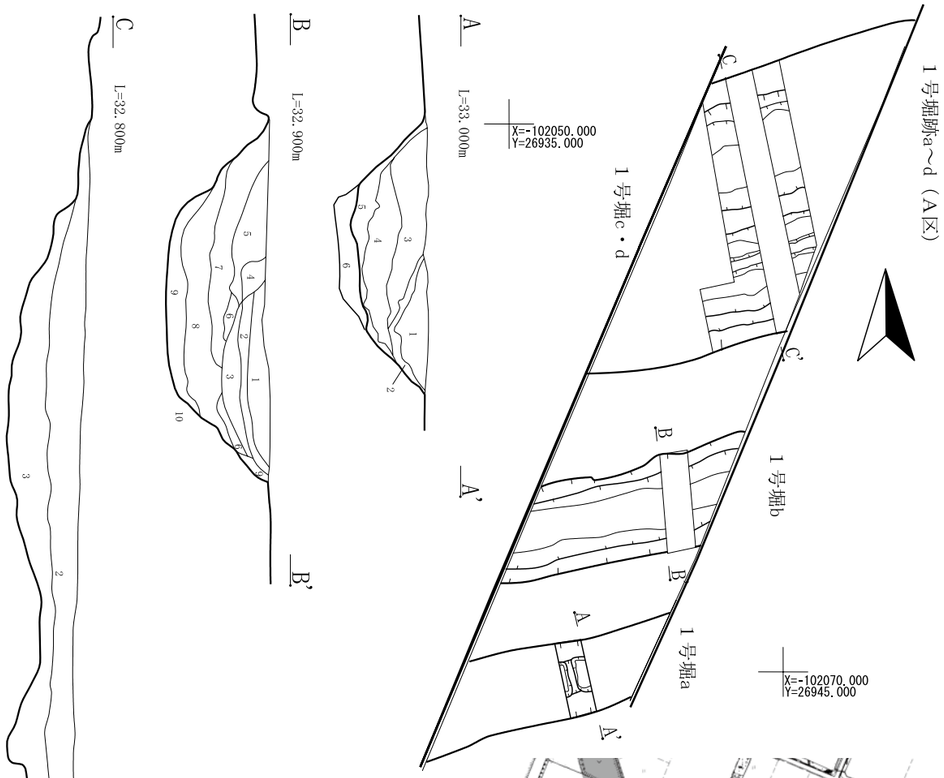


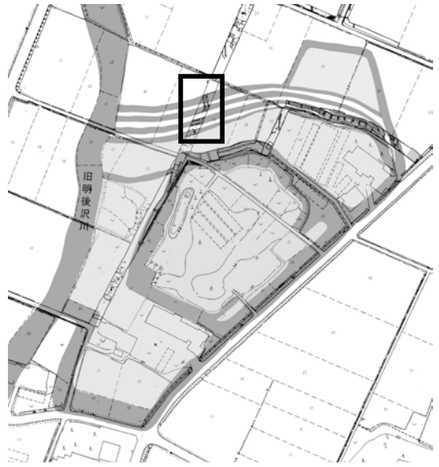
1号堀跡J断面
1．10YR3/2　黒褐色土　粘性やや有。締まっている。



0　1:60　3m

第53図　1号堀跡断面2





1号堀跡b
1．7.5Y4/2　灰オリーブ色粘土　下部に酸化鉄多く含む。粘性、締り有。
2．7.5Y 3/1　黒褐色粘土質　植物腐蝕層。堆積の最後の流路跡。
3．10YR2/2　オリーブ黒色粘土　粘性、締り有。
4．10YR3/3　暗褐色土・7.5Y4/1　灰色粘土　酸化鉄多く含む。
5．10YR4/6　褐色粘土　径2～5cm灰白粘土粒少量、酸化鉄多く含む。粘性、締り有。
6．10YR4/1　褐灰粘土　水成堆積。下部は灰黄褐色に変化している。粘性、締り有。
7．10YR7/3　にぶい黄橙色粘土　上位層との境に酸化鉄の集積多い。粘性、締り有。
8．10YR4/1　褐灰色粘土層　上部は灰黄褐色に変化。粘性、締り有。
9．10YR4/3　にぶい黄褐色粘土　粘性、締り有。
10．10YR5/4　にぶい黄褐色砂質土　下部はオリーブ灰色にグライ化。粘性なし。締り有。地山。
※4～7層は水成堆積と思われる。8～9層は土塁などを人為的に埋めた土か。

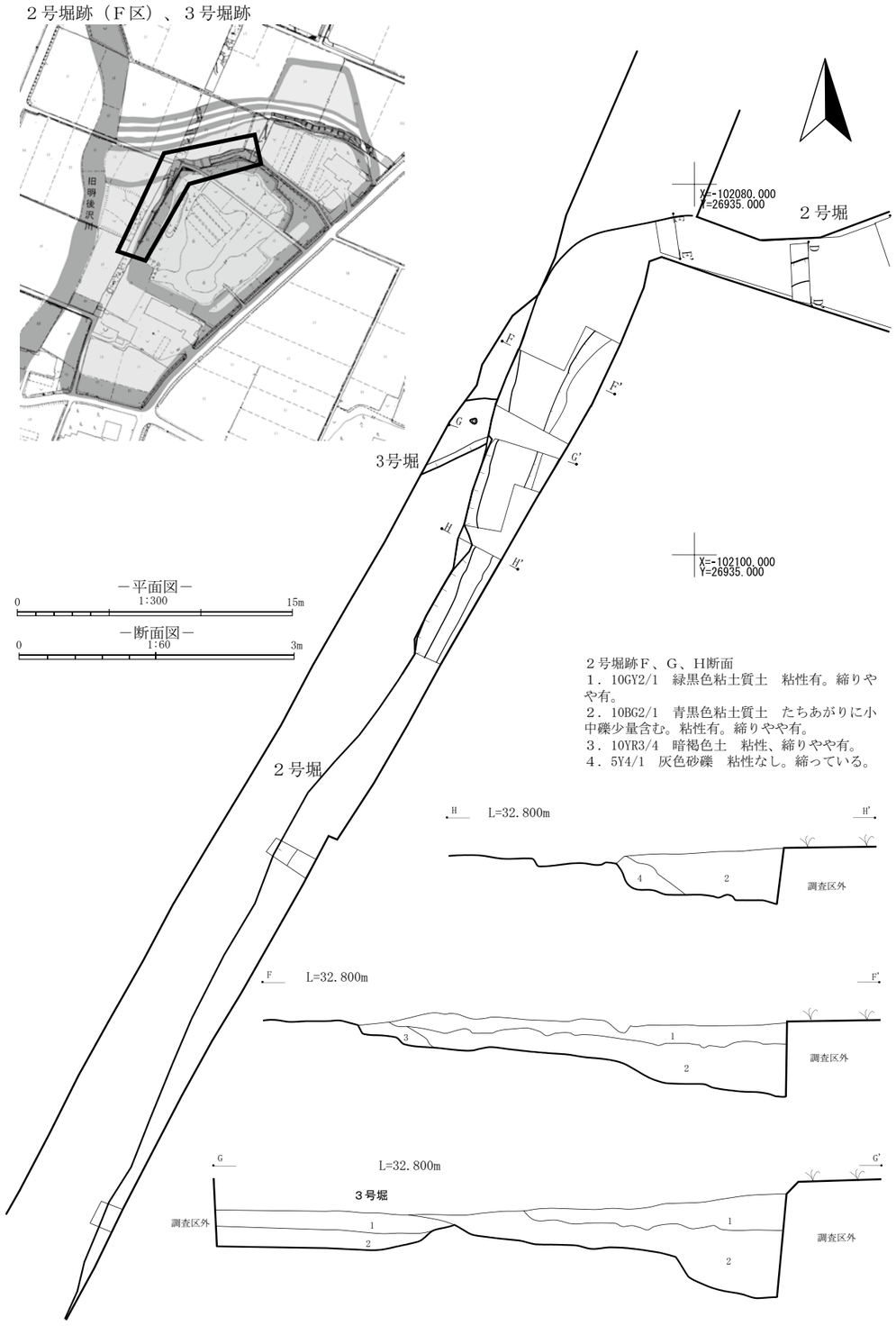
1号堀跡c d
1．10Y5/1　灰色粘土　自然堆積（水成）。粘性、締り有。
2．10Y4/1　灰色粘土　自然堆積（水成）。粘性、締り有。
3．10Y3/1　オリーブ黒色土　2層より暗く、粘性強い。自然堆積（水成）。粘性、締り有。
地山　10GY6/1　緑灰色砂質粘土　粘性、締り有。

1号堀跡a
1．10YR5/8　黄褐色粘土質ブロック主体、灰白色粘土ブロック10%、褐灰色土ブロック10%含む。
2．10YR6/1　褐灰色土　自然堆積か。
3．10YR5/8　黄褐色粘土質土ブロック主体、その隙間に褐灰色土や灰白色土が10～15%入る。
4．7.5GY8/1　明緑灰色粘土ブロック主体、その隙間に褐灰色土や灰白色土が10%入る。
5．N4/　灰色土　自然堆積。
6．5BG7/1　明緑灰色粘土質土。地山。掘りすぎ。
※1，3，4層は人為堆積。2，4は自然堆積。

―平面図―
1:200
0　10m

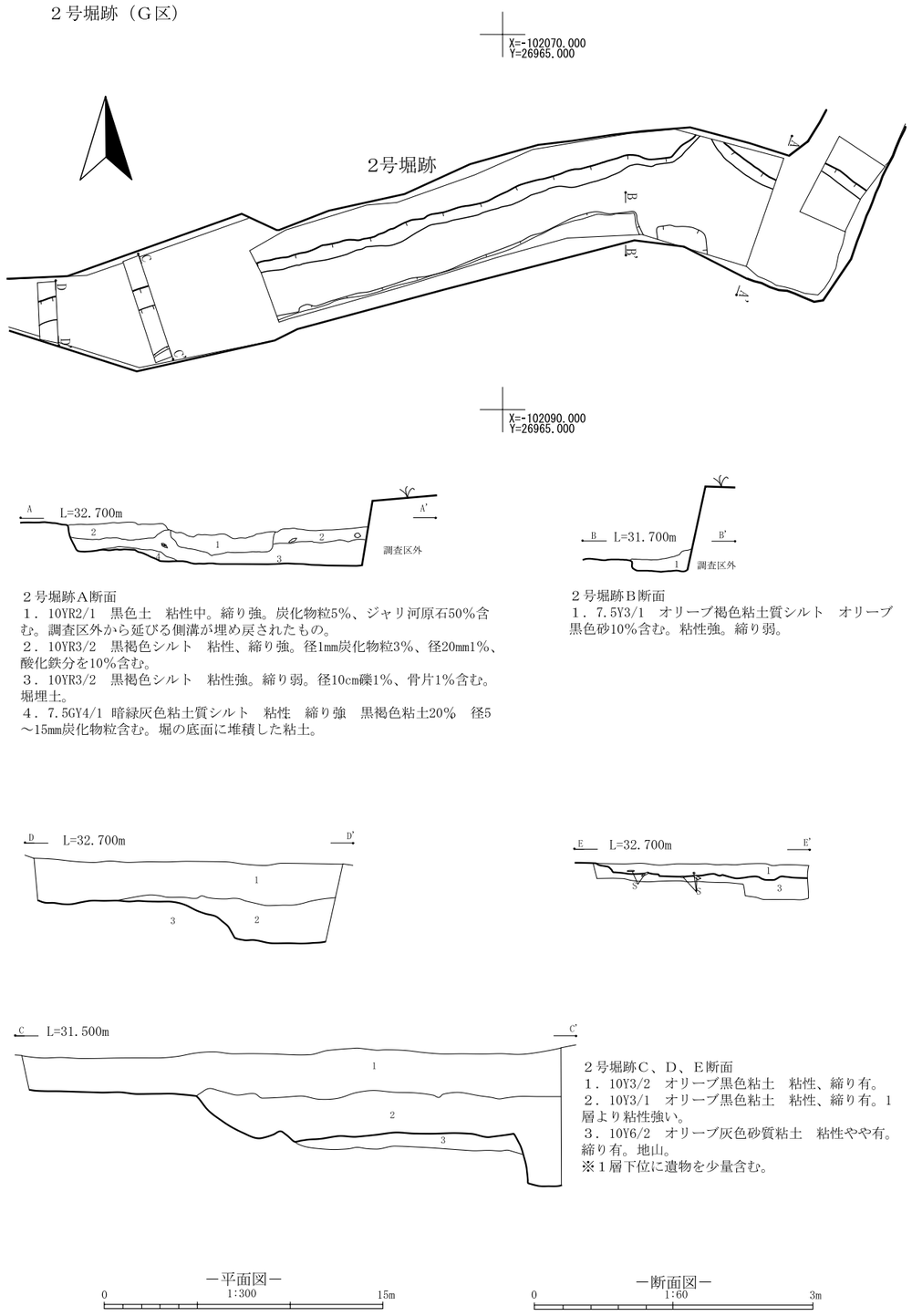
―断面図―
1:60
0　3m

第54図　1号堀跡断面3、a～d（A区）



２号堀跡Ｆ、Ｇ、Ｈ断面
１．10GY2/1　緑黒色粘土質土　粘性有。締りやや有。
２．10BG2/1　青黒色粘土質土　たちあがりに小中礫少量含む。粘性有。締りやや有。
３．10YR3/4　暗褐色土　粘性、締りやや有。
４．5Y4/1　灰色砂礫　粘性なし。締っている。

第55図　2号堀跡(F区)、3号堀跡



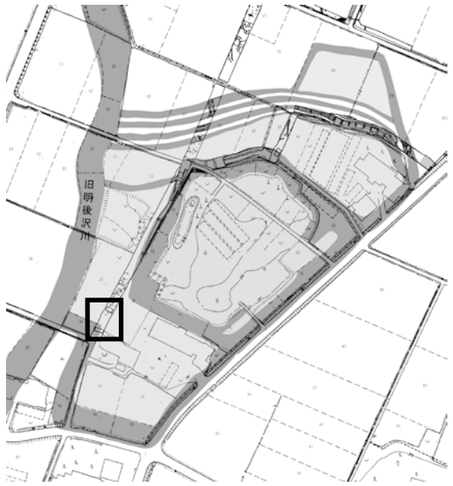
２号堀跡Ａ断面
１．10YR2/1　黒色土　粘性中。締り強。炭化物粒5%、ジャリ河原石50%含む。調査区外から延びる側溝が埋め戻されたもの。
２．10YR3/2　黒褐色シルト　粘性、締り強。径1mm炭化物粒3%、径20mm1%、酸化鉄分を10%含む。
３．10YR3/2　黒褐色シルト　粘性強。締り弱。径10cm礫1%、骨片1%含む。堀埋土。
４．7.5GY4/1 暗緑灰色粘土質シルト　粘性　締り強　黒褐色粘土20%　径5～15mm炭化物粒含む。堀の底面に堆積した粘土。

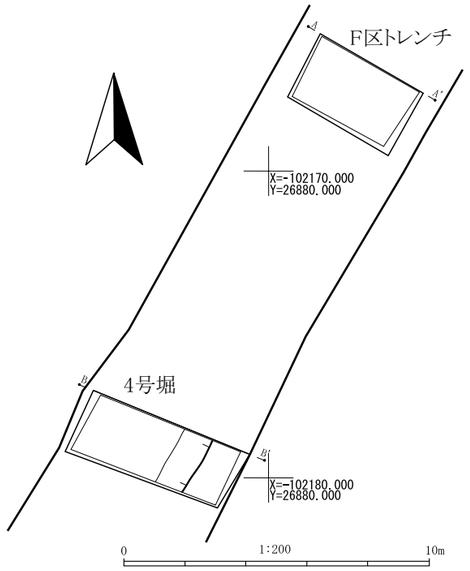
２号堀跡Ｂ断面
１．7.5Y3/1　オリーブ褐色粘土質シルト　オリーブ黒色砂10%含む。粘性強。締り弱。

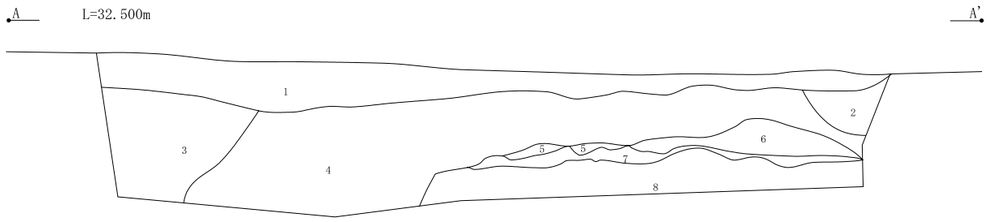
２号堀跡Ｃ、Ｄ、Ｅ断面
１．10Y3/2　オリーブ黒色粘土　粘性、締り有。
２．10Y3/1　オリーブ黒色粘土　粘性、締り有。1層より粘性強い。
３．10Y6/2　オリーブ灰色砂質粘土　粘性やや有。締り有。地山。
※１層下位に遺物を少量含む。

第56図　2号堀跡(G区)

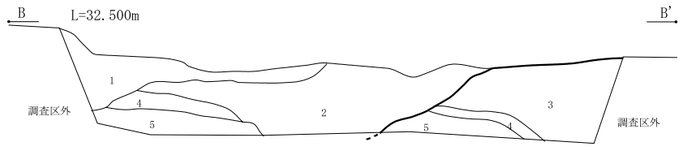
４号堀跡、Ｆ区トレンチ







Ｆ区トレンチ
１．7.5YR　明褐色砂質土　粘性弱。締っている。（遺構検出面）
２．10Y6/1　灰色砂及び粘土のラミナ。
３．5Y5/1　灰色粘土及び砂が交互に堆積。
４．5YR5/1　灰色粘土　粘性有。締っている。
５．2.5Y7/1　灰白色火山灰　粘性、締り無し。（火山灰降下後殆んど動いていない）
６．2.5Y5/3　黄褐色粘土　粘性有。締っている。
７．10YR4/6　褐色土　粘性、締りやや有。
８．６層と同じ。

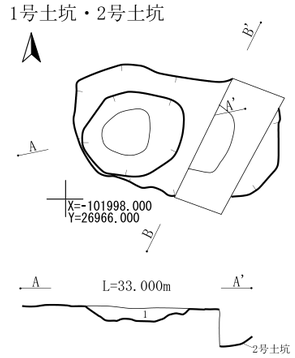


４号堀跡
１．5BG4/1　暗青灰色粘土と砂が交互に堆積。粘性、締りやや有。
２．5BG3/1　暗青灰色粘土と砂礫が交互に堆積。粘性、締りやや有。
３．10BG2/1　青黒色粘土　粘性有　締りやや有
４．2.5Y8/1　灰白色粘土　粘性無し。締りやや有。（一次堆積）
５．３層と同じ。
５の下層　砂礫層。（湧水）

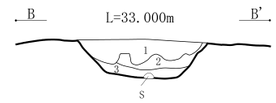
0　1:60　3m

第57図　4号堀跡、F区トレンチ

1号土坑・2号土坑

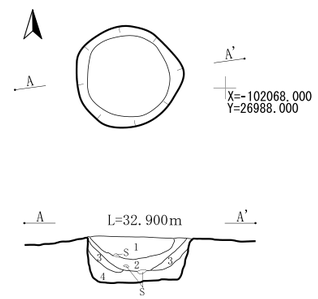


１号土坑
１．10YR3/2　黒褐色　粘土質シルト　地山ブロック５㎜大を少量、炭化物５㎜大を微に含む。粘性やや有。締り有。砂混じりで、シャリシャリしている。



２号土坑
１．10YR3/2　黒褐色　粘土　地山ブロック大きく、やや多量に混じる。粘性、締り有。
２．10YR3/2　黒褐色　粘土　粘性、締り有。
３．10YR3/1　黒褐色　粘土　地山ブロックこまかく微量に含む。粘性、締り有。

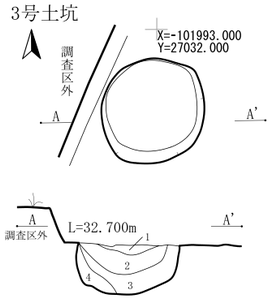
5号土坑



５号土坑
１．10YR2/3　黒褐色シルト　5㎜大黄褐色土粒1%、2〜3㎜大炭化物粒3%、酸化鉄全体的に含む。粘性中。締り強。
２．10YR3/1　黒褐色シルト　2㎜大黄褐色土粒1%含む。粘性、締り強。
３．10YR2/3　黒褐色シルト　10㎜大黄褐色ブロック5%含む。粘性中。締り強。
４．10YR3/2　黒褐色シルト　1㎜大黄褐色土粒1%含む。締り、粘性強。

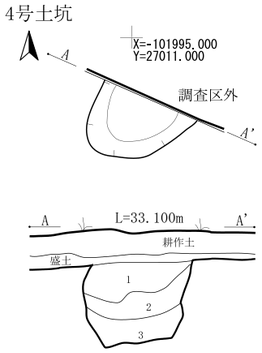
0　1:50　2m

3号土坑



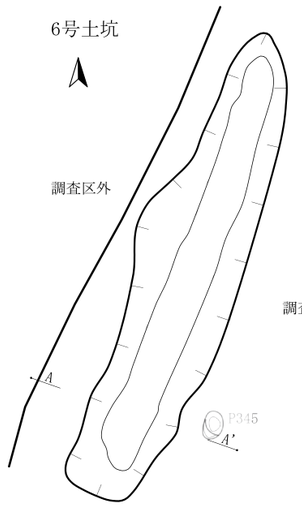
３号土坑
１．10YR3/1　赤褐色砂多量に含む（９号溝埋土）。　粘性やや強（粘土質）。締り強。
２．10YR3/1　灰色粘土粒少量含む。粘性やや強（粘土質）。　締りやや強。
３．10YR2/1　灰色粘土粒多量含む。粘性強（粘土）。　締りやや強。
４．10YR2/1　灰色粘土粒微量含む。粘性強（粘土）。　締りやや弱。

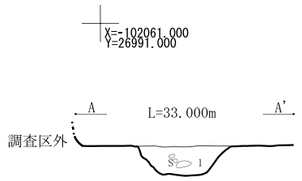
4号土坑



４号土坑
１．10YR2/2　粘性やや有。締り強。
２．10YR2/1　粘性やや強（粘土質）。締りやや弱。
３．10YR2/1　白色粘土ブロック少量含む。粘性やや強（粘土質）。締りやや弱。

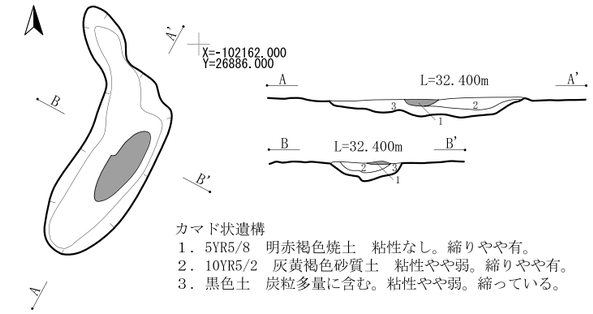
6号土坑





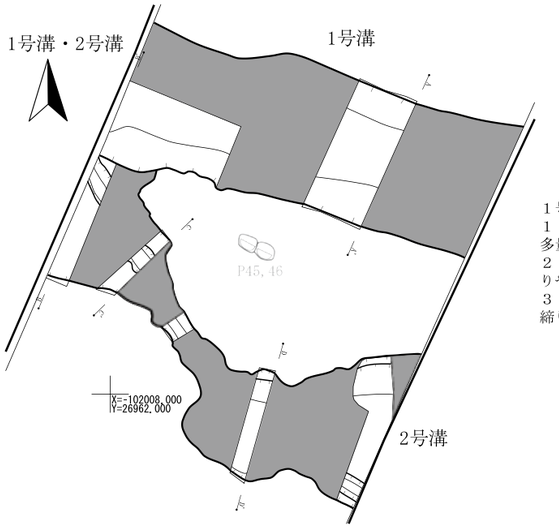
６号土坑
１．10YR4/1　褐灰色粘土質シルト　10㎜大炭化物ブロック3%、1㎜大炭化物粒1%、20㎜大褐色粘土ブロック5%、礫1%含む。粘性、締り強。

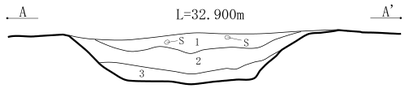
カマド状遺構



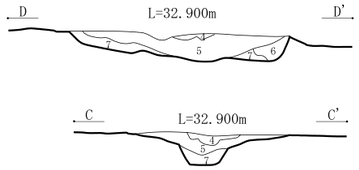
カマド状遺構
１．5YR5/8　明赤褐色焼土　粘性なし。締りやや有。
２．10YR5/2　灰黄褐色砂質土　粘性やや弱。締りやや有。
３．黒色土　炭粒多量に含む。粘性やや弱。締っている。

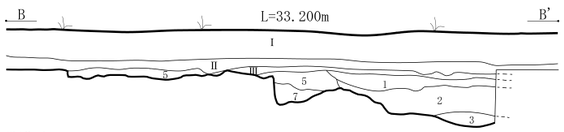
第58図　1〜6号土坑、カマド状遺構





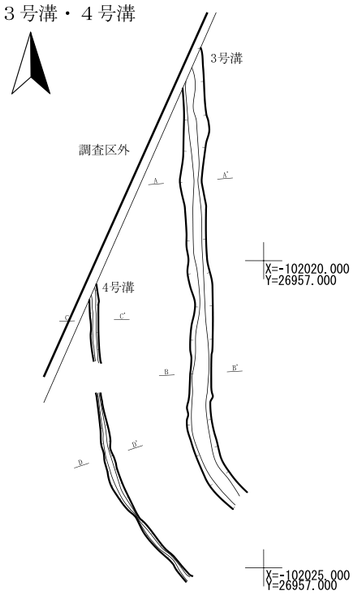
１号溝跡
１　2.5Y3/2　黒褐色砂質粘土　径３～４cm大の礫微量、酸化鉄多量に含む。粘性、締り有。
２　2.5Y4/1　黄灰色粘土　径１cm炭化物微量含む。粘性有。締りやや有。
３　10YR4/1　褐灰色粘土　地山ブロック多量に含む。粘性有。締りややなし。





２号溝跡
Ⅰ．10YR3/2　（やや明るめ4/2に近い）黒褐色粘土質シルト　締りやや有。粘性有。表土。下面に酸化したうすい層（床土）が有。
Ⅱ．10YR3/2　黒褐色粘土　締り、粘性有。旧水田土。
Ⅲ．酸化した床土層。
１～３層　１号溝。土層観察は、１号溝のＡ断面と対応する。
４．10YR3/1　黒褐色粘土　上面（検出面）に灰白色ブロック（十和田ａ火山灰か？）少量含む。締り、粘性有。
５．10YR3/2　黒褐色粘土　地山ブロックごく微量含む。締り、粘性有。
６．地山（10YR5/6黄褐色）ブロック層　10YR3/2　黒褐色粘土少量含む。
７．10YR3/2　黒褐色粘土　地山ブロック斑状（径～１cm程度）にやや多量含む。締り、粘性有。

３号溝・４号溝

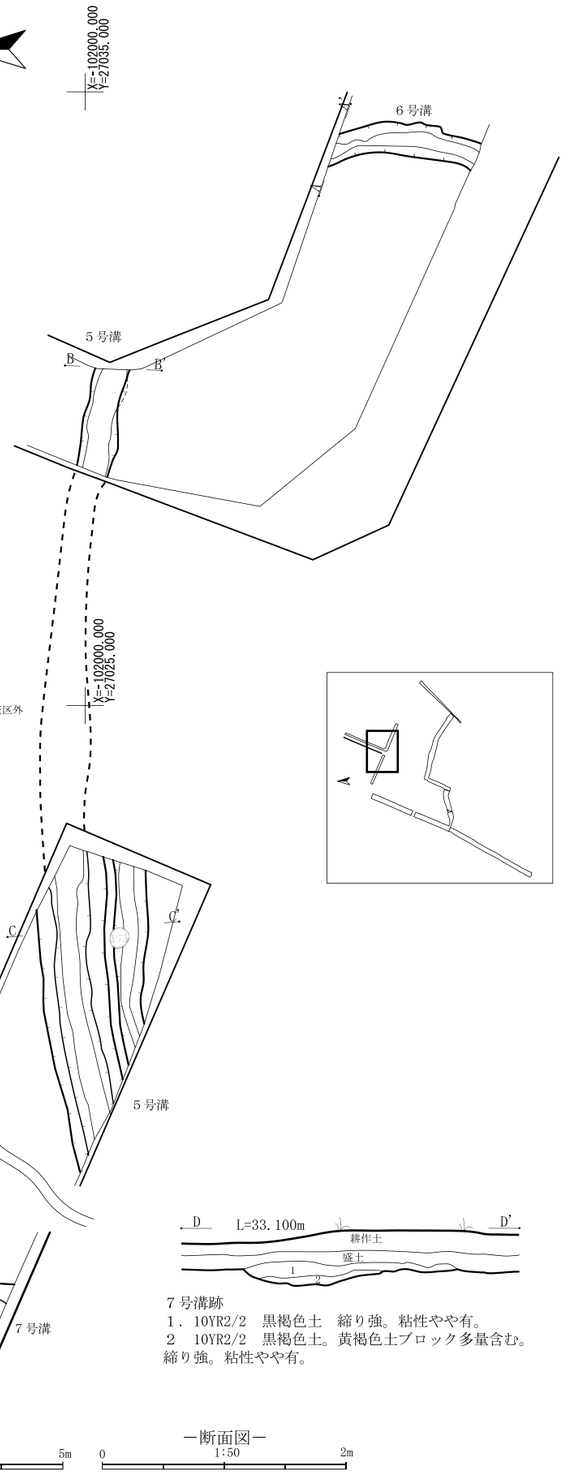


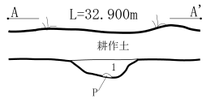
３号溝跡
１．10YR3/2　黒褐色粘土　大きい地山ブロック少量含む。粘性、締り有。
※両壁が深くなる為工具痕？もしかしたらキャタピラの痕か。

４号溝跡
１．10YR3/3　暗褐色粘土　径５mm大の地山ブロック細かく微量含む。締りやや有。粘性有。

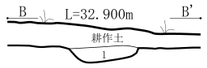
第59図　1～4号溝跡

５号溝・６号溝・７号溝

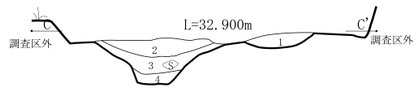




６号溝跡
１．10YR2/1　黒色土　締り強。粘性やや強。

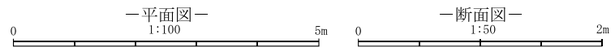


５号溝跡
１．10YR3/1　黒褐色土　灰白色砂ブロック少量含む。締り強。粘性やや強（粘土質）。



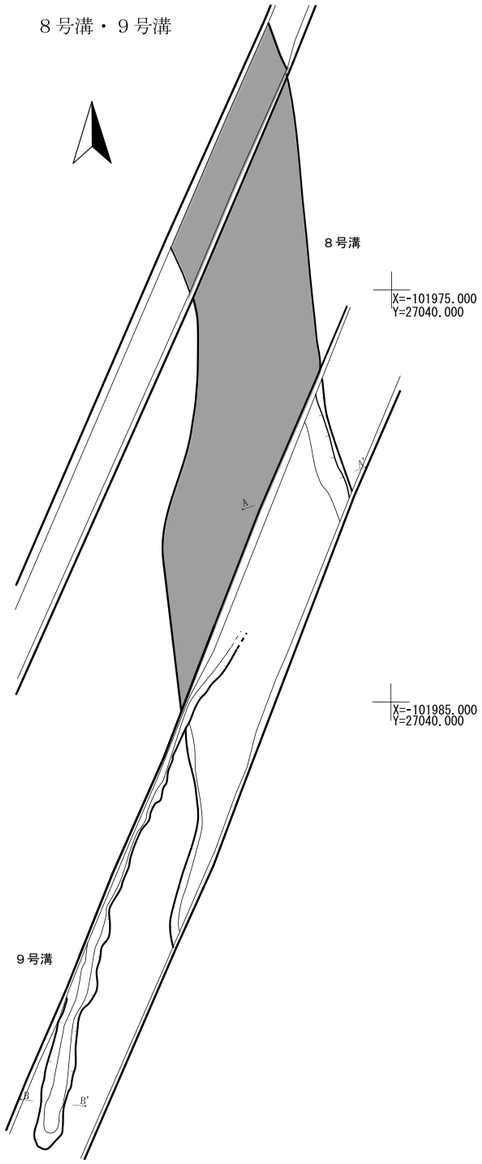
５号溝跡
１．10YR2/2　黒褐色土　黄褐色砂ブロック少量含む。締り強。粘性やや有。
２．１層と同じ。
３．10YR2/1　黒色土　締り強。粘性やや有。
４．10YR3/1　黒褐色土　白色粘土粒少量含む。締り強。粘性やや強（粘土質）。

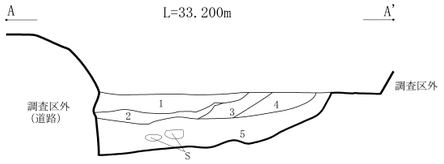
７号溝跡
１．10YR2/2　黒褐色土　締り強。粘性やや有。
２　10YR2/2　黒褐色土。黄褐色土ブロック多量含む。締り強。粘性やや有。



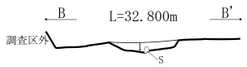
第60図　5～7号溝

８号溝・９号溝

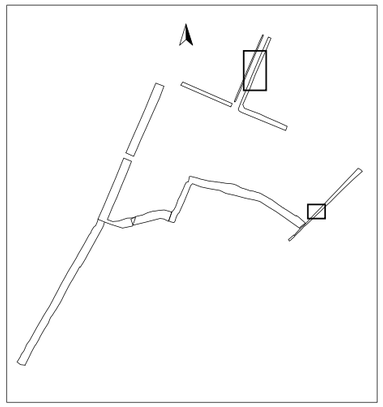




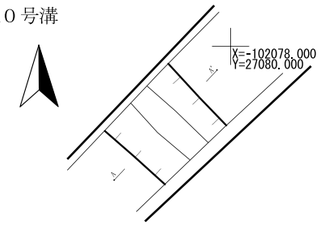
８号溝跡
１．10YR3/2　黒褐色土　締り強。粘性やや強。
２．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　締りやや弱。　粘性なし。
３．10YR3/2　黒褐色土　灰白色粘土ブロック、砂多量に含む。締り強。粘性やや強（粘土質）。
４．10YR3/1　黒褐色土　灰白色粘土粒少量含む。締り強。粘性やや強（粘土質）。
５．10YR2/1　黒色土　礫多く含む。締りやや弱。粘性強（粘土）。

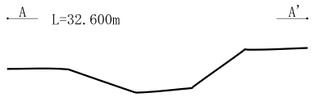


９号溝跡
１．10YR3/1　黒褐色土　灰白色砂ブロック少量含む。締り強。粘性やや強（粘土質）。



１０号溝





１０号溝
土層観察なし。

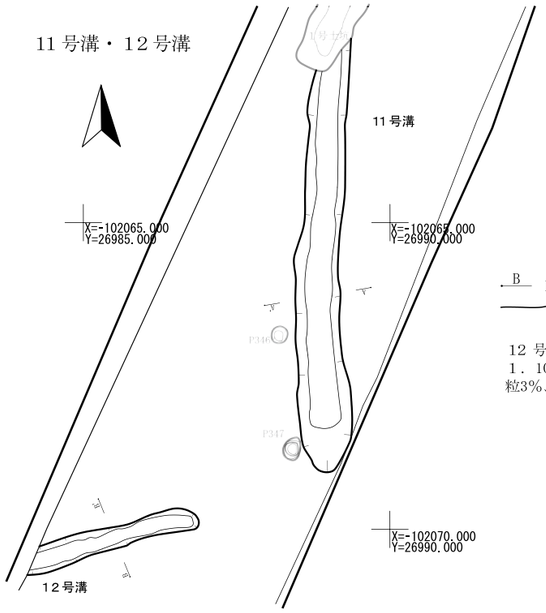
－８・９号溝平面図－
0　1:150　6m

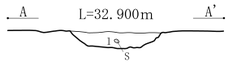
－１０号溝平面図－
0　1:100　4m

－断面図－
0　1:50　2m

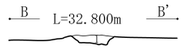
第61図　8～10号溝跡

１１号溝・１２号溝

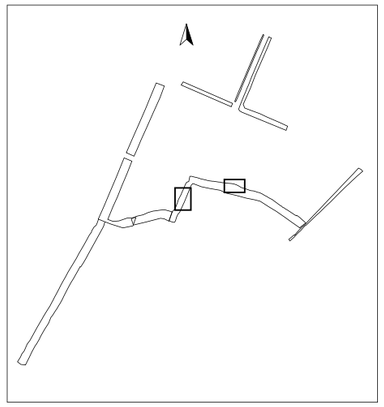




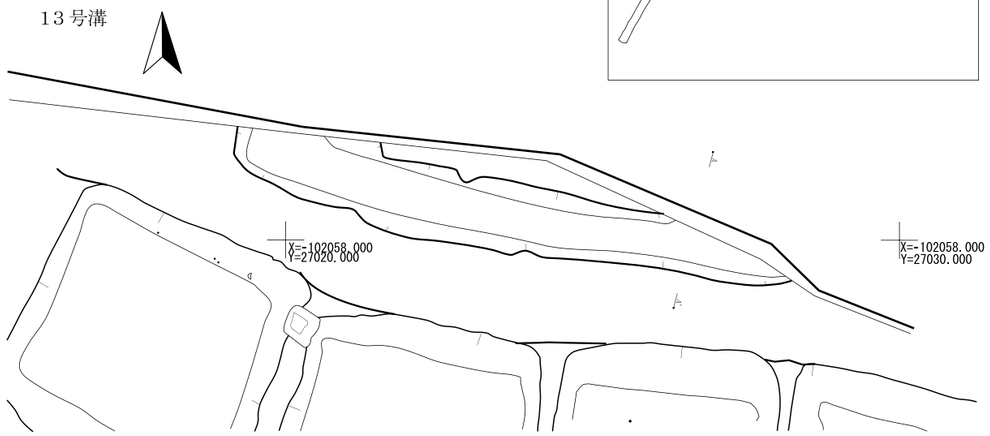
１１号溝
１．10YR2/3　黒褐色シルト　径5～10mm大の黄褐色粘土ブロック（地山由来）5%、径2mmの炭化物粒1%含む。粘性、締り強。

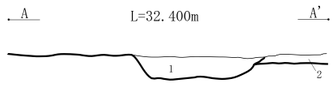


１２ 号溝
１．10YR2/3　黒褐色シルト　粘性中。締り強。径1～3mmの黄褐色土粒3%、径1mm炭化物粒1%含む。



１３号溝



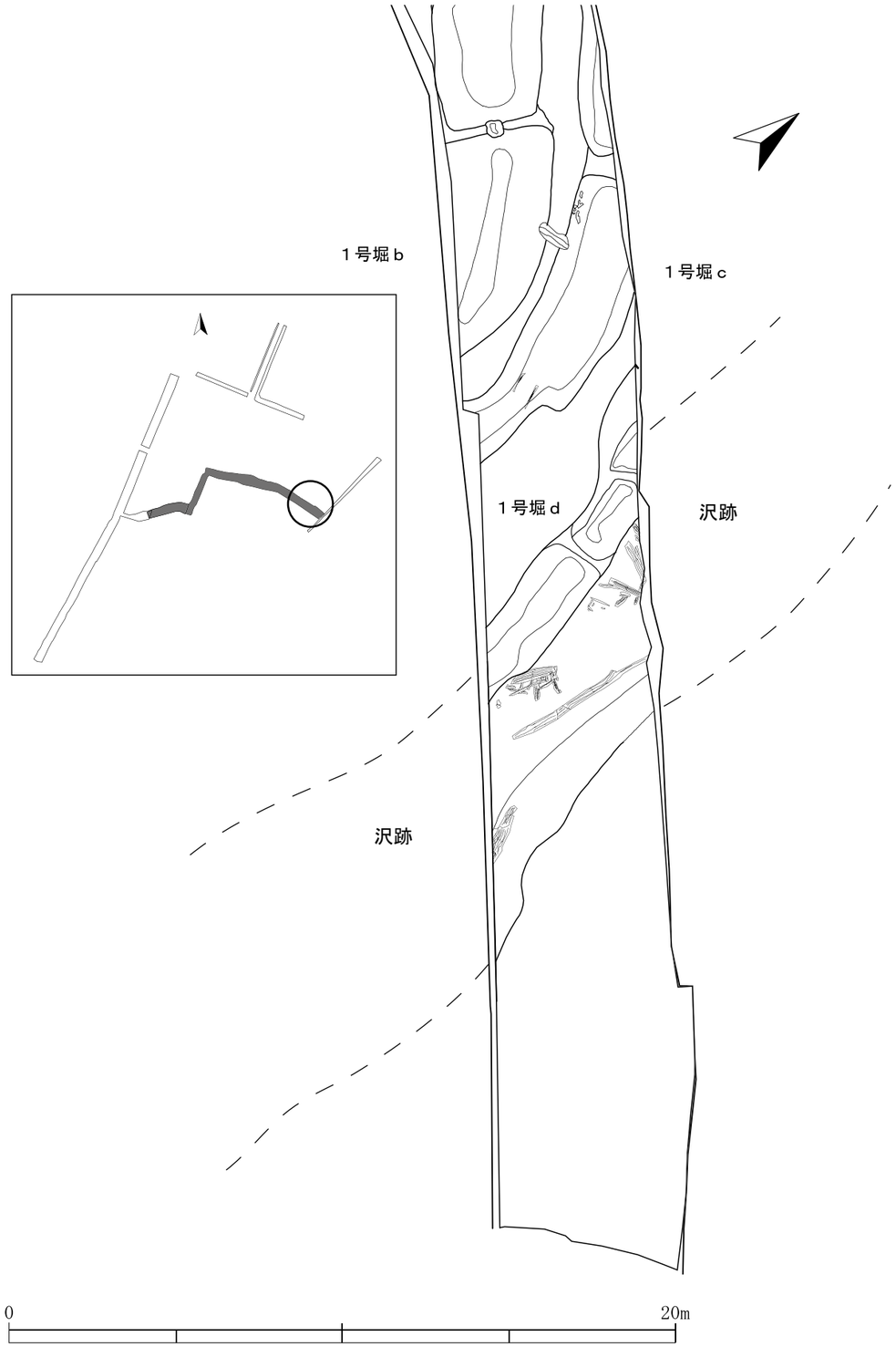


１３号溝
１．10YR4/1　褐灰色土　地山ブロック少量、土師器・須恵器含む。粘性やや有。締まっている。
２．2.5Y4/1　黄灰色土　粘性有。締まっている。（１号堀埋土）

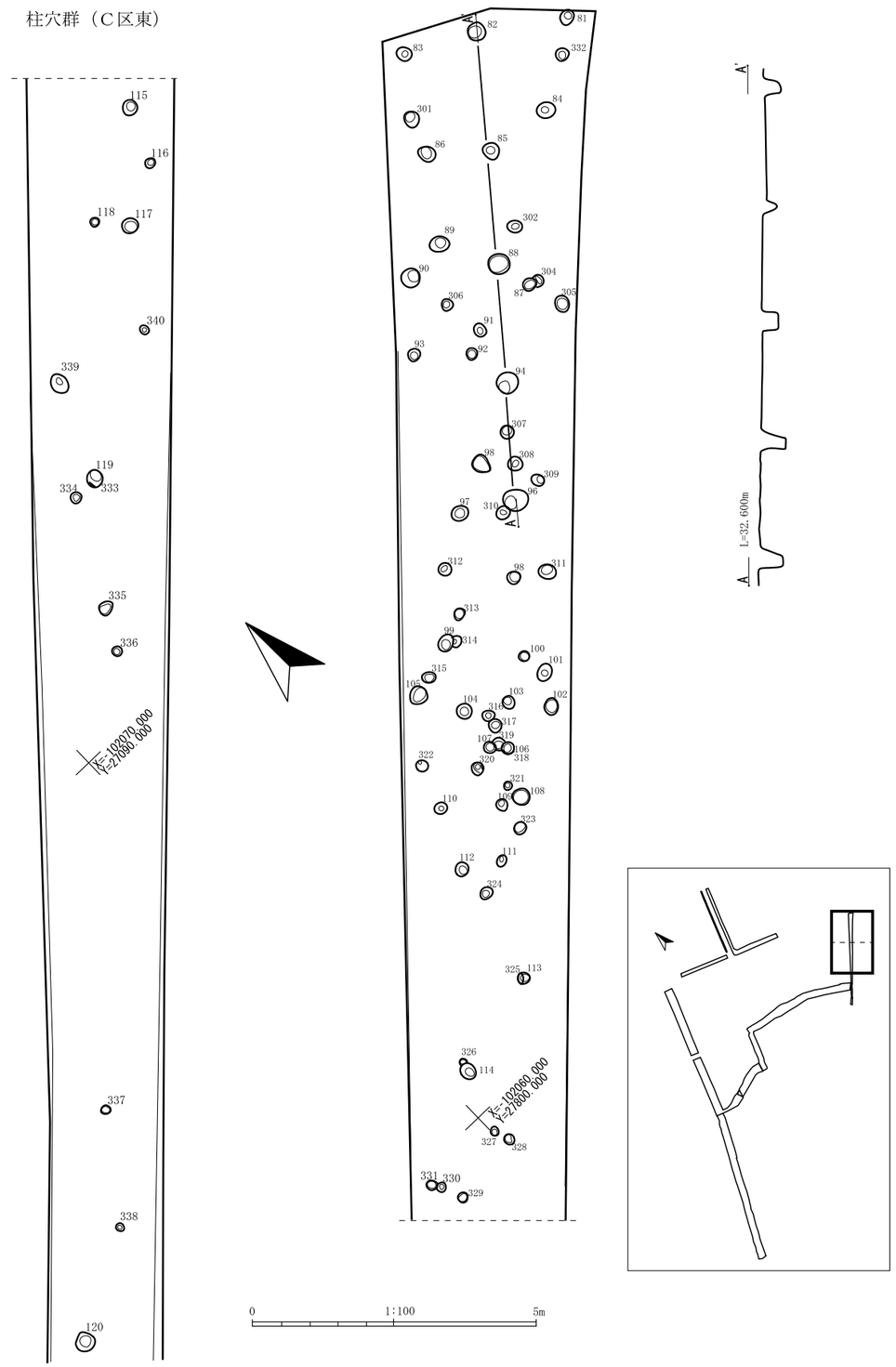
－平面図－
0　1:100　5m

－断面図－
0　1:50　2m

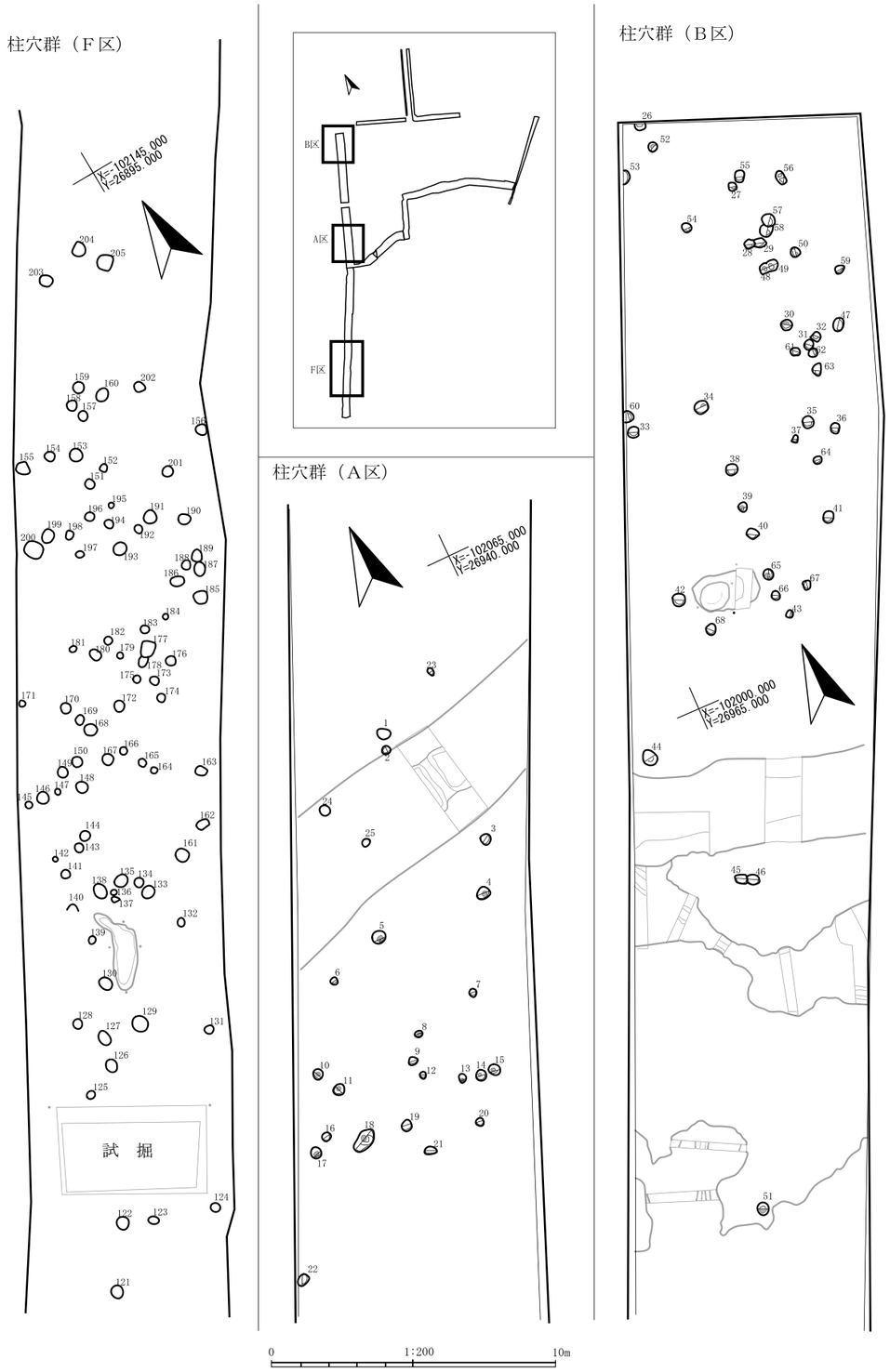
第62図　11～13号溝跡



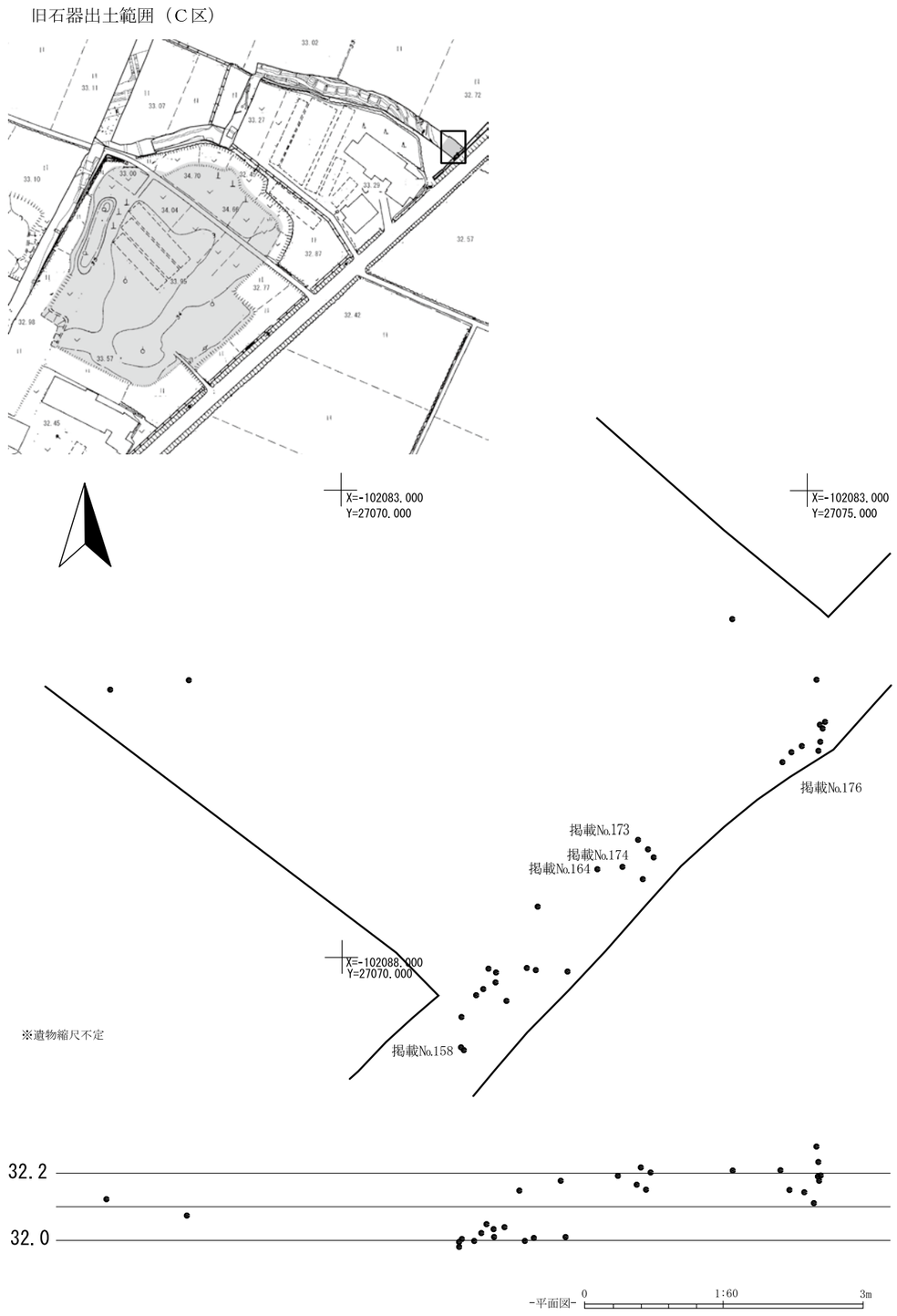
第63図　自然地形、沢跡



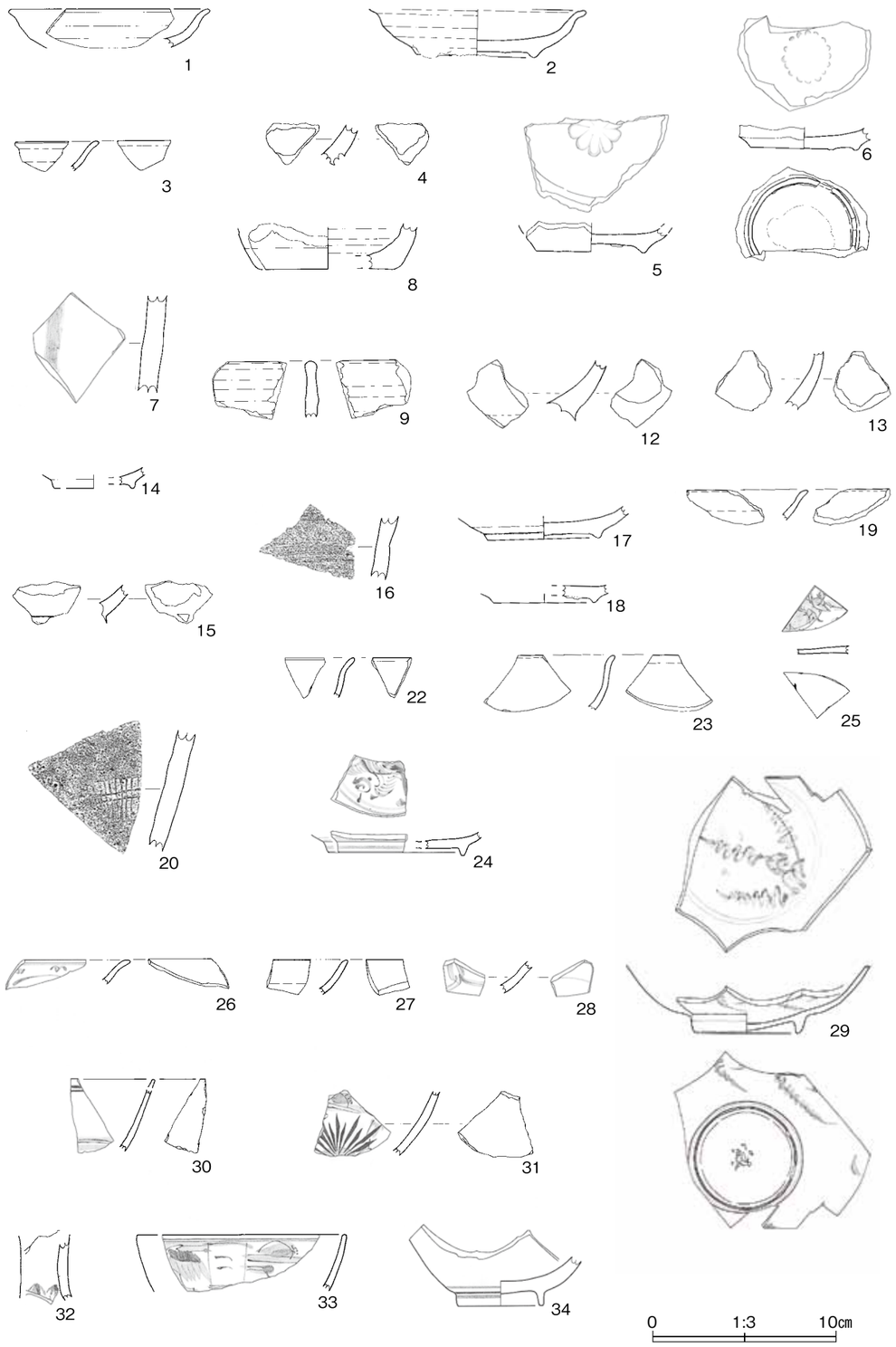
第64図　柱穴群（C区）



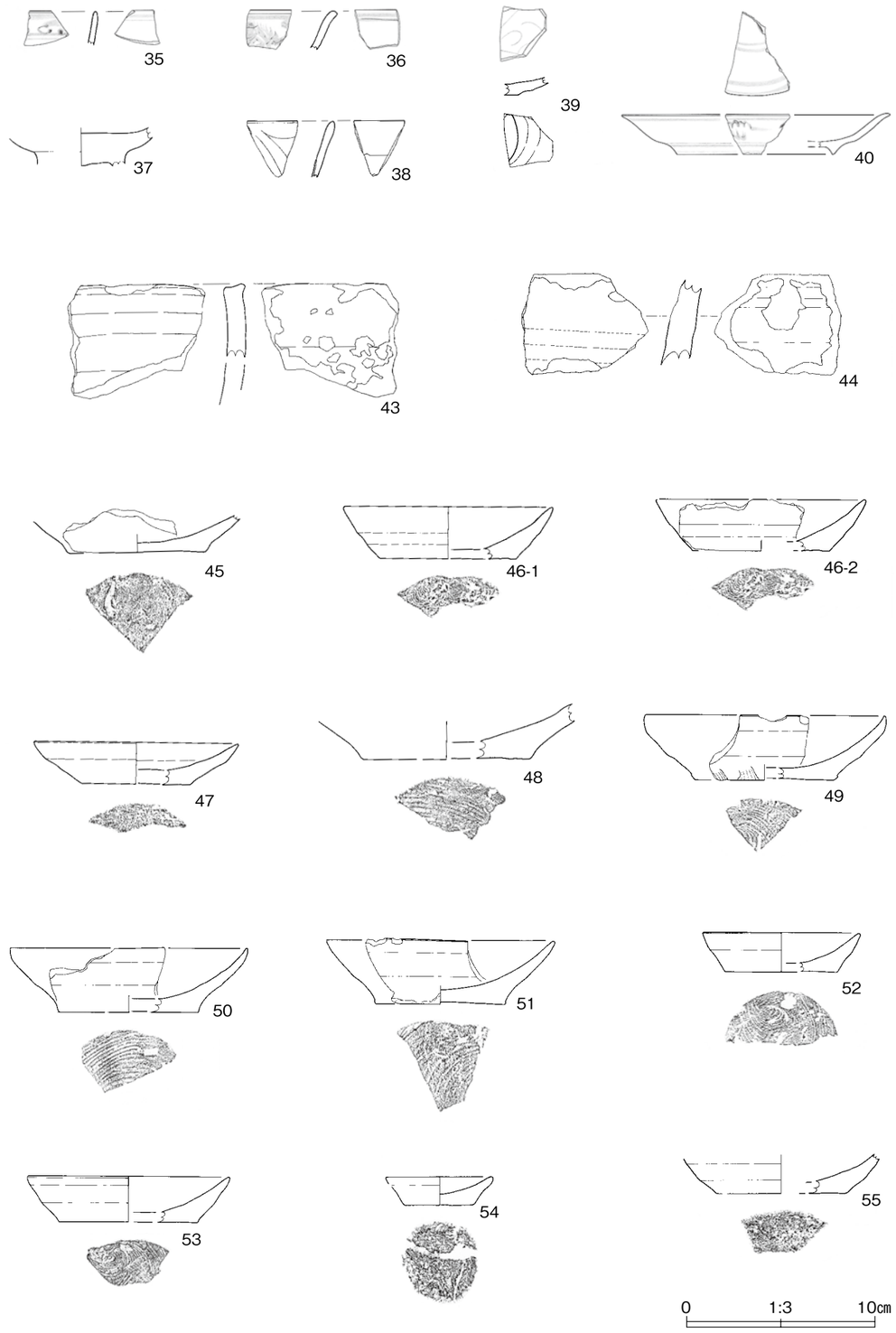
第65図　柱穴群(A･B･F区)



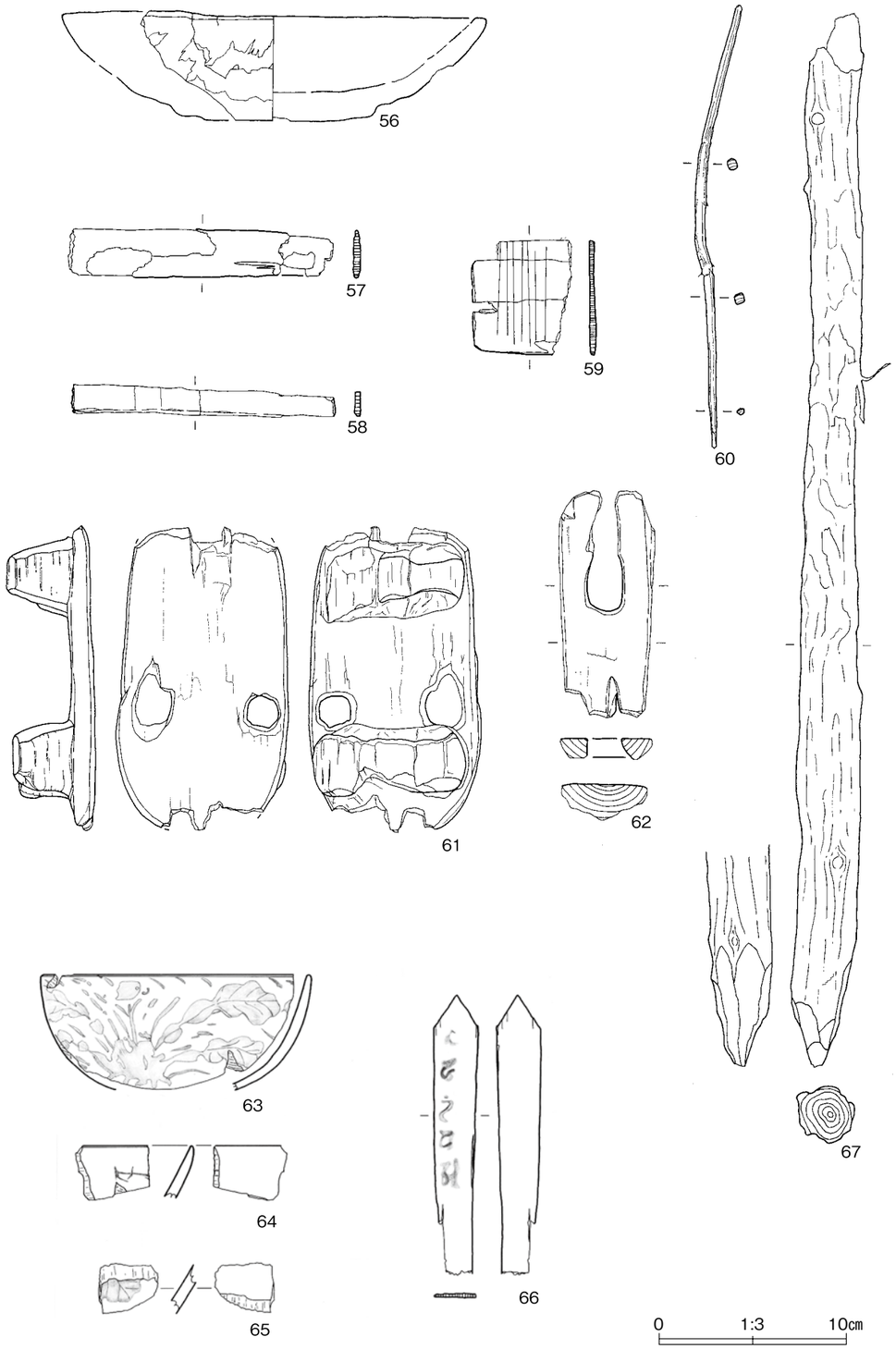
第66図　旧石器出土地点



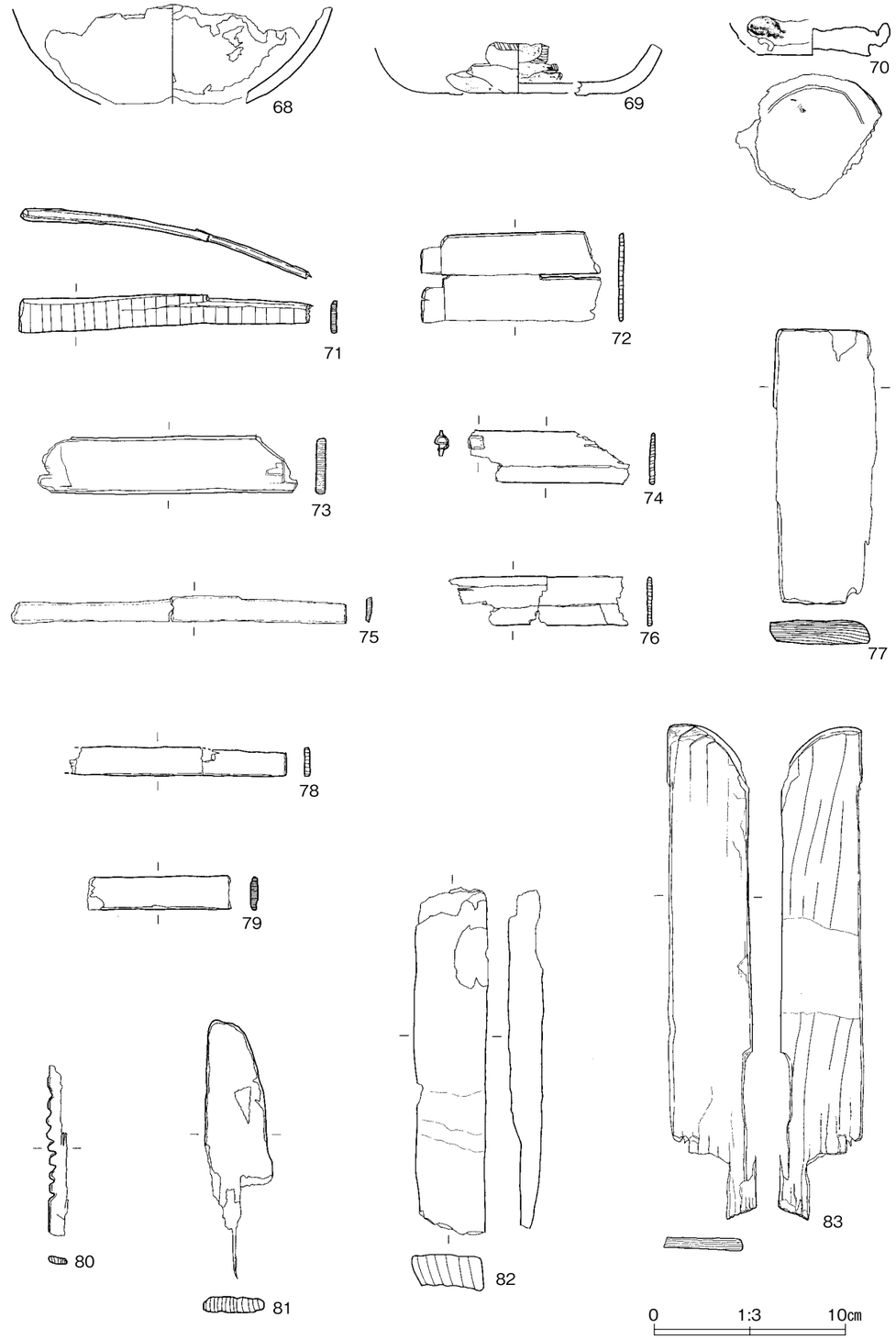
第67図　陶磁器1



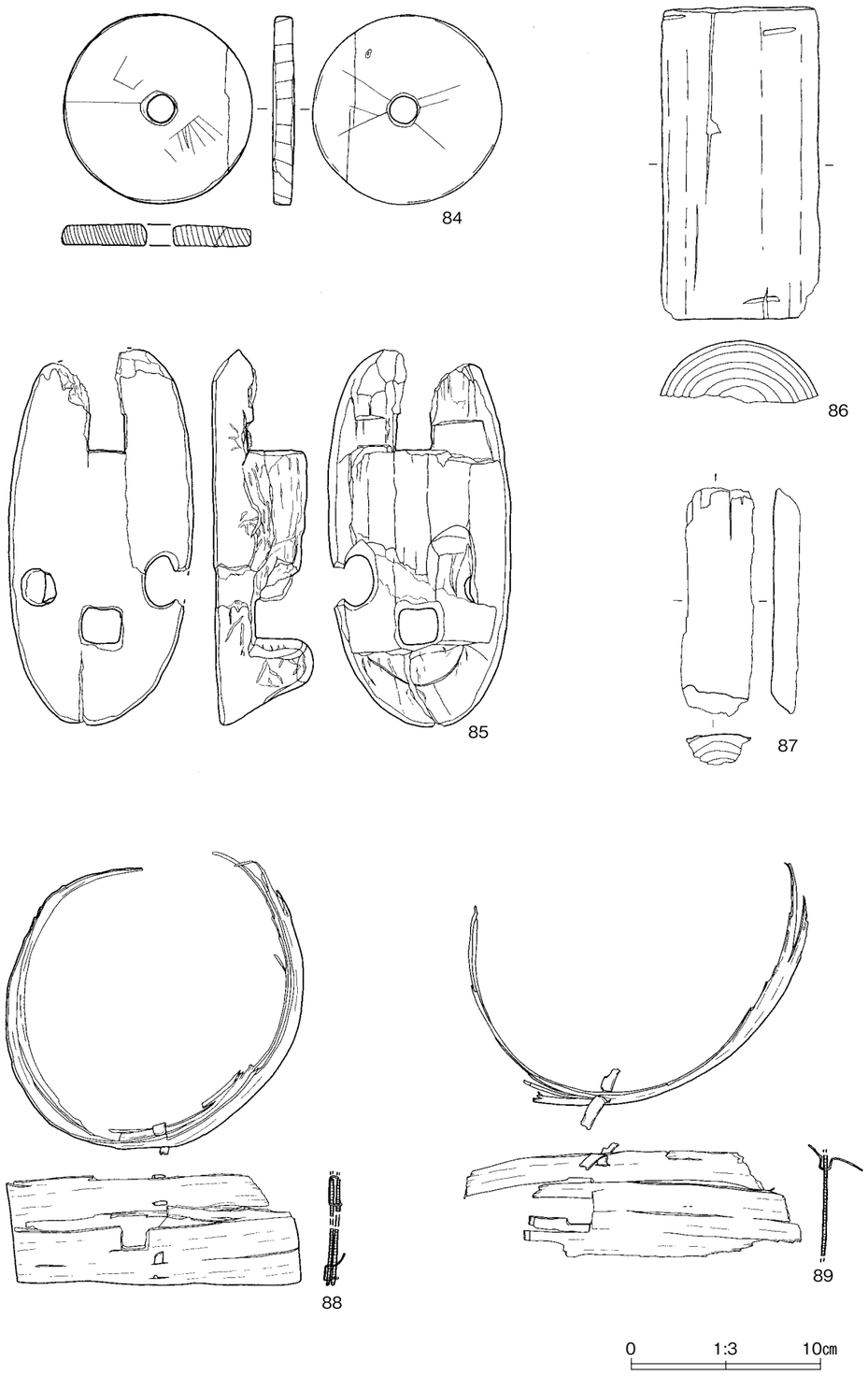
第68図　陶磁器2、かわらけ



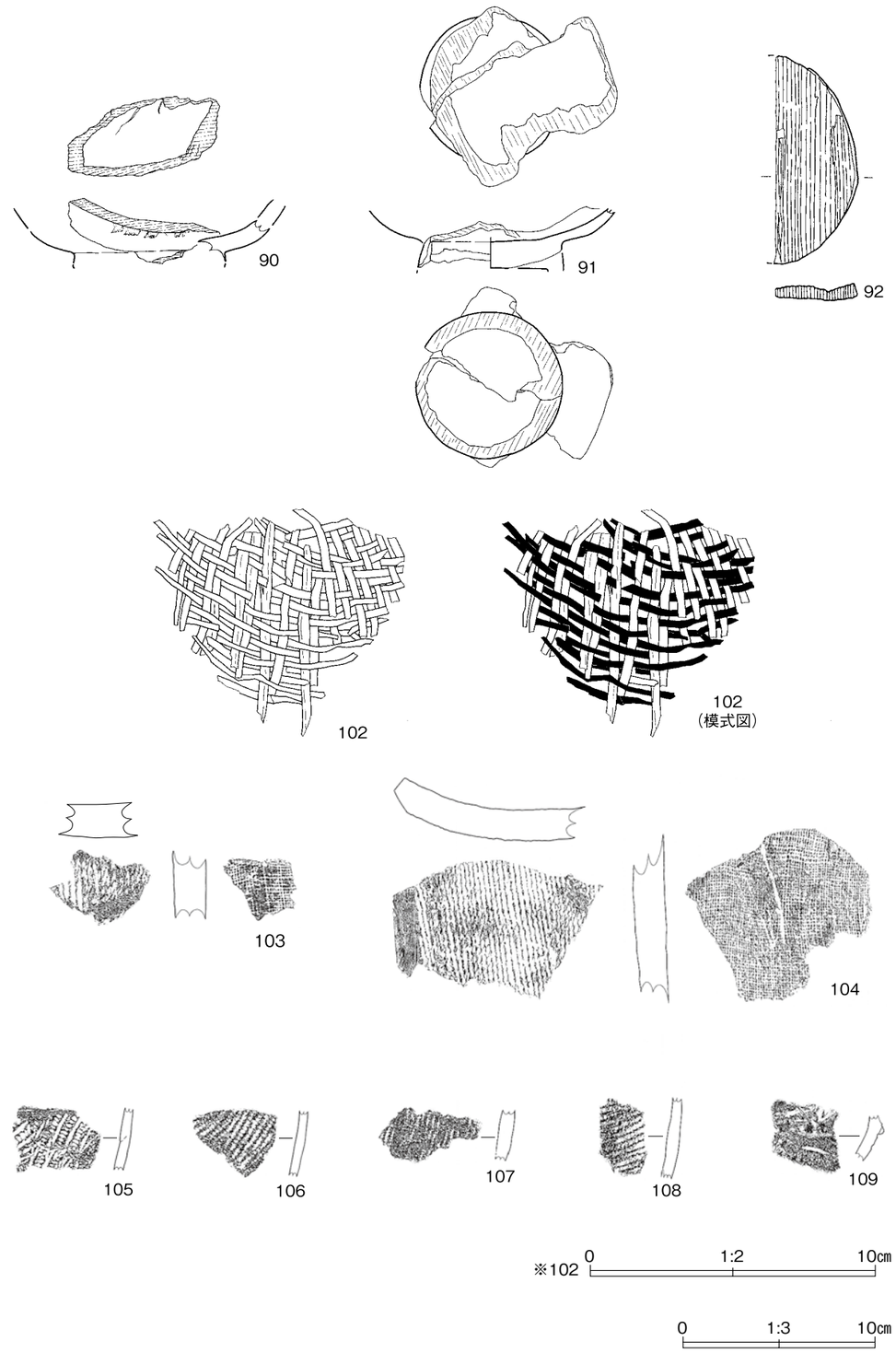
第69図　木製品1



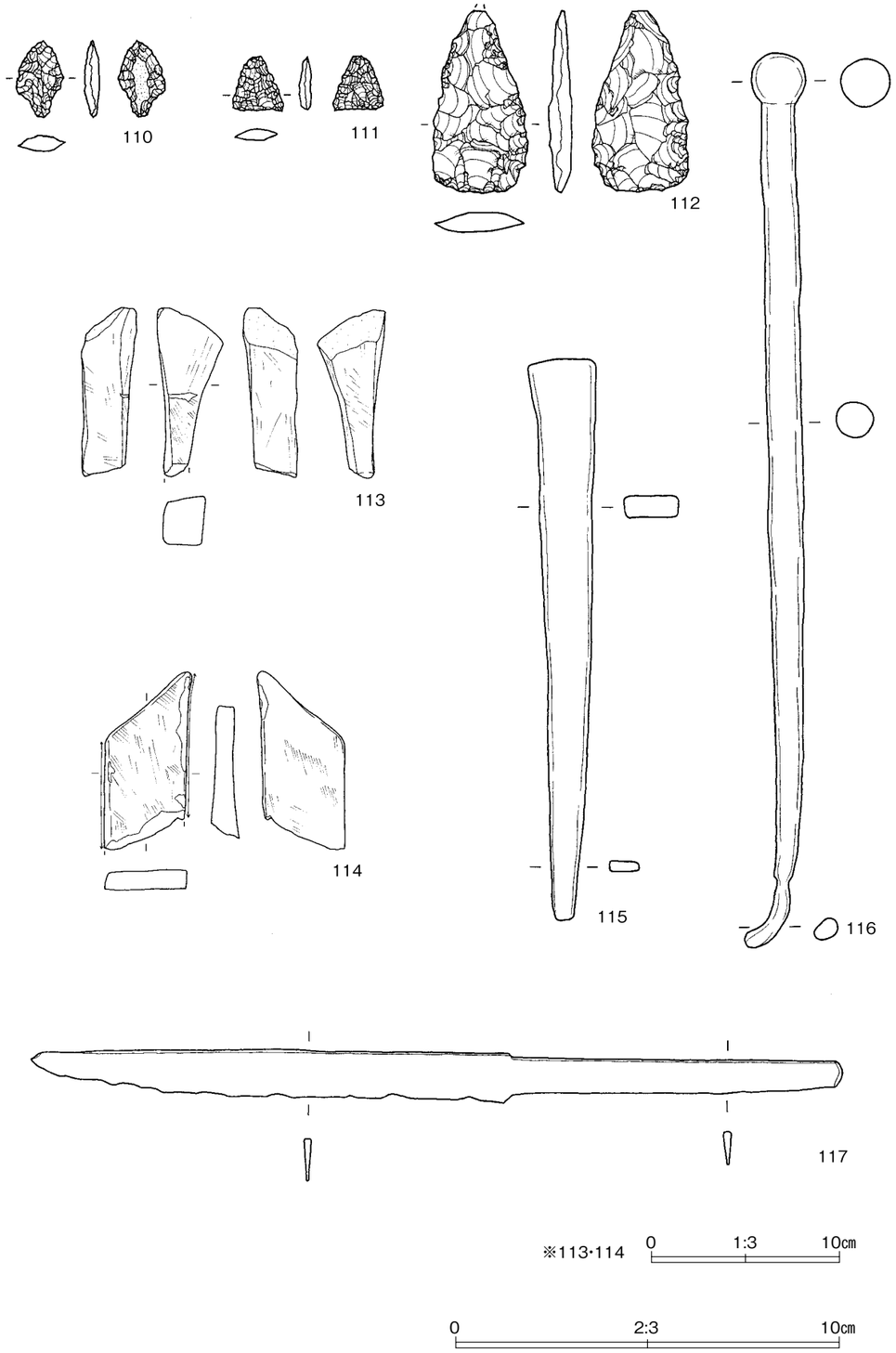
第70図　木製品2



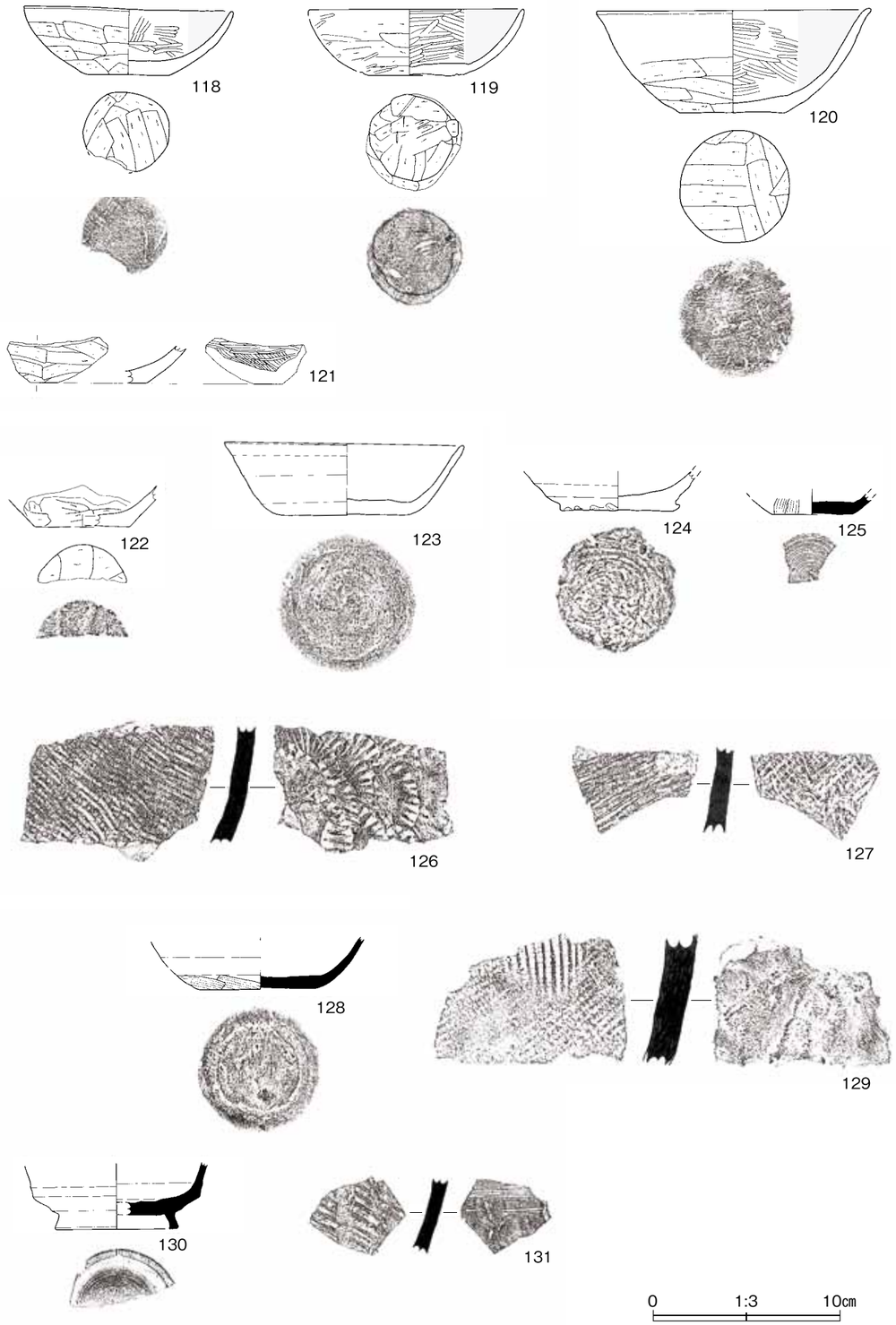
第71図　木製品3



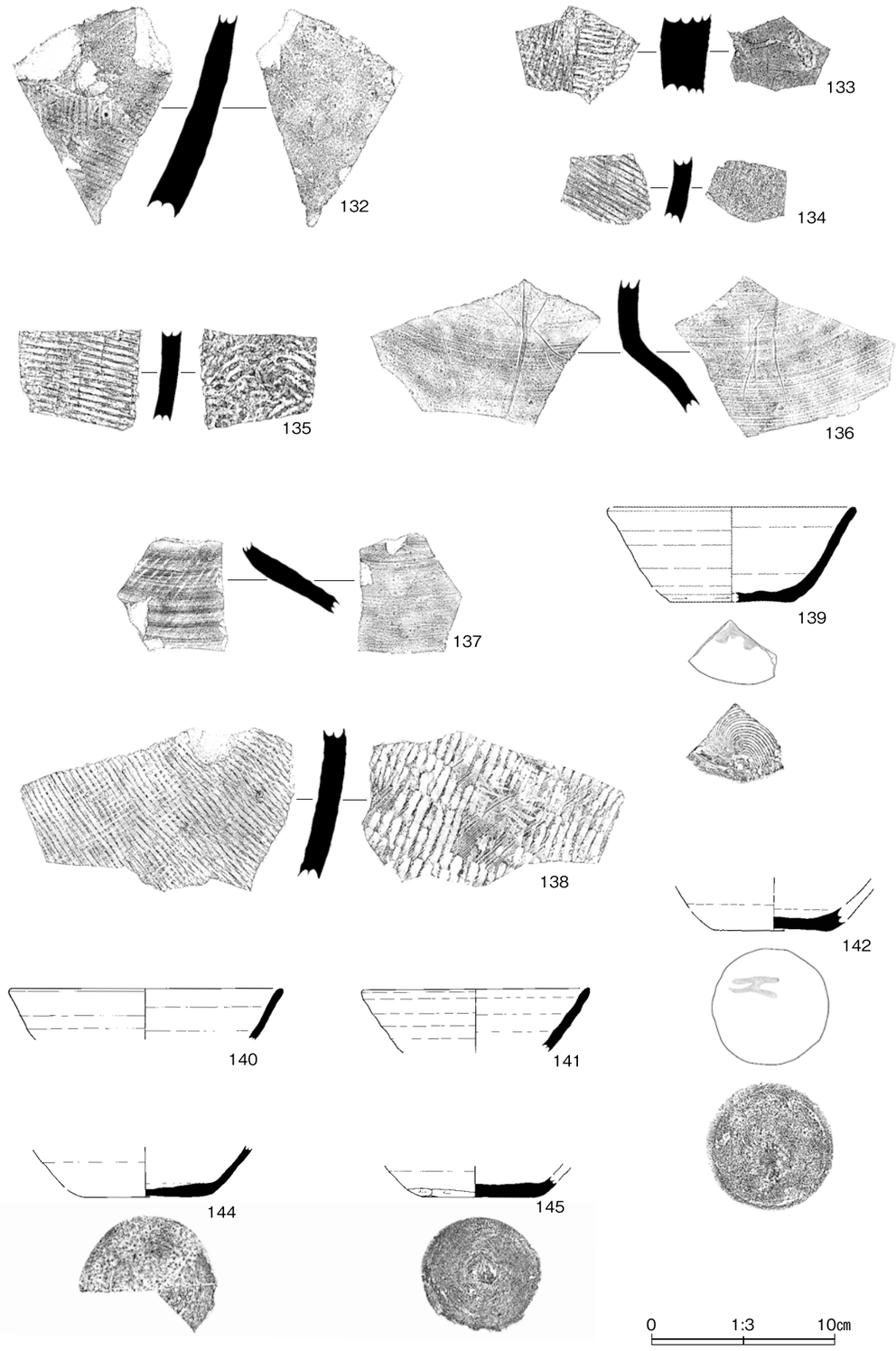
第72図　木製品4、瓦、縄文土器



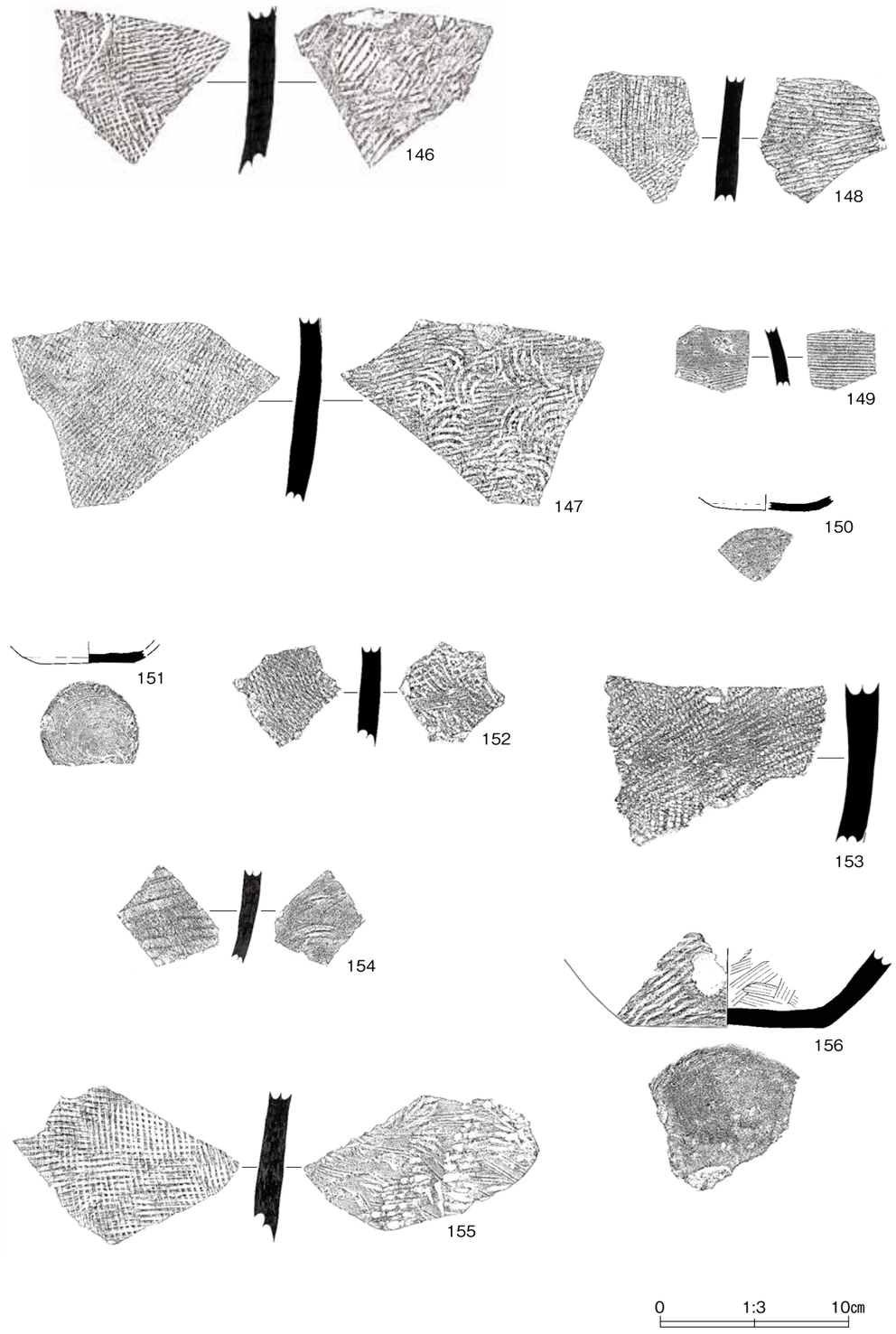
第73図　石器（縄文）、鉄製品



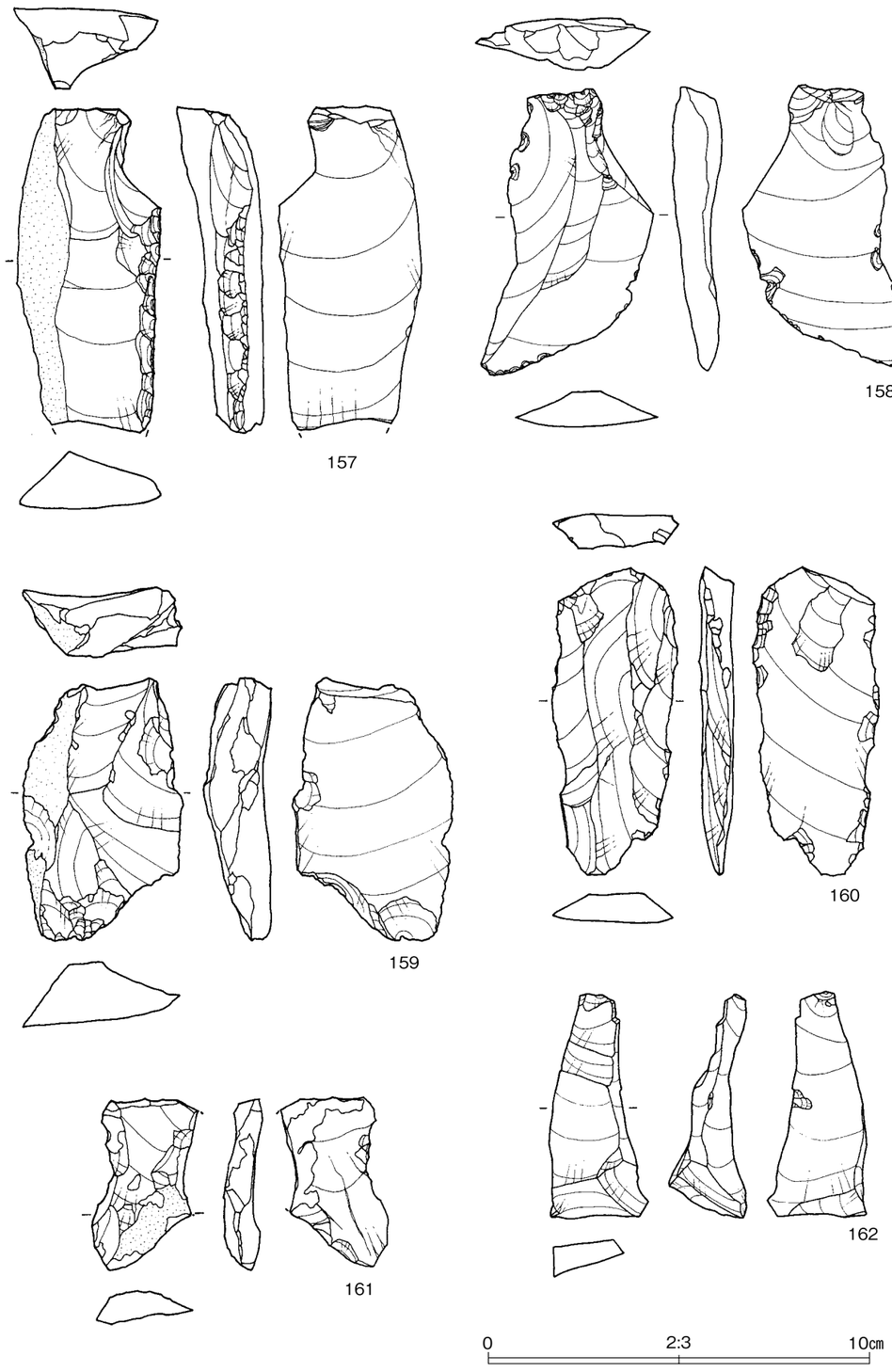
第74図　土師器･須恵器1



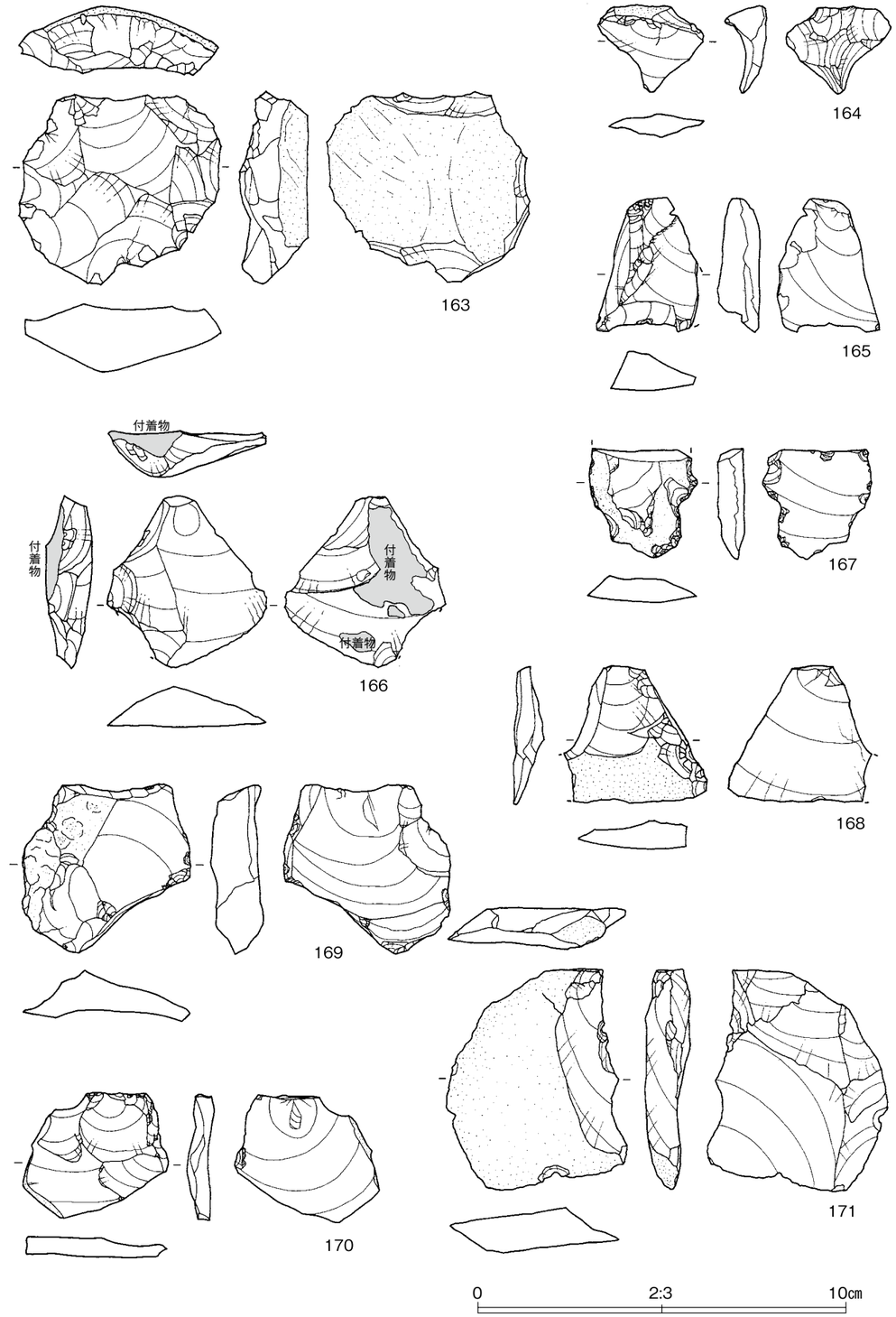
第75図　須恵器2



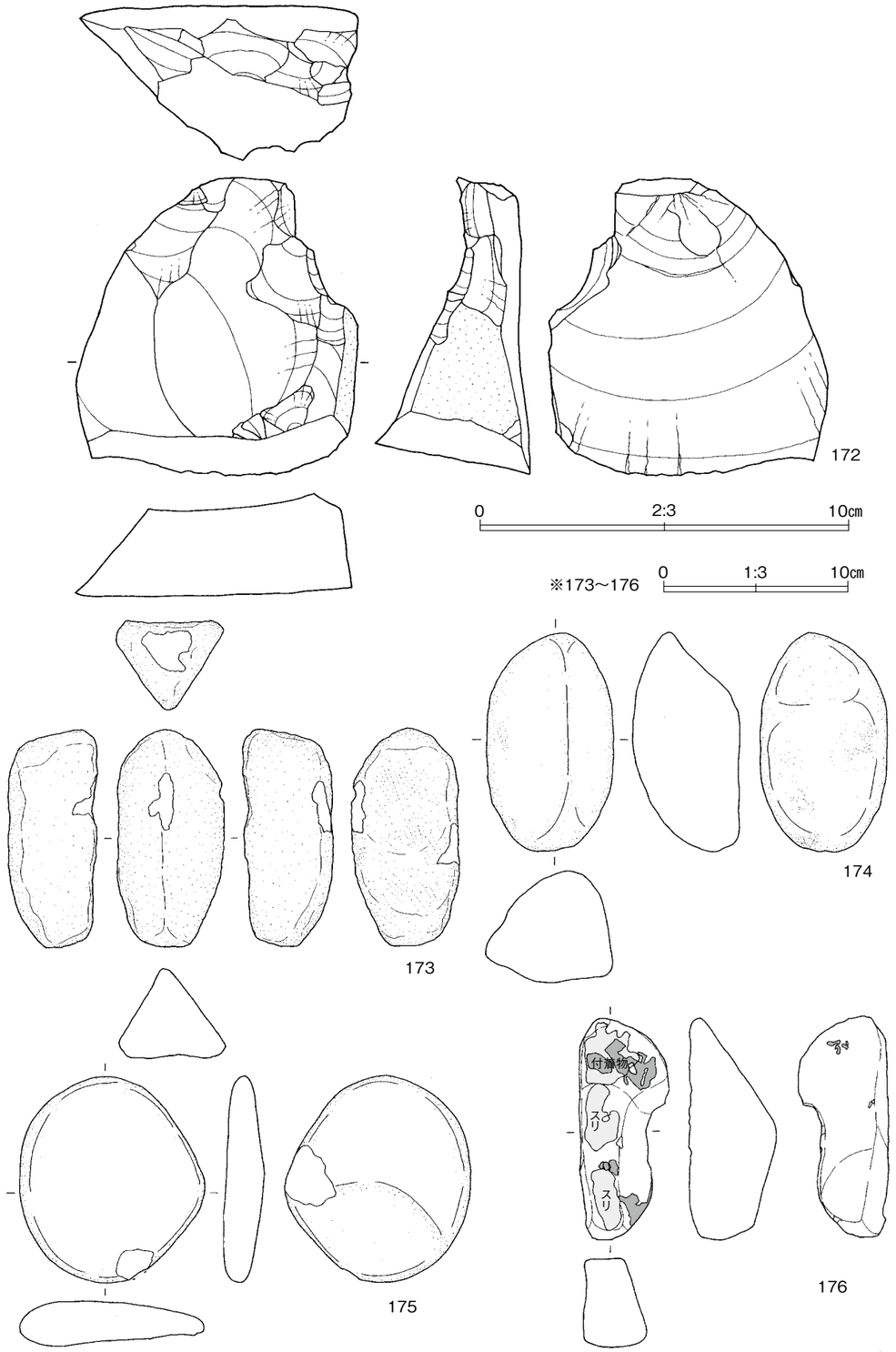
第76図　須恵器3



第77図　石器1



第78図　石器2



第79図　石器3

第13表　柱穴観察表

No.	深さ(cm)	調査区
1	−	A
2	15.2	A
3	11.6	A
4	16.0	A
5	45.6	A
6	33.6	A
7	19.2	A
8	18.0	A
9	25.6	A
10	27.2	A
11	23.2	A
12	25.6	A
13	16.0	A
14	17.6	A
15	29.6	A
16	14.8	A
17	23.6	A
18	34.0	A
19	10.8	A
20	6.4	A
21	4.0	A
22	14.4	A
23	8.0	A
24	−	A
25	−	A
26	32.8	B
27	22.4	B
28	16.8	B
29	21.2	B
30	25.2	B
31	11.6	B
32	26.4	B
33	36.8	B
34	26.4	B
35	25.6	B
36	20.8	B
37	11.2	B
38	22.8	B
39	28.8	B
40	25.6	B
41	34.0	B
42	9.6	B
43	18.0	B
44	14.8	B
45	11.6	B
46	10.4	B
47	14.0	B
48	15.6	B
49	26.8	B
50	29.6	B
51	17.6	B
52	8.4	B
53	35.2	B
54	15.2	B
55	24.4	B
56	8.0	B
57	39.6	B
58	32.8	B
59	12.0	B
60	34.0	B
61	15.6	B
62	10.8	B
63	26.0	B
64	18.0	B

No.	深さ(cm)	調査区
78	36.0	E
79	16.0	E
80	欠番	E
81	29.6	C
82	30.8	C
83	29.6	C
84	26.4	C
85	24.0	C
86	36.0	C
87	17.2	C
88	31.6	C
89	30.0	C
90	55.2	C
91	18.4	C
92	34.4	C
93	25.2	C
94	43.6	C
95	25.2	C
96	42.8	C
97	27.6	C
98	36.8	C
99	21.2	C
100	17.2	C
101	30.8	C
102	23.6	C
103	16.8	C
104	20.0	C
105	31.2	C
106	12.2	C
107	16.0	C
108	15.6	C
109	29.2	C
110	28.0	C
111	22.4	C
112	20.4	
113	25.6	C
114	22.8	C
115	21.2	C
116	18.4	C
117	23.2	C
118	22.4	C
119	30.8	C
120	14.8	C
121	確認範囲	F
122	確認範囲	F
123	確認範囲	F
124	確認範囲	F
125	確認範囲	F
126	確認範囲	F
127	確認範囲	F
128	確認範囲	F
129	確認範囲	F
130	確認範囲	F
131	確認範囲	F
132	確認範囲	F
133	確認範囲	F
134	確認範囲	F
135	確認範囲	F
136	確認範囲	F
137	確認範囲	F
138	確認範囲	F
139	確認範囲	F
140	確認範囲	F
141	確認範囲	F

No.	深さ(cm)	調査区
155	確認範囲	F
156	確認範囲	F
157	確認範囲	F
158	確認範囲	F
159	確認範囲	F
160	確認範囲	F
161	確認範囲	F
162	確認範囲	F
163	確認範囲	F
164	確認範囲	F
165	確認範囲	F
166	確認範囲	F
167	確認範囲	F
168	確認範囲	F
169	確認範囲	F
170	確認範囲	F
171	確認範囲	F
172	確認範囲	F
173	確認範囲	F
174	確認範囲	F
175	確認範囲	F
176	確認範囲	F
177	確認範囲	F
178	確認範囲	F
179	確認範囲	F
180	確認範囲	F
181	確認範囲	F
182	確認範囲	F
183	確認範囲	F
184	確認範囲	F
185	確認範囲	F
186	確認範囲	F
187	確認範囲	F
188	確認範囲	F
189	確認範囲	F
190	確認範囲	F
191	確認範囲	F
192	確認範囲	F
193	確認範囲	F
194	確認範囲	F
195	確認範囲	F
196	確認範囲	F
197	確認範囲	F
198	確認範囲	F
199	確認範囲	F
200	確認範囲	F
201	確認範囲	F
202	確認範囲	F
203	確認範囲	F
204	確認範囲	F
205	確認範囲	F
206～300欠番		
301	30.0	C
302	16.8	C
303	欠番	C
304	34.0	C
305	19.2	C
306	12.4	C
307	23.2	C
308	27.2	C
309	30.4	C
310	27.6	C
311	18.0	C
312	16.0	C

No.	深さ(cm)	調査区
326	11.6	C
327	10.8	C
328	38.0	C
329	22.8	C
330	21.6	C
331	22.8	C
332	18.8	C
333	30.0	C
334	24.0	C
335	26.8	C
336	14.4	C
337	6.4	C
338	17.2	C
339	17.2	C
340	11.2	C
341	27.2	F
342	21.2	G
343	12.8	G
344	22.8	G
345	13.2	G
346	10.8	G
347	8.8	G

第14表　陶磁器観察表

掲載番号	仮番号	種別	器種	出土地点	特徴	胎土	時期
1	719	瀬戸美濃	灰釉端反皿	C4区堀西、埋土	大窯1・2	2.5Y7/1灰白色	16c前半
2	701	瀬戸美濃	灰釉端反皿	4号堀	見込みに印花文、大窯1後	5Y8/1灰白色	16c前半
3	718	瀬戸美濃	灰釉端反皿	C4堀西側、埋土	大窯1・2	2.5Y7/3浅黄色	16c前半
4	705	陶器	陶器碗	E区溝	産地不明	10R5/6赤	近世か
5	716	瀬戸美濃	灰釉皿	C区堀	見込みに印花文、大窯1・2	2.5Y7/2灰黄色	16c前半
6	715	瀬戸美濃	灰釉皿	C区堀	見込みに印花文、大窯1・2	2.5Y7/2灰黄色	16c前半
7	717	常滑	陶器甕	C4堀、埋土	内外面:降灰釉	2.5Y7/1灰白色	12c後半
8	706	瀬戸	鉄釉甕	E区溝内	内外面:薄い鉄釉	10YR8/2灰白色	近世か
9	712	瀬戸	陶器香炉	D区北側、盛土層	内:部分的な鉄釉、外:鉄釉	10YR8/2灰白色	18c
10	808	不明	不明	D区北側、盛土層	内外面に釉、青磁かもしれない	N7/0灰白色	中世か
11	807	不明	不明	D区北側、盛土層	焼けた青磁片か	N7/0灰白色	中世か
12	707	青磁	磁器碗	F区北端(溝内か？)、検出面	中国産、無文の碗か、 全面に釉	10YR8/1灰白色	15c
13	713	瀬戸美濃	灰釉皿	溝跡、埋土	大窯期の皿類であろう	2.5Y7/2灰黄色	16c
14	703	瀬戸美濃	灰釉皿	E区東側、検出面直上	大窯期の皿類であろう	5Y8/1灰白色	16c
15	714	大堀相馬	灰釉碗	E区北側、検出面直上	内外面に釉	2.5Y7/1灰白色	18c
16	702	須恵器系	陶器甕類	E区東側、検出面直上	須恵器系陶器か	5Y7/1灰白色	12c後半
17	708	瀬戸美濃	灰釉端反皿	F区遺構外、北側礫層 (床土より上)	見込みに印花文、大窯1・2	10YR8/2灰白色	16c前半
18	709	瀬戸美濃	灰釉皿	F区遺構外、北側礫層 (床土より上)	見込みに文様あり、大窯1・2	10YR7/1灰白色	16c前半
19	710	瀬戸美濃	灰釉端反皿	G区検出	大窯1・2	10YR7i2灰白色	16c前半
20	711	常滑	陶器甕	検出面	内面:降灰釉　外面:押印	10YR7/1灰白色	12c後半
21	704	瀬戸美濃	灰釉皿	E区8号溝、埋土	大窯期の皿類であろう	5Y8/1灰白色	16c
22	802	白磁	皿類	4号堀(確)	中国産	N8/0灰白色	16c
23	801	白磁	皿	4号堀	中国産	N8/0灰白色	16c
24	803	染付	磁器皿	4号堀T2-3	中国産染付皿B1か	N8/0灰白色	15c後～16c前
25	817	染付	磁器皿	C区堀RP	高台内に放射状の削り 明末染付か	N8/0灰白色	17c初か
26	820	染付	磁器端反皿	堀(大溝)	中国産染付皿B1か	N8/0灰白色	15c後～16c前
27	816	白磁	皿か	堀(大溝)	中国産	N8/0灰白色	15-16c
28	819	不明	碗か	堀(大溝)	染付、産地不明	N8/0灰白色	-
29	821	染付	磁器碗	堀	中国産、染付碗Cか	10YR8/1灰白色	15c後～16c前
30	812	肥前	磁器碗	D区溝内	染付	N8/0灰白色	18世紀後半
31	811	肥前	磁器碗	D区溝内	染付	N8/0灰白色	18世紀後半
32	813	肥前	磁器徳利	D区溝内	染付	N8/0灰白色	17c後～18c
33	814	肥前	磁器碗	E区8号溝跡、埋土	染付	N8/0灰白色	18c
34	815	不明	磁器碗	E区8号溝跡、埋土	染付	2.5Y8/1灰白色	19c～
35	806	染付	磁器皿	A区南側T4、褐灰色粘土	中国産染付皿Cか	N8/0灰白色	15c後～16c前
36	804	染付	磁器碗	A区南側、検出面	中国産染付皿B1か	N8/0灰白色	15c後～16c前
37	805	青磁	磁器碗	A区南側T2、褐灰粘土下位	中国産、見込みに印花文	N8/0灰白色	15c前
38	818	青磁	磁器碗	遺構外	半肉掘りの連弁文あり	N7/0灰白色	15c前
39	822	白磁	皿	排土中	半肉掘りの細い曲線文様あり	10YR7/1灰白色	12c前半
40	810	染付	磁器皿	E区、検出面上	中国産染付皿B1か	N8/0灰白色	15c後～16c前
41	606	常滑	陶器甕	F区遺構外、北側礫層 (床土より上)	押印、渥美か	10YR6/1褐灰色	12c後半
42	809	瀬戸美濃	灰釉皿	E区北側、検出面直上	大窯期の皿類であろう	N7/0灰白色	16c
43	605	土器	大形の鉢か	E区北側、検出面直上	ロクロ整形	平口縁	中世か
44	604	土器	大形の鉢か	D区北側、盛土層	ロクロ整形	細砂含	中世か

第15表　かわらけ観察表

掲載番号	仮番号	器種	出土地点	計測値:cm・g				その他
				口径	器高	底径	重量	
45	601	ロクロ　大	A区1号堀、堆積土上位	-	-	(7.4)	36.5	
46	602	ロクロ　大	A区2号堀、堆積土上位(黒色土)	(11.4)	2.8	(7.4)	36.6	
47	603	ロクロ　大	A区2号堀、堆積土上位(黒色土)	(11.2)	2.3	(6.0)	31.9	
48	607	ロクロ　大	B区、検出面	-	-	(9.2)	48.6	
49	477	ロクロ　大	C区堀出土遺物5	(13.2)	3.5	(7.6)	33.6	
50	476	ロクロ　大	C区堀出土遺物7	(12.9)	3.6	(7.6)	47.1	内面に油煤付着
51	611	ロクロ　大	C区堀出土遺物6	(12.5)	3.5	(7.2)	52.1	
52	478	ロクロ　小	C区堀	(8.6)	(2.2)	(6.2)	45.9	
53	608	ロクロ　大	G区、検出	(11.3)	2.5	(7.8)	30.7	底面黒色付着物
54	610	ロクロ　小	検出面	(5.8)	1.6	3.7	33.7	灯明皿
55	609	ロクロ　大	G区、検出	-	-	(7.0)	33.7	

第16表　木製品観察表

掲載番号	仮番号	種類	出土地点	計測値:cm・g				その他
				長さ(口径)	幅(器高)	厚さ(底径)	重量	
56	907	椀	A区南側T2 4号堀、褐灰粘土上位	(22.2)	(5.5)	-	142.7	
57	916	円形曲物・側板	A区南側T1(4号堀)、褐灰粘土中	(13.9)	2.5	0.4	11.1	
58	918a	円形曲物・側板	4号堀	13.8	(1.5)	0.4	5.5	
59	918b	円形曲物・側板	4号堀	(6.1)	(5.2)	0.4	6.4	
60	919	箸	A区南側T2 4号堀、褐灰粘土下位	(23.3)	2.1	0.6	5.6	
61	920	連歯下駄	A区南側T1 4号堀、褐灰粘土中	(15.9)	9.0	4.7	226.4	
62	921	下駄？	A区南側T1 4号堀、褐灰粘土中	(11.9)	(5.0)	(2.0)	44.1	
63	935	漆椀	C5堀、西　埋土	(14.2)	(6.0)	-	50.8	赤漆で文様が描かれる
64	939a	漆椀	C区5号溝西側、埋土	-	-	-	2.5	935と同一個体
65	939b	漆椀	C区5号溝西側、埋土	-	-	-	1.9	935と同一個体
66	934	塔婆	C4堀	(14.6)	2.3	0.2	4.5	梵字あり
67	932	杭？	A区南側T1 4号堀、褐灰粘土中	(55.6)	3.4	3.0	353.3	
68	908	漆椀	4号堀(G区)、埋土	-	(5.2)	-	26.7	
69	909	漆椀	4号堀(G区)、埋土	-	(2.6)	(7.3)	28.0	
70	910	椀or皿？	4号堀(G区)T-1	-	(2.0)	-	36.0	
71	914a	円形曲物・側板	G区4号堀	(15.3)	2.6	0.3	7.7	
72	914b	円形曲物・側板	G区4号堀	(9.5)	4.8	0.3	7.6	
73	912a	円形曲物・側板	4号堀(G区)、埋土	(13.5)	3.0	0.5	13.1	
74	913a	円形曲物・側板	4号堀(G区)	(9.5)	2.7	0.3	4.3	
75	912b	円形曲物・側板	4号堀(G区)、埋土	(17.8)	1.5	0.3	3.9	
76	913b	円形曲物・側板	4号堀(G区)	(8.5)	2.7	0.3	4.4	
77	911	容器(籠)	G区4号堀	14.5	(5.5)	1.3	68.6	
78	915	円形曲物・側板	4号堀、埋土	(11.5)	1.6	0.3	3.7	
79	917	円形曲物・側板	4号堀(G区)	(7.6)	1.8	0.4	4.3	
80	924	加工板	4号堀(G区)	(9.0)	(1.1)	0.4	2.2	
81	923	加工板	4号堀(G区)T-1	(13.6)	3.6	0.8	17.6	
82	922	加工材	G区4号堀	(18.4)	4.0	1.9	86.1	
83	925	加工板	4号堀(G区)T-1	26.0	4.7	0.6	93.2	
84	901	円形曲物蓋板？	1号堀、埋土	9.8	9.8	1.1	73.2	
85	902	下駄	1号堀、埋土	19.5	9.6	4.9	370.2	
86	904	加工材	1号堀、埋土	16.2	8.3	(3.3)	288.8	
87	903	加工材	1号堀、埋土	(11.8)	(3.7)	(1.6)	42.9	
88	938a	円形曲物・側板	C区東側　溝跡？、埋土	-	(5.7)	-	37.0	
89	938b	円形曲物・側板	C区東側　溝跡？、埋土	-	(5.2)	-	13.6	
90	940	漆椀	堀	-	(3.5)	-	10.3	赤漆で文様が描かれる
91	936	漆椀	C区西側	-	(3.3)	(7.7)	68.4	遺物№11
92	937	容器蓋(底板？)	C区西側	10.9	(4.3)	0.7	8.5	
93	600	欠番						
94	905	加工材	A区1号堀、堆積土上位	18.0	4.8	2.7	103.5	
95	906	樹皮	A区1号堀、堆積土	18.3	4.3	0.5	27.9	
96	926	加工材	4号堀	10.2	5.2	2.6	56.8	
97	927	自然木	A区南側T2 4号堀、褐灰粘土	24.8	3.0	2.3	102.1	
98	928	自然木	A区南側T1 4号堀、褐灰粘土中	10.0	1.8	1.6	24.4	表のみ
99	929	柱材	A区P8	11.0	4.4	2.0	32.7	表のみ
100	930	柱材	B区P34	16.6	9.0	6.6	324.8	
101	931	部材	G区　検出	12.9	3.5	2.9	72.0	
102	960	籠製品	C区4号堀	〈8.0〉	〈8.9〉	—	—	

第17表　金属製品観察表

掲載番号	仮番号	種類	出土地点	計測値:cm・g				その他
				長さ	幅	厚さ	重量	
115	1001	器種不明	4号堀	14.9	1.9	0.6	52.6	
116	1002	火箸	E区8号溝内	23.7	2.1	1.0	72.2	
117	1003	刀子	C区4号堀　西側ハウス	21.3	1.3	0.3	23.0	

第18表　土師器・須恵器観察表

掲載番号	仮番号	器種	部位	出土地点	特徴(口:口径、底:底径、高:器高、計測値㎜)	その他
118	466	土師器坏	口～底	C区4号堀	外ケズリ・ミガキ、内ミガキ、底部ケズリ、口116・底46・高37	内外面黒色処理
119	467	土師器坏	口～底	C区4号堀2	内外ミガキ、底部ケズリ、口119・底50・高37	内外面黒色処理・光沢強
120	475	土師器坏	口～底	C区4号堀、埋土	外ロクロナデ・ケズリ、内ミガキ、底部ケズリ、口152・底60・高56	内面黒色処理
121	468	土師器坏	体下～底	C区4堀(ハウス近)、埋土	外ケズリ、内ミガキ	内面黒色処理
122	473	土師器小形甕	胴下～底	C区4号堀(中央ハウス)、埋土	外ケズリ、内ナデ、底部ケズリ、底52	
123	469	須恵器・坏	口～底	C区4号堀1	内外ロクロナデ、底部回転ヘラ切り、口132・底73・高41	底部縁辺再調整
124	443	土師器小形甕	胴下～底	E区3号土坑、埋土	内外ロクロナデ、底部回転糸切り、底66	
125	442	須恵器小形甕	胴下～底	E区3号土坑、埋土	内外ロクロナデ、底部回転糸切り、底45	
126	402	須恵器甕	胴部	A区2号堀、堆積土上位(黒色土)	外タタキ、内アテ具	
127	403	須恵器甕	胴部	A区2号堀跡、堆積土上位(黒色土)	外タタキ、内アテ具	
128	464	須恵器坏	体下～底	C2堀C1堀にともなう、埋土	内外ロクロナデ、底部回転ヘラ切り、底65	底部縁辺再調整
129	465	須恵器大甕	胴	C区2号堀	外タタキ、内アテグ	内面褐色付着物
130	471	須恵器高台坏	体下～底	C区4号堀	内外ロクロナデ、底68	
131	404	須恵器甕	胴部	4号堀	外タタキ、内アテ具	
132	474	須恵器大甕	胴	C4堀	外タタキ、内アテグ	
133	405	須恵器甕	胴部	G区4号堀	外タタキ、内ナデ	
134	401	須恵器甕	胴部	1号堀、埋土	外タタキ、内アテ具	
135	406	須恵器甕	胴部	B区1号溝跡、堆積土下位	外タタキ、内アテ具	
136	479	須恵器甕	頸～胴上	内堀	内外ロクロナデ	
137	480	須恵器甕	胴上	1号溝	外タタキ・ロクロナデ、内ナデ	
138	463	須恵器大甕	胴	G区1号溝(浅い方)、埋土	外タタキ、内アテグ	
139	410	須恵器坏	口～底	D区5号溝跡、埋土	内外ロクロナデ、底部回転糸切り、口134、底68、高52	底部縁辺再調整
140	408	須恵器坏	口縁	D区5号溝跡、埋土	内外ロクロナデ、口150	
141	409	須恵器坏	口縁	D区5号溝跡、埋土	内外ロクロナデ、口124	
142	413	須恵器坏	体下～底	D区5号溝跡、埋土	内外ロクロナデ、底部回転ヘラ切り、底6.3	底部墨書「工」?
143	431	土師器壺か	胴上	D区5号溝跡、埋土	内外ナデか(摩耗)	外面赤色塗彩
144	411	須恵器坏	体下～底	D区5号溝跡、埋土	内外ロクロナデ、底部回転ヘラ切り、底70	底部縁辺再調整?
145	414	須恵器坏	体下～底	D区5号溝跡、埋土	内外ロクロナデ、底部回転ヘラ切り、底62	底部縁辺再調整
146	432	須恵器大甕	胴	D区5号溝跡、埋土	外タタキ、内アテグ	
147	417	須恵器甕	胴部	D区5号溝跡、埋土	外タタキ、内アテ具	
148	435	須恵器甕	胴	E区8号溝跡、埋土	外タタキ、内アテグ	
149	444	須恵器甕	胴	B区　P30、堆積土上位	内外ロクロナデ(一部カキメ様)	
150	447	須恵器薬壺	蓋	E区　P72、埋土	内外ロクロナデ、底57	
151	453	須恵器坏	体下～底	B区北側、検出面	内外ロクロナデ、底52	
152	455	須恵器甕	胴	B区、検出面	外タタキ、内アテグ	
153	454	須恵器大甕	胴	B区北～中央、検出面	外タタキ、内アテグ	
154	459	須恵器甕	胴	D区北側、盛土層	外タタキ、内アテグ	
155	460	須恵器大甕	胴	D区北側、盛土層	外タタキ、内アテグ	
156	461	須恵器甕	胴下～底	E区東側、検出面直上	外タタキ、内アテグ、底部ナデ・指押え、底106	内面褐色付着物

第19表　石器観察表

掲載番号	仮番号	種類	出土地点	計測値:cm・g				石材	特徴
				長さ	幅	厚さ	重量		
110	301	石鏃	A区南側、検出面	2.1	1.3	0.5	0.7	黒曜石	凸基有茎
111	302	石鏃	E区8号溝内	1.5	1.4	0.4	0.6	頁岩　奥羽山脈　新生代新第三紀	平基無茎
112	303	石鏃	C区堀					頁岩　奥羽山脈　新生代新第三紀	円基
113	1101	砥石	C区、表土	8.8	3.5	3.0	79.8	頁岩　奥羽山脈　新生代新第三紀	5面使用 細かい擦痕あり
114	1102	砥石	C区堀(大溝)	9.3	4.6	1.5	59.4	頁岩　奥羽山脈　新生代新第三紀	4面使用 細かい擦痕あり
157	1	削器	C区南東の角、Ⅲ層内	8.5	3.7	2.2	55.6	頁岩　北上山地　古～中生代	一側縁に連続する片側刃部調整
158	2	縦長剥片	C区東端、灰色粘土上面	7.5	4.6	1.3	26.8	頁岩　北上山地　古～中生代	
159	4	フレイク	C区南東の角、Ⅲ層内	6.9	4.2	1.8	44.8	頁岩　北上山地　古～中生代	
160	14	リタッチドフレイク	D区北側	8.1	3.3	0.9	24.0	頁岩　奥羽山脈　新生代新第三紀	

第19表　石器観察表(続き)

掲載番号	仮番号	種類	出土地点	計測値:cm・g				石材	特徴
				長さ	幅	厚さ	重量		
161	8	フレイク	C区東端(堀?)、黒色粘土	4.5	2.6	0.9	10.2	不明	
162	21	フレイク	調査区南東端、埋土	5.9	2.6	2.1	16.1	頁岩　北上山地　古～中生代	
163	3	フレイク	C区東端(堀?)、黒色粘土	5.2	8.8	5.2	50.6	頁岩　奥羽山脈　新生代新第三紀	
164	7	フレイク		2.4	2.9	1.2	4.0	頁岩　奥羽山脈　新生代新第三紀	
165	9	フレイク	C区東端(堀?)、黒色粘土	3.7	2.8	1.2	10.6	頁岩　奥羽山脈　新生代新第三紀	
166	5	フレイク	C区南東の角、Ⅲ層内	4.7	4.4	1.3	17.0	頁岩　北上山地　古～中生代	
167	15	リタッチドフレイク	1号堀、埋土	3.0	3.0	0.8	7.3	頁岩　奥羽山脈　新生代新第三紀	
168	13	フレイク	A区、検出面	3.8	4.0	1.0	8.7	頁岩　奥羽山脈　新生代新第三紀	
169	6	フレイク	C区南東の角、Ⅲ層内	4.6	4.6	1.5	17.6	頁岩　奥羽山脈　新生代新第三紀	
170	18	リタッチドフレイク	D区4号土坑、埋土	3.5	4.0	0.8	7.6	頁岩　北上山地　古～中生代	
171	17	フレイク	D区5号溝跡、埋土	6.1	5.0	1.3	32.2	頁岩　奥羽山脈　新生代新第三紀	
172	20	フレイク	調査区南東端、埋土	8.1	7.6	4.2	186.7	頁岩　北上山地　古～中生代	
173	10	磨石	旧-19	11.5	5.7	4.8	333.8	砂岩　北上山地　中～古生代	
174	12	磨石	旧15	11.6	6.7	5.7	530.8	デイサイト　奥羽山脈　新生代新第三紀	
175	19	磨石	C区西側	10.9	9.8	2.4	296.7	デイサイト　奥羽山脈　新生代新第三紀	黒色付着物あり
176	11	磨石	旧-23	11.7	4.8	4.7	276.1	安山岩　奥羽山脈　新生代新第三紀	

第20表　動物・植物遺体観察表

掲載番号	仮番号	種類	出土地点	計測値:cm・g			
				長さ	幅	厚さ	重量
177	1322	獣骨(馬)	C4堀　西埋土上位	−	−	−	
178	1323	獣骨(馬)	C区5号堀　埋土	−	−	−	
179	1203	獣歯(馬)	C区堀	4.7	3.0	2.2	31.1
180	1324	獣骨(馬)	堀(大溝)	−	−	−	
181	1325	獣骨(馬)	堀	−	−	−	
182	1201	獣歯(馬)	E区東側、検出面直上	5.8	3.6	1.5	23.6
183	1326	獣骨(馬)	C区東側	−	−	−	
184	1327	獣骨(馬)	C区西側	−	−	−	
185	1202	二枚貝(鑑定結果入る)	D区北側、盛土層	3.4	2.7	1.0	1.7
186	1301	種子(鑑定結果入る)	2号住居跡、堆積土上位	−	−	−	2.2
187	1302	種子(鑑定結果入る)	A区南側T1、褐灰粘土底面	−	−	−	1.1
188	1303	種子(鑑定結果入る)	A区南側T2、褐灰粘土上位	−	−	−	0.5
189	1304	種子(鑑定結果入る)	A区南側T4、褐灰粘土底面	−	−	−	0.6
190	1306	種子(鑑定結果入る)	B区、検出面	−	−	−	3.5
191	1307	種子(鑑定結果入る)	B区、検出面	−	−	−	1.4
192	1308	種子(鑑定結果入る)	D区4号土坑、埋土	−	−	−	0.8
193	1310	種子(鑑定結果入る)	D区5号溝跡、埋土	−	−	−	0.5
194	1312	種子(鑑定結果入る)	E区北側、検出面直上	−	−	−	3.6
195	1313	種子(鑑定結果入る)	E区北側、検出面直上	−	−	−	1.0
196	1314	種子(鑑定結果入る)	F区遺構外北側、レキ層(床土より上)	−	−	−	0.1
197	1316	種子(鑑定結果入る)	堀、埋土	−	−	−	0.1
198	1317	種子(鑑定結果入る)	堀、埋土	−	−	−	2.2
199	1318	種子(鑑定結果入る)	堀、埋土	−	−	−	2.0
200	1320	種子(鑑定結果入る)	C区堀	−	−	−	1.2
201	1321	種子(鑑定結果入る)	堀(大溝)	−	−	−	
202	1319	葉(鑑定結果入る)	遺物№3	−	−	−	−

Ⅵ　自然科学分析

1　放射性炭素年代測定

八反町遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

八反町遺跡は、岩手県奥州市前沢区古城字南八反47番地１ほかに所在する。測定対象試料は､SX2埋土出土木片（63：IAAA-112765)、SX3埋土出土木片（59：IAAA-112766）の合計２点である（表１)。

2　測定の意義

遺構の時期決定の一助とする。

3　化学処理工程

（1）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

（2）酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/?（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

（3）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（4）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（5）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し､グラファイト(C)を生成させる。

（6）グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4　測定方法

加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し､^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C)、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

（1）δ^{13}C は、試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（2）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され､1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977)。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また､^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

（3）pMC（percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。

（4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は、14C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

6　測定結果

試料の^{14}C年代は、SX02埋土の63が^{s}890±20yrBP、SX03埋土の59が1100±20yrBPである。暦年較正年代（1σ）は、63が1053～1208cal AD、59が^{s}899～986cal ADの間に各々２つの範囲で示される。

試料の炭素含有率はいずれも50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

表１　[#4918]

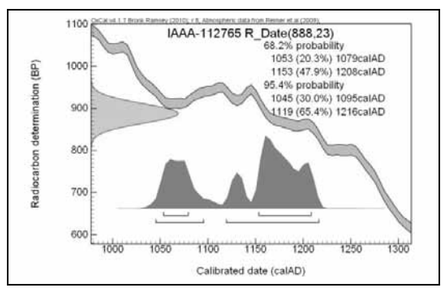
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C (‰) (AMS)	δ^{13}C 補正あり Libby Age（yrBP）	δ^{13}C 補正あり pMC (%)
IAAA-112765	63（仮番 92）	SX２　埋土	木片	AAA	**-30.74 ± 0.79**	**890 ± 20**	**89.53 ± 0.27**
IAAA-112766	59（仮番 268）	SX３　埋土	木片	AAA	**-27.92 ± 0.75**	**1,100 ± 20**	**87.25 ± 0.25**

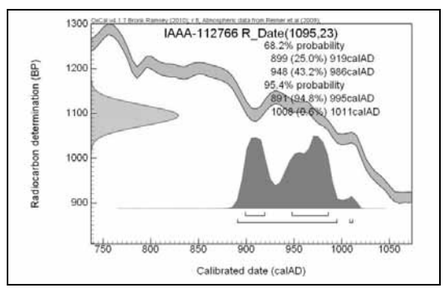
表２　[参考値]

測定番号	δ^{13}C 補正なし Age（yrBP）	δ^{13}C 補正なし pMC（%）	暦年較正用(yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
IAAA-112765	980 ± 20	88.47 ± 0.22	888 ± 23	1053calAD - 1079calAD (20.3%) 1153calAD - 1208calAD (47.9%)	1045calAD - 1095calAD (30.0%) 1119calAD - 1216calAD (65.4%)
IAAA-112766	1,140 ± 20	86.73 ± 0.21	1,095 ± 23	899calAD - 919calAD (25.0%) 948calAD - 986calAD (43.2%)	891calAD - 995calAD (94.8%) 1008calAD - 1011calAD (0.6%)

文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363
Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150





[参考]暦年較正年代グラフ

中畑城跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

中畑城跡は、岩手県奥州市前沢区古城字水上西88番地ほかに所在する。測定対象試料は、４号堀跡埋土出土木片(61：IAAA-112763)、A区堀跡埋土出土木片(94：IAAA-112764)の合計２点である(表１)。

2　測定の意義

遺構の時期決定の一助とする。

3　化学処理工程

（1）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

（2）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/?（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

（3）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（4）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（5）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイト(C)を生成させる。

（6）グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

（1）δ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（2）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977)。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

（3）pMC（percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。

（4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

6　測定結果

試料の^{14}C年代は、4号堀跡埋土の61が400±20yrBP、A区堀跡埋土の94が420±30yrBPである。暦年較正年代（1σ）は、61が1446～1485cal AD、94が1439～1472cal ADの範囲で示される。

試料の炭素含有率はいずれも50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

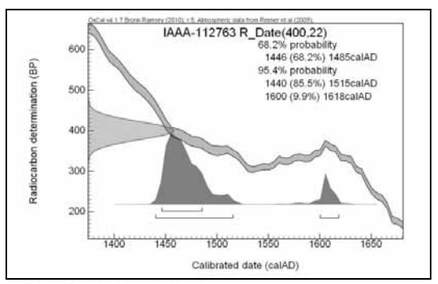
Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363
Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150

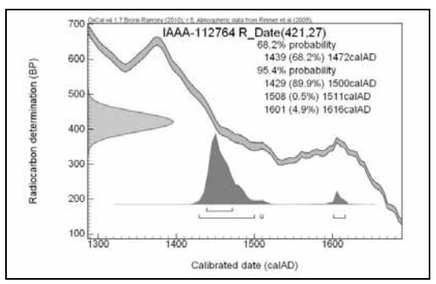
表３　[#4917]

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C (‰) (AMS)	δ ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC (%)
IAAA-112763	61（仮番 920）	４号堀跡　埋土	木片	AAA	**-27.66 ± 0.57**	**400 ± 20**	**95.13 ± 0.27**
IAAA-112764	94（仮番 905）	A 区堀跡　埋土	木片	AAA	**-31.90 ± 0.96**	**420 ± 30**	**94.89 ± 0.32**

表４　[参考値]

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-112763	440 ± 20	94.61 ± 0.24	400 ± 22	1446calAD - 1485calAD (68.2%)	1440calAD - 1515calAD (85.5%) 1600calAD - 1618calAD (9.9%)
IAAA-112764	540 ± 20	93.55 ± 0.26	421 ± 27	1439calAD - 1472calAD (68.2%)	1429calAD - 1500calAD (89.9%) 1508calAD - 1511calAD (0.5%) 1601calAD - 1616calAD (4.9%)





[参考]暦年較正年代グラフ

２　花　粉　分　析

八反町遺跡の花粉分析

吉川昌伸（古代の森研究舎）

１．はじめに

八反町遺跡は、奥州市前沢区古城地区にあり、北上川の右岸側で扇状地の末端付近に立地している。本遺跡では古代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、藤原氏と同時期に形成された12世紀後半の溝跡などが確認されている。ここでは、12世紀後半頃の溝内と周辺の植生及び生業を解明することを目的に花粉化石を調査した。

２．試料と分析方法

花粉分析試料は、SX2の４層（H1）と、SX3南ベルト４層（H2）の２試料である。堆積物は、SX2の４層が灰色細粒砂質シルト、SX3の４層はオリーブ灰色細粒砂質シルトからなる。

花粉化石の抽出は、試料約1.5gを秤量し体積を測定後に10%KOH（湯煎約15分）、傾斜法と篩分（0.25㎜の篩）により砂と大型の植物遺体を取り除き、48%HF（約15分）、重液分離（比重2.15の臭化亜鉛）、アセトリシス処理（濃硫酸１：無水酢酸９の混液で湯煎５分）の順に処理を行った。プレパラート作製は、残渣を適量に希釈しタッチミキサーで十分撹拌後、マイクロピペットで取り重量を測定（感量0.1mg）しグリセリンで封入した。また、堆積物の性質を調べるために、有機物量、シルト以下の細粒成分、砂分量、及び生業の指標となる微粒炭量について調査した。有機物量については強熱減量を測定した。強熱減量は、電気マッフル炉により750℃で３時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。微粒炭量は、デジタルカメラでプレパラートの顕微鏡画像を取り込み、画像解析ソフトのImageJで75μ㎡より大きいサイズの微粒炭の積算面積を計測した。

３．結　　果

花粉分析試料の堆積物の特性を表１に示す。堆積物は、２試料ともおおむね同様な特性を示し、シルト以下の細粒成分を主とし有機物を12～13%といく分多く含む（表１）。

表１　八反町遺跡の分析試料の堆積物の特性（重量％）

試料	遺構	堆積物の特徴	砂	シルト～粘土	強熱減量（有機物量）
H1	SX2-4層	灰色細粒砂質シルト	17.8	69.2	13.0
H2	SX3-4層	オリーブ灰色細粒砂質シルト	11.6	76.7	11.7

出現した分類群のリストとその個数を表２に、主要花粉分布図を図１に示す。出現率は、樹木は樹木花粉数、草本胞子は花粉胞子数を基数として百分率で算出した。図表中で複数の分類群をハイフンで結んだのは、分類群間の区別が明確でないものである。また、クワ科やバラ科で樹木と草本の区別が出来ない分類群は草本花粉としてまとめた。

花粉化石群の組成は、SX2の４層（H1）では、針葉樹のスギと落葉広葉樹のコナラ亜属が比較的高率で出現し、クリ、ケヤキ型、ブナ、ハンノキ属、ヤナギ属などやつる植物のブドウ属などが出現している。草本では、ヨモギ属とアサ属－カナムグラ属が比較的多く占め、アサ型やアカザ科の頻度がいく分高い。また、イネ科（イネ型）や水生植物のスブタ属－ミズオオバコ属、イボクサ属、ミズアオイ属が出現し、ソバ属も僅かに検出される。微粒炭量は1128 ㎟/㎤と多い。

表２　八反町遺跡より出現した花粉化石の一覧表

和　名	学　名	SX2 H1	SX3 H2
樹　木			
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	3	2
スギ	*Cryptomeria japonica* (L.fil.)D.Don	30	10
ヤナギ属	*Salix*	4	12
サワグルミ属	*Pterocarya*	-	1
クルミ属	*Juglans*	1	1
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	-	1
ハシバミ属	*Corylus*	-	1
カバノキ属	*Betula*	3	1
ハンノキ属	*Alnus*	6	7
ブナ	*Fagus crenata* Blume	6	14
イヌブナ	*Fagus japonica* Maxim.	1	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	27	30
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	-	2
クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	8	7
ニレ属	*Ulmus*	-	1
ケヤキ型	*Zelkova serrata* type	6	3
カツラ属	*Cercidiphyllum*	1	1
ウルシ	*Toxicodendron vernicifluum* (Stokes) F.A.Barkley	1	-
カエデ属	*Acer*	-	2
トチノキ	*Aesculus turbinata* Blume	2	1
クロウメモドキ科	Rhamnaceae	-	1
ブドウ属	*Vitis*	4	-
ウコギ科	Araliaceae	3	-
トネリコ属	*Fraxinus*	-	1
草　本			
ミクリ属	*Sparganium*	2	-
オモダカ属	*Sagittaria*	-	6
スブタ属－ミズオオバコ属	*Blyxa - Ottelia*	1	1
イネ科（イネ型）	Gramineae (*Oryza* type)	46	75
イネ科（野生型）	Gramineae (Wild type)	33	30
カヤツリグサ科	Cyperaceae	13	19
ホシクサ属	*Eriocaulon*	-	2
ツユクサ属	*Commelina*	1	1
イボクサ属	*Aneilema*	2	3
ミズアオイ属	*Monochoria*	1	8
アサ型	*Cannnabis sativa* type	25	4
カナムグラ属	*Humulus*	22	1
アサ属－カナムグラ属	*Cannabis - Humulus*	106	5
クワ科－イラクサ科	Moraceae - Urticaceae	2	-
ギシギシ属	*Rumex*	1	-
イヌタデ属	*Persicaria*	7	2
ソバ属	*Fapopyrum*	4	2
アカザ科	Chenopodiaceae	51	23
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiacea - Amaranthaceae	11	2
ナデシコ科	Caryophyllaceae	7	5
キンポウゲ科	Ranunculaceae	-	1
アブラナ科	Cruciferae	6	3
バラ科	Rosaceae	4	2
ミソハギ属	*Lythrum*	-	1
アリノトウグサ属	*Haloragis*	-	1
セリ科	Umbelliferae	6	4
シソ科	Labiatae	1	-
ゴマ	*Sesamumu indicum* L.	-	1
オオバコ属	*Plantago*	1	1
ヨモギ属	*Artemisia*	199	87
オナモミ属	*Xanthium*	5	-
他のキク亜科	other Tubuliflorae	2	7
タンポポ亜科	Liguliflorae	1	7
シダ植物			
単条型胞子	Monolete spore	7	13
三条型胞子	Trilete spore	2	4
他のパリノモルフ			
回虫（寄生虫卵）	*Ascaris*	1	-
鞭虫（寄生虫卵）	*Trichuris*	-	1
樹木花粉	Arboreal pollen	106	99
草本花粉	Nonarboreal pollen	560	304
シダ植物胞子	Fern spores	9	17
花粉・胞子数	Pollen and Spores	675	420
不明花粉	Unknown pollen	8	6
樹木花粉量（粒/cm^3）		2680	2190
微粒炭量（mm^2/cm^3）		1128	508

SX3の４層（H2）では、コナラ亜属が高率を占め、ブナ、ヤナギ属、ハンノキ属、クリなどが比較的多く出現する。草本ではヨモギ属とイネ科（イネ型）が比較的高率で占め、カヤツリグサ科と水生植物のオモダカ属、ミズオオバコ属、イボクサ属、ミズアオイ属が出現し、ソバ属やゴマ、アサ型が僅かに検出される。微粒炭量は308 mm²/cm³と少ない。

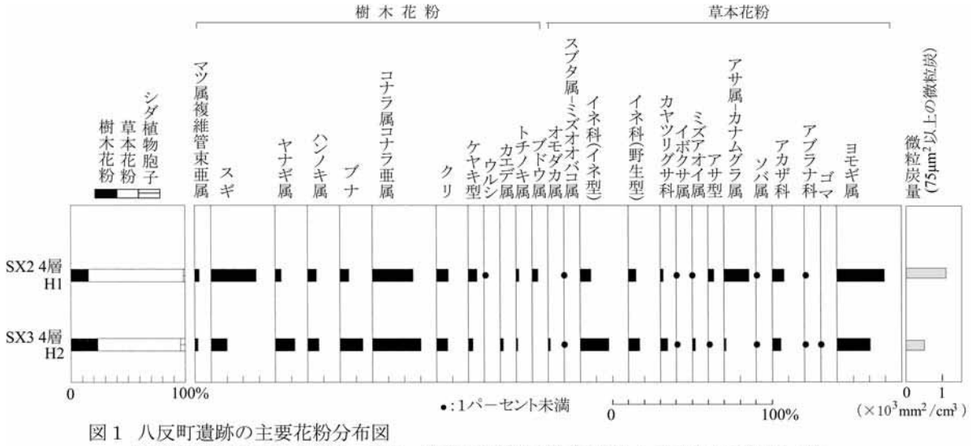


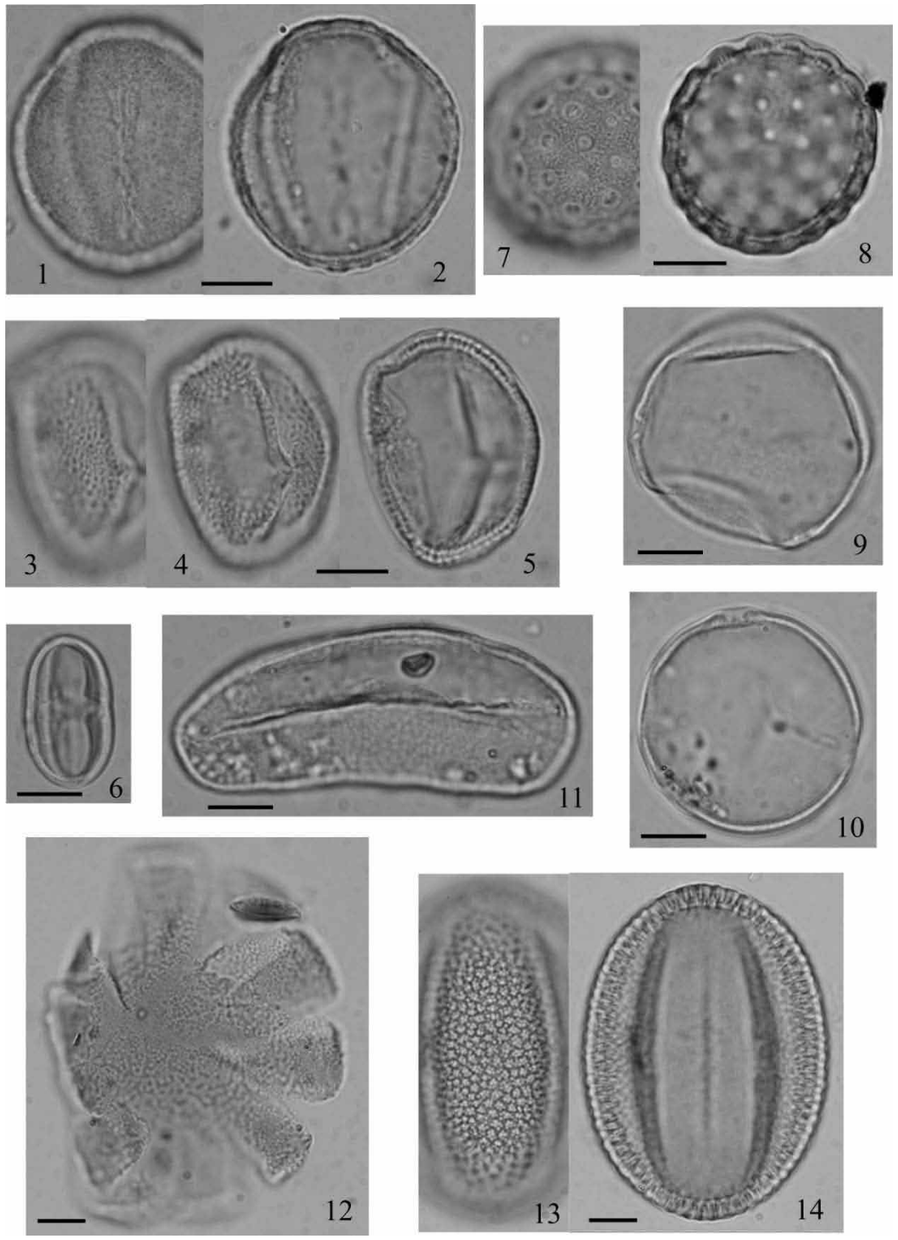
図１　八反町遺跡の主要花粉分布図
（出現率は樹木は樹木花粉数、草本・胞子は花粉胞子数を基数として百分率で算出した）

４．考　　察

SX2とSX3の各４層の花粉化石群は、同様な植物の分類群から構成される。SX2のスギの頻度が高いため相対的に他の分類群の頻度が低くなっているとみれば、スギを除く花粉組成はSX3とおおむね同様であると考えられる。さらに、樹木花粉の比率が16～24％と低いことから周辺の樹木は疎林、あるいは林分が点在していた可能性がある。また、クリが７～８％と虫媒花粉としては比較的高い頻度で出現している。クリ花粉は、クリ林の周囲に落葉広葉樹林が広がっている地点においては、樹木花粉比率はクリ純林内で30％以上、林内に約25m以上入った中央部で約60％以上を占め、クリ林から離れると急減し、風下側の樹冠縁から約20mで５％以下、約200mでは１％以下とクリ花粉の散布範囲が狭いことが明らかになっている(吉川、2011)。さらに、クリ林からの距離とクリ花粉量の関係からも散布範囲が狭いことが明らかになっている(未公表)。つまり、周辺にはクリや落葉広葉樹のコナラ亜属などが分布し、針葉樹のスギや落葉広葉樹のブナやハンノキ属、ヤナギ属はより離れた所に分布していたと推測される。クリ個体は分析地点より約20mの範囲にあった可能性が高い。また、溝内にはイネやオモダカ属、スブタ属－ミズオオバコ属、イボクサ属、ミズアオイ属などの抽水植物が生育し、溝の周辺は日当たりのよい開けた環境にあり、そこにはヨモギ属やつる草のカナムグラ属などが繁茂していたと考えられる。さらに、周辺ではウルシやソバ、アサ、ゴマなども栽培されていたと推測される。

引用文献

吉川昌伸．2011．クリ花粉の散布と三内丸山遺跡周辺における縄文時代のクリ林の分布状況．植生史研究，18：65-76



図版1　八反町遺跡から出現した花粉化石の顕微鏡写真
1-2:コナラ亜属，SX2，AFR.MY 2090．3-5:ウルシ，SX2，AFR.MY 2096．6:クリ，SX2，AFR.MY 2093．7-8:アカザ科，SX2，AFR.MY 2088．　9:アサ型，SX2，AFR.MY 2091．10:カナムグラ属，SX2，AFR.MY 2094．11:ミズアオイ属，SX2，AFR.MY 2090．　12：ゴマ，SX3，AFR.MY 2115．　13-14:ソバ属，SX2，AFR.MY 2095．　スケール= 10μm

中畑城跡の堀内堆積物の花粉分析

吉川昌伸（古代の森研究舎）

１．はじめに

中畑城跡は、奥州市前沢区古城地区にあり、現在、周辺には水田が広がりその中で周囲より少し高い所に立地している。本城跡は出土遺物から16世紀後半（戦国時代）の城館であることが明らかになっている。中畑城跡では、一曲輪及び二曲輪を区切る内堀と、二曲輪の外側を巡る外堀が発見されている。ここでは、16世紀後半の城と周辺の植生及び生業を解明することを目的に堀内堆積物の花粉化石を調査した。

２．試料と分析方法

花粉分析試料は、C-5堀西の埋土下層（N1）と、C-4堀中～西の埋土下層（N2）の２試料である。堆積物は、C-5埋土下層が灰オリーブ色細粒砂質シルト、C-4埋土下層は灰オリーブ色細粒砂質シルトからなる。

花粉化石の抽出は、試料約２gを秤量し体積を測定後に10％KOH(湯煎約15分)、傾斜法と篩分(0.25㎜の篩）により砂を取り除き、48％HF（約15分)、重液分離（比重2.15の臭化亜鉛)、アセトリシス処理（濃硫酸１:無水酢酸９の混液で湯煎５分）の順に処理を行った。プレパラ－ト作製は、残渣を適量に希釈しタッチミキサ－で十分撹拌後、マイクロピペットで取り重量を測定（感量0.1mg）しグリセリンで封入した。また、堆積物の性質を調べるために、有機物量、シルト以下の細粒成分、砂分量、及び生業の指標となる微粒炭量について調査した。有機物量については強熱減量を測定した。強熱減量は、電気マッフル炉により750℃で３時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。微粒炭量は、デジタルカメラでプレパラ－トの顕微鏡画像を取り込み、画像解析ソフトのImageJで75μ㎡より大きいサイズの微粒炭の積算面積を計測した。

３．結　　果

花粉分析試料の堆積物の特性を表１示す。C-5とC-4堀内下層堆積物は、２試料ともシルト以下の細粒成分を主とするが、C-4が相対的に砂分少なく有機物量が多い（表１)。

表１　中畑城跡の分析試料の堆積物の特性(重量％)

試料	遺構	堆積物の特徴	砂	シルト～粘土	強熱減量(有機物量)
N1	C-5堀西(埋土下層)	灰オリーブ色細粒砂質シルト	16.3	74.3	9.4
N2	C-4堀中～西(埋土下層)	灰オリーブ色シルト	7.9	80.4	11.7

出現した分類群のリストとその個数を表２に、主要花粉分布図を図１に示す。出現率は、樹木は樹木花粉数、草本胞子は花粉胞子数を基数として百分率で算出した。図表中で複数の分類群をハイフンで結んだのは、分類群間の区別が明確でないものである。また、クワ科やバラ科で樹木と草本の区別が出来ない分類群は草本花粉としてまとめた。

花粉化石群の組成は、C-5堀西埋土下層（N1）では、優占する分類群はなく落葉広葉樹のヤナギ属、クリ、ブナ、ハンノキ属、コナラ亜属と、針葉樹のスギの頻度が比較的高く、クマシデ属－アサダ属、ケヤキ型、カエデ属などを伴う。草本ではイネ科（イネ型）が比較的高率で出現し、水生植物のサジオモダカ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、キカ

表２　中畑城跡より出現した花粉化石の一覧表

和　　名	学　　名	C-5 N1	C-4 N2
樹　木			
マツ属単維管束亜属	*Pinus* subgen. *Haploxylon*	2	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	6	-
スギ	*Cryptomeria japonica* (L.fil.)D.Don	12	23
イチイ科－ヒノキ科－イヌガヤ科	Taxaceae - Cupressaceae - Cephalotaxaceae		
ヒノキ型	*Chamaecyparis* type	-	1
ヤナギ属	*Salix*	18	58
サワグルミ属	*Pterocarya*	-	3
クルミ属	*Juglans*	2	1
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	4	5
ハシバミ属	*Corylus*	-	2
カバノキ属	*Betula*	4	1
ハンノキ属	*Alnus*	10	11
ブナ	*Fagus crenata* Blume	11	16
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	9	36
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	1	-
クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	17	30
シイノキ属	*Castanopsis*	-	2
ケヤキ型	*Zelkova serrata* type	5	4
ヌルデ	*Rhus javanica* var. *roxburghii*	1	6
カエデ属	*Acer*	2	-
トチノキ	*Aesculus turbinata* Blume	-	1
ブドウ属	*Vitis*	-	4
ウコギ科	Araliaceae	2	6
ミズキ属	*Cornus*	-	1
ニワトコ属	*Sambucus*	1	5
草　本			
ガマ属	*Typha*	-	2
ヒルムシロ属	*Potamogeton*	-	13
サジオモダカ属	*Alisma*	3	1
オモダカ属	*Sagittaria*	7	12
イネ科（イネ型）	Gramineae (*Oryza* type)	161	76
イネ科（野生型）	Gramineae (Wild type)	42	26
カヤツリグサ科	Cyperaceae	15	19
ホシクサ属	*Eriocaulon*	-	2
ツユクサ属	*Commelina*	5	1
イボクサ属	*Aneilema*	3	-
ミズアオイ属	*Monochoria*	9	21
カナムグラ属	*Humulus*	2	2
アサ属－カナムグラ属	*Cannabis - Humulus*	5	13
クワ科－イラクサ科	Moraceae - Urticaceae	1	1
イヌタデ属	*Persicaria*	6	-
ソバ属	*Fapopyrum*	6	2
アカザ科	Chenopodiaceae	38	10
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiacea - Amaranthaceae	11	4
ナデシコ科	Caryophyllaceae	13	2
アブラナ科	Cruciferae	6	11
バラ科	Rosaceae	-	4
ツリフネソウ属	*Impatiens*	1	1
キカシグサ属	*Rotala*	3	1
アリノトウグサ属	*Haloragis*	-	1
セリ科	Umbelliferae	1	2
オオバコ属	*Plantago*	1	1
ホタルブクロ属－ツリガネニンジン属	*Campanula - Adenophora*	1	-
ヨモギ属	*Artemisia*	112	56
他のキク亜科	other Tubuliflorae	6	4
タンポポ亜科	Liguliflorae	5	2
シダ植物			
ゼンマイ属	Osmunda	1	-
他のシダ植物胞子	other Pteridophyta	45	13
他のパリノモルフ			
鞭虫（寄生虫卵）	*Trichuris*	-	5
樹木花粉	Arboreal pollen	107	216
草本花粉	Nonarboreal pollen	463	290
シダ植物胞子	Fern spores	46	13
花粉・胞子数	Pollen and Spores	616	519
不明花粉	Unknown pollen	9	22
樹木花粉量（粒/cm^3）		990	4640
微粒炭量（mm^2/cm^3）		424	208

シグサ属を伴う。また、ヨモギ属やイネ科(野生型)、アカザ科、ソバ属などが出現している。微粒炭量は424mm²/cm³といく分多く含まれる。

C-4堀中央から西の埋土下層では、ヤナギ属が比較的高率で出現し、他の樹木花粉の出現傾向はC-5とおおむね同様で、コナラ亜属やクリ、ブナ、スギの頻度が比較的高い。草本花粉もC-5に比較してイネ科（イネ型）の出現率が相対的に低いものの他の分類群の出現傾向は類似し、ヒルムシロ属やサジモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属などの多種の水生植物が出現する。微粒炭量は208mm²/cm³と少量含まれる。

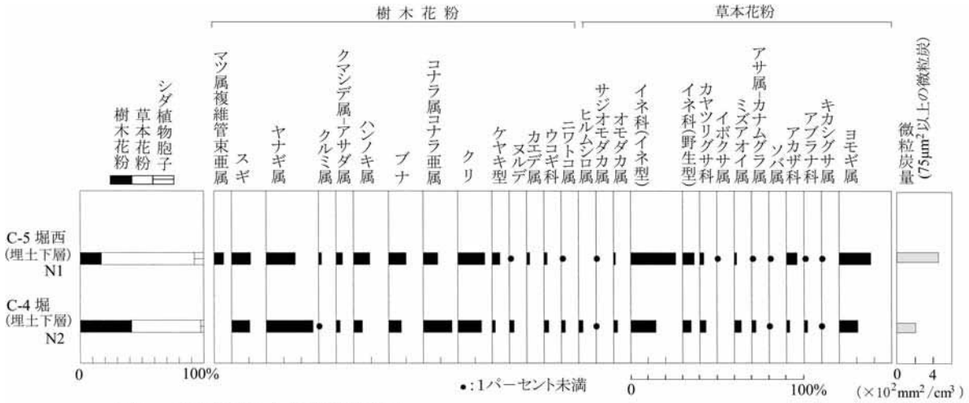


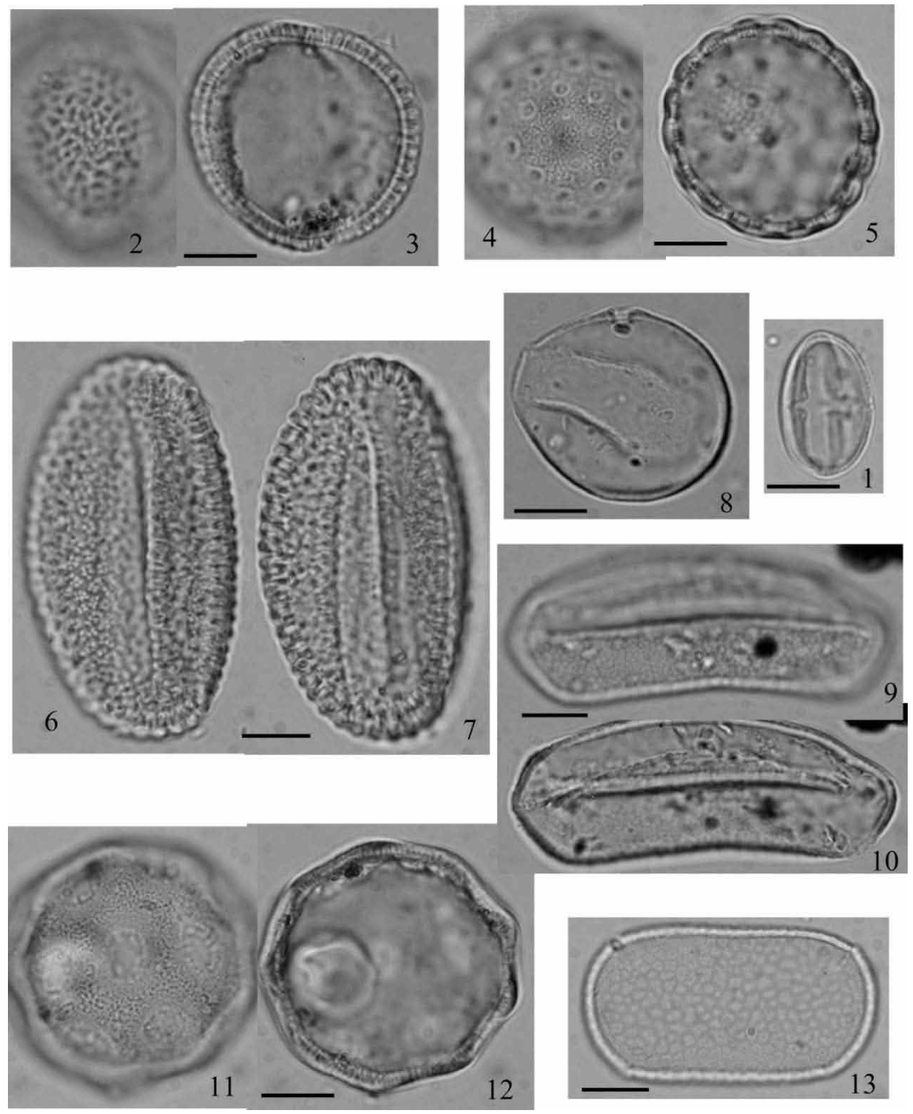
図１　中畑城跡の主要花粉分布図
（出現率は樹木は樹木花粉数、草本・胞子は花粉胞子数を基数として百分率で算出した）

４．考　　察

C-5とC-4の２地点の堀内堆積物下層から出現した花粉組成は類似し、特に虫媒のクリ花粉の頻度が14～16％と比較的高い特徴がある。クリ花粉は、クリ林の周囲に落葉広葉樹林が広がっている地点においては、樹木花粉比率はクリ純林内で30％以上、林内に約25m以上入った中央部で約60％以上を占め、クリ林から離れると急減し、風下側の樹冠縁から約20mで５％以下、約200mでは１％以下とクリ花粉の散布範囲が狭いことが明らかになっている（吉川、2011）。さらに、空中花粉と落下花粉数がクリ林から約15m以内で急減することが明らかになっている(未公表)。中畑城跡のC-5とC-4の２地点間の距離は不明であるが、少なくとも分析地点の約５m以内にはクリの樹冠が広がっていたと考えられる。さらに２地点で花粉頻度が比較的高いヤナギ属も堀周辺に生育していた可能性がある。また、樹木花粉の比率が低いため、城の周辺は疎林ないし小林分が点在していたと推測され、落葉広葉樹のコナラ亜属やブナ、針葉樹のスギなどは分析地点から離れた所に分布していたと推測される。一方で、堀内にはイネや抽水植物のサジオモダカ属やオモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、キカシグサ属が繁茂し、C-4では枕水ないし浮葉植物のヒルムシロ属も繁茂していた。また、堀の外には日当たりのよい開けた場所があり。そこにはヨモギ属などが生え、周辺ではソバ栽培も行われていた可能性がある。

引用文献

吉川昌伸．2011．クリ花粉の散布と三内丸山遺跡周辺における縄文時代のクリ林の分布状況．植生史研究，18：65-76.



図版1　中畑城跡から出現した花粉化石の顕微鏡写真
1-2:クリ，C-4，AFR.MY 2102.　2-3:アブラナ科，C-4，AFR.MY 2101. 4-5:アカザ科，C-5，AFR.MY 2098. 6-7:ソバ属，C-4，AFR.MY 2097.　8:カナムグラ属，C-4，AFR.MY 2103. 9-10:ミズアオイ属，C-5，AFR.MY 2100.　11-12：サジオモダカ属，C-5，AFR.MY 2099.　13:ツリフネソウ属，C-4，AFR.MY 2104.　スケール= 10μm

3　種子・種実同定

八反町遺跡から出土した大型植物化石

吉川純子（古代の森研究舎）

１.はじめに

八反町遺跡は奥州市前沢区古城地区に位置し、12世紀後半藤原氏と同時期の堀や溝、井戸跡などの遺構が検出されている。これらの遺構からは種実等の大型植物化石が出土し、当時の植物資源利用状況及び周辺の古環境を推測する目的で大型植物化石の同定をおこなった。分析に充てた試料は発掘担当者により現地取り上げないし水洗選別して得られた計20試料である。大型植物化石は肉眼ないし実体顕微鏡で観察・同定した。

２.同定結果

出土した大型植物化石の同定結果を表１及び表２に示す。以下に特筆すべき分類群の記載を行う。

表1 八反町遺跡出土大型植物化石(1)

	遺構	SX-2								
	位置	北東区	北東区	南西区	南ベルト	北西区	南ベルト	南ベルト	ベルト北	ベルト内
	層位	3層埋土下	3層埋土上	底面	3層	埋土上部	2層	2層	4層	5号
分類群	出土部位＼番号	90	91	92	93	94	95	96	97	98
オニグルミ	内果皮半分割痕	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	内果皮半分風化	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モモ	核完形	1	1	-	2	-	-	-	1	-
	核完形風化	-	-	3	1	-	1	-	1	-
	核半分	-	-	1	-	1	-	-	1	1
カナムグラ	種子	-	-	-	-	-	-	3	-	-

	遺構	SI-3			SX-3	SE-1	-
	位置	南東区	南西部	北西区	中央東側	-	C区南端
	層位	底面	埋土上部	埋土上部	埋土	埋土上部	To-a上
分類群	出土部位＼番号	87	88	89	101	103	104
オニグルミ	内果皮半分割痕	-	-	-	1	-	1
	内果皮半分風化	-	-	1	-	-	-
モモ	核完形	-	-	1	-	-	1
	核完形風化	-	1	-	-	1	-
	核半分	2	5	6	-	-	-
カナムグラ	種子	-	-	-	-	-	-

ハシバミ属：果実は完形であれば円錐形あるいは楕円球形で基部は果実長の３分の１程度と大変大きく果皮との境目に段差があり、境目から基部に向かって鋸歯状に平滑な面が伸びる場合が多い。本遺跡では境目を含む小破片を出土した。ハシバミ属には低地に生育するツノハシバミと高山に生育するハシバミがあるが、破片では両者の区別がつかない。

アサ：核は円形で２面、へそは盤状でやや白く表面は平滑で薄く脈状の模様がある。

ダイズ属：炭化した種子(子葉)は楕円球形でへそが種子長の３分の１程度でほぼ真ん中に位置し、ササゲ属に見られるスポンジ状厚膜が剥がれた痕跡がない。

ササゲ属：炭化した種子は楕円形でへそは種子長の２分の１程度でやや一方に偏り、スポンジ状の厚膜が剥がれた痕跡でへその中央の筋が隠れている。

マメ科：炭化焼け膨れしていてへそや表面の細かい観察ができなかった種子はマメ科とした。

ウリ科：カボチャ属の種子に似るが風化のためか縁と基部の形態がはっきりしない。

ベニバナ：果実は四角錐を一方に湾曲させた形態で果皮が白っぽくて堅く厚く先端は丸みを帯びる。

ヒメビシ：果実は約２㎝、変形菱形で左右に２本細長く伸びた刺状突起があり、前後に２本小さい刺状突起がある。ヒシ属の形態は水域ごとに変異が激しく様々な形態がある。

コウホネ属：種子は倒卵形で基部は平坦、表面は光沢があり微小な多角形の網目模様がある。ヒシ属と同様に水域ごとに変異が多い。

オニバス：種子は球形で一端がやや突出し、大きな特徴として楕円形のへその隣に円形の珠孔が並んである。表面は平滑で光沢がない。オニバスの1975年時点の北限は宮城県遠田郡田尻町（大滝1980）であるが、本遺跡から出土したことで12世紀の岩手県奥州市には普通に生育していたことが確認された。

イボクサ：出土種子は破片であるが、完形は楕円形あるいは食パン形で扁平膜状、表面は微細な蝋質の網目があり、濃色で筋状のへそが中央にある。

表2 八反町遺跡出土大型植物化石(2)

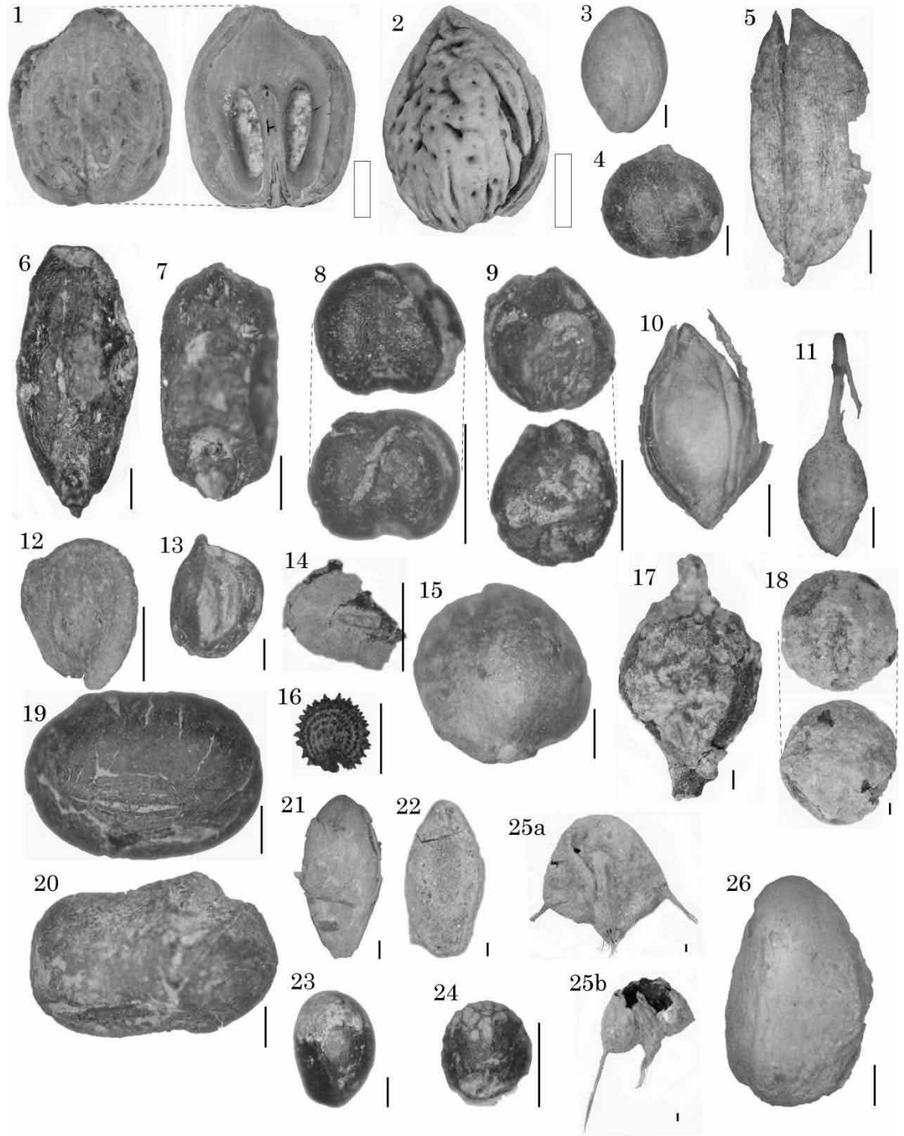
	遺構	SX-2	SX-2	SX-3	堀	堀
	位置			南ベルト中央	C区	C区内側
	層位	5層	3層	4層		
分類群	出土部位＼番号	99	100	102	105	106
利用植物						
ハシバミ属	果皮破片	-	-	-	-	(1)
モモ	核破片	1	-	-	-	-
イネ	穎	-	-	-	-	2
	炭化胚乳	-	7	2	(1)	2
オオムギ	炭化種子	-	1	-	-	-
コムギ	炭化種子	2	1	-	1	-
アワ	炭化種子	-	1	-	-	-
ヒエ	穎	-	-	-	-	1
	炭化種子	-	2	-	-	1
アサ	核	-	-	2	-	2
ダイズ属	炭化種子	-	-	-	2	-
ササゲ属	炭化種子	-	-	-	1	-
マメ科	炭化種子	-	3	2	6	-
メロン仲間	種子	-	-	-	2	-
ウリ科	種子	-	-	-	1	-
ベニバナ	果実	-	-	-	-	1
沈水植物						
ヒルムシロ属	果実	-	-	-	-	1
浮水植物						
ヒメビシ	果実	-	-	-	2(2)	-
ヒシ属	果実	-	-	-	-	(1)
抽水植物						
コウホネ属	種子	-	-	-	-	4
オニバス	未熟果	-	-	-	-	1
	種子	-	-	-	198	-
ヘラオモダカ	果実	-	-	1	-	-
ミクリ属	果実	-	-	-	-	1
ホタルイ属	果実	1	-	51	3	30
湿性植物						
イボクサ	種子	-	-	1	-	-
イシミカワ	果実	-	-	-	-	4
ヤナギタデ	果実	4	2	8	-	6
その他木本						
針葉樹	雄花序	-	-	-	-	6
	冬芽	-	-	-	-	42
サクラ属	核	-	-	-	1	4
ブドウ属	種子	-	1	(1)		8
ノブドウ	種子	1	-	-	2	19
クマヤナギ属	内果皮	-	-	-	-	2
バラ科	刺状突起	1	-	3	1	20
木本	芽	-	-	-	2	-
	炭化芽	-	-	-	1	-
その他草本						
エノコログサ属	穎	-	-	-	-	1
カナムグラ	種子	3	4	-	-	-
ヒユ属	種子	17	42	94	17	41
ハコベ属	種子	-	2	-	2	3
マンテマ属	種子	-	3	-	-	3
ギシギシ属	果実	1	-	-	-	1
ハナタデ近似種	果実	4	-	8	1	-
サナエタデ近似種	果実	11	-	73	4	5
イヌタデ属	炭化果実	1	-	-	-	-
キケマン属	種子	1	-	-	-	-
アカネ属	種子	1	-	-	-	-
スミレ属	種子	-	-	-	(1)	-
カタバミ属	種子	-	-	-	-	1
エノキグサ	種子	-	2	-	-	-
イヌコウジュ属	果実	-	-	13	-	2
不明	果実	-	-	-	-	4

八反町遺跡の溝や堀などからはモモ、利用痕跡が残るオニグルミや炭化したイネ、オオムギ、コムギ、アワ、ヒエなどが検出され、少量であるがアサやベニバナなども出土した。一方で各遺構からはミクリ属やヘラオモダカなど湿地性の植物が、特に堀からはオニバスやコウホネ属、ヒルムシロ属やヒメビシなどある程度水深がある場所に生育する種類を多く出土した。こうしたことから様々な水生植物が生育する堀などに不要物を廃棄していたかあるいは生活排水が比較的多く流れ込んでいた。

本遺跡のSX-2からは水生植物は出土しなかったがホタルイ属とヤナギタデを出土することから地下水位が高く湿った環境であると言える。ここではイネ、オオムギ、コムギ、アワ、ヒエなどの利用後の種実が多く検出され、これらが排水で流れ込んだ可能性もあるが、流水で流れにくいモモも多く出土するのでこれらはおもに廃棄されていたと考えられる。SX-3からはオニグルミとアサや炭化マメ科を出土し、抽水植物のヘラオモダカやイボクサも出土するため、水がある溝にこれらの利用種実が廃棄されたと考えられる。堀からはオニバスの種子を多く出土し、オニバスの未熟果やコウホネ属の種子、ヒメビシも出土することから、堀には50～１ｍ程度の水深があり流入水は生活排水で極端には汚れていないものの、栄養塩類が供給されるため水質は富栄養に傾いていたと考えられる。また、SX-2、SX-3と堀からはヒユ属やサナエタデ近似種、ギシギシ属など日当たりの良い路傍などに生育する雑草の種子が多く、ノブドウやクマヤナギ属、カナムグラなどの蔓植物の種子も出土するため、堀や溝の周囲に木本の個体は少なく裸地が多かったと考えられる。

引用文献

大滝末男．1980．水草の観察と研究．ニューサイエンス社．



図版1　八反町遺跡出土大型植物化石

1.オニグルミ、内果皮半分割痕(140)　2.モモ、核(97)　3.サクラ属、核(105)　4.ノブドウ、種子(105)　5.イネ、穎(106)　6.オオムギ、炭化種子(105)　7.コムギ、炭化種子(105)　8.アワ、炭化種子(100)　9.ヒエ、炭化種子(100)　10.ヒエ、穎果(106)　11.ミクリ属、果実(106)　12.ヘラオモダカ、果実(102)　13.ヒルムシロ属、果実(106)　14.イボクサ、種子破片(102)　15.アサ、核(106)　16.ハコベ属、種子(100)　17.オニバス、未熟果(105)　18.オニバス、種子(105)　19.ダイズ属、炭化種子(105)　20.ササゲ属、炭化種子(105)　21.メロン仲間、種子(105)　22.ウリ科、種子(105)　23.コウホネ属、種子(106)　24.イヌコウジュ属、果実(102)　25.ヒメビシ、果実(105)　26.ベニバナ、果実(106)　　スケールは1mm

中畑城跡から出土した大型植物化石

吉川純子（古代の森研究舎）

１．はじめに

中畑城跡は奥州市前沢区古城地区に位置し、藤原氏より後の16世紀後半に樫山氏が居館とした城館跡で内外からなる堀跡が複数確認されている。この堀や溝跡からは種実等が比較的良好な状態で検出されたことから、当時の植物利用状況を把握する目的でこれら大型植物化石の同定をおこなった。分析に充てた試料は発掘担当者により現地取り上げないし水洗選別して得られた計16試料である。大型植物化石は肉眼ないし実体顕微鏡で観察・同定した。

２．同定結果

出土した大型植物化石の同定結果を表１に示す。本遺跡の堀からはオニグルミ、モモ、トチノキ、サトイモ科、オニバスを出土した。２号住跡からはオニグルミを出土し、４号土坑と５号溝からはモモを出土した。他の遺構からはオニグルミ、モモ、オニバスを出土した。以下に特筆すべき分類群の記載を行う。

表1 中畑城跡出土大型植物化石

		遺構	2号住跡	T1	T2	T4	-	-	4号土坑	5号溝跡
		位置	A区	A区南側	A区南側	A区南側	B区	B区	D区	D区
		層位	堆積土上位黒色土	褐灰粘土底面	褐灰粘土上位	褐灰粘土底面	検出面	検出面	埋土	埋土
分類群	出土部位＼番号		186	187	188	189	190	191	192	193
オニグルミ	内果皮完形		-	-	-	-	-	-	-	-
	内果皮完形食痕		-	-	-	-	-	-	-	-
	内果皮半分割痕		1	-	-	-	-	-	-	-
	内果皮半分風化		-	-	-	-	-	1	-	-
	内果皮破片		-	-	-	-	1	-	-	-
モモ	核完形		-	-	-	-	1	-	-	-
	核完形風化		-	-	-	-	1	-	1	1
	核半分		-	-	-	1	-	-	-	-
	核破片		-	-	-	2	1	-	-	-
トチノキ	種皮半分		-	-	-	-	-	-	-	-
	種皮破片		-	-	-	-	-	-	-	-
サトイモ科	塊茎表皮半炭化		-	-	-	-	-	-	-	-
オニバス	種子		-	5	-	-	-	-	-	-

		遺構	-	-	-	堀	堀	堀	堀	堀（大溝）
		位置	E区北側	E区北側	F区北側	-	-	-	C区	-
		層位	検出面	検出面	礫層	埋土	埋土	埋土	-	-
分類群	出土部位＼番号		194	195	196	197	198	199	200	201
オニグルミ	内果皮完形		-	-	-	-	-	-	-	1
	内果皮完形食痕		1	-	-	-	-	-	-	-
	内果皮半分割痕		-	-	-	-	-	-	-	-
	内果皮半分風化		-	-	-	-	-	-	-	-
	内果皮破片		-	-	-	-	-	-	-	-
モモ	核完形		-	-	-	-	1	-	-	-
	核完形風化		-	-	-	-	-	-	-	-
	核半分		-	1	1	-	-	-	-	-
	核破片		-	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ	種皮半分		-	-	-	-	-	-	2	-
	種皮破片		-	-	-	-	-	-	1	-
サトイモ科	塊茎表皮半炭化		-	-	-	1	-	-	-	-
オニバス	種子		-	-	-	-	-	17	-	3

サトイモ科：出土した塊茎は表皮のみで半分炭化しており、薄い繊維状の膜が半球形に残っており、子イモ部分の表皮も残っていた。形状としてはサトイモに近似するがサトイモ科の他属の塊茎に近似する形態があるかどうか検討できなかったため種の同定に至らなかった。

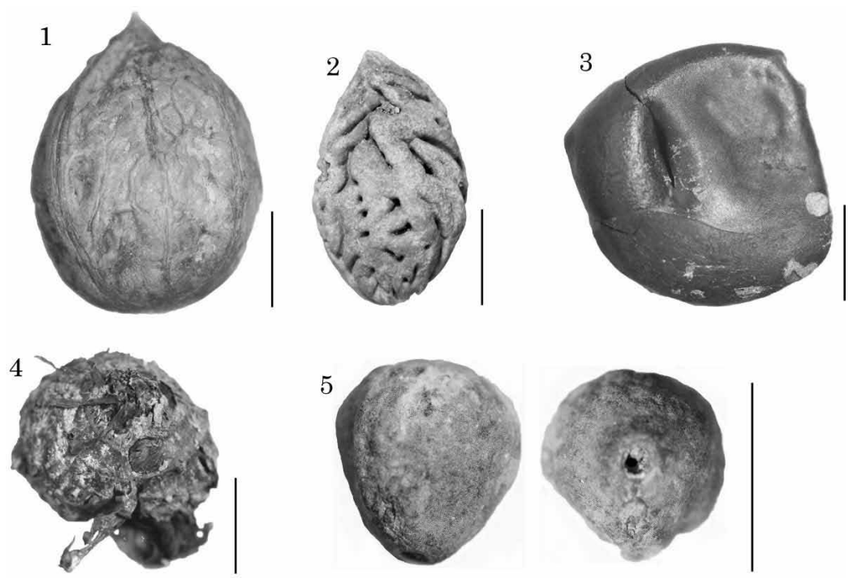
オニバス：種子は球形で一端がやや突出し、大きな特徴として楕円形のへその隣に円形の珠孔が並んである。表面は平滑で光沢がない。オニバスの1975年時点の北限は宮城県遠田郡田尻町（大滝1980）であるが、奥州市八反町遺跡の12世紀の試料からも出土しており、本遺跡で出土したことで岩手県奥州市には16世紀後半まで生育が継続していたことが確認された。

３．考　　察

本遺跡の堀からは完形のオニグルミとモモ、トチノキ、オニバス、サトイモ科を出土しオニグルミとモモが堀の近辺に生育していた可能性が考えられる。ただし出土個数は少ないため、サトイモ科とともに廃棄された可能性もある。同様にトチノキも積極的に利用された痕跡はないが少数のみの出土で破片の状態であることからほかから廃棄された可能性がある。オニバスは水生植物で種子の利用例はないことから堀に生育していたものが堆積したと考えられる。堀にはある程度の水深があったと思われるが、ほかの水生植物が出土しない。要因として考えられるのは、堀の水質の富栄養化が進んで他の植物が繁茂できずさらに水位が下がって種実等が腐敗したが、オニバスの種子は休眠期間が長いため休眠種子がかなり遅くまで生き残っていた可能性も考えられる。種子壁は生存中は大変丈夫だが、枯死すると弱くなり保存状態が悪い場合には腐敗が始まる。

引用文献

大滝末男．1980．水草の観察と研究．ニューサイエンス社．



図版1 中畑城跡出土大型植物化石

1.オニグルミ、内果皮(201)2.モモ、核(193)3.トチノキ、種子半分(200)4.サトイモ科、塊茎表皮半炭化(197)5.オニバス、種子(201)　スケールは1cm

4　樹　種　同　定

八反町遺跡出土木製品の樹種

吉川純子（古代の森研究舎）

1．はじめに

八反町遺跡は奥州市前沢区古城地区に位置し、12世紀後半の藤原氏と同時期の堀や溝、井戸跡などの遺構が検出されている。これらの遺構から若干の木製品が出土し、当時の木材利用状況を把握する目的で木製品の樹種同定をおこなった。分析に充てた試料は椀２点、下駄１点、板材１点、曲げ物２点の合計６点である。出土木製品からは直接剃刀を用いて横断面、接線断面、放射断面の３方向の薄片を採取し、ガムクロラールを用いてプレパラートに封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。

2．同定結果

出土した木材の樹種同定結果を表１に示す。出土した樹種は、スギ、クリ、ケヤキであった。以下に同定された分類群の記載を行う。

表1 八反町遺跡木製品樹種

番号	遺構	位置	層位	器種	分類群
57	SE-1(1号井戸)	―	―	木椀	ケヤキ
61	SI-3	―	―	一木下駄	クリ
63	SX-2	ベルト南側	4層	木椀	ケヤキ
64	SX-2	北西部	―	曲げ物側板	スギ
65	SX-2	No.11	―	曲げ物側板	スギ
67	SX-2	北東区	底面	板材	スギ

スギ（ Cryptomeria japonica （ Linn. Fil.）D.Don ）：早材から晩材への移行は急で晩材部が厚い。分野壁孔はスギ型で横に長い楕円形となり、１分野に２～３個ある。

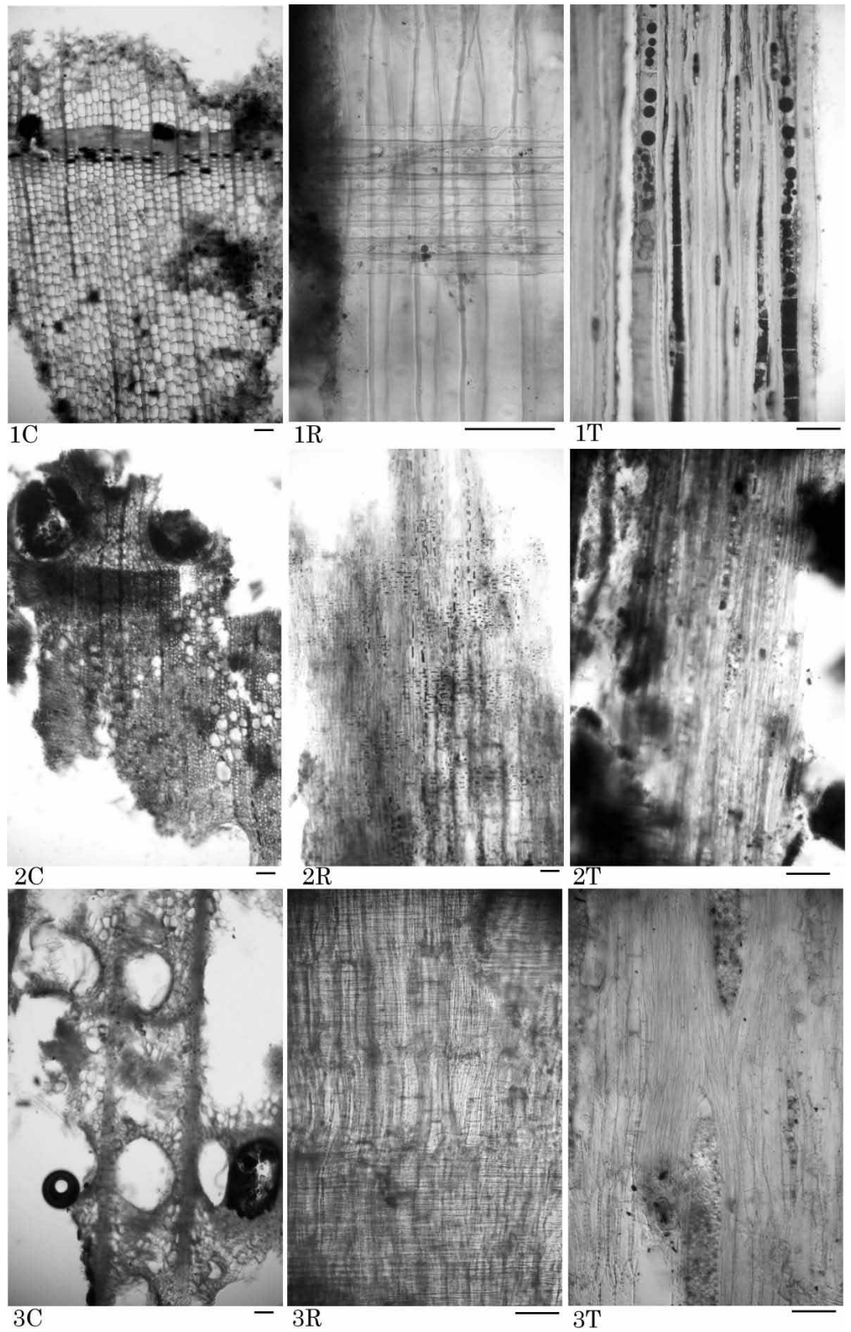
クリ(Castanea crenata Sieb. et Zucc.)： 年輪はじめに大きい道管が花弁状に配列し、急に径が減じて火炎状に配列する環孔材である。道管は単穿孔、放射組織は１～２列でほぼ同性である。

ケヤキ(Zelkova serrata (Thunb.) Makino)：年輪はじめに大型で丸い道管が単独で１列並び､晩材部では小型で薄壁の角張った管孔が多数集合して斜めないし接線方向に帯状に連なる環孔材。道管の穿孔板は単一で小道管内壁にらせん肥厚がある。木部柔組織は周囲状で晩材部では小道管の周囲を囲んで帯状となる。放射組織は異性で１-８細胞幅で放射細胞の縁にしばしば大型の結晶がある。

本遺跡で調査した６試料中３点がスギであり、曲げ物と板材に使用されていた。試料数は少量であるが本地域のスギ依存の高さがうかがえる。また木椀は２点ともケヤキであった。隣県ではあるが、宮城県多賀城市の市川橋遺跡(大山ほか2004)では古代の椀のうちブナ属は全て漆椀であったが塗りのない椀はケヤキが用いられていた。分析点数は少ないが本遺跡でもこうした樹種選択があった可能性がある。

引用文献

大山幹成・小川とみ・鈴木三男．2004．宮城県多賀城市市川橋遺跡出土木製品の樹種．多賀城市文化財調査報告書第75集　市川橋遺跡　第三分冊．多賀城市教育委員会・多賀城市城南土地区画整理組合．1-38.



図版1 八反町遺跡出土木製品の顕微鏡写真
1.スギ(65曲げ物側板)　2.クリ(61下駄)　3.ケヤキ(57椀)
C:横断面R:放射断面T:接線断面、スケールは0.1mm

中畑城跡出土木製品の樹種

吉川純子(古代の森研究舎)

１．はじめに

中畑城跡は奥州市前沢区古城地区に位置し、藤原氏より後の16世紀後半樫山氏が居館とした城館跡で内外からなる堀跡が複数確認されている。この堀や溝跡からは多数の木製品等が良好な保存状態で検出されたことから、当時の木材利用状況を把握する目的でこれら木製品の樹種同定をおこなった。分析に充てた種類は漆椀、曲げ物、木簡、下駄、部材など合計16点である。出土木材からは直接剃刀を用いて横断面、接線断面、放射断面の３方向の薄片を採取し、ガムクロラールを用いてプレパラートに封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。なお、編み物は組織が潰れていたため破片をアルカリ・尿素処理で復元した後パラフィン包埋して切片を作成した。

２．同定結果及び考察

中畑城遺跡から出土した木材の樹種同定結果を表１に示す。出土した樹種は、マツ属複維管束亜属、スギ、ヒノキ、ヒノキ属、アスナロ属、針葉樹、クリ、ブナ属、ケヤキ、モクレン属、ナナカマド属、タケ亜科であった。以下に同定された分類群の記載を行う。

表1 中畑城出土木製品樹種

番号	遺構	位置	層位	器種	分類群
60	4号堀	A区南側	褐灰粘土下	箸	ヒノキ属
61	4号堀	A区南側	褐灰粘土中	連歯下駄	クリ
63	5号堀	C区	埋土	漆塗椀	ブナ属
65	5号堀	C区	埋土	漆塗椀	ケヤキ
66	C-4堀	-	-	木簡	スギ
67	4号堀	A区南側	褐灰粘土中	机	クリ
68	4号堀	G区	埋土	漆塗椀	ケヤキ
77	4号堀	G区	-	桶側板	アスナロ属
80	4号堀	G区	-	鋸歯状加工板	マツ属複維管束亜属
84	1号堀	-	埋土	曲げ物蓋板	針葉樹
85	1号堀	-	埋土	下駄(ぽっくり)	モクレン属
88	溝跡	C区東側	埋土	曲げ物側板	ヒノキ
91	-	C区西側	-	漆塗椀	ブナ属
92	溝	C区西側	堆積土	容器底板	針葉樹
101	-	G区検出	-	部材	ナナカマド属
102	4号堀	C区	-	網代編み編組製品破片	タケ亜科

マツ属複維管束亜属(Pinus subgen. Diploxylon)：晩材部がやや厚く水平樹脂道と垂直樹脂道がある針葉樹。放射仮道管の内壁は内宮に向かって著しく鋸歯状に突出して、放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。

スギ（ Cryptomeria japonica （ Linn. Fil.）D.Don ）：早材から晩材への移行は急で晩材部が厚い。分野壁孔はスギ型で横に長い楕円形となり、１分野に２～３個ある。

ヒノキ(Chamaecyparis obtusa Endl.)：早材から晩材の移行は急で晩材部が薄い針葉樹で晩材部に樹脂細胞が点在する。分野壁孔は典型的なヒノキ型で１分野に２個存在する。

アスナロ属（ Thujopsis ）：早材から晩材への移行はゆるやかで年輪界が比較的明瞭なヒノキに似た針葉樹。晩材部付近に樹脂細胞があり水平壁が数珠状に肥厚する。分野壁孔はスギないしヒノキ型で小さく１分野に２-３個存在する。

針葉樹：放射組織は柔細胞のみからなるようであるが、分野壁孔が溶けて確認できず、細胞壁も薄く組織が失われている可能性があるものを針葉樹とした。

クリ(Castanea crenata Sieb. et Zucc.)： 年輪はじめに大きい道管が花弁状に配列し、急に径が減じて火炎状に配列する環孔材である。道管は単穿孔、放射組織は１～２列でほぼ同性である。

ブナ属(Fagus)：中程度の管孔が年輪内に均一に分布する散孔材で晩材部で径が減じる。広放射組織のところで年輪界が外側に引きずられる。道管には単穿孔と階段穿孔があり、放射組織はほぼ同性で単列や２,３細胞幅と幅広い広放射組織の３種類がある。

ケヤキ(Zelkova serrata (Thunb.) Makino)：年輪はじめに大型で丸い道管が単独で１列並び、晩材部では小型で薄壁の角張った管孔が多数集合して斜めないし接線方向に帯状に連なる環孔材。道管の穿孔板は単一で小道管内壁にらせん肥厚がある。木部柔組織は周囲状で晩材部では小道管の周囲を囲んで帯状となる。放射組織は異性で１-８細胞幅で放射細胞の縁にしばしば大型の結晶がある。

モクレン属(Magnolia)：中程度の管孔が単一あるいは数個複合して年輪内にほぼ均一に分布する散孔材。道管の穿孔板は単一で道管側壁は交互状から階段状、放射組織は上下が方形細胞でほかは平伏細胞からなり異性で１-２細胞幅で細長い。

ナナカマド属(Sorbus)：やや小さい管孔が単独ないし数個複合して年輪内にほぼ均一に散布する散孔材。道管の穿孔板は単一で放射組織は異性で１-７細胞幅である。

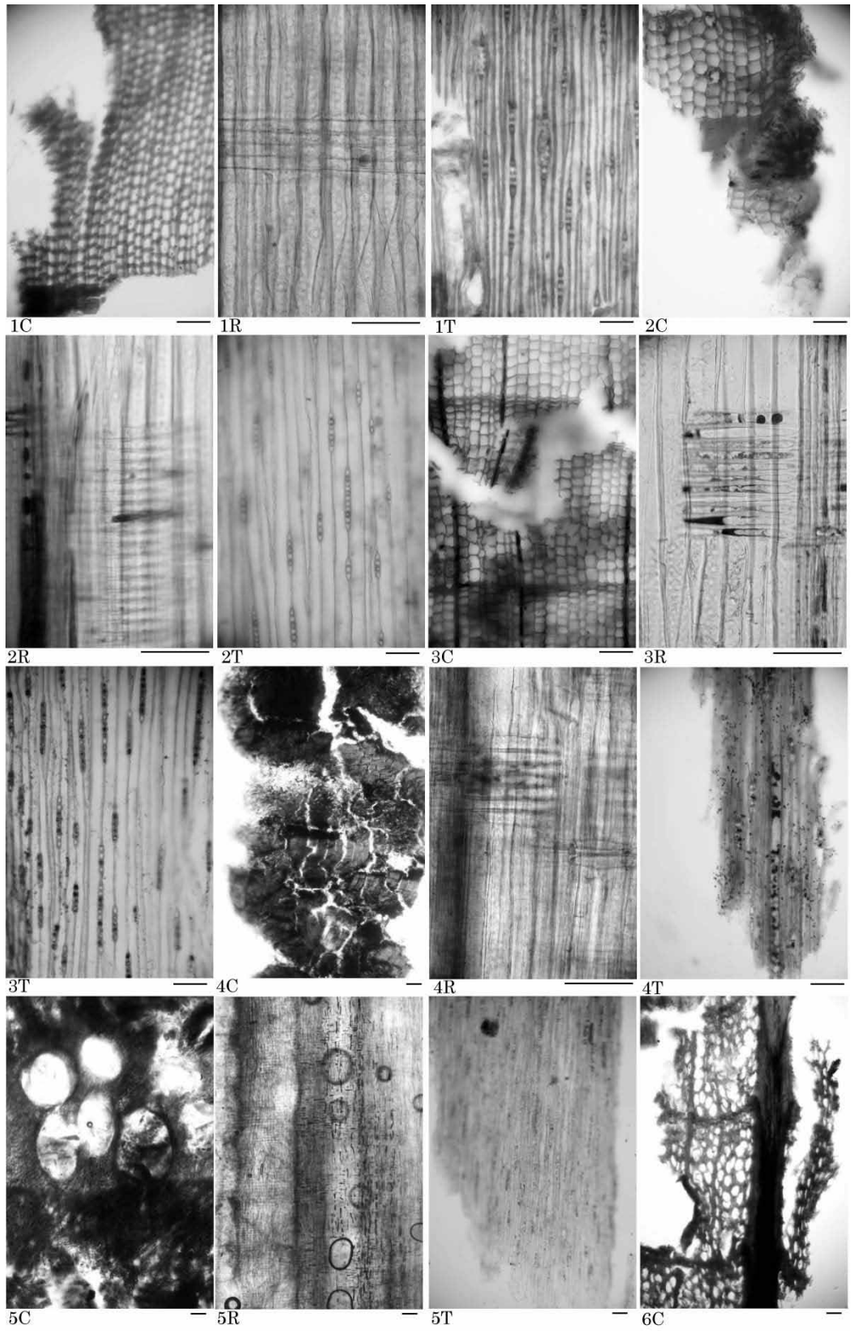
タケ亜科(Bambusoideae)：年輪はなく、原生木部と一対の大きな後生木部道管と師部からなり、外側を繊維組織がとり囲んで維管束鞘となり、この束が散在している。維管束のかたちは潰れているが外側に固い光沢がある表皮が確認できるためタケ亜科とした。

漆椀は４点の内２点にブナ属、２点にケヤキが使われ、下駄はクリとモクレン属が使われていた。東北では椀材としてブナ属とケヤキの頻度がかなり高く、クリは様々な日用品に、モクレン属は下駄の歯として現在も用いられている。いずれも調達しやすい樹種から器種により樹種を選択して利用していたことがうかがえる。また曲げ物や箸など容器類にはスギ、ヒノキ、アスナロ属などの針葉樹を用いており、近世になって多様な針葉樹の利用が展開されていたことがうかがえる。ヒノキはもともと関東地方北部以西の分布であり、近世には東北地方でも植林されるようになる。宮城県古代の市川橋遺跡(大山ほか2004)では斎串、人形、曲げ物などが出土し、他地域から持ち込まれたと考えられているが、近世の沼向遺跡(鈴木ほか2010)になるとヒノキが箸や下駄、杭など実用品に多用されるようになるため調達が容易になったと考えられる。なお、編み物素材の切片作成に際し東北大学植物園の小林和貴氏に大変お世話になりました。ここに謝意を表します。

引用文献

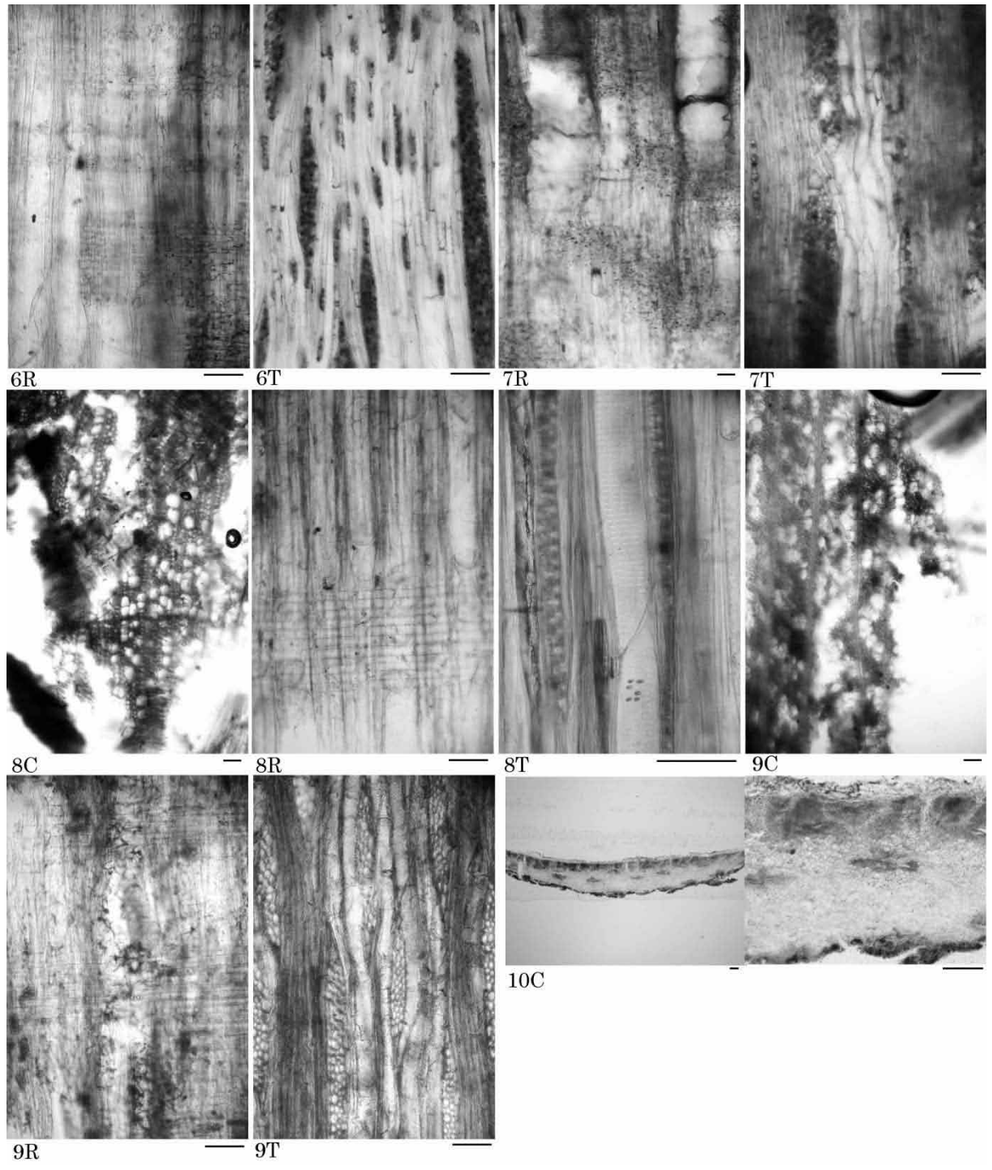
大山幹成・小川とみ・鈴木三男．2004．宮城県多賀城市市川橋遺跡出土木製品の樹種．多賀城市文化財調査報告書第75集　市川橋遺跡　第三分冊．多賀城市教育委員会・多賀城市城南土地区画整理組合．1-38.

鈴木三男・小川とみ．2010．沼向遺跡出土木製品・炭化材の樹種同定(中野高柳遺跡を含む)．仙台市文化財調査報告書第360集　沼向遺跡第4～34次調査　第9分冊．沼向遺跡環境復元検討会・自然科学分析・総括．仙台市教育委員会．75-125.



図版1　中畑城遺跡出土木製品の顕微鏡写真

1.マツ属複維管束亜属(80加工板) 2.スギ(66木簡) 3.ヒノキ(88曲物) 4.アスナロ属(77桶) 5.クリ(61下駄) 6.ブナ属(91漆椀)　C:横断面R:放射断面T:接線断面、スケールは0.1㎜



図版2 中畑城遺跡出土木製品の顕微鏡写真

6.ブナ属(91漆椀) 7.ケヤキ (68漆椀) 8.モクレン属(85下駄) 9.ナナカマド属(101部材) 10.タケ亜科(102編み物)
C:横断面R:放射断面T:接線断面、スケールは0.1㎜

5　骨　同　定

中畑城跡・八反町遺跡の出土骨

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

中畑城跡および八反町遺跡は、いずれも岩手県奥州市前沢区北部の古城地区に所在し、旧明後沢川沿いに位置する。中畑城跡では、一曲輪、二曲輪、三曲輪がみられ、一曲輪と二曲輪を区切る内堀、二曲輪外側の外堀が発見され、特に外堀は東北地方で事例が少ない障子堀が確認された。また出土遺物から16世紀後半の城郭と判明された。一方、八反町遺跡では、２条の溝跡とそれに挟まれた道路跡、掘立柱建物跡などが検出されており、12世紀後半の遺跡である。今回、調査区内から出土した骨について種類を明らかにし、動物利用に関する情報を得ることにした。

１．試　　料

中畑城跡で採取された試料は、C区５号堀埋土(No.1323-178)、C区堀(No.1203-179)、堀(大溝)(No.1324-180)、E区東側検出面直上(No.1201-182)、C区東側(No.1326-183)、C区西側(No.1327-184)で出土した骨である。一方、八反町遺跡で採取された試料は、2号井戸埋土上部から採取された骨である。なお、試料の詳細は、結果とともに表示する。

２．分析方法

試料を肉眼で観察し、その形態的特徴から、種類・部位を同定する。なお、骨格各部の名称については、ウシを用いて図１に示す。

表1.　骨同定結果

遺跡	調査区	出土位置	番号		種類	部位	左 右	部分	数量		備考
中畑城遺跡	C区	堀	1203	179	ウシ	上顎第1後臼歯	右	破損	1+	30.3g	
	C区	5号堀埋土	1323	178	獣類	四肢骨		破片	多数	35.7g	
	C区	堀(大溝)	1324	180	ウシ	中足骨		破片	3	36.2g	
						踵骨	右	ほぼ完存	1	27.8g	
					ウマ／ウシ	四肢骨		破片	40	68.8g	
						不明		破片	9	15.4g	
					残渣				多数	30.9g	
	C区	東側	1326	183	獣類	不明		破片	多数	53.3g	
	C区	西側	1327	184	獣類	不明		破片	多数	28.4g	
	E区	東側検出面直上	1201	182	ウシ	下顎第3後臼歯	左	破片	1	23.4g	
		堀	1325	181	獣類	不明		破片	15+	68.6g	
八反町遺跡		2号井戸埋土上部	64	108	獣類	四肢骨		破片	7+	20.8g	

３．結　　果

同定結果を表１に示す。全体的に保存状態が極めて悪く、全体的に青みを帯びた状態である。確認された種類は、脊椎動物門(Vertebrata)哺乳綱(Mammalia)ウシ目(Artiodactyla)ウシ(Bos Taurus)である。以下、試料ごとに結果を記す。

(1)中畑城跡

＜C区５号堀埋土(No.1323-178)＞獣類の四肢骨片である。

＜C区堀(No.1203-179)＞ウシ右上顎第１後臼歯である。一部破損する。

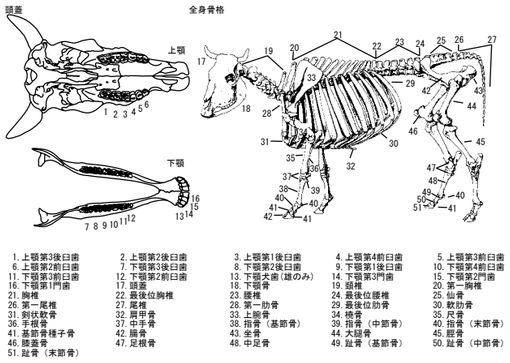


図1　ウシ骨格各部の名称

(原図は、全身骨格・脳頭蓋が加藤・山内, 2003、下顎骨が久保・松井, 1999による)

＜堀(大溝)(No.1324-180)＞ウシ中足骨片３点、ウシ右踵骨１点確認される。ウシ右踵骨はほぼ完形。

＜E区東側検出面直上(No.1201-182)＞ウシ左下顎第３後臼歯である。破損する。

＜C区東側(No.1326-183)＞獣類の部位不明破片である。

＜C区西側(No.1327-184)＞獣類の部位不明破片である。

(2)八反町遺跡

＜2号井戸埋土上部＞獣類の四肢骨片である。

４．考　　察

今回、中畑城跡および八反町遺跡から出土した骨は、青みを帯びた状態である。このような状態は、低地や溝跡などから出土する骨でよく見受けられるが、骨の主成分であるリン酸と地下水に含まれる鉄分が結合してビビアナイトが形成され、空気中に曝されることで青色に変色する。つまり、リン酸を溶解するため骨自体が脆くなる。今回出土した骨の保存状態が悪いのも、そのような影響を受けた結果と言える。

出土した骨は、破片となっており、種類不明および部位が不明なものが多いが、ウシの中足骨・右踵骨・右上顎第１後臼歯・左下顎第３後臼歯がみられた。重なる部位がないが、出土位置が異なることから同一個体か不明である。一方、別の調査では、C区４号堀西埋土からウマも出土している。

古墳時代以降の河川や溝跡などからウシ・ウマが出土する事例は良く見受けられる。ウマ・ウシの生前の用途については、物資やヒトを運ぶ役割、軍用、農耕用など、多様な用途が考えられる。本遺跡内で出土したウマ・ウシも同様な用途として用いられたと推測される。ウマ・ウシに関しては、その出土状態から自然死、事故死、屠殺、犠牲などに分類される(松井,1997)。ただし、今回、骨が散在して出土している点を考慮すると、遺構が埋積する過程において周辺から流れ込んだことも考えられる。

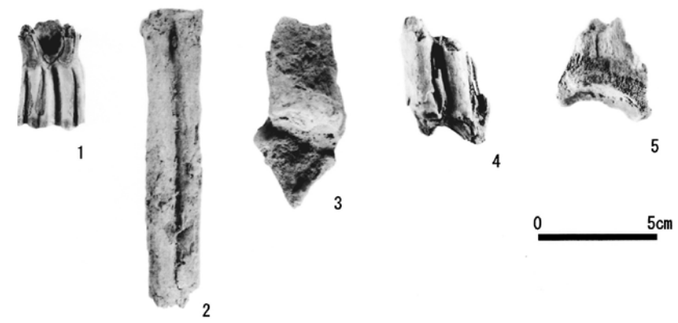
引用文献

加藤　嘉太郎・山内　昭二,2003,新編　家畜比較解剖図説　上巻.養賢堂,315p.

久保　和士・松井　章,1999,ウシ・ウマ.考古学と動物学,同成社,169-208.

松井　章,1997,考古学からみた動物利用.部落解放なら,8,奈良県部落解放研究所,2,31.

図版１　出土骨



1. ウシ右上顎第1後臼歯(中畑城遺跡C区堀;1203-179)
2. ウシ中足骨(中畑城遺跡C区堀(大溝);1324-180)
3. ウシ右踵骨(中畑城遺跡C区堀(大溝);1324-180)
4. ウシ左下顎第3後臼歯(中畑城遺跡E区東側検出面直上;1201-182)
5. 獣類四肢骨(八反町遺跡2号井戸埋土上部;64-108)

中畑城跡の出土骨

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

中畑城跡(岩手県奥州市前沢区北部の古城地区に所在)は、旧明後沢川沿いに位置し、一曲輪、二曲輪、三曲輪がみられ、一曲輪と二曲輪を区切る内堀、二曲輪外側の外堀が発見され、特に外堀は東北地方で事例が少ない障子堀が確認された。また出土遺物から16世紀後半の城郭と判明された。今回、調査区内から出土した骨について種類を明らかにし、動物利用に関する情報を得ることにした。

１．試　　料

試料は、C区４号堀の西埋土(No.1322-177)、西埋土、中～西埋土の３試料である。この内、西埋土、中～西埋土の２試料は、土壌の中に骨が存在する状態である。なお、試料の詳細は結果とともに表示する。

２．分析方法

土壌が付いた試料は、土壌を除去すると形質をとどめないと判断されたため、ある程度土壌を除去して形質を判断できる程度にとどめた。試料を肉眼で観察し、その形態的特徴から、種類・部位を同定する。なお、骨格各部の名称については、ウマを用いて図１に示す。

３．結　　果

同定結果を表１に示す。全体的に保存状態が極めて悪く、全体的に青みを帯びた状態である。確認された種類は、脊椎動物門(Vertebrata)哺乳綱(Mammalia)ウマ目(Perissodactyla)ウマ(Equus caballus)である。以下、試料ごとに結果を記す。

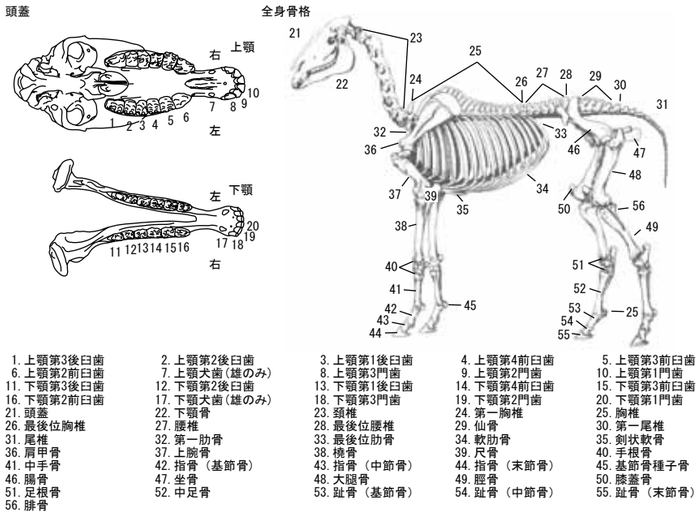


図1　ウマ骨格各部の名称
(全身骨格は、加藤・山内,2003に加筆)

表1.　骨同定結果

遺跡	調査区	出土位置	番号		種類	部位	左	右	部分	数量		備考
中畑城遺跡	C区	4号堀西埋土	1322	177	ウマ	中手骨/中足骨			遠位端	1	18.1g	
						基節骨			近位端片	1	2.2g	
					大型獣類	四肢骨			破片	8	19.7g	
					獣類	不明			破片	多数	67.5g	
	C区	4号堀西埋土			獣類	四肢骨			破片	15+	106g	土塊状
					残渣					多数	525g	
	C区	4号堀中～西埋土			獣類	不明			破片	13	471g	土塊状
					残渣					多数	305g	

＜C区4号堀西埋土(No.1322-177)＞ウマの中手骨/中足骨遠位端および基節骨近位端、大型獣類の四肢骨、獣類の部位不明破片である。
＜C区4号堀西埋土＞獣類の四肢骨である。
＜C区4号堀中～西埋土＞獣類の部位不明破片である。

４.考　　察

C区４号堀から出土した骨は、青みを帯びた状態である。このような状態は、低地や溝跡などから出土する骨でよく見受けられるが、骨の主成分であるリン酸と地下水に含まれる鉄分が結合してビビアナイトが形成され、空気中に曝されることで青色に変色する。つまり、リン酸を溶解するため骨自体が脆くなる。今回出土した骨の保存状態が悪いのも、そのような影響を受けた結果と言える。

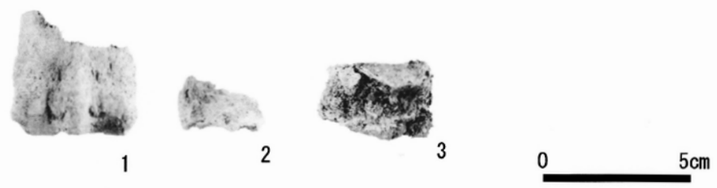
出土した骨は破片となっており、また形質をほとんどとどめないほど保存状態が悪いが、ウマの中手骨/中足骨、基節骨の破片を確認できた。また、別の調査では、ウシも出土していることが明らかにされた。

古墳時代以降の河川や溝跡などからウシ・ウマが出土する事例は日本各地で良く見受けられる。ウマ・ウシの生前の用途は、物資やヒトを運ぶ役割、軍用、農耕用など、多様な用途が考えられるが、本遺跡内で出土したウマ・ウシも同様な用途として用いられたと推測される。ウマ・ウシに関しては、その出土状態から自然死、事故死、屠殺、犠牲などに分類される(松井,1997)。ただし、今回、出土した部位が限られている点を考慮すると、遺構が埋積する過程において周辺から流れ込んだ可能性がある。

引用文献

加藤　嘉太郎・山内　昭二,2003,新編　家畜比較解剖図説　上巻.養賢堂,315p.
松井　章,1997,考古学からみた動物利用.部落解放なら,8,奈良県部落解放研究所,2,31.

図版１　出土骨



1. ウマ中手骨/中足骨(中畑城遺跡C区4号堀西埋土;1322-177)
2. ウマ基節骨(中畑城遺跡C区4号堀西埋土;1322-177)
3. 大型獣類四肢骨(中畑城遺跡C区4号堀西埋土;1322-177)

Ⅶ　調査のまとめ

1　八反町遺跡

八反町遺跡は奥州市前沢区古城字南八反町、字北八反町、字館八反町、字向田地区に所在する。ＪＲ東北本線前沢駅の北北東約3.5㎞にあり、北上川右岸の標高33～34ｍの河岸段丘上に立地している。平坦な地形の中にも微高地が点在し、現況は畑地と水田になっている場所で、遺跡範囲は東西500ｍ、南北550ｍほどある。

今回の調査区は９地点に分散しており、遺跡の南端、中央部、北端部、西部に分かれている。

遺構の種類と時期は以下のとおりである。

	縄文時代	９－10 世紀	12 世紀	不明	現代
掘立柱建物跡			5	4	
竪穴住居跡		2			
竪穴遺構			1		
土坑	1		2	16	2
井戸状遺構			2	1	
溝跡			7	16	5
柱穴列				3	
道路跡			1		
性格不明遺構			3		
焼土		1			
沢跡		1			

出土遺物は平安時代の土師器・須恵器、12世紀の陶磁器、かわらけ、鉄製品などが中コンテナ1.5箱。下駄、柱材、杭等の木製品が大コンテナ１箱である。

縄文時代

調査した地点からは集落であった痕跡は見つからなかった。石鏃が遺構外から出土していること、陥し穴が１基検出されていることから、狩猟の場として使われていたようである。

平安時代（９－10世紀）

遺跡中央にあるＢ区から２棟の竪穴住居跡が見つかっている。周囲には土師器・須恵器片が散布しており、このＢ区を中心とした調査区外には平安時代の遺構が広がっている可能性は極めて高い。２棟の竪穴住居跡には重複関係がないものの、それぞれの軸線が異なる方向となっていることから時期差を持っていると推測される。集落についてはＢ区の北東方向及びＣ区の東側へ広がっていると考えている。

遺跡北端部にあるＧ区からは埋没沢が見つかっている。沢は西北西から東南東方向へと流れていたようだが沢の岸近くが調査区内に入っていただけなので全体の規模は不明である。もしかすると、現在Ｇ区の北側にある明後沢川（かつては松ノ木沢川が流れていた）がこの場所を流れていたのかもしれない。沢跡には十和田ａ火山灰が堆積していた。この場所に降下したものである。掲載した遺物はこの火山灰層の直下から出土したものである。

平安時代末（12世紀）

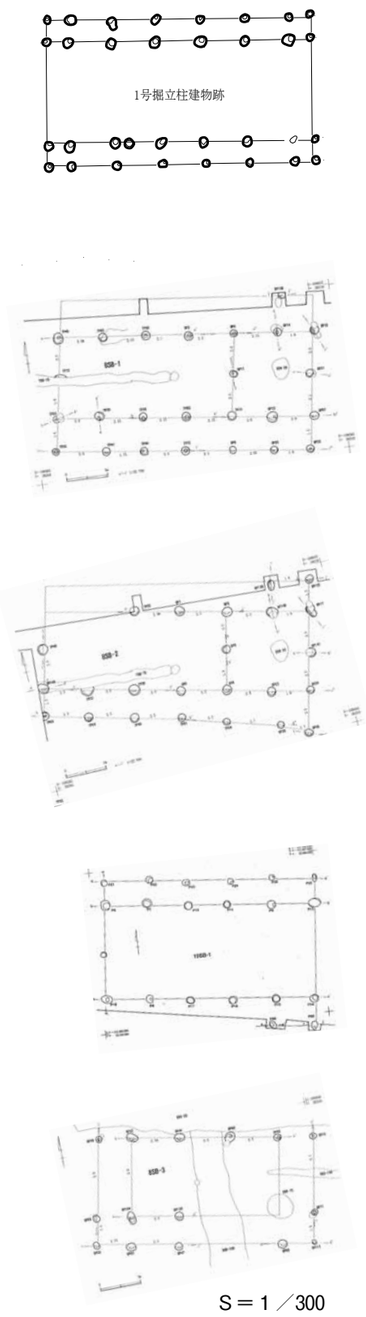
今回の調査において主体となる時期である。この時期の遺構・遺物は遺跡の中央部南にあたるＡ・Ｂ区、遺跡北端にあたるＧ区などから見つかっている。

遺跡中央南にあたるＡ・Ｂ区では道跡（１号道路跡）と建物跡（１～４号掘立柱建物跡）などが検出された。１号道路跡（幅約３ｍ）は西北西－東南東方向に延びる側溝を持つ遺構で、側溝からは常滑産陶器片が出土した。この道路跡のやや北側に１号掘立柱建物跡（５×２間身舎に四面庇）と、御堂のような４号掘立柱建物跡（１間四面）、それに３間二面の２・３号掘立柱建物跡が重複した状態で在り、道路と建物群はその主軸方向や配置に極めて強い共通性が認められた。これらの掘立柱建物跡群からは遺物が出土していないものの、逆にそのことが中近世や古代に属する可能性が低いという根拠になると判断し、１号道路跡と同時期に存在するものと解釈した。建物の規模・構造から１号掘立柱建物跡を在地領主（本稿では末端に近いの支配者層という位置付けで用いている）の居所、４号掘立柱建物跡が御堂、２・３号掘立柱建物跡が御堂と関連するような施設と推察された。因みに奥州市前沢区で見つかっている12世紀の掘立柱建物跡の中でも規模の大きな事例と比較しても本遺跡の１号掘立柱建物跡は全く遜色ないことが分かる。

そして遺跡北端部にあたるＧ区では３号竪穴遺構、ＳＸ１～３（性格不明遺構）、１・２号井戸跡、14号土坑などが検出された。

性格不明遺構については大凡の形態も似ており同じ目的のために利用された施設と考えられる。しかしながらその目的については解明に至らず大きな課題として残っている。ここでは有力な可能性を２つ挙げておく。一つは粘土の採掘坑の可能性である。遺構のあるＧ区の基盤層には少し掘り下げると粘土層があること、本遺跡と同じ古城地区にある明後沢遺跡では粘土採掘坑跡（平安時代）が見つかっていること、「仙臺領礦物調」（宮城県史32）には本遺跡の西隣にあたる中畑村には瀬戸土取り場（近世）があったことを記している。このことからこの地域は粘土の産地であったことが分かる。ところがＳＸ１～３の形態を見ると、粘土採掘坑にしては壁・底面が平滑で粘土を掘るために壁や床面が抉れたりはしていない点と、溝が付く点で明後沢遺跡の例とは遺構の雰囲気が異なる。

もう一つの可能性は農業用の溜池である。類例は泉町の衣関遺跡、奥州市江刺区の反町遺跡などにある。



第80図　類例（前沢区）

衣関遺跡の池は本遺跡の遺構と同時期であるが、規模はかなり大きい。反町遺跡の池は溝が付く形態や規模が似ているが時期が異なる。また秋田県にかほ市横枕遺跡でも溝の付く水溜土坑が検出されておりよく似ている。遺構の周囲は鍛冶作業場であったという。G区では水田・畠跡は見つかっていないため、農地の存在が不確実なこと、近くに明後沢川（かつての松の木沢川）があるため水の便は良く池はそれほど必要ではなかったのではと推測されることなどが問題点としてあげられる。

上記の可能性の他にも広く考古事例・民俗例を精査し遺構の内容解明に努めたい。

こうした各種遺構の分布から、本遺跡の中央部南には道路に沿って在地領主の居所と御堂等の建物群のある空間があり、とくにその北側に12世紀の集落が展開していると推察される。その集落の北端部に採掘坑（或いは溜池）といった居住域とは別の施設が造られていたことが明らかとなった。

１号道路跡はどこへ通じる道路であったのか。周辺の遺跡調査で道路跡の続きや関連する施設が確認されているわけではないので想定による話になるが、１号道路跡を東南東方向へ進むと道上遺跡を通って北上川へ達する。道上遺跡は密教法具の一つである六器（12世紀）が出土している遺跡である。この六器は旅壇具で携帯用のものであるという。北上川に達したところには川岸場Ⅰ・Ⅱ遺跡（前沢区白山地区）がある。この遺跡は近世北上川舟運の川湊（六日入河岸）のあった場である。ここに12世紀段階にも川湊があったのではないだろうか。川岸場Ⅱ遺跡では発掘調査も行われているが、12世紀の遺構・遺物は見つかっていない。完全に壊されてしまったか、少し位置がずれて在るのではないかと解釈したい。遺跡のある前沢区の古城地区や白山地区には12世紀の遺跡が数多く存在することが明らかになっている。その多くは集落と見られるが、遺跡数の多さを説明する上で川湊の存在は無視できないものといえ、川岸場Ⅰ・Ⅱ遺跡はその有力な候補地である。

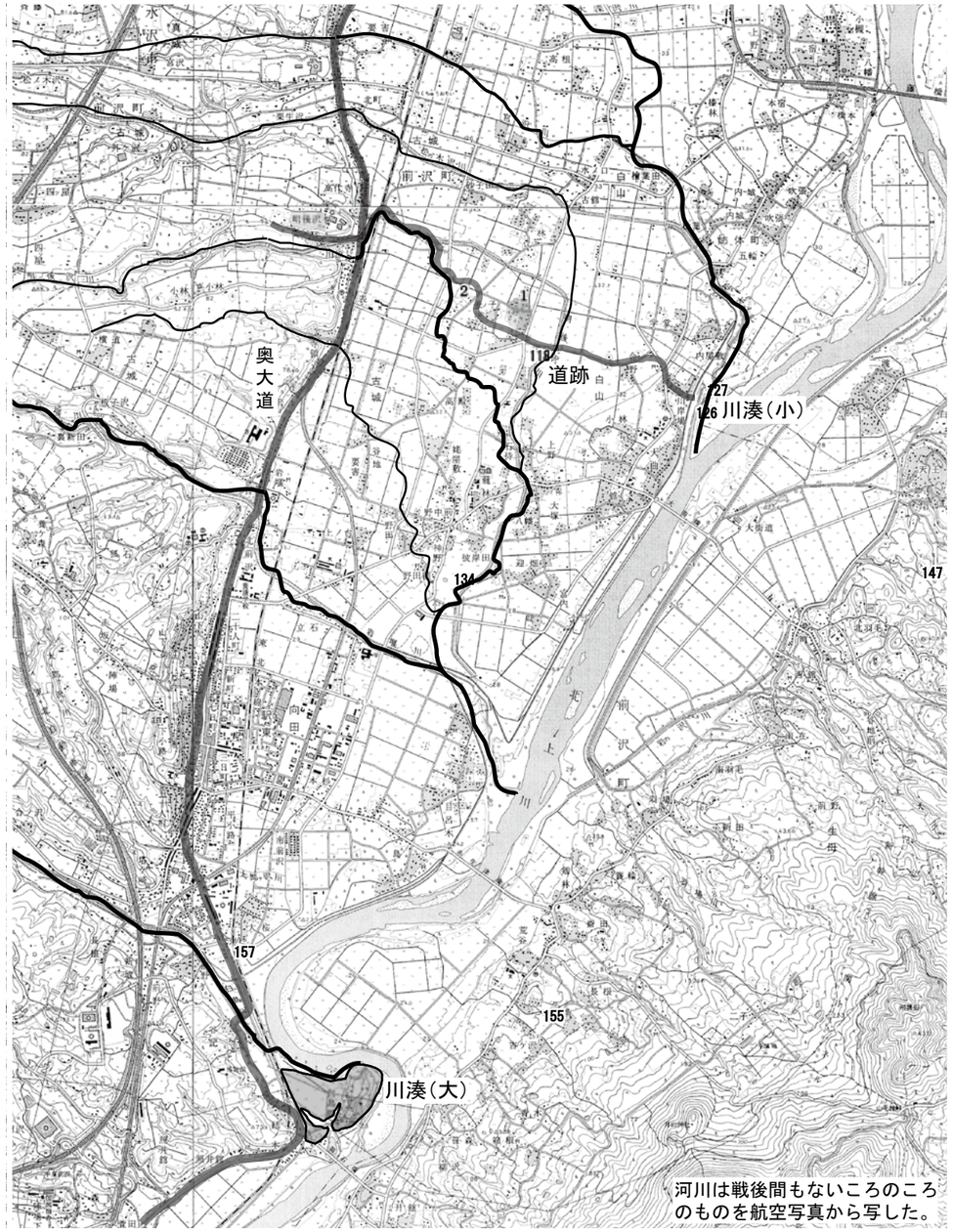
一方、１号道路跡を西北西へ向かえば1.3km程で現在の東北本線と国道４号に直交するようにぶつかる。この付近は鉄道と国道が近接して走っており近世には奥州街道があった。とすれば12世紀にも奥大道がこの辺りを通っていたと考えるのが最も素直であろう。現在の場所でいうと古城字川原下地区のところで奥大道と交差していたと思われる。この交差点から更に西側は一段高い段丘面になるのだが、丁度その川原下地区からだと明後沢川沿いに崖が緩やかになっていて登り易くなっている。この明後沢川伝いに一段高い面へ上ったところに明後沢遺跡群がある。この遺跡群からは12世紀の遺構・遺物が他の周辺の遺跡よりもまとまった量で出土している。加えて規模の大きな掘立柱建物跡も見つかっており、この地域に勢力を持つ有力者（八反町遺跡の在地領主より上位）の居た可能性が高いと考えられる。

これらのことから１号道路跡は奥大道の枝道であり、この地域の有力者の居所・集落・川湊を結んでいたと想定された。

奥州市前沢区では12世紀の遺跡調査が多く、その成果が蓄積されつつある。その内容について時期をみて整理していくことが必要になろう。

中世

16世紀前半の瀬戸美濃産天目碗が遺跡の北端部のG区で出土している。今回の調査で中世の遺構は検出されなかったもの遺跡内には13－16世紀の遺構があると考えたほうが良い。調査成果から12世紀の集落は主に遺跡中央から北側にかけて存在していたといえる。恐らくは平泉藤原氏滅亡とともにこの集落が廃され、別の場所に新たに営まれるようになったのであろう。具体的には現在の集落域とほぼ重なるような場所に集落が形成されていったのではないだろうか。よって今回の調査区域外にあたる場所についても中世の遺構・遺物が発見される可能性があることを指摘しておく。そしてこれが本遺跡西隣にある16世紀の城館・中畑城跡の領内に相当する集落の一つと位置付けられるのではないだ



第81図　12世紀の奥州市前沢区古城

ろうか。最後にＢ・Ｃ区の東隣にある墓地内には五輪塔らしき石造物があること、遺跡北の字古舘地区には板碑１基が確認されていることを付け加えておきたい。

２　中　畑　城　跡

本遺跡はＪＲ東北本線前沢駅の北北東約３㎞に位置している。水沢段丘高位面にある小規模な微高地を複数の堀で囲んで城域としている。調査区の現況は標高32～34mの水田であった。

検出された遺構・遺物の数量や所属時期などは以下の通りである。ここでは時代ごとに調査成果を整理し、この地域の中でどのように位置づけられるかを考えたい。

	旧石器時代	９－10 世紀	12 世紀	16 世紀	不明
堀　　跡				4	
掘立柱建物跡			1		
土　　坑		3			3
カマド状遺構				1	
溝　　跡		6			7
柱　穴　群			1	2	1
旧石器集中区	1				
沢　　跡		1			

遺物は中世の陶磁器が小コンテナ0.１箱、木製品が大コンテナ１箱、旧石器３点他が出土している。

旧石器時代

遺跡北東端にあたるＣ区において旧石器の集中区１箇所を確認した。限られた調査区のため集中区の一部を調査したに過ぎず、その広がりは６m四方とみられる。遺跡中央の小高くなっている場所を主たる生活の場とし、その周辺に石器類が散在していると解釈した。よって調査区外には他にも石器集中区が分布している可能性が高いといえるし、何よりも遺跡中央の小高くなっている場所（中世城館中畑城の一曲輪）には濃密に分布していると考えたほうがよかろう。石器類は出土した地層、各石器の特徴などから本遺跡の南にある水尻遺跡の石器群と同じでＡＴ降下前後までの後期旧石器時代前半期とみられる。

平安時代（９－10世紀）

遺跡北端部にある３号土坑、１・５・８・９号溝跡、遺跡東側の沢跡などがこの時期にあたる。遺物もこれらの遺構の埋土及びその近くから出土する場合が多かった。直線距離にして約90mも離れているので本稿では別々の遺構として扱ったが、８号溝跡と沢跡は形態や規模、遺物出土の状況などが似ており、同じ流路であった可能性が高い。土師器坏には底部再調整が施されるものがあること、沢跡に堆積した十和田ａ火山灰よりやや下位から出土していることから９世紀前半であろう。５号溝跡から出土した須恵器にも底部再調整が見られるので９世紀前半ころとなる。そうなるとこれらの遺構（沢跡）の近くに集落を想定しなければならないだろう。今回の調査区は狭かったので竪穴住居跡などはなかったが、あまり離れた場所から流れてきたような土師器・須恵器ではなかったので近い場所に集落があったとみたい。具体的には本遺跡の中央から北端まで、さらに８号溝跡の上流にあたる本遺跡を超えて北西方向に分布していると思われる。

平安時代末（12世紀）

遺跡北東部にあたるＣ区（東から）の柱穴群近くで12世紀後半の常滑産陶器片が出土している。このことから遺跡北東部には平泉藤原氏時代の集落のあったことが分かった。その規模や性格については不明といわざるを得ないが、東隣の八反町遺跡もこの時代の遺跡であるので一体のものとして捉えてもよいかもしれない。広い平野部に家屋が散居する風景はこの頃にはすでにできていたのであろう。八反町遺跡で検出された道路跡も本遺跡の何処かを通っていたと想定され、それは遺構遺物の見られたＣ区東側の近くにあったのかもしれない。

中世後半（16世紀）

本遺跡の主体となる時期である。

中畑城は「風土記御用書出」によると樫山館（御城主樫山平次郎）と記載される城館である。また「仙台領古城書上」には城主樫山彦三郎と記されている。このことから、この時期に伊沢郡を実質的に領していた柏山（樫山）氏の一族が居城としていた可能性が高いとされてきた。

＜調査内容＞

調査区は主に城館を取り囲む北側の外堀と内堀の北側から西側の一部にあたる。検出された堀跡は４条である。外堀跡は「障子堀」であることが判明した。その構造は４条の細長い堀を隙間なく連ね、その１条１条に間隔や深さの不規則な障壁を設けるといったものであった。障壁は粘土などを後から貼って造ったのではなく、地山をそのまま掘り残して利用したものである。そしてその障壁の何箇所かには隣に水が流れるように小さな導水溝が設けられており、堀が水を湛えていたことも判明した。

内堀も障壁を有するが、外堀と少し構造が異なる。全体を調査することができなかったのではっきりとは言えないが、北側の内堀は外堀のような複雑な構造ではなく、障壁が一列に連続するだけの所謂「畝堀」であったようだ。加えて西側の内堀では障壁がみられなかったことから、内堀については北側では障壁を設けているものの途中からは障壁を持たない堀へと変わるようである。このことから、中畑城跡では外堀も内堀も北側にだけ「障子堀」「畝堀」を取り入れていた可能性があることを指摘しておきたい。

出土遺物から16世紀に構築されたと言え、県内では金ヶ崎町にある柏山館跡に次ぐ２例目で極めて珍しい事例である。

＜伊澤郡古城村大字古城字水上西繪圖＞（第44図）

この地域が古城村となったのは明治18年以降であることから、この原図も明治18年よりは新しいものとなる。奥州市教育委員会よりコピーを頂いたため原本の大きさは分からないが、入手した全部分をトレースして掲載した。地目の中には地番の記載があるところと、地番はあるが地目の記載のないところとがあった。地目も文字で「田・畑・宅地」とあるものと、「道路・水路」など色分けされているものとで構成されているようだが、白黒コピーであったため分からないところも多くありトレースの際には地目を網かけに変えて、地番は割愛した。

中畑城跡はこの絵図の南端部に位置している。南は字水尻、東は字南八反町、西は字四戸橋と接する場所である。字四戸橋の文字のすぐ隣に河川が描かれている。これが旧明後沢川であり北から南に蛇行しつつ流れていた（今は改修されこの場を流れていない）。その東隣が中畑城跡になる。字水尻西・字八反町という文字のすぐ近くに書かれた道路は現在も道路として存在している。

田の部分を堀、畑の部分を曲輪とみれば、中畑城の縄張りがほぼ把握できる。南側の宅地と畑で構成される場所、これが三曲輪である。また北側の宅地と畑で構成される場所が二曲輪である。この二曲輪と三曲輪に挟まれ、細長い田で囲まれた部分が一曲輪（主郭）である。また二曲輪の北側にも田で台形状に囲まれた畑がある。この部分は馬出しと推測される。次に各曲輪の中で注視さる部分を挙げておく。

三曲輪　宅地とある部分は現在も宅地であるが、畑部分の多くは水田に変わった。そのためか堀の形状を留めていた田の畦畔も失われている。絵図には田が三曲輪を全周せずに北西方向が開いて描か

れていることから、三曲輪は一曲輪の南部から南西部を占めていることが読み取れる。

二曲輪　東側の宅地とある部分は現在も宅地でその隣の２枚の畑も現在は宅地となっている。旧明後沢川のある西側の畑は現在水田に変わったものの形状に大きな変化は認められない。一曲輪の北部から北西部を取り囲む形をして三曲輪と接するわけだが、その境界については絵図の中ではよく分からない。

一曲輪　二曲輪と三曲輪に囲まれて在る。細長い田が一曲輪を全て囲んでいる。西側に墓があるが、現在も同じ場所に残っており、そこは土塁跡でもある。一曲輪で注目される部分は二か所の出入り口施設とみられる地割である。一曲輪の北東端部に細長い田と細長い畑と道路とが集まった部分がある。現在この地割は失われているが、道路だけは同じ場所に残っている。もう一つは南東端部にある畑に細長い田が食い込んでいるような地割がみられるところである。これも今は失われているが、同じ場所に道路が設けられている。

馬出し　二曲輪の北側に台形状をした畑の地割があり、その周りを細長い田が囲んでいる。現況は全て田となってしまい完全にこの地割は失われていた。このことからも他の曲輪よりも低い地形に構築されていたことが分かる。東側の畑に田が入り込んでいるような地割をしている。この部分も出入口施設であった可能性があるとみている。

その他　自信がないのだが、馬出しから北側についても中畑城跡の縄張であったかもしれない。墓地と畑が南北に接しているところがある。この西側には細長い田が旧明後沢川に向かって並んで描かれている。これが外堀であったとは考えられないであろうか。もしそうだとすると馬出しについても別の解釈が必要となるかもしれない。もう一つは三曲輪のさらに南に曲輪を想定できないものかということである。絵図は無いのだが、西側を旧明後沢川、東側を現道に挟まれた部分は大凡三曲輪と同じスペースがある。何れにしても現段階では他の曲輪程その地割が明瞭なものではないので本稿ではその可能性を指摘するに止めたい。

＜地名・伝承＞

当地は明治18年以前には中畑村であった。「中畑」を地元では「なかぱた」と発音するという。中畑城跡の中に現在居住されている方の屋号は「館」というそうだが、ご主人は中畑城の歴史について全く伝承されていないとのことだった。聞き取りから得られたことは、水田が泥田で深かった部分があったこと（その場所から外堀を検出）、二曲輪にあたる畑からは古い炭化米が出てきたこと、アイオン・カスリン台風の時は周りの水田まで冠水したことなどである。

＜葛西・柏山氏と中畑城の城主＞

発掘調査で出土した遺物は16世紀のもので、15世紀や17世紀の遺物は無い。よって城館の機能していた期間は16世紀代に限られる。

中畑城跡の城主については前述したとおり樫山彦三郎や樫山平次郎といった記録がある。何れにせよ伊澤郡を実質的に領していた樫山（柏山）氏の一族が居城としていた可能性が高いといえる。樫山（以下は柏山と記す）氏は葛西氏の有力な家臣で独立領主的な存在であったともいわれている。葛西氏の祖は関東御家人で奥州総奉行を務めた葛西清重である。柏山氏の祖については不明な部分が多く諸説あるが、関東の御家人で平姓千葉氏ではないかとするものが有力である。両氏ともに関東地方に所縁のある一族であることは確かといえよう。

その葛西・柏山氏も15・16世紀になると隣国勢力との争いや一族・家臣の内乱などが起こり衰退していく。その概要については前述したとおりである（８頁）。柏山氏は16世紀後半になると家督争いがもとで内紛状態になっていたと云われている。その中に、柏山伊勢守明吉の三男小山九郎明長（遺跡地図98）、四男折居宮内明久（遺跡地図85）兄弟が、柏山氏の重臣であった前沢城主三田氏（遺跡地図142）を謀反の疑いで攻め滅ぼしたという記録がある。中畑城の城主には前述のように柏山一族の名が伝えられている。その一方で柏山氏の家臣である三田氏に関しては前沢村の他に中畑村他も領していたと伝えられており、このままではそれぞれの史料の内容が符合しないことになってしまう。現時点では複数の解釈が可能と思われる中で、本稿では発掘調査で見つかった「障子堀」が本県に於いては柏山氏の城館でのみ検出されていることから、中畑城の城主についても柏山氏の一族であったと考えたい。

重臣三田氏の滅亡に関する史料の中に中畑城跡は登場していないのだが、位置的には非常に近い位置にあるため無縁であったとは考えにくい。どちらの側に立っていたのかまでは分からないが、この争いの渦中にあったと考えたほうがよかろう。そして16世紀末には城館としては使われなくなったとするのが最も妥当といえる。

＜障子堀の系譜＞

今回の発掘調査で最大の成果といえば「障子堀」が見つかったことであろう。そしてその構築年代は出土した陶磁器の年代観から16世紀に位置付けられる。堀からは15世紀代あるいは17世紀代の国産陶器は出土しなかった。

岩手県に於ける「障子堀」の事例は、金ヶ崎町にある柏山館跡（大林城）のみで、中畑城跡の堀跡を合わせても僅かに２例しか確認されていない。柏山館（報告書名は「館山遺跡」）での例は障壁が一列に連続するだけの所謂「畝堀」であった。

本遺跡のある奥州市や金ケ崎町をはじめとする県南地域、宮城県北部が他の地域に比べて中世城館の調査事例が少ないのかといえば、そうではない。発掘件数は他の地域と同じくらいはあるもの「障子堀」については筆者の知る限り事例は少ない。

障子堀という築城技術は戦国大名の後北条氏との関連性が強いとされてきたが、その分布は領域外にも広がっていることなどから、今は時期的にも空間的にも後北条氏と直接結びつけずに捉えようとする動きが大勢を占めるようである。それでも事例の多くが関東地方に密にあることには変わりなく、関東で成立発展しそれが各地に広がったと考えて大過ないであろう。

その障子堀が如何にして中畑城築城の際に採り入れられることになったのか、限られた範囲の発掘調査で城館の全容を明らかにしたとは決して言えない中、この問いに答える手掛かりは少ない。本稿ではそうした中で二つの仮説を検証してみたい。一つは障子堀という技術が関東で発展し分布を広げる中、福島から宮城、宮城から岩手へと徐々に伝わってきたという解釈である。二つ目は関東から直接人材を連れて来ること、或いはこちら側の者が関東へ行き障子堀についての知識を身につけてまた戻って来るという考え方である。

第一の仮説についてであるが、前述したように本県における類例は１件しかない状況である。宮城県でもその事例は多くはなく構築年代のよく分からないものもある。また、仙台市にある北目城跡では複雑な障壁を配置する障子堀が検出されているが、伊達政宗が仙台城を築くまで居城としていた城館と伝えられているため、中畑城跡よりも構築年代は新しいであろう。このように障子堀が各地域へ広がっていくと想定した場合に宮城県から岩手県へ、という伝わり方を具体的に示すものは現時点で殆どないと思われる。

第二の仮説についてであるが、関東から直接人材を連れて来ること、或いはこちら側の者が関東へ行き障子堀についての知識を身につけてまた戻って来るといったことは可能なのであろうか。これまでのところ本県での２例は何れも葛西氏の重臣であった柏山氏の居城と柏山氏の一族の城館から見つ